



部典經  
卷一第

BL                    Tripitaka. Japanese. 1929  
1411                 Showa shinshu kokuyaku  
T8J3                 Daizokyo  
1929  
v.1

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---





昭和  
新纂

國  
譯大藏經



BL  
1411  
T8J3  
1929  
v. 1

昭和  
新纂  
國譯大藏經  
經典部  
第一卷

無量義經 目次

德行品 第一……………一

說法品 第二……………七

十功德品 第三……………三

妙法蓮華經 目次

卷 第一

序品 第一……………二五

方便品 第二……………四

卷 第二

譬喻品 第三……………九

信 解 品 第 四 ..... 101

卷 第 三

藥 草 論 品 第 五 ..... 119

授 記 品 第 六 ..... 118

化 城 論 品 第 七 ..... 117

卷 第 四

五 百 弟 子 授 記 品 第 八 ..... 116

授 學 無 學 人 記 品 第 九 ..... 110

法 師 品 第 十 ..... 115

見 寶 塔 品 第 十 一 ..... 114

提 婆 達 多 品 第 十 二 ..... 116

勸 持 品 第 十 三 ..... 111

卷 第 五

安 樂 行 品 第 十 四 ..... 118

從 地 涌 出 品 第 十 五 ..... 114



如來壽量品第十六	二三五
分別功德品第十七	二四三

卷 第 六

隨喜功德品第十八	二五五
法師功德品第十九	二六〇
常不輕菩薩品第二十	二七四
如來神力品第二十一	二七九
囑累品第二十二	二八四
藥王菩薩本事品第二十三	二八五

卷 第 七

妙音菩薩品第二十四	二九四
觀世音菩薩普門品第二十五	三〇〇
陀羅尼品第二十六	三〇七
妙莊嚴王本事品第二十七	三一一
普賢菩薩勸發品第二十八	三二六

佛說觀普賢菩薩行法經 目次

佛說觀普賢菩薩行法經.....三三

梵網菩薩戒經 目次

梵網菩薩戒經.....三四五

佛說四十二章經 目次

佛說四十二章經.....三七五

佛說尸迦羅越六方禮經 目次

佛說尸迦羅越六方禮經.....三六六

玉耶經 目次

玉耶經.....三九五





無  
量  
義  
經

第一卷	經典部
-----	-----





る無量の法性身、大士とは菩薩のこ

【戒】三摩耶見五分法身と稱す、法身の徳性なり

【無分別】無分別無造作をいふ

【性相の眞實】一切諸法の内外相の眞如實際をいふ

【陀羅尼】ニ(Dharani)總持と譯す、種種の善法を集め持れて散失せしめざること

【無義持す】これに義、法、言、樂説の四あり、如來の四攝の智智なり

【佛の覺法】佛の覺法は衆生の輪廻著く一切を摧伏するが如きに名く

【小乘】小乘の教に喩ふる

【ニルヴァーナ】滅盡の譯す、こ

こには小乗の涅槃をいふ

【十二因縁】無明

薩摩訶薩八萬人と俱なり。是諸の菩薩は皆是れ法身のだいじ大士ならざる莫し。戒定慧、般若、解脫、見の成就する所なり。其心禪寂にして、常に三昧に在り。恬安淡泊にして無爲無欲なり。顛倒亂想復入ることを得ず。靜寂清澄にして志玄虛淡なり。之を守りて動ぜざることを億百千劫、無量の法門悉く現在前せり。大智慧を得て諸法に通達し、性相の眞實を曉了し分別し、有無長短、明現顯白なり。又能善く諸の根性隨順して、陀羅尼、無礙辯才を以て諸佛の轉法輪を隨順して能く轉す。微滴生ず積ちて以て欲塵を洗し、涅槃の門を開き、解脫の風を扇ぎ、目の熱惱を涼き、法の清涼を致す。次に甚深の十二因縁を講らして、用て無明老病死等の猛盛熾燃なる苦聚の日光に濯ぐ。爾して乃ち眞に無上の大乗を注いで衆生の諸有の善根を潤ひ清し、善の種子を布きて功德の田に廻じ、善く一切をして菩提の芽を發さしむ。智慧の日月、方便の時節、大乘の事業を扶輔し增長して、衆をして共に河海多羅三軌三菩提を成じ、常住の快樂微妙眞實に、無量の大悲、苦の衆生を救はしむ。是れ諸の衆生の眞善知識なり、是れ諸の衆生の良福田なり、是れ諸の衆生の請せざるの師なり、是れ諸の衆生の安隱の樂處、救處、護處、大依止處なり。處處に衆の爲に大導師と作れり。能く生の自せるが爲には自ら眼目を作し、聲聞衆の者には耳鼻舌を作し、諸根毀缺するには能く具足せしめ、顛狂荒亂するには大正念を作す。船師なり、大船師なり、群生を運載して、生死の河を渡して涅槃の岸に置く。醫王なり、大醫王なり、病相を分別し藥性を曉了して、病に隨ひて藥を授け、衆をして樂服せしむ。調御なり、大



乃老死によつて  
知るる苦界生起  
の因縁、前の微滯  
に對して今甚深と  
いふ。

【善知識】 正法を  
導き人をして佛道  
に入らしめ、解脫  
を得しむる人。

【福田】 佛、信に  
資養せば福徳を生  
ずること、田地の  
よを生ずるが如  
くに名く。

【御】 一切煩悩  
を制伏制御するこ  
と。

【地尊】 如来  
の地尊。

【大神】 神、  
神功、慧命、神  
持伴、侍者、神  
頭陀、その神れた  
る徳なり。

【阿闍梨】 阿闍  
梨 (Achari) 僧、  
殺賊とす、用  
儀を稱して高僧  
無生、阿闍梨、  
塔への供養、  
【塔】 塔、

【塔】 塔、

【塔】 塔、

諸放逸の行無し、猶象馬師の能く馴するに訓せざることを無く、獅子の勇猛な  
る、衆獸を威伏して、沮壞すべきことを懐き、諸の波羅蜜に遠處し、如來  
の地に於て堅固にして動せず、願力に安住して廣く辯論を爲す、久しからずして因縁を離  
三藐三菩提を成ずることを得べし、是の如く、摩訶薩の如きの不思議の功徳有り  
其比丘の名、大智舍利弗、神通目犍連、慧命摩訶提、摩訶迦旃延、彌多羅尼子、富樓那、  
阿若憍陳如、天眼阿那律、持律優婆塞、侍者阿難、童子羅云、優婆塞、羅漢、劫賓那、  
薄拘羅、阿周陀、莎伽陀、頭陀大迦葉、優鉢摩、迦耶葉、彌提迦葉と曰ふ。是の  
如き當の比丘、二千二人なり。皆阿闍梨にして、諸の結縛を盡し、復轉著無著して眞正の佛  
に成ず。

爾時、大摩訶薩摩訶訶、闍衆の衆にして、各自取たるを佛に曰りて、衆中の八萬の善  
摩訶薩と俱に坐より起ち、來りて佛の前に詣り、頭面に足を檢し、建つこと百千植して  
天香、天香を燒散し、天衣、天璣珞、天寶、香中より旋轉して散下し、四面に雲を  
と、摩訶二箇、佛に入る。天厨の天厨、人の百味充滿溢し、色を見、香を聞て  
に、自然に佛に坐す。天輪、天輪、天輪、天輪、處處に坐覺し、又の伎藝を作して  
佛に敬禮せしめ、たてまつる。即ち前んで所説し、入定して、一心に相に佛を伺つて佛  
を説きて讀むと云ふ。

大いなる故、大情大徳、堪無く堪無く著する所なし。

【脚腕】印度の禮法の一。屈膝。右膝を地につく。

【二】以下別序、偈を以て佛徳を讃歎するを述ぶ。

【妬、染、著】何れも煩惱の異名。

【天人象馬の調御】如來の異名。

【大陰人界】異名。五陰、十二入、十八界。

【其身は有に非ず等】以下十二句は佛自内證の法性身を顯するなり。

【戒定慧等】以下の句は佛の修徳の三身を顯す。

【三明】阿羅漢果の聖者の有する三種の智明。

【六通】天眼、天耳、他心、神足、宿命、漏盡の六。

【道品】四念處、四正勤、四如意足

五根、五力、七菩提分、八聖道分の三十七科に分かる修行方法の種類

【慈悲】四無量心の

【慈悲】四無量心の

天人象馬の調御、道風徳香一切に盡せり  
智恬かに情怕かに廣海靜なり、意滅し、亡じて心も亦寂なり  
永く夢妄の思想念を斷じて、復諸大陰界人無し

其身は有に非ず亦無に非ず、因に非ず縁に非ず自他に非ず  
方に非ず圓に非ず短長に非ず、出に非ず没に非ず生滅に非ず  
造に非ず起に非ず爲作に非ず、坐に非ず臥に非ず行住に非ず  
動に非ず轉に非ず閑靜に非ず、進に非ず退に非ず安危に非ず  
是に非ず非に非ず得失に非ず、彼に非ず此に非ず去來に非ず  
青に非ず黃に非ず赤、白に非ず、紅に非ず紫種種の色に非ず  
戒定慧解知見より生じ、三明六通道品より發し

慈悲十力無畏より起り、衆生善業の因縁より出でたり  
示して丈六紫金の暉を爲し、方髻に照り曜きて甚だ明徹なり  
毫相は月のごとく旋りて項には日の光あり、旋れる髮は紺青にして頂には肉髻あり  
淨き眼は明照にして上下に陶き、眉睫は紺にして舒び方しき口頬なり  
唇舌は赤く好くして丹華の若く、白き齒の四牙は黠し珂雪のごとし  
額は廣く鼻は脩く而門は聞け、胸には卍字を表して獅子の臆なり  
手足は柔軟にして千幅を具へ、腋掌には合纒ありて内外に握れり

其身は有に非ず亦無に非ず、因に非ず縁に非ず自他に非ず  
方に非ず圓に非ず短長に非ず、出に非ず没に非ず生滅に非ず  
造に非ず起に非ず爲作に非ず、坐に非ず臥に非ず行住に非ず  
動に非ず轉に非ず閑靜に非ず、進に非ず退に非ず安危に非ず  
是に非ず非に非ず得失に非ず、彼に非ず此に非ず去來に非ず  
青に非ず黃に非ず赤、白に非ず、紅に非ず紫種種の色に非ず  
戒定慧解知見より生じ、三明六通道品より發し

慈悲十力無畏より起り、衆生善業の因縁より出でたり  
示して丈六紫金の暉を爲し、方髻に照り曜きて甚だ明徹なり  
毫相は月のごとく旋りて項には日の光あり、旋れる髮は紺青にして頂には肉髻あり  
淨き眼は明照にして上下に陶き、眉睫は紺にして舒び方しき口頬なり  
唇舌は赤く好くして丹華の若く、白き齒の四牙は黠し珂雪のごとし  
額は廣く鼻は脩く而門は聞け、胸には卍字を表して獅子の臆なり  
手足は柔軟にして千幅を具へ、腋掌には合纒ありて内外に握れり

其身は有に非ず亦無に非ず、因に非ず縁に非ず自他に非ず  
方に非ず圓に非ず短長に非ず、出に非ず没に非ず生滅に非ず  
造に非ず起に非ず爲作に非ず、坐に非ず臥に非ず行住に非ず  
動に非ず轉に非ず閑靜に非ず、進に非ず退に非ず安危に非ず  
是に非ず非に非ず得失に非ず、彼に非ず此に非ず去來に非ず  
青に非ず黃に非ず赤、白に非ず、紅に非ず紫種種の色に非ず  
戒定慧解知見より生じ、三明六通道品より發し

慈悲十力無畏より起り、衆生善業の因縁より出でたり  
示して丈六紫金の暉を爲し、方髻に照り曜きて甚だ明徹なり  
毫相は月のごとく旋りて項には日の光あり、旋れる髮は紺青にして頂には肉髻あり  
淨き眼は明照にして上下に陶き、眉睫は紺にして舒び方しき口頬なり  
唇舌は赤く好くして丹華の若く、白き齒の四牙は黠し珂雪のごとし  
額は廣く鼻は脩く而門は聞け、胸には卍字を表して獅子の臆なり  
手足は柔軟にして千幅を具へ、腋掌には合纒ありて内外に握れり

其身は有に非ず亦無に非ず、因に非ず縁に非ず自他に非ず  
方に非ず圓に非ず短長に非ず、出に非ず没に非ず生滅に非ず  
造に非ず起に非ず爲作に非ず、坐に非ず臥に非ず行住に非ず  
動に非ず轉に非ず閑靜に非ず、進に非ず退に非ず安危に非ず  
是に非ず非に非ず得失に非ず、彼に非ず此に非ず去來に非ず  
青に非ず黃に非ず赤、白に非ず、紅に非ず紫種種の色に非ず  
戒定慧解知見より生じ、三明六通道品より發し

慈悲十力無畏より起り、衆生善業の因縁より出でたり  
示して丈六紫金の暉を爲し、方髻に照り曜きて甚だ明徹なり  
毫相は月のごとく旋りて項には日の光あり、旋れる髮は紺青にして頂には肉髻あり  
淨き眼は明照にして上下に陶き、眉睫は紺にして舒び方しき口頬なり  
唇舌は赤く好くして丹華の若く、白き齒の四牙は黠し珂雪のごとし  
額は廣く鼻は脩く而門は聞け、胸には卍字を表して獅子の臆なり  
手足は柔軟にして千幅を具へ、腋掌には合纒ありて内外に握れり

其身は有に非ず亦無に非ず、因に非ず縁に非ず自他に非ず  
方に非ず圓に非ず短長に非ず、出に非ず没に非ず生滅に非ず  
造に非ず起に非ず爲作に非ず、坐に非ず臥に非ず行住に非ず  
動に非ず轉に非ず閑靜に非ず、進に非ず退に非ず安危に非ず  
是に非ず非に非ず得失に非ず、彼に非ず此に非ず去來に非ず  
青に非ず黃に非ず赤、白に非ず、紅に非ず紫種種の色に非ず  
戒定慧解知見より生じ、三明六通道品より發し

の中の二

【十力】 量、非處力、業智力、定力、根力、欲力、性力、至處道力、壽命力、天眼力、漏盡力

【一】 佛菩薩の具する徳の一。四

【示して大云々の等】 以下二十句は佛の十二相について

【相三十一】 日の異名

【相三十二】 佛の身に具へ給ふ相好なり。十種好は相に隨置せる如な

【相三十三】 十二相、十種好のこと。

【佛の所處】 佛の所處

【四】 佛の所處

【須】 須

【一】 一

【二】 二

【三】 三

【四】 四

【五】 五

【六】 六

【七】 七

【八】 八

【九】 九

【十】 十

【十一】 十一

【十二】 十二

鬚は脩く肘は長く指は直く織し、皮膚は細軟にして毛は右に旋れり

鬚膝は露に現れ、馬のごとくに露れ、筋鎖骨鹿の膊腸なり

裏裏映徹して淨くして垢無く、濁水に染まること莫く塵を受けず

星の如き等の相十二ありて、八十有見るべきに似たり

而も實には相非相の色無く、一の首の目の對、絶せり

無相の相にして言相の身なり、衆生の相のごとく相も亦然たり

是れ衆生をして難言し禮して、心を敬を表して慇懃なることを示し

是れ自高我慢の處に因りて、是の如き妙色の體を成就しがまへり

等八萬の等、依に共に稽首して

多く思想心意を清したまへる、象の御の無着の聖に歸命したてまつ

稽首して歸依したてまつる法色身の定慧解知見聚に

稽首して歸依したてまつる妙幢相に稽首して歸依したてまつる難思處に

是等は雷のごとく震ひて八種あり、微妙清淨にして甚だ深廣なり

阿耨六度十二難、衆生の心業に隨順して轉じたまふ

聞くこと有れば意開け、無量の生死の結を斷ぜずといふこと莫し

漏無爲の縁、無生無滅の薩婆を得

【斯陀含】 斯陀含の略。サクリダーガ

【阿那含】 阿那含の略。アナーリ

【阿羅漢】 阿羅漢の略。アラム

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略。アヌタラサマサムササ

或は無量の陀羅尼、無礙樂説の大辯才を得て

甚深微妙の偈を演説し、法の清池に遊戯し澡浴し

或は躍り飛騰して神足を現じ、水火に出沒して身自由なり

是の如きの法輪の相是の如し、清淨無邊にして無思業なり

我等咸く復共に稽首して、法輪轉するに時を以てしたまふに歸命したてまつる

稽首して梵音聲に歸依したてまつる、稽首して緣諦度に歸依したてまつる

世尊は往昔の無量劫に、勲善して衆の徳行を修習して

我人天龍神王の爲にし、普く一切の諸の衆生に及ぼしたまへり

能く一切の諸の捨て難き、財寶妻子及び國城を捨てて

法の内外に於て憍む所無く、頭目體腦悉く人に施したまへり

諸佛の清淨の戒を奉持し、乃至命を失ふまでも毀傷したまはず

若し人あり刀杖もて來りて害を加へ、惡口罵辱すれども終に瞋りたまはず

劫を歴て身を挫けども倦惰したまはず、晝夜に心を攝めて常に禪に在り

過く一切の衆の道法を學して、智慧深く衆生の根に入りたまへり

是故に今自在の力を得て、法に於て自在にして法王と爲りたまふ

我復咸く共に俱に稽首して、能く諸の勲め難きを勲めたまへるに歸依したてまつる

【説法品】 本經の要點、正宗分を疾得成薩の法門を述す。

【一】 大莊嚴菩薩等行すべきところの法門を問へるを明す。

【飛涅槃】 梵にパリニルヴァーナ(Parinirvana)といふ、解脱をいふ、解脱は人の解脱をいふ。

【二】 菩薩等法門の義行を問へる所に如來その所を説く答へたことを明す。

説法品第二

爾時、大莊嚴菩薩摩訶薩、八萬の菩薩摩訶薩と與に、是偈を説きて、佛を讚ずること已りて、佛に佛に白して言まく、世尊、我等八萬の菩薩の衆、今言如來の法の中に於て諮問する所あらんと欲す。不審し、世尊懸聽を垂れたまはんや否や。佛、大莊嚴菩薩及び八萬の菩薩に告げて言はく、善男子。善く是時なることを知れ、汝の所問を念にせよ。佛、善男子。佛の所問を問ふは、佛に白して當に問涅槃すべし。涅槃の後、善く一切をして復餘の疑ひ無からしめ奉。佛の所問を問ふは、佛に白して言まく、世尊、菩薩摩訶薩、八萬の菩薩と與に即ち共に偈を同唱して、佛に白して言まく、世尊、菩薩摩訶薩、八萬の菩薩三菩提を成ずることを得んと欲せば、當に何等の法門をか修行すべき、何等の法門か能く菩薩摩訶薩をして、次に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしむる。佛、大莊嚴菩薩及び八萬の菩薩に告げて言はく、善男子、一の法門有り、能く菩薩をして、次に阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。若し菩薩ありて、是法門を學せば、則ち亦く佛に阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

世尊、法門二字を何等とぞ問くる。其法云何、菩薩云何が修行せん。佛の言はく、善男子、一の法門は言けて無量法と爲す。菩薩、無量法を修學することを得んと欲せば、

【本、來、今】順  
次に過去、未來、  
現世をいふ。

【六氣】地獄、業  
鬼、畜生、修羅、  
人間、天上の六道  
のこと。

【四相】生、住、  
異、滅のこと。

【無量義とは一法  
より生ず】一切の  
法門無量義は實相  
の一法より生ずと  
なり。  
【寶相】 森羅萬象  
ありのままの相  
【必ず、扶く】 實相  
を必ず得ることを得る

應當に一切の諸法は自ら本來今、性相空寂にして、大無く小無く、生無く滅無く、住に非ず動に非ず、進ならず退ならず、猶し虚空の如くにして二法有ること無く、而も諸の衆生は、虚妄もて横に是は此、是は彼、是は得、是は失なりと計して、不善の念を起し衆の惡業を造り、六趣に輪廻して諸の苦毒を備け、無量億劫にも自ら出ること能はずと觀察すべし。菩薩摩訶薩、是の如く諦かに觀じて憐愍の心を生じ、大慈悲を發して、將に救拔せんと欲し、又復深く一切の諸法に入れ、法の相は是の如くにして是の如きの法を生じ、法の相は是の如くにして是の如きの法に住し、法の相は是の如くにして是の如きの法を異し、法の相は是の如くにして是の如きの法を滅す。法の相は是の如くにして是の如きの法を生じ、法の相は是の如くにして能く善法を生ず。住と異と滅も亦復是の如し。菩薩、是の如く四相の始末を觀察して、悉く遍く知り已れば、次に復諦かに一切の諸法は念念に住せず新舊に生滅すと觀じ、復即時に生住異滅すと觀せよ。是の如く觀じ已りて、而も衆生の諸の根性欲に入れ、性欲無量なるが故に説法無量なり。説法無量なるが故に善も亦無量なり。無量義とは一法より生ず。其一法とは即ち無相なり。是の如きの無相は相無くして相ならず。相ならずして相無きを名けて實相と爲す。菩薩摩訶薩は、是の如きの實相に安住し已りて發する所の慈悲は明諦にして虚しからず。衆生の所に於て眞に能く苦を抜く。苦既に抜き已れば、復爲に法を説いて諸の衆生をして快樂を受けしむ。善男子、菩薩若し能く是の如く一切の法門無量義を修する者は、必ず疾に阿耨多羅三藐三菩提を

【法華】の法無量義を修する者は即ち成就の大智を得るなり

【法華】の法無量義を修する者は即ち成就の大智を得るなり

【法華】の法無量義を修する者は即ち成就の大智を得るなり

【法華】の法無量義を修する者は即ち成就の大智を得るなり

成ずることを得ん。善男子、是の如き甚深の無上大乗無量義經は文理眞正なり、尊にして過上無し、三世の諸佛の共に守護したまふ所なり、天魔群道得入すること有ること無く、一切の邪見生起に壞敗せられず。是故に善男子、菩薩摩訶薩若し疾く無上菩提を成ぜんと思せば、應當に是の如き甚深の無上大乗無量義經を修學すべし。

爾時、大莊嚴菩薩、復佛に白して言さく、世尊、世間の説法は不可思議なり。衆生の根性亦不可思議なり。法門深妙亦不可思議なり。我等は佛の教きたまふ所の諸法に於て復疑難難れども、而も諸の衆生は迷惑の心を生ぜんが故に重ねて我等に語ひたまはる。如來得道したまひてより已來四十餘年、常に衆生の爲に、諸法の四相の義、善の義、空の義、無常の義、無我の義、無大の義、無小の義、無生の義、無死の義、一相の義、無相の義、法性の義、法相の義、本來空寂の義、本來不生の義、不出の義、不没の義を演説したまふ。善男子、何れのことと有る者哉、或は假法、誑法、世尊一法、須陀洹果、斯陀含果、阿羅漢果、阿耨多羅三藐三菩提道を得、菩提心を發し、第一度、第二、第三に及び、第十地に至る。往日説きたまふ所の諸法の義と今の説きたまふ所と、何等の異なること有らん、而も甚深の無上大乗無量義經のみ智難修すねば、必ず疾く無上菩提を成ずることを得んと言ふ、是事云何、世尊、は世尊、一切を悉くして、隨て衆生の爲に

【法華】の法無量義を修する者は即ち成就の大智を得るなり

【法華】の法無量義を修する者は即ち成就の大智を得るなり

【道場】法にボー  
 テイマンダラ  
 (Jhannala) 諸佛  
 の金剛室に於て  
 正覺を成ず給ふ處  
 【提提】ボー  
 イドレ、ボー  
 諸佛の菩提を成ず  
 る道場にある樹を  
 謂ふ也

四十餘年には未  
 た曾て實を顯さ  
 ず佛成道後三七  
 日開寶藏を説き  
 受てより阿含十二  
 年、方等般若三十  
 二年、法華を合して  
 四十餘年といふ。

此開所説の諸經は  
 未だ如來の眞實を  
 顯はさずなり

【得道差別】四十  
 餘年間に説くとこ  
 ろの諸經は三乘各  
 業を異にし、衆生  
 の得道同じからざ

き甚深の無上大乗の微妙の義を問へり。當に知るべし、汝能く利益する所多く、大衆を安  
 樂し、苦の衆生を拔かん。實の大慈悲なり、信實にして虚しからず。是因縁を以て必ず次に  
 無上菩提を成ずることを得ん。亦一切の今世來世の諸の有ゆる衆生をして無上菩提を成  
 ずることを得しめん。善男子、我道場菩提樹下よりして端坐すること六年にして、阿耨多羅  
 三藐三菩提を成ずることを得たり。佛眼を以て一切の諸法を覆するに、宣説すべからず。  
 所以は何ん。諸の衆生の性欲不同なるを以てす。性欲不同なれば種種に法を説く。種種に  
 法を説くこと方便力を以てす。四十餘年には未だ曾て實を顯はさず。是故に衆生は得道差  
 別して、我に無上菩提を成ずることを得ず。善男子、法は譬へば水の能く垢穢を洗ふが如  
 し。若は月、若は池、若は江、若は河、若は河溪、若は大海、皆悉く能く諸有の垢穢を洗ふ。其法水  
 も亦復是の如く、能く衆生の諸の煩惱の垢を洗ふ。善男子、水の性は其れ一なれども、  
 江河井池溪渠大海、各別異なり。其法の性も亦復是の如し、塵勞を洗除することは等しく  
 して差別無けれども、三法、四果、二道一ならず。善男子、水は俱に洗ふと雖も、而も月は  
 池に非ず、池は江河に非ず。溪渠は海に非ず。如來世雄の如きは、法に於て自在にして、  
 説く所の諸の法も亦復是の如し。初中後の説、皆能く衆生の煩惱を洗除すれども、而も  
 初は中に非ず、而も中は後に非ず。初中後の説、文辭は一なりと雖も、而も義は各異な  
 り。善男子、我樹王を起ちて、波羅奈鹿野園の中に詣り、阿若拘隣等の五人の爲に四諦の  
 法輪を轉せし時も、亦一諸法は本來空寂にして、代謝して住せず、念念に生滅すと説き、





【方等十二部經】方等とは方廣平等の義、即ち大乘をいふ、十二部經とは長行、重頌、授記、採起、無問自說、因緣、譬喩、本事、本生、方便、未曾有、論議是なり。

【摩訶般若】大般若經のこと。

【華嚴海會】華嚴經のこと。

【佛出他】ナユタ(Nyuta) 印度の數量、千億或は萬億のこと。

【恆河沙】恆河の沙の無量なるを以て、無量の量にいふ。

【阿僧祇】アナムクヤ(Astika) 無數と譯す、大數の極なり。

【二乘】聲聞、緣覺をいふ。

【十住の菩薩】通教の十地、別教の十地の菩薩をいふ。

【五】隨喜供養並に聞經の得益を明

を以て百千萬億那由他無量無數恆河沙の身を示し、一一の身の中に又若干の百千萬億那由他阿僧祇恆河沙の種類の身形を示し、一一の形の中に又若干の百千萬億那由他阿僧祇恆河沙の形を示す。善男子、是れ則ち諸佛の不可思議甚深の境界なり。二乘の如き所に非ず、亦十住の菩薩の及ぶ所に非ず。唯佛と神とのみ乃ち能く究了したまふ。善男子、是故に我説かく、微妙甚深の無上大乗無量義經は文理真正にして、尊にして過上無し、三世の諸佛の共に守護したまふ所なり、衆魔外道得入すること有ること無し、一切の邪見生死に破敗せられず」と。菩薩摩訶薩、若し疾に無上菩提を成ぜんと思せば、應當に是の如き甚深の無上大乗無量義經を修學すべし。

【佛、是を説きたまふこと】りて、是に於て三千大千世界、六種に震動し、自然に空中より種種の天華、天鬘鉢羅華、鉢曇摩華、拘物頭華、分陀利華を雨らし、又無數の種種の天香、天衣、天鬘瑠璃、天無價寶を雨らし、上空の中より旋轉來下して、佛及び一切の菩薩、聞天衆に供養す。天厨の天鉢器には天の百味充滿溢溢し、天幢、天幡、天蓋、天妙樂具、處處に安置し、天の伎樂を作して佛を歌歎したてまつる。又復六種に東方恆河沙の諸佛の世界を震動し、亦天華、天香、天衣、天鬘瑠璃、天無價寶を雨らし、天厨の天鉢器には天の百味あり、天幢、天幡、天蓋、天妙樂具、天の伎樂を作して、被佛及び彼菩薩聲聞大衆を歌歎したてまつる。南西北四方四維上下も亦復是の如し。

是に於て衆中の三萬二千の菩薩摩訶薩は無量義三昧を得、三萬四千の菩薩摩訶薩は無數

無上

無上

無上

無上

無上

無上

無上

無上

無上

無上

無上

す。

【蔓鉢羅華】 ウト

バラ【ゴロシ】 青蓮

華のこと。

【鉢曇華】 バド

ヤ(Palma) 木

のト。

【拘物氣華】

(Kumudi) 木

のト。

【分陀利華】 プン

リカ Kundalika

【白蓮華】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

【無性法】 不生

無量の陀羅尼門を得て、能く一切の二正の諸佛の本眞の法輪を轉す。其路の比丘、比丘尼、優婆塞、檀越、居士、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、大摩訶輪王、小摩訶輪王、阿蘭若、諸轉輪王、閻浮、王子、諸臣、國長、國主、國女、國女長者、及び諸の眷屬、百千の家と俱なす。佛如來の足履を成したまふと明をたてまつる時、廣く法、戒、禪、淨、四正、須陀洹果、阿羅漢果、辟支佛果、阿耨多羅三藐三菩提を得、又菩薩無生法智を得、又一の陀羅尼を得、又二の陀羅尼を得、又三の陀羅尼を得、又四の陀羅尼を得、又五、六、七、八、九、十の陀羅尼を得、又百千萬億の陀羅尼を得、又無量阿僧祇恒河沙阿僧祇の陀羅尼を得、皆能く轉顯して不退轉の法を成ず。知念の國主は阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。

十功德品第三

【十功德品】 前品に續き、本經に十種の不思議の力ありて、成證せしむること、並に本經の付属ををく。【大衆】 大衆本經の不思議の功徳の事についで佛に對ふ【四衆】 比丘、比丘尼、優婆塞、優

阿耨多羅三藐三菩提、得入すること有ること無し。一切の邪見生死の地獄する所にあらず。所以は何ん。  
 一たび開けば、能く一切の法を持つが故なり。若し衆生有りて是經を聞くことを得れば、則ち得れ大利なり。所以は何ん。若し能く修行すれば、必ず衆に無上菩提を成ずることを得ればなり。其れ衆生有りて聞くことを得ざる者は、常に知るべし、是れ等は爲大利を失へるなり。無量無邊不可思議阿僧祇劫を過ぐれども、終に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ず。所以は何ん。菩提の大道直を知らざるが故なり。除道を行くに、留難多きが故なり。世尊、是經典は不可思議あり、唯願くば世尊、廣く大衆の衆に講説して、是經の甚深不思議の事を演説したまへ。世尊、是經典は、何れの處より來り、去りて何れの所にか至り、往りて何れの所にか住りて、乃至是の如き無量の功徳不思議の力有りて、衆をして疾に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしむるや。」

爾時、世尊、大莊嚴菩薩摩訶薩に告げて言はく、善哉善哉、善男子。是の如く是の如し、汝が言ふ所の如し、善男子、我是經を説くこと甚深甚深なり。眞實甚深なり。所以は何ん。衆をして、疾に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしむるが故なり。一たび開けば、能く一切の法を持つが故なり。諸の衆生に於て、大利益あるが故なり。大直道を行くに、留難無きが故なり。善男子、汝は是經は、何れの所より來り、去りて何れの所にか至り、住りて何れの所にか住り」と問ひしことは、當に善く論かに聽くべし。善男子、是經は、本諸佛の室宅の中より來り、去りて一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩の所行の處に住

【室宅】 諸佛は大慈悲をもつてその室宅として住す。

【二】以下十不思  
【功徳力の一】に  
【心不思】力。初に

【善仁なき心】  
以下四無善心を説く、善心は慈悲心

【大善心】は慈悲心  
【捨無量心】は善

【請の擧げ】  
下は布施の三智徳

【未だ彼を】とす  
【以下】は三智徳

【十善】は十善、不  
【六】は六、煩悩

【十】は十、偷  
【三】は三、貪

【三】は三、貪  
【三】は三、貪

【十】は十、偷  
【三】は三、貪

【有】は有、中  
【請の擧げ】は三智徳

【爲す】は爲す、中  
【有】は有、中

【無爲】は無爲、反  
【有】は有、中

る。善男子、是は、是の如く来り是の如く去り是の如く住る。是故に善人は能く是の如  
き無量の功徳不思議の力有りて、衆をして共に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしむ。善男子、  
汝、寧ろ此阿耨多羅三藐三菩提の不思議功徳の力有ることを問かんと欲するや否や。大莊嚴菩薩言さ  
く、願くば問きたてまつらんと欲す。

【請の言はく】善男子、第一に慈悲は能く衆生の未だ真心せざる者をして善徳心を發さし  
め、善仁無量に慈悲心を起さしめ、衆生を行む善には大善の心を起さしめ、衆生を生ず  
る善には阿耨多羅三藐三菩提の心を起さしめ、衆生ある善には捨捨の心を起さしめ、請の擧げの善には勇  
猛の心を起さしめ、衆生ある善には持戒の心を起さしめ、衆生ある善には忍辱の心を  
起さしめ、衆生ある善には持戒の心を起さしめ、衆生ある善には忍辱の心を起さし  
め、衆生ある善には持戒の心を起さしめ、衆生ある善には忍辱の心を起さし  
め、衆生ある善には持戒の心を起さしめ、衆生ある善には忍辱の心を起さし

るの心を起さしめ、衆生を行ずる善には持戒の心を起さしめ、有爲を離れ善人は、衆生の  
心を起さしめ、衆生ある善には持戒の心を起さしめ、衆生ある善には忍辱の心を起さ  
しめ、衆生ある善には持戒の心を起さしめ、衆生ある善には忍辱の心を起さし  
しめ、衆生ある善には持戒の心を起さしめ、衆生ある善には忍辱の心を起さし  
しめ、衆生ある善には持戒の心を起さしめ、衆生ある善には忍辱の心を起さし

【善】は善、中  
【請の言はく】は三智徳  
【衆生】は衆生、中  
【阿耨多羅三藐三菩提】は阿耨多羅三藐三菩提、中  
【成ぜしむ】は成ぜしむ、中  
【問かんと欲するや否や】は問かんと欲するや否や、中  
【大莊嚴菩薩】は大莊嚴菩薩、中  
【願くば】は願くば、中  
【問きたてまつらんと欲す】は問きたてまつらんと欲す、中

【有漏】 三界の業因たる見思の惑を斷じて漏有ることなきをいふ。  
 【三】 第三に義生不思議力に就て。  
 【四】 第三に船師不思議力に就て。  
 【生死】 二十五有の分段生死をいふ。

【四體】 人體は地水火、風の四大合成なるに名く。  
 【五道諸有の身】 地獄、餓鬼、畜生修羅、人間を五道といひ、諸有は二十五有なり。迷界流轉の身の意。  
 【百八の重病】 百八煩惱。

【五】 第四に王子不思議力に就て。

經云、譬へば一の種子より百千萬を生じ、百千萬の中より一に復百千萬を生じ、是の如く展轉して、乃至無量なるがごとし。是經典も亦復是の如し。法より百千の義を生じ百千の義の中より、一に復百千萬を生じ、是の如く展轉して乃至無量無邊の義あり。是故に此經を無量義と名く。善男子、是を是經の第二の功德不思議の力と名く。  
 善男子、第三に是經の不可思議の功德力とは、若し衆生有りて是經を聞くことを得て、若は一轉、若は一偈、乃至一句もせば、百千萬億の義に通達し、思ひて、煩惱有りし雖も、煩惱無きが如く、生を出で死に入るとも、怖畏の想無けん。諸の衆生に於て、憍恚の心を生じ、一切の法に於て勇健の想を得ん。壯なる力士の、諸の有ゆる重き者を、能く擔ひ能く持つが如し。是持經の人も亦復是の如し。能く無上菩提の重き寶を背ひ、衆生を擔ひ負うて、生死の道を出ず。未だ自ら度すること能はざれども、已に能く教を度せん。船師の、身重病に嬰り、四體御まらずして、此岸に安止すれども、好き堅牢の舟船ありて、常に諸の彼を度する者の具を辨ぜざるを、給ひ與へて去らしむるが如し。是持經の者も亦復是の如し。五道諸有の身、百八の重病に嬰り、恆常に相纏はれて無明老死の此岸に安止せりと雖も、而も堅牢なる此大乘の經の無量義には能く衆生を度することを辨するもの有り。能く説の如く行する者は生死を度することを得。善男子、是を是經の第二の功德不思議の力と名く。

善男子、第四に是經の不可思議の功德力とは、若し衆生有りて是經を聞くことを得て、

【普賢菩薩】如來  
聖法の大菩薩なり

【普賢】一心入道  
して是れ菩薩なり

【六】般若に隨て  
不思義に隨て

若は一轉、若は一偈、乃至一句もせば、眞如の相を得て、未だ自ら度せずと雖も、而も能く他を度せん。諸の菩薩と以て眷屬と爲り、者佛如來、常に是人に向ひて爾も法を演説したまはん。是人聞き已りて、悉く能く受持し隨順して道はず。轉た復人の爲に宜きに隨ひて轉く或は、善男子、是人は、佛へて國王と大士とに轉じ、王子を生まんに、若は一日、若は二日、若は七日に至り、若は一月、若は二月、若は七月に至り、若は一歳、若は二歳、若は七歳に至り、復國王を領理すること能はずと雖も、常に位階に坐す數はれ、諸の大王の子を以て伴者と爲し、王及び夫人、愛心獨に重くして常に與に共に居らん。爾以は何ん、稚小なるを以ての故に。善男子、是轉經の善も亦復たの如し。諸佛の國王と是經の夫人と和合して、共に是菩薩の子を生ず。若し一菩薩、是經を聞くことを得て、若は一句、若は一偈、若は一轉、若は十、若は百、若は千、若は萬、若は億、若は十億、若は十萬沙、無量無數轉經に、復轉經の權を備ふること能はずと雖も、復三千大千の國土を震動し、雷聲言もて、法輪を轉ずること無かずと雖も、已に一切の四衆八種の法に宗び仰がれ、諸の天菩薩を以て眷屬と爲し、深く諸佛の隨喜の法に入りて、演説する所無きこと無く、失却く、常に諸佛に隨喜せられて、無受處に置はれん。善學なるを以ての故なり。善男子、是を是經の第四の功徳と思ふべしと名く。

善男子、第五に及ぶる不可思議の功徳力とは、若し善男子善女人、若は佛の在世にもあれ、若は滅度の後にもあれ、其れ是れ經を別當の教主大菩薩の法を受持し、讀誦し、書寫す

【七】第六に治等不思議力に就て。

ること行らん。是人復轉煩惱を具して、未だ諸の凡夫の事を遠離すること能はずと雖も、  
問も能く大菩薩の道を示現し、一日を延べて以て百劫と爲し、百劫を亦能く促めて一日と  
爲して、彼衆生をして教誨し、信伏せしめん。善男子、是善男子善女人は、譬へば龍の子の  
始めて生れて七日にして雲雨能く興し、亦能く雨を降らすが如し。善男子、是を是經  
の第五の功德不思議の力と名く。

【初不動地】菩薩十地位の初地をいふ。即ち歡喜地のこと。  
【八】第七に賞封不思議力に就て。  
【第七の地】十地位の第七遠行地な

善男子、第六に是經の不可思議の功德力とは、昔し善男子善女人、其は佛の在世にもあ  
れ、若は滅度の後にもあれ、是無畏を受持し、嗔惱を具すも雖も、而も衆生の爲  
に法を説きて煩惱生死を遠離し、一切の善を修することを得しめん。衆生聞き已りて修行  
して、得法得果得道すること、猶如來と異に等しくして差別無ぜん。譬へば王子の復稚小  
なりと雖も、若し王の愛せし、又以て疾病するに候、是王子に委せて國事を領理せしむ。王  
子是時に、大王の命に依りて、法の如く觀察百官に教令し正位を定流するに、國土の人  
民、各其安に吟びて、大王の治するが如く等しくして異なること有ること無きが如く、持  
國の善男子善女人も亦爾の如し。若は佛の在世にもあれ、若は滅度の後にもあれ、善  
男子、未だ初不動地に住することを得ずと雖も、佛の是の如く教法を用説したまふに依り  
て、而も歡喜せんに、衆生聞き已りて一心に修行せば、煩惱を離除して得法得果乃至得道  
せん。善男子、是は其經の第六の功德不思議の力と名く。

善男子、第七に其經の不可思議の功德力とは、昔し善男子善女人、佛の在世に於ても、





【上地】七地までを下地といふに對し、第八不動地以上を上地といふ。

【九】第九に救濟不思議力に就て。

【宿業】過去世の惡業。

【六精】四無礙辯のこと。

【諸波羅蜜】六波羅蜜、十波羅蜜等。

【諸の三昧】百八三昧。

【首楞嚴三昧】シユーラガマ、サマ

デー(の)hramaya(samathi) 勇健定、健行定と譯す。分別して諸三昧の行相の多少淺深を知ること、大將が諸兵力の多少を知るが如し、菩薩の三昧を得れば諸煩惱等をよく救することを得。

【大總持門】一切の陀羅尼を總括せるをいふ。

【上地を越ゆ】第九善慧地に入るをいふ。

於て無生法忍を得、上地に至ることを得て、諸の菩薩を以て眷屬と爲し、遠に離く衆生を成就し、佛國土を淨ら、久しからずして無上菩提を成ずることを得ん。善男子、是を是

の第八の功徳不思議の力と名く。

善男子、第九に是經の不可思議の功徳力とは、若し善男子善女人、若し佛の在世にもあれ

若し滅度の後にもあれ、是經を得ること有りて歡喜し勇躍し、未曾有なることを得て、受持

し、讀誦し、書寫し、供養し、隨く衆人の爲に是經の義を分別し、宣説せんば、即ち宿業の餘

罪、重障一時に滅盡することを得て、便ち清淨なることを得、大辯を建得し、次第に諸

波羅蜜を莊嚴し、諸の三昧、首楞嚴三昧を獲、大總持門に入り、總持力を得て、遠に上地

を越ゆることを得、善能く分身散體して十方の國に遍じ、一切二十五有の曠苦の衆生を拔

濟して悉く解脱せしめん。是故に是經に此の如きの力有り。善男子、是を是經の第九の

功徳不思議の力と名く。

善男子、第十に是經と不可思議の功徳力とは、若し善男子善女人、若し佛の在世にもあれ、

若し滅度の後にもあれ、若し是經を得て大歡喜を發し、希有の心を生じ、即ち自ら受持し、讀

誦し、書寫し、供養し、讀の如く修行し、復能く廣く在家出家の人を勸めて受持し、讀

書寫し、供養し、法の如く修行せしめん。既に餘人をして是經を修行せしむる力の故に得道

得果せん。若し善男子善女人の盡心して變化するの力に由るが故なり。是善男子善女人、

即ち是身に於て、便ち無量の諸の陀羅尼門に逮り、凡夫地に於て自然に、初時に、能く



を獲しめたまふ。衆を爲れ奇特にして未曾有なり。世間の雜思は實に損ずべきこと無し。爾時、三千大千世界、六種に震動し、上空の中に於て復種種の華、天曼珠璣華、鉢曇華、栴檀華、分陀利華を雨らし、又無數の種種の天香、天瑠璃、天寶蓋を雨らし、上空の中より、旋、下して、佛及び諸の菩薩、聲聞、天衆に降下す。天厨の天鉢器には、天の百味、充滿溢し、色を見、香を聞ぐに、自然に飽是す。天幢、天幡、天蓋、天妙樂具、處處に安置し、天の伎樂を作して佛を讚歎したてまつる。又復六種に東方恆河沙等の諸佛の世界を震動し、亦天華、天香、天衣、天寶蓋、天寶價を雨らし、天厨の天鉢器には天の百味あり。色の見、香を聞ぐに、自然に飽是す。天幢、天幡、天蓋、天妙樂具、天の伎樂を作して佛及び諸の菩薩、聲聞、天衆を讚歎す。南西北方四維上下も亦復是の如し。

爾時、佛、大莊嚴菩薩摩訶薩及び八萬の菩薩摩訶薩に告げて言はく、汝等當に莊嚴に於て常に沐く真心を起し、泥の如く修行し、廣く一切を化して熱心に洗布せしむべし。常に當に慈愍に晝夜に守護して普く衆生のして各法利を獲しむべし。汝等眞に是れ大慈大悲なり。以て神通の神力を立てて是經を守護して疑滯せしむること勿れ。當來世に於て必ず廣く阿浮提に行せしめて、一切衆生をして見聞し、宣誦し、書寫し、供養することを得しめよ。是を以ての故に、亦汝等をして、速に阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。是時、大莊嚴菩薩摩訶薩、八萬の菩薩摩訶薩と共に即ち坐より起ち、佛の所に來詣して

【阿浮提】 ツヤム  
ブドギーバ (Tamb  
ニエニエ)

譯す、吾人の住める世界。

頭面に是を禮し、遶ること百千匝して即ち唄んで唱宣し、俱に共に聲を同りして佛に白して言さく、世尊、我等憶く世尊の慈恩を蒙り。我等が爲に、是甚深微妙の無上大乗無量義經を説きたまふ。竝んで佛勅を受けて、如所の後後に於て當に廣く是經を流布せしめ、普く一切をして所持し、讀誦し、書寫し、供養せしむべし。唯願くば護持を蒙れたまふこと勿れ。我等當に障力を以て、普く一切衆生をして此經を得て、見聞し、讀誦し、書寫し、供養して、威神の力を得しむべし。

爾時、佛告めて言はく、善い善い哉、諸の男子。汝等今者眞に是れ佛子なり。大慈大悲して、深く能く善を授け厄を救ふ者より、一切衆生の良福田なり。普く一切の爲に大良導とす。一切の衆生を依止所なり。一切の衆生の大施主なり。常に法利を以て廣く一切に施すべし。

爾時、大會、皆大いに歡喜して、佛の所に歸り奉り、受持して去れり。



妙法蓮華經

第一卷	經典部
-----	-----







【摩訶迦勝延】十  
大弟子中論議第一  
と稱せらる。

【阿菟樓駄】十大  
弟子中天眼第一と  
稱せらる。

【妙賢那】星宿を  
知ること衆倍中第  
一と稱せらる。

【橋梵波提】解律  
第一と稱せらる。

【離婆多】坐禪を  
樂ふを以て佛弟子  
に稱せらる。

【摩訶伽婆提】樹  
下に苦坐して風雨  
を遮げざるを以て  
稱せらる。

【摩訶羅】ブクラ  
(Mauria) 國、  
佛影等と稱す。  
【摩訶迦勝延】問  
答第一。

【摩訶】音聲の絶  
たざるを以て稱せらる。

【探勝】陀 佛  
の提帶にして諸根  
調伏第一の稱あり

【當機】摩訶羅尼  
子 十大弟子中説  
法第一と稱せらる

【須菩提】十大弟  
子中解宗第一と稱

達し、彼岸に到り、名稱普く無量の世界に聞えて、能く無數百千の衆生を度す。其の百二十、  
文殊師利菩薩、觀音菩薩、得大勢菩薩、常精進菩薩、不休息菩薩、寶掌菩薩、藥王菩  
薩、勇施菩薩、寶月菩薩、月光菩薩、灌月菩薩、大力菩薩、無量力菩薩、三三昧菩薩、  
跋陀婆羅菩薩、阿鞞波羅、寶印菩薩、華嚴菩薩といふ。是の如き等の菩薩摩訶薩八萬人と  
俱なり。

爾時、釋提桓因、其眷屬一萬の天子と俱なり。復者月天子、普賢天子、寶光天子、  
四大天王あり。其眷屬萬の天子と俱なり。自在天子、大自在天子、其眷屬三萬の天子と俱  
なり。

婆娑世界の主、梵天王、尸棄大梵、光明大梵等、其眷屬萬二千の天子と俱なり。  
八の龍王あり、龍陀龍王、龍摩訶龍王、婆伽羅龍王、和修吉龍王、徳文迦龍王、阿那婆  
達多龍王、摩那斯龍王、優婆塞龍王なり。各業千の百千の眷屬と俱なり。

四の緊那羅王あり、法堅那羅王、妙法堅那羅王、大法堅那羅王、持法堅那羅王なり。各  
若千の百千の眷屬と俱なり。

四の乾闥婆王あり、善乾闥婆王、樂音乾闥婆王、美乾闥婆王、美音乾闥婆王なり。各  
若千の百千の眷屬と俱なり。

四の阿修羅王あり、婆羅摩修羅王、俱羅摩修羅王、毘摩質多羅阿修羅王、羅摩阿修  
羅王なり。各若千の百千の眷屬と俱なり。

【十六】十六弟子  
【十七】十七弟子  
【十八】十八弟子  
【十九】十九弟子  
【二十】二十弟子

【二十一】二十一弟子  
【二十二】二十二弟子  
【二十三】二十三弟子  
【二十四】二十四弟子  
【二十五】二十五弟子

【二十六】二十六弟子  
【二十七】二十七弟子  
【二十八】二十八弟子  
【二十九】二十九弟子  
【三十】三十弟子

【三十一】三十一弟子  
【三十二】三十二弟子  
【三十三】三十三弟子  
【三十四】三十四弟子  
【三十五】三十五弟子

【三十六】三十六弟子  
【三十七】三十七弟子  
【三十八】三十八弟子  
【三十九】三十九弟子  
【四十】四十弟子

【四十一】四十一弟子  
【四十二】四十二弟子  
【四十三】四十三弟子  
【四十四】四十四弟子  
【四十五】四十五弟子

【四十六】四十六弟子  
【四十七】四十七弟子  
【四十八】四十八弟子  
【四十九】四十九弟子  
【五十】五十弟子

【五十一】五十一弟子  
【五十二】五十二弟子  
【五十三】五十三弟子  
【五十四】五十四弟子  
【五十五】五十五弟子

四の迦樓羅あり、大風徳迦樓羅、大身迦樓羅王、十滿迦樓羅王、始迦樓羅王たり。

各若千の百千の眷屬と俱なり。  
韋提希の子闍維世王、若千の百千の眷屬と與に俱なり。

各佛の足を踏して、遠いて一面にせり。  
爾時、世尊、阿耨多羅三藐三菩提に坐して、諸の菩薩の爲に、大乘

經の無量菩薩、阿耨多羅三藐三菩提を説きたまふ。佛、此の經を説き已りて、跏趺

坐し、無量義三昧に入りて、一心に觀た

是時、王より父陀羅華、摩訶陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華を唱らして、佛の上、

及び諸の大衆に散じ、佛世尊、六處に震動す。爾時、會中の比丘、比丘尼、優婆塞、

優婆夷、王、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人及び四の  
小王、轉輪聖王、是諸の大衆、夫れを得、歡喜し、合掌し、一心に佛を觀た

【二】以下通序、初に此土他土の六

瑞を擧げて、説法につ、ての現瑞を示す。

【四輩】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。

【普賢世界】三千大千世界に同じ。

【六種】震、動、擊、起、擧、なり。

【六塵】地、水、火、風、香、色、聲、觸、味、生、長、老、死、入、門、天上。

【舍利】身骨等と譯す、佛または聖者の遺骨をいふ。

【三】彌勒、大衆佛の神變を觀じ給ふを見て、その何の因縁なるやを疑ふを明す。

【四】彌勒、前に起せる疑念に基き文殊師利に問す。

見、復諸佛の破涅槃の義、離舍利を以て、七寶の塔を起つるを見る。

爾時、彌勒菩薩、是念を作さく、今普賢尊、諸佛の相を現したまふ、何の因縁を以てか而も自塔有る。今佛世尊は、三昧に入りたまへり。是不思議に希有の事を現せ奉るを、當に以て當に問ふべき。我が昔答へん者なる。復此念を作さく、是文殊師利、法王の子は、目に會て過去無量阿僧祇に親近し供養せり。必ず應に此希有の相を見るべし。我今當に問ふべし。

爾時、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の天、龍、鬼神等、咸く此念を作さく、是佛の光明、神通の相を、今當に當にか問ふべき。

爾時、彌勒菩薩、自ら疑を決せんと欲し、又四衆の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の天、龍、鬼神等の集會の心を觀じて、文殊師利に問うて言はく、自の因縁を以て此瑞神通の相有りて、大光明を放ち、東方萬八千の主を照らしたまふに、悉く彼佛の圓界の莊嚴を見るや。

是に於て彌勒菩薩、重ねて此義を宣べんと欲して、佛を以て問うて曰はく、

文殊師利、導師何が故に

眉間白毫の、大光普く照らしたまふや

曼陀羅、曼殊沙華を雨らして

梅檀の香ばしき風、衆の心を悅可す

【有頂】 チヤンダ  
 (Cātavana) 與樂  
 とす。香木なり。

【有頂】 有頂とは  
 世界の最上、非  
 常の理想天の別名

【理主師子】 理章  
 師子

是國を以て、地皆嚴淨なり

而此世界、六種に震動す

時に西部の衆、咸く皆歡喜し

身自然として、未曾有なることを得たり

日月の光明、東方

萬千の土を照らしたまふに、皆金色の如し

喜樂より、上は有頂に至るまで

世界の中の、六道の衆生

所の所趣、善惡の業緣

愛の好醜、此に於て悉く見る

理主師子

の、微妙第一なるを演説したまふに

衆の衆に、衆の衆の音を出だし

菩薩を教へたまふこと、無數億萬なり

衆の衆に、衆の衆と樂はし

衆の衆に、衆の衆に

衆の衆に、衆の衆に

【緣起】十二因縁を繋じて覺る聖者師によらずして獨悟するを以て獨覺ともいふ。

【摩訶】如意寶珠【金剛語珍】以下華嚴までを八珍といふ。  
【廻向】自ら修したる善行の功德を有量の衆生に廻施すること。

佛道を照明し、衆生を開悟せしめたまふを廻向に照明を説きて、痛苦の際を盡さしめ

若し人智有りて、骨て佛を供養し

勝法を志すするに似、爲に縁覺を説き

若し佛子有りて、種種の行を修し

無上尊と名むるには、爲に淨道を説きたまふ

殊勝の利、我此に住して

見聞すること斯の若く、千億の事に及び

是の如く衆多なる、今當に略して説くべし

我彼上の、恆沙の菩薩

種種の因縁もて、而も佛道を求むるを見る

或は佛を行するに、金銀珊瑚

眞珠摩尼、碾磑、

金剛の指輪、奴婢車畜

寶飾の華鬘を、歡喜して布施し

佛道に廻向して、是業の

【寶飾】 飾りせる

三軍一にして、諸佛の歎じたまふ所なるを得んと願ふ有り

或は菩薩の、騎馬の寶車の

【寶飾】あると、軒飾あるとを布施する有り

寶菩薩の、身肉手足

及び妻を施して、無上道を求むるを見る

又菩薩の、頭目身體を

以樂施して、佛の智慧を求むるを見る

【寶飾】我諸王の

佛の所に往詣して、無上道を開ひたてまつり

佛の樂、宮殿臣妾を捨てて

樂を棄除して、法服を被るを見る

或は菩薩の、而も比丘と作りて

獨り閑に處し、樂みて經典を誦するを見る

又菩薩の、勇猛精進し

深山に入りて、佛道を思惟するを見る

又欲を離れ、常に空閑に處し

深く禪を修して、五神通を得るを見る

【五神通】 入眞、  
天眼、他心、宿命、  
神足の五徳

又菩薩の、禪に安んじて合掌し

千萬の偈を以て、諸法の王を讚めたてまつるを見る

復菩薩の、智深く志固くして

能く諸神に問ひたてまつり、問して悉く受持するを見る

又佛子の、定慧具足して

無量の喩を以て、衆の爲に法を講じ

欣樂説法して、諸の菩薩を化し

魔の兵衆を破して、法鼓を擧つを見る

又菩薩の、寂然安默にして

天龍恭敬すれども、爲を以て喜びとせざるを見る

又菩薩の、林に處して光を放ち

地獄の苦を救ひて、佛道に入らしむるを見る

又佛子の、衆だ嘗て誦説せず

林中に遊行して、佛道を懇求するを見る

又善を具して、威儀缺くること無く

淨きこと寶珠の如くにして、以て佛道を求むるを見る

又佛子の、忍辱の力に任して

【宴默】 禪に安ずること。

【經行】 行道に同じ。

【忍辱】 苦痛屈辱をしのんでうらみを報ぜざること。



【佛上】未だ悟  
るに自ら悟れ  
るを思ふこと

【佛上】未だ悟  
るに自ら悟れ  
るを思ふこと

佛上は人の、悪罵打打するを

能く忍んで、以て佛道を求むるを見る

諸の戲笑

及び能なる眷属を離れ、智者に近づく

一心に念を除き、念を山林に禁めて

佛千遍を、以て佛道を求むるを見る

佛は菩薩の、何處飲

各種の薬を、佛及び僧に施し

衣千疋の、價直千疋なる

衣は佛の衣を、佛及び僧に施し

千萬箇の梅檀の寶

衣なる臥具を、佛及び僧に施し

佛の園林の、華茂く盛んたるを

泉池とを、佛及び僧に施し

佛の等の施の、佛に徴せざるを

喜しくこと無くして、無有迫を求むるを見る

佛は菩薩の、疾を治すを見て

【塔廟】塔は梵語 (Stupa) 廟はその漢譯。梵語の塔廟。佛骨を安置する靈廟のこと。

種種に、無數の衆生に教誨するあり

或は菩薩の、諸法の性は

二相あること無し、猶し虚空の如しと觀するを見る

又佛子の、心に所著無くして

此妙慧を以て、無上道を求むるを見る

又殊師利、又菩薩の

佛の滅度の後、舍利を供養することあり

又佛子の、諸の塔廟を造ること

無數恆沙にして、國界を嚴飾し

寶塔高妙にして、五千由旬

縱、廣正等にして、二千由旬

一一の塔廟に、各千の幢幡あり

珠もて交露せる幢ありて、寶鈴和磬せり

諸の天龍神、人及び非人

香華伎樂を、常に以て供養するを見る

又殊師利、諸の佛子等

舍利を供せんが爲に、塔廟を嚴飾す

【天の徳王】 切利  
天の徳王の徳

【徳王】 徳王、徳王  
徳王の徳

圓量白に、殊特妙好なること

天の圓下の、其華開敷せるが如し

徳一の徳を放ちたまふに、我及び衆

此世界の、種種に殊妙なるを見立

諸徳に華有、智慧希有なり

一の徳を放ちて、無量の間を照したまふ

我此を見て、未曾有なることを得たり

佛の文殊、願くば衆の、願うば衆へ

四衆欣仰して、仁及び我を讚る

世間向が故に、斯光明を放ちたまふ

佛子、佛仁答へて、疑を滅して善ばしめせ入

何の能益する所ありてか、明光則を照すたまふ

佛、道徳に準して、得たまふる所の同也

爲めこれに於かんとす、爲めて説く所したるを

佛の徳を、衆生に説く

及て諸徳を見せたまふること、此の徳に非ず

文殊に問ふべし、四衆欣仰

【五】交殊、前問に答へて各佛の同一道を説示して今佛の説法を推尊するを明す。初めに長行。

【阿僧祇】アサンクヤ(Asankusya)無央數とす。

【如來】如實の道に乗じ來りて正覺を成ずるの義。

【應供】應に供養を受くべきの義。

【正遍知】眞正等道の覺知の義。

【明行具足】明行具足の義。

【善道】善く説いて涅槃界に入るの義。

【世間尊】能く一切世間を了知するの義。

仁者を禮祭す、爲めて何等をか説きたまはん。爾時、交殊師利、彌勒菩薩摩訶薩及諸の居士に語らく、善男子等、我が權付するが如きは、今佛世尊は、大法を説き、大法の雨を雨らし、大法の螺を吹き、大法の鼓を撃ち、大法の義を演べんと欲すらん。諸の善男子、我過夫の諸佛に於て、曾て此瑞を見たてまつりしに、斯光を放ち已りて、即ち大法を説きたまひき。是故に當に知るべし、今の佛の光を現じたまふも亦復是の如く、衆生をして、成く一切世間無量の法を聞知することを得しめんと欲するが故に、斯瑞を現じたまふならん。諸の善男子、過去無量阿僧祇劫、無上正遍知、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號く。正法を演説したまはんに、初善、中善、後善たり。其義深遠に、其語巧妙に、純一無雜にして、具足清白、梵行の相なり。聲聞を求むる者の爲には、應せらる四諦の法を説きて、生老病死を度し、涅槃を究竟せしめ、辟支佛を求むる者の爲には、應せらる十二因縁の法を説き、諸の菩薩の爲には、應せらる六波羅蜜を説きて、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切種智を成ぜしめたまふ。次に復、備有す、亦日月燈明と名く、次に復、佛有す、亦日月燈明と名く。是の如く、萬の佛、皆同く一字にして日月燈明と號く。又同く一字にして、頗羅障を姓とせり。彌勒、當に知るべし、初佛後佛、皆同く一字にして、日月燈明と名け、十號具足せり、説きたまふ所の法、初中後善なり。其最後の佛、未だ出家したまはざりし時八の下子あり、一をば有意と名け、



【梵、魔】梵は色界主、魔は欲界主。

【沙門】シニラマナ(Śramaṇa)勤息と譯す、出家人の通稱。

【婆羅門】ブラフマナ(Brahmana)靜胤と譯す、印度國姓の一。

【多比阿伽度】タターガタ(Thāgata)如來のこと。

【阿羅訶】アルハ(Ārahan)魔供のこと。

【善業】善業、有餘義に對し、心内共に滅したるをいふ。

【六八】文殊重ねて偈もて答ふるを明す。

に坐して、六十小劫身心驚愕す。佛の記きたまふ所を聽くこと、食頃の如しと前へり。是時、衆中に、一人の若は身、若は心に懈倦を生ずるもの有ること無かりき。日月燈明佛、六十小劫に於て是經を説き已りて、即ち梵、魔、沙門、婆羅門、及び天、人、阿修羅衆の中に入れて、此言を宣べたまはく、「如來今日の申言に於て、當に無餘涅槃に入るべし」時に菩薩有り、名を徳藏と曰ふ。日月燈明佛、即ち共に記を授け、諸の比丘に宣ひたまはく、「正徳教菩薩次に當に作佛すべし、時をば淨身奉配阿伽度、阿羅訶、及諸の佛、佛と曰はん」佛、授記し已りて、便ち申言に於て、無餘涅槃に入りたまふ。佛の滅度の後、妙光菩薩、妙法蓮華經を持ちて、八十小劫を滿して人の爲に演説す。日月燈明佛の八子、皆妙光を師とす。妙光教化して、其をして阿耨多羅三藐三菩提に堅固たらしむ、是諸の王子、無量百千萬億の佛を供養し已りて、皆佛道を成ず、其最後に成佛したまふ有れば、名を燃燈と曰ふ。八百の弟子の中に一人有り、號を求名と曰ふ。利養に貪著たり。復衆生を誑誦すと雖も而、通利せず、忘失する所多し。故に求名と號く。是人亦諸の善根を積累たる因縁を以ての故に、無量百千萬億の諸佛に值はたてまつることを得て、供養し恭敬し尊重し、讚歎せり。彌勒、當に知るべし、兩時の妙光菩薩は、其異人ならんや、我身是なり。求名菩薩は汝が身是なり。今此瑞を見るに、本と異なること無し。是故に憐愍するに、今日の如來も當に大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふべし。

爾時、文殊師利、衆衆の中に於て、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

業因集果の處、即ち六道をいふ。

我過去世の、無量無數劫を念ずるに

佛人中尋行しき、日月燈明と號す

世尊法を演説して、無量の衆生

無數劫の善業を興して、佛の智業に及らしめたまふ

佛光大出家したまはさりし時の、摩訶の王子

大聖の出家を見て、亦隨ひて梵行を修す

時に佛、大乘經の無量義と名くるを説きて

衆の大乘の中に於て、爲に賢く分別したまふ

佛、此經を説き已りて、即ち法座の上に於て

宣説して、昧に覺したまふ、無量劫處と名くる

天より佛華を雨らし、天鼓自然に鳴り

一切の天龍鬼神、人中衆を供養す

一切の諸の佛土、如時に大いに震動し

佛四洲の佛を放ちて、諸の善有の事を現じたまふ

此方東方、高八千の佛土と照らして

一切衆生の、生死の業報時を示したまふ

佛の佛土の、衆生を以て莊嚴して

【夜叉】ヤクシヤ  
(リビキ) 勇健、暴  
悪と譯す。八部鬼  
衆の一。

【施忍辱等】布施  
持戒、忍辱、精進、  
禪定、智慧の六度  
の行。

琉璃樹葉の色なるを見ること有り、斯れ佛の華の照らしたまふに由る  
及び諸の天人、龍神、夜叉衆  
乾闥、緊那羅、各其國を供養するを見る

又諸の如來の、自然の佛道を成じて  
身の色金山の如く、羅漢にして甚だ微妙なること

淨琉璃の中、内に眞金の像を現するが如くなるを見る  
世尊大衆に在して、深法の義を演演したまふ

一一の諸の佛土、聲聞衆無數なり  
佛の光の所照に囚りて、悉く徒大衆を見る

或は諸の比丘の、山林の中に在りて  
精進し淨戒を持つこと、猶し明珠を護るが如くなる有り

又諸の菩薩の、施忍辱等を行すること  
其數恆沙の如くなるを見る、斯れ佛の光の照らしたまふに由る

又諸の菩薩の、深く諸の禪定に入りて  
身心寂かにして動せずして、以て無上道を求むるを見る

又諸の菩薩、法の寂滅の相を知りて  
各其國土に於て、法を説きて佛道を求むるを見る



爾時四部衆、日月梵仙の

大神通を現したる二を見て、其心皆歡喜して

各自相問はく、是事何の因縁ぞ。

天人所掌の境、遠く三昧より起す。

妙法菩薩を讀じたまはく、汝は茲れ世間の限なり

一切に歸信せられて、善法縁を奉理す。

我が説所の法の如きは、唯汝のみ衆、能知せり

世間既に謂致し、轉光して敬信せしむ。

是法華經を説きたまふに、八十小劫を講じて

此衆を和らたまはく、説きたまふ佛の上妙の法

是光法、悉く持守す。

佛は法華を講じて、衆を三歡喜せしむるに

歡で即ち是日に於て、天人衆に告げたまはく

諸法實相の義、已に汝等が爲に盡く

我今中夜に於て、常に涅槃に入るべし

汝一心に精進し、當に放逸を離るべし

諸佛には甚だ値ひ難し、億劫に時に一たび遇ひたてまつる

【滅度】涅槃(ニ)の譯語。永く生死の苦を滅し、生死の海を渡るが故に滅度と云ふ是に於ては佛の入寂を指す。

世尊の諸子等、佛涅槃に入りたまはんと聞きて

各に悲惱を懐く、佛滅したまふこと一に何ぞ速かなると

聖主法の王、無量の衆を安慰したまはく

我若し滅度せん時、汝等憂怖すること勿れ

是徳藏菩薩は、無漏實相に於て

心已に通達することを得たり、其れ次に當に作佛すべし

號をば曰ひて淨身と爲さん、亦無量の衆を度せん

佛此夜滅度したまふこと、薪盡きて火の滅するが如し

諸の舍利を分布して、無量の塔を起す

比丘比丘尼、其數恆沙の如し

倍す復精進を加へて、以て無上道を求む

是妙光法師、佛の法藏を奉持して

八十小劫の中に、廣く法華經を宣ふ

是諸の八王子、妙光に開化せられて

無上道に堅固にして、當に無數の佛を見たてまつるべし

諸佛を供養し已りて、隨順して大道を行じ

相繼ぎて成佛することを得て、轉次して授記す

【人中天】世間、  
衆生、善、義の阿  
人中最上の人の義

【族】 貴族の種

【釋天子】 釋尊を  
指す

最後の中天をば、實を修得すといふ  
諸師の尊厳として、無量の衆を度脱したまふ  
是れ妙光法師、時に一の弟子有り

心常に謙遜と修きて、名利に貪著せり

名利を求むるに厭ふこと無くして、唯く利に貪著せり

諸師の尊厳を更勝し、衆生して諸利也

是因縁を以ての故に、之を請けて求名と爲す

亦一木の善業を行じ、無数の佛を見たてまつることを得

諸佛を供養し、隨順して大道を行じ

六波羅蜜を具して、今釋師子を見たてまつる

其れ後に當に作佛すべし、其をば名けて彌勒と曰はん

廣く諸の衆生を度すること、其數量り有ること無けん

彼佛の滅度の後、憍念なり、者は汝是なり

妙光法師は、今則ち我が身なり

我佛明佛を見たてまつりしに、木の光瑞此の如し

是を以て知りぬ今の佛も、法華經を説かんと欲すならん

今の相木の瑞の如し、是れ諸佛の方便なり

【三乘】 聲聞、緣覺、菩薩。

【方便品】 述門の正宗分、要は開三顯一、即ち三乘の權執を開して一乘の眞實なるを顯すにあり。

【一】 初めに略して開三顯一を述ぶ中に就き初に權實の二智を歎す、初に長行。

【辯支佛】 プラト

エーカプツダ (Etekaupuddha) 獨覺と譯す、鹿花菩薩等によりて無師獨悟する人をいふ。

【如見波羅蜜】 般若波羅蜜のこと。

【無量】 無量は慈悲喜捨の四無量

の四無量は慈悲喜捨のこと。

今の佛の光明を放ちたまふも、實相の義を助發せん諸人今當に知るべし、合掌して一心に付ちたまへし佛當に法雨を雨らして、道を求むる者に充足したまふべし。諸の三乘を求むる人、若し疑悔有らば佛當に爲に除斷して、盡して餘り有ること無からしめたまはん。

方便品第二

爾時、世尊、三昧より安詳として起ちて、舍利弗に告げたまはく、諸佛の智慧は、甚深にして無量なり。其智慧の門は、難解にして難入なり。一切の聲聞、辟支佛の知ること能はざる所なり。所以は何ん。佛、曾て百千萬億無數の諸佛に親近して、盡して諸佛の無量の道を修行し、勇猛精進して、名稱普く聞えたり、甚深未曾有の法を成就して、宜しきに隨ひて説きたまふ所は、意趣解り難し。

舍利弗、吾成佛してより已來、種種の因縁、種種の譬喩もて、廣く言教を演べ、無數の方便もて、衆生を引導して、諸の著を離れしむ。所以は何ん。如來は方便、知見波羅蜜、皆已に具足せり。舍利弗、如來の知見は、廣大にして深遠なり。無量、無礙、力、無所畏、禪定、解脱、三昧ありて、深く無際に入り、一切未曾有の法を成就せり。舍利弗、如來は



【最後身】 漏盡き  
三界の生なきをいふ。

【十方】 四方、四維、上、下。

【辟支佛】 獨覺と譯す。無師獨悟の人を云ふ。

諸餘の衆生の類は、能く得解すること有ること無し  
諸の菩薩衆の、信力堅固なる者をば除く  
諸佛の弟子衆の、會て諸佛を供養し

一切の漏已に盡して、是最後身に住せり  
是の如き諸人等は、其力堪へざる所なり

假使世間に満てらん、皆舍利弗の如くにして

思を盡して供に度量すとも、摩訶智を潤ふこと能はざらん

正使十方に満てらん、皆舍利弗の如く

及び餘の諸の弟子、亦十方の刹に満てらん

思を盡して供に度量すとも、亦復知ること能はざらん

辟支佛の刹にして、無漏の最後身なる

亦十方界に満じて、其數竹林の如くたらん

斯等共に一心に、億無量劫に於て

佛の實智を思はんと欲すとも、能く少分をも知ること莫けん

新發意の菩薩の無數の佛を供養し

諸の義趣の了達して、又能善く法を説かざるもの

稻麻竹葦の如くにして、十方の刹に充滿せん

【不退の菩薩】大  
乘にては初住不退  
初地不退を説く。  
今は初住以上を不  
退の菩薩と云ふ。

【三】所聞の大衆  
疑を發して請を致  
す。

一心に妙智を以て、恆河沙劫に於て

咸く皆共に思量すとも、佛智を知ること難はざらん

不退の菩薩の菩薩、其數恆沙の如くにして

一心に共に思求すとも、亦復知ること能はざらん

又舍利弗に告げたまはく、無漏不思議

甚深微妙の法を、我今已に具ふることを得たり

我の父兄相を知れり、十方の佛も亦然なり

舍利弗當に知るべし、諸佛は語異たること無し

佛の説きたまふ所の法に於て、當に大信力を生ずべし

世尊は法久しうして後、要す當に眞實を説きたまふべし

諸の聲聞衆、及び緣覺衆を求むるものに皆く

我苦縛を脱し、涅槃を速得せしめたることは

佛方便力と以て、示すに三乘の教を以てす

衆生の愚暗の者、之を引きて出づることを得しめん

爾時、大衆の中に、諸の聲聞、漏盡の阿羅漢、阿若憍陳如等の千二百人、及び聲聞、

支佛の心を喪せらる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷あり。各其念を作さく、今苦世界、何が

故に醜惡に方便を稱讚して、爾も妙智を作したまふや。佛の得たまへる所の法は、甚深に

方廣經卷第二

二三

して解り難く、言説したまふ所有るは、意趣知り難し。一切の聲聞、辟支佛の及ぶこと能はざる所なり。佛、解脱の義を説きたまひしかば、我等も亦此法を得て、涅槃に到たり。而るに今是義の所趣を知らず。

爾時、舍利弗、四衆の心の疑を知り、自ら亦未だ了らずして、佛に白して言さく、「世尊、何の因、何の縁ありしか、慇懃に諸佛第一の方便甚深微妙難解の法を稱歎したまふ。我昔より來、未だ曾て佛に従ひて是の如きの説を聞きたるべからず、今者四衆、咸く皆疑有し。唯願くば世尊、斯事を敷演したまへ。世尊、何が故に慇懃に甚深微妙難解の法を稱歎したまふ。」

爾時、舍利弗、重ねて此義を宣べんと欲して、佛を説きて言さく、

【持法蓮華經】佛の尊勝、佛の智慧はよく世間の無明を破する故に名く  
慧日大壇尊、久しうして乃し是法を説きたまふ  
自ら是の如き、力無畏の味  
禪定解脱等の、不可思議の法を得たりと説きたまふ  
道場所得の法は、能く問を發す者無し  
我が意測るべきこと難し、亦能く問ふ者無し  
問ふこと無けれども自ら説きて、所行の道を稱歎したまふ  
智慧甚な微妙にして、諸佛の得たまへる所なり  
無漏の諸の羅漢、及び涅槃を求むる者



【兩足尊】 福慧二種の莊嚴満足して世間の尊なるをいふ。

【佛日所生の子】 佛の教法を聞きて修行するもの意即ち佛弟子のこと

【佛の教法を聞きて修行するもの意即ち佛弟子のこと】

今皆疑網に墮せり。佛何が故に是を説きたまふ其緣法をよむる者、比丘、比丘尼

引見て猶豫を懐き、兩足尊を瞻仰す

是事一何なる焉き、願くば釋尊に解説しなまへ諸の聲聞衆に於て、惟我を第一なりと云ふまふ我今自ら智に於て、疑滅して了ること能はず

爲めて是は究竟の法なりや、爲めて是れ佛の道なりや佛日所生の子、合掌し瞻仰して待ちたてまつる

聞くは微細の言を出だして、時に爲に實の言を説きたまへ

天龍神等、其數無沙の如し

佛をよむる諸の菩薩、大數八萬有り

佛の萬億圍の、轉輪聖王に至れる

佛、一切世間の諸天及び人、七寶に裝飾すべし。舍利弗、重ねて佛に白して言さく、世尊、佛の言は之を説きたまへ。唯願くば之を説き

【諸根益利】 諸根とは信等の五根、此根の作用のすぐれたるをいふ。

【法王無上尊】 佛のことに。

【大坑】 無間地獄

【長子】 舍利弗は智慧第一にして十大弟子及び諸の羅漢の長老なるを以てかく稱す。

たてへ、所以は何ん、是會の無數百千萬億阿僧祇の衆生は、曾て諸佛を見たてまつり、諸根益利にして、智慧明了なり。佛の所説を聞きたてまつらば、則ち深く敬信せん。

爾時、舍利弗、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、  
法王無上尊、唯説きたまへ願くば、應ひしたまふこと勿れ。

是會の無量の衆は、能く敬信すべき音有り。  
偈復、止みなん、舍利弗、若し是事を説かば、一切世間の天、阿修羅、皆當に驚

すべし。増上慢の比丘は、將に大坑に墜つべし。』  
爾時、世尊、重ねて偈を説きて言はく、

止みなん止みなん、説く須からず、我が法は妙にして思ひ難し。  
諸の増上慢の者は、聞きて必ず敬信せじ。

爾時、舍利弗、重ねて佛に白して言さく、世尊、唯願くば之を説きたまへ、唯願くば之を説きたまへ。今此會中の我が如きの等比百千萬億なるは、世世に已に曾て佛に従ひて化

を受けたり。此の如きの人等は、必ず能く敬信して、長夜安隱にして、饒益する所多からん。

爾時、舍利弗、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、  
無上兩足尊、願くば第一の法を説きたまへ。

我は爲れ佛の長子なり、唯分別して説くことを垂れたまへ。



【佛知見】……道に  
入らしめん。開示  
悟入の四佛知見と  
いふ、この四佛知  
見は諸佛出世の一  
大事因縁なり、故  
に法華經を諸佛の  
本懐といふ。

【一佛乘】 實大乘  
の一切衆生をして  
悉く成佛せしむる  
法をいふ。  
【餘乘】 一佛乘以  
外の二乘又は三乘  
【一切種智】 諸法  
を差別相に於て知  
了する智慧。

の言は、虚妄ならず。舍利弗、諸佛隨宜の説法は、意趣解り難し。所以は何ん、非無量の方便、種種の因縁、譬喩、言辭を以て、諸法を演説す。是法は思量分別不能解する所に非ず。唯諸佛のみ有して、乃し能く之を知らしめせり。所以は何ん。諸佛世尊は、唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふ。舍利弗、云何なるをか。諸佛世尊は唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと名くる。諸佛世尊は、衆生をして佛知見を開かしめ、清淨なることを得しめんと欲するが故に、世に出現したまふ。衆生に佛知見を示さんと欲するが故に、世に出現したまふ。衆生をして佛知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したまふ。衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲するが故に世に出現したまふ。舍利弗、是を諸佛は唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと名くる。佛、舍利弗に告げたまはく、「諸佛如來は、但菩薩を教化したまふ。諸の所作は、常に一事の爲なり。唯佛の知見を以て、衆生に示悟したまはく。舍利弗、如來は但一佛乘を以ての故に、衆生の爲に法を説きたまふ。餘乘の、若は二、若は三有ること無し。舍利弗、一切十方の諸佛の法も亦是の如し。舍利弗、過去の諸佛も、無量無数の方便、種種の因縁、譬喩、言辭を以て、衆生の爲に、諸法を演説したまふ。是法も皆一佛乘の爲の故なり。是諸の衆生の、諸佛に従ひたてまつりて、法を聞きしも、究竟じて皆一切種智を得たり。舍利弗、未來の諸佛の、當に世に出でたまふべきも、亦無量無数の方便、種種の因縁、譬喩、言辭を以て、衆生の爲に、諸法を演説したまはん。是法も皆一佛乘の爲の故なり。是諸の衆生の、佛に



【衆生濁】父母尊長を恭敬せず、善功徳を修せざるをいふ。

【具濁】邪見處にして正法を毀壞するをいふ。

【命濁】人間の壽命の短促なるをいふ。

【五】以下仍もて重ねて開三顯一の義を述ぶ。

【舍利弗善く聽け以下】諸佛等しく同一乘を以て權を施し實を顯すを述ぶ。

り。所以は何ん。若し比丘の實に阿羅漢を得たる有りて、此法を信ぜざるが若きは、是處有ること無けん。佛の滅度の後、現前に佛無からんをば除く。所以は何ん。佛の滅度の後に、是の如き等の經を受持し讀誦し、其義を解せん者、是人得難ければなり。若し餘佛に遇はば、此法の中に於て、便ち決了することを得ん。舍利弗、汝等當に一心に信解して佛語を受持すべし。諸佛如來は言虛妄無し。餘乘有ること無く、唯一佛乘のみなり。」

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を讀みて言はく、

比丘比丘尼の、増上慢を懷くこと有る  
優婆塞の我慢なる、優婆夷の不信なる

是の如き四衆等、共數五千有り

自ら其過を見ず、戒に於て缺漏あり

其瑕疵を護り惜む、是小智は已に出でたり

衆中の糟粕なり、佛の威徳の故に去れり

斯人は福徳尠くして、是法を受くるに堪へず

此衆は枝葉無し、唯諸の眞實のみ有り

舍利弗善く聽け、諸佛の所得の法は

無量の方便利もて、而も衆生の爲に説きたまふ

衆生の心の所念、種種の所行の道

【伽陀】 ガトハ

頌と譯す。唱歌の

ために作成されし

韻文。

【晝夜】 ゲーヤの

譯す。散文を重ね

たる韻文。

【優婆塞舍】 ウパ

デーシヤ (Uparis)

と論議説と譯す。

【九部の法】 修

より佛提舍に

重る九部を云ふ。

若丁の諸の欲性、先世の善惡の業、

佛、悪く量を知らしめし、已りて、諸の縁、賢

言辭、方便方を以て、一切をして歡喜せしむたまふ

或は修多羅、伽陀及び本事

本生未曾有と説き、亦因縁

譬喩並に晝夜、優波提舍經を説きたまふ

鈍根にして、法を樂ひ、生死に貪著し

諸の無量の佛に於て、深妙の道を行せず

樂苦に觸著せらるるには、是が爲に涅槃を説きたまふ

是方佛を説けて、智慧に入ることを得しむ

未だ曾て法華、雲に寶道を成ずることを得べしと説かず

今正しく是れ其時なり、決定して大乘を説く

我が此九部の法は、衆生に隨順して説く

大乘に入るに高れ本なり、故を以て是經を説く

佛子の心淨く、柔軟に亦利根にして

無量の諸佛の所に於て、深妙の道を行する有り

此諸の佛子の爲に、是大乘經を説く  
我是の如き人、來世に佛道を成せんと記す  
深心に佛を念じ、淨戒を修持するを以ての故に  
此等佛を得べしと聞きて、大喜身に充遍す  
佛彼心行を知れり。故に爲に大乘を説く  
聲聞若は菩薩、我説く所の法を聞くこと  
乃至一偈に於てもせば、皆成佛せんこと疑ひ無し  
十方佛土の中には、唯一乗の法のみ有り  
二も無く亦三も無し、佛の方便の説を除く  
但假の名字を以て、衆生を引導したまふ  
佛の智慧を説かんが故に、諸佛世に出でたまふには  
唯此一事のみ實なり、餘の二は則ち眞に非ず  
終に小乘を以て、衆生を濟度したまはず  
佛は自ら大乘に住したまへり、其所得の法の如きは  
定慧の力莊嚴せり、此を以て衆生を度したまふ  
自ら無上道、大乘平等の法を證して  
若し小乘を以て化すること、乃至一人に於てもせば



【實相の印】 諸法實相の理は佛説たしるしなるが故に、實相印と云ふ

【實事】 本は因なり、即ち勝果の因と云ふ、善根功德のこと

我則ち慳貪に墮せん、此事は爲めて不可なり  
若し人佛に信歸すれば、如來欺誑したまはず  
亦實相の意無し、諸法の中の惡を斷じたまへり  
故に權は十方に於て、而も獨り畏るる所無し  
我相を以て身を嚴り、光明世間を照らす  
無量の衆に尊まれて、獨に實相の印を説く  
舍利弗當に知るべし、我本誓願を立てて  
一切の衆をして、我が如く等しくして異なること無からしめんと欲せり  
我が誓願ふ所の如き、今者已に満足せり  
如來生を化して、皆作道に入らしむ  
若し我衆生に遇はば、盡く教ふるに佛道を以てす  
無量の衆生を誘ひ、迷惑して我を受けず  
我知らん衆生は、去た曾て善本を修せず  
斷く五障に著して、癡闇の故に惱みを生ず  
諸法の因縁を以て、三惡道に墜墮し  
六度の中に修習して、佛に諸の苦毒を云く  
受取す願所、世に當に增長し

【欄林】邪見林の如く稠密なるを云ふ。

【六十二】外道の計、私の如き四句あり、四陰にも四句ありて二十、之を三世に約して六十となし、更に有無二見を加へて六十二見といふ。

【過去無數劫の以下】過去佛の開三顯一に就て。

薄徳少福の人にして、衆音に遠迫せらる

邪見の欄林、若は有者は無等に入り

此諸見に依止して、六十二を具是す

深く虚妄の法に著して、堅く受て捨つべからず

我慢にして自ら矜高し、詭曲にして心不實なり

千萬億劫に於て、佛の名字を聞かず

亦正法を聞かず、是の如き人は度し難し

是故に舍利弗、我爲に方便を設けて

諸の盡苦の道を説き、示すに涅槃を以てす

我涅槃を説くと雖も、是れ亦眞の滅に非ず

諸法は本より來、常に自ら寂滅の相なり

伸子道を行じ已りて、來世に作佛することを得ん

我方方便有りて、三乘の法を開示す

一切の諸の世尊も、皆一乘の道を説きたまふ

今此諸の大衆、皆應に疑惑を除くべし

諸佛は語異なること無し、唯一にして二乘無し

過去無數劫の、無量の滅度の佛

【第一卷】 10  
【第二卷】 11

【卷一】 10

百千萬億にして、其數量るべからず  
是の如き諸の世尊、種種の縁、菩薩

無量の方便をもて、諸法の相を演説したまひき  
是諸の世尊も、皆一乘の法を説きて

無量の衆生を化して、佛道に入らしめたまひき  
又諸の大教主、一切世間の

天人群生類の、深心希欲を知らしめして  
更に異の方便を以て、第一義を助顯したまふ

善い衆生類も、諸の過去佛に值ひて、  
善法を聞きて、信持忍辱

法進解等、種種に福徳を修せし  
是の如き諸大尊、皆に佛道を成ぜり

諸佛滅定して、善い人善哉の心ありし  
是の如き諸の衆生、皆に佛道を成ぜり

諸佛滅定して、善いに供養する者  
八億種の塔を建て、金銀及び銅鐵

種種の器と、寶瓏の環はともて

【泥水】 次の本橋  
と共に香木の名。

清淨に廣く嚴飾し、諸の塔を莊校し

或は石崗を起て、栴檀及び沈水

木槩並に餘の材、埽瓦泥土等もてせる有り

若は曠野の中に於て、土を積みて佛廟を成し

乃至童子の戯れに、沙を聚めて佛塔と爲せる

是の如き諸人等、皆已に佛道を成ぜり

若し人佛の爲の故に、諸の形像を建立し

刻雕して衆相を成せる、皆已に佛道を成ぜり

或は七寶を以て成し、鍍銀、赤白銅

白鐵及び鉛錫、鐵木及真泥

或は膠漆布を以て、嚴飾して佛像を作せる

是の如き諸人等、皆已に佛道を成ぜり

彩畫して佛像の、百福莊嚴の相を作すこと

自らも作し若は人をしてもせる、皆已に佛道を成ぜり

乃至童子の戯れに、若は草木及び筆

或は指の爪甲を以て、畫きて佛像を作せる

是の如き諸人等、漸漸に功徳を積み

【三】 篋と篋は  
同字、くだらざること。

大慧心を具足して、皆已に佛道を成ぜり

但、唯の音聲を化し、無量の衆を度脱せり

若し人等、佛像及び菩薩に於て

華香幡蓋を以て、敬心にして供養し

若し人をして、此を作さしめ、教を學ぶ、角鬘を成き

簫笛琴箏、琵琶鏡銅鐵

是の如き、此の妙音、盡く持ちて以て供養し

或は歡喜の心を以て、歌讚して佛道を誦し

乃至一小音をてせし、皆已に佛道を成ぜり

若し人散亂の心に、乃至一華を以て

菩薩に供養せし、漸く無數の衆を見たてまつれり

或は人有りて禮拜し、或は復但合掌し

乃至一手を擧げ、或は復小手頭を低れ

此を以て儀にして養せし、漸く無量の佛を見たてまつりて

自ら無上道を成じて、廣く無數の衆を度し

無量涅槃に入ること、普賢さて火の滅ゆるが如くなりき

若し人散亂の心に、此の中に入りて

【未來の諸の世尊以下】未來佛の開三顯一に就て。

【一乘】三乘各別の權大乘に對し、一切衆生悉皆成佛の實大乘の法を云ふ。  
【法位】着法の住すべき位置、即ち實相の理。  
【現在十方の佛以下】現在佛の開三顯一。

たゞ南無佛と稱せし、皆已に佛道を成ぜり

諸の過去の佛の、在世或は滅後に於て

若し是法を聞くこと有りし、皆已に佛道を成ぜり

未來の諸の世尊、其數量り有ること無けん

是諸の如來等も、亦方便して法を説きたまはん

一切の諸の如來、無量の方便を以て

諸の衆生を度脱して、佛の無漏智に入れたまはん

若し法を聞くこと有らん者は、一として成佛せずといふこと無けん

諸佛の本誓願は、我が所行の佛道を

普く衆生をして、亦同じく此道を得しめんと欲す

未來世の諸佛、百千億の

無數の諸の法門を説きたまふと雖も、其れ實には一乘の爲なり

諸佛兩足尊、法は常に無性なり

佛種は縁によりて起ると知ろしめず、是故に一乘を説きたまふ

是法は法位に住して、世間の相常住なり

道場に於て知ろしめし已りて、導師方便して説きたまはん

天人の供養したてまつる所の、現在十方の佛



【樹】

菩提樹

大勢の佛、及與び諸苦の法を求めず

深く諸の邪見に入りて、苦を以て苦を捨てんと欲す

是衆生の爲の故に、而も大悲心を起し

我始め道場に坐して、樹を觀じ亦經行して

三七日の中に於て、是の如きの事を思惟せり

我が所得の智慧は、微妙にして最も第一なり

衆生の諸根鈍にして、樂に著し癡に盲ひられたり

斯の如きの等類を、云何にしてか度すべきと

爾時諸の梵王、及び諸の天帝釋

護世四天王、及び大自在天

並に餘の諸の天衆、眷屬百千萬

恭敬し合掌し禮して、我に轉法輪を請す

我即ち自ら思惟すらく、若し但佛乘を讀めば

衆生苦に没在し、是法を信すること能はざらん

法を破して信ぜざるが故に、三惡道に墜らん

我寧ろ法を説かずとも、疾に涅槃にや入りなまし

譬で過去の佛の、所行の方便力を念ふに





【轉法輪】佛の教法を説きて邪見を摧伏すること猶し輪王の輪寶を轉じて障礙の物を摧敗する如きが故に云ふ。

是を轉法輪と名く、便ち涅槃の音

及以阿羅漢、法僧差別の名有り

久遠劫より來、涅槃の法を宣示して

生死の苦永く盡すと、我常に是の如く説けり

舍利弗當に知るべし、我佛子等を見るに

佛道を志求する者、無量千萬劫

成く恭敬の心を以て、若佛の所に來至せり

曾て諸佛に従ひて、方便所説の法を聞けり

我即ち是念を作さく、如來出でたる所以

佛慧を説かんが爲の故なり、今正しく是れ其時なり

舍利弗當に知るべし、鈍根小智の人

著相憍慢の者は、是法を信すること能はず

今我喜んで畏れ無し、諸の菩薩の中に於て

正直に方便を捨てて、但無上道を説く

菩薩是法を聞きて、疑網皆已に除く

千二百の羅漢、悉く亦當に作佛すべし

三世の諸佛の、説法の儀式の如く



當來世の惡人は、佛説の一乘を聞きて

迷惑して信受せず、法を破して惡道に墮せん

慚愧清淨にして、佛道を志求する者有らば

當に是の如き等の爲に、廣く一乘の道を讚むべし

舍利弗當に知るべし、諸佛の法是の如く

萬億の方便を以て、宜しきに隨ひて法を説きたまふ

其習學せざる者は、此を曉了すること能はず

汝等既に已に、諸佛世の師の

隨宜方便の事を知れり、復諸の疑惑無く

心に歡喜を生じて、自ら當に作佛すべしと知れ

妙法蓮華經 卷第二

魏秦三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

譬喻品第二

爾時、舍利弗、增上慢著して、即ち起きて會坐し、羣類を瞻仰して、佛に白して言さく、  
 『今世尊に値ひ奉り、此法音を聞き、心に驚躍を懐き、未曾有なることを得たり。  
 所以は何ん。我昔佛に値ひ奉りて、是の如き法を聞き、諸の菩薩の授記作佛を見しかば、  
 而も我等は斯事に預らず。甚る自ら如來の無量の知見を失へることと感傷せり。況んや、  
 常に獨り山林樹下に處して、若は坐し、若は行じて、毎に是念を作さく、「我等も同じく法性  
 に入れり、云何が如來小乘の法を以て濟度せらるる」と。是れ我等が咎なり。世尊には非  
 ず。所以は自ら若し我等、所因の譬喩多羅三藐三菩提を成就することを欲せしまふを得た  
 るしかば、佛の法を以て度脱することを得まし。然るに我等は方便隨宜の所説を解ら  
 ずして、佛の法を聞き、過慢を信じ、愚痴して聲を取ねり。世尊、我等より來  
 ぬ日迄夜、毎に自ら如來世に、而もに今佛に値ひ奉りて、未だ聞かざる所の未曾有  
 の法を聞き、佛の授記を蒙じ、身意空然として、怯く空しくなることを得たり。今日

【譬喩品】以下授  
 學無學人記品に至  
 るまでは方便品の  
 所竟を更に譬喩、  
 四教等を以て説述  
 せざるものにして、  
 今品は初に前品を  
 承けて舍利弗の領  
 解並に疑難を對し  
 後接して三界を火  
 宅に、三乘を羊鹿  
 牛の三草に、一佛  
 乘を大白牛車に喩  
 へ、譬喩一乘法、  
 無二乘無三の義を  
 顯明せり。  
 【一】本品を承け  
 て舍利弗の領解を  
 述ぶ。  
 【二】疑難を對する  
 こと  
 【三】佛の  
 授記を受けること  
 によつて度脱する  
 こと  
 【法性】ここにて  
 は一乘の所の無空  
 の理を云ふ。法性  
 本來の眞なる實如  
 の性を指すに當らず

乃ち知んぬ、實に是れ佛子なり。佛口より生じ、法化より生じ、淨法の分を得たり。二  
爾時、舍利弗、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、

我是法音を聞きて、未曾有なる所を得て

心に大歡喜を懐き、疑網皆已に除こりぬ

昔も亦佛教を蒙りて、大疑を失はず

佛の首は甚だ稀有にして、能く衆生の惱を除きたまふ

我已に漏盡を得れども、聞きて亦憂惱を除く

我山谷に處し、或は林樹の下に在りて

若は坐し若は經行して、常に是事を思惟し

嗚呼して深く自ら責めて、云何が而も自ら欺ける

我等も亦佛子にして、同じく無漏の法に入れども

未來に於て、無上道を演説すること能はず

金色三十二、十力諸の解脱

同じく共に一法の中にして、而も此事を得ず

八十種の妙好、十八不共の法

是の如き等の功德、而も我皆已に失へり

我獨り經行せし時、佛大眾に在して

【金色三十二】應身佛の具有せる三十二相。

【十力】如來の十力なり。即ち是處

非處、業報、定根、

欲、性、至處道、

壽命、天眼、漏盡の十力。

【八十持戒の善好】  
八十持戒の善好、  
八十持戒の善好の

【十八不共法】  
十八不共法の佛  
十八不共法の佛の

【三三三】  
三三三、三三三、三三三、  
三三三、三三三、三三三、  
三三三、三三三、三三三、

【入】  
入、入、入、入、入、  
入、入、入、入、入、  
入、入、入、入、入、

名聞十方に廣く、廣く衆生を饒益したまふを見て  
自ら直はく其利を失へり、我爲れ自ら欺誑せり  
我常に日夜に於て、毎に是事を思惟して

以て世尊に侍りてたまつらんと欲す、爲めて失はずや  
我常に世尊を見奉りてたまつるに、諸の菩薩を稱讚したまふ  
是を以て日夜に、此の如き事を籌量しき

今佛の菩薩を侍りてたまつるに、宜しきに隨ひて法を説きたまへり  
無漏の思惟を離れ、衆をして道場に至らしむ  
我本佛見に於て、諸の梵志の師と爲りき

世尊、我れ心を明ろしめして、邪を抜き涅槃を説きたまひしかば  
我乘く輪廻を止きて、空法に於て證を得たり

爾時心に自ら説へり、滅度に至ることを得たりと  
知るに今佛の佛を覺りぬ、是れ實の滅度に非ず

若し佛の佛を得ん時は、三十二相を具し  
天人夜叉、龍等恭敬せん

是時乃ち自ら説ふべし、永く盡滅して餘無しと  
佛入衆の中に於て、我當に作佛すべしと説きたまふ

【魔】 マーラ(一) 役及殺者と譯す。善法を障へて修道の妨げを爲すもの。

【波旬】 パービーヤン(Papiyan) 惡殺者と譯す。常に惡意を有し惡事を喜ぶ者の類。一説に釋迦在世時の魔王の名。

是の如き法音を聞きて、疑悔悉く已に除こりぬ。初め佛の所説を聞きて、心中大いに驚異しき。將に魔の佛と作りて、我が心を攪亂するに非ずやと。佛種種の縁、譬喩を以て巧みに言説したまふ。其心安きこと海の如し、我聞きて疑網斷ぜり。佛説きたまはく過去世の、無量の滅度の佛。方便の中に安住して、亦皆是法を説きたまへり。現在未來の佛、其數量り有ること無きも。亦諸の方便を以て、是の如き法を演説したまふ。今者の世尊の如きも、生じたまひしより及び出家し得道し法輪を轉じたまふまで、亦方便を以て説きたまふ。世尊は實道を説きたまふ、波旬は此事無し。是を以て我定めて知りぬ、是れ魔の佛と作るには非ず。我疑網に墮するが故に、是れ魔の所爲と謂へり。佛の柔軟の音、深遠に甚だ微妙にして。清淨の法を演暢したまふを聞きて、我が心大いに歡喜し。疑悔永く已に盡きて、實智の中に安住す。



【一】如來成佛して舎利弗に當來作佛の授記を賜ふるを明す。

我定めて當に自佛して、天人に敬はるることす。

爾時、佛、舍利弗に告げたまはく、吾々天、人、沙門、婆羅門等の大衆の中に於て置く。

我昔嘗て、萬佛の佛の所に於て無上道の眞の道に、常に汝を教化す。汝亦屢夜に我に隨

ひて受學せり。我方便を以て汝を引導せしが爲に、我が法の中に生れたり。舍利弗、我昔

汝をして三摩地を志願せしめたり。汝今よく修して、而も復ち自ら心に滅度を得たりと謂

へり。我今欲して汝をして本願所行の道を憶念せしめんと欲するに故に、佛の聲聞の

爲に、三藏、經、妙法華華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説く。舍利弗、汝未來世に

於て、無量阿僧祇不可思議劫を過して、若しの一萬億の佛を供養し、正法を奉持し、菩薩所

行の重寶具として、常に作佛することを得べし。號をば華光如來、摩訶、正遍知、自行

足、無礙、世間解、無上王、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰は、國をば離垢と名けん。

其土正にして、清淨嚴飾に、寶嚴豐樂にして、天人熾盛ならん。瑞寶を地と爲して、

八の交道有り。黄金を繩と爲して、以て其側を界ひ、其傍らに各七寶の行樹有りて、常

に華葉有らん。華葉如來、摩訶寶を以て、衆生を教化せん。舍利弗、彼佛出でたまはんと時

は、三世に於てと雖も、十劫を以ての故に三業の法を盡きたまはん。其時をば寶莊嚴と

名けん。何故に告げたまはざるや。我國の中には、菩薩を以てた寶と爲すが莫な

り。賢諸の菩薩は量無邊不可思議にして、算數譬喩も从ふこと能はざる所ならん、佛の

【小劫】人壽十歳の時より百年毎に一歳を増し、人壽八萬歳に至り、更に又百年毎に一歳を減じて、人壽十歳に至る、この一増一減の間を一小劫と云ふ。又一説に方廣四十里の巨石を長壽天が三年に一度乘りて重さ三昧の天衣にて拂ひ洗ひ、その石の磨滅する間を云ふと。

【正法】佛滅後、衆行惡の三尙具足して闍ける時期をいふ。

【法間】正法の次みありて惡業なき時なり。

【佛音菩薩】佛は佛陀、音は菩薩等、佛陀、音は菩薩、佛の異稱なり。

智育に非ずんば能く知る者無けん。若し行かんと欲する時は寶華足を承く。この諸の菩薩は初めて意を發するに非ず、皆久しく根本を植えて、無量百千萬億の阿僧祇所に於て淨く修行を修し、恆に諸佛に恭敬せらるることを爲、常に佛慧を修し、大神道を具し、善く一切の諸法の門を知り、質直無偽にして、志念堅固ならん。是の如きの菩薩其阿僧祇に充滿せん。舍利弗、華光佛は壽十二小劫ならん。王子と爲りて未だ作佛せざる時をば除く。其國の人民は壽八小劫ならん。華光如来、十二小劫を過ぎて、堅滿菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けて、諸の比丘に告げん。是堅滿菩薩、次に當に作佛すべし、號をば華足安行、多陀阿憍度、阿羅訶、三藐三佛陀と曰はん。其佛の國土も、亦復是の如くならん。と、舍利弗、華光佛の滅度の後、正法世に住すること三十二小劫、像法世に住すること亦三十二小劫ならん。

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偏を説きて言はく、

舍利弗、來世に、佛音智尊と成りて

號をば名けて華光と曰はん、當に無量の衆を度すべし

無量の佛を供養し、菩薩の行

十力等の功德を具足して、無上道を證せん

無量劫を過ぎ已りて、劫をば大寶と名け

世界をば彌堵と名けん、滿淨にして瑕穢無く

【六波羅蜜】六波羅蜜。

【大士】菩薩のこと。

【六波羅蜜】六波羅蜜。

罪障を以て堪へ難し、金繩其道を界ひ

し善業所の徳、常に華果實有らん

從縁の一心の空慧は、志念常に堅固にして

善業の蜜、檀越に悉く具足し

善業の徳の類は悉く、善く菩薩の道を學せん

是の如き等の大士、彌光佛の所化ならん

國王の身ならんは、國を棄て世の榮を捨てて

寂の身に於て、出家して佛道を成ぜん

世に在ること、壽十二小劫

先世に人民衆を、壽八小劫ならん

法華の法、法華に住すること

二十小劫、廣く諸の衆生を度せん

法華の法、法華に住すること

法華の法、法華に住すること

法華の法、法華に住すること

法華の法、法華に住すること

法華の法、法華に住すること

法華の法、法華に住すること

【三】 四衆の領解を明す。

【上表】 出家の二衆は、大衆を上衣といふ。

【釋提桓因】 帝釋天の婿。

【五衆】 色、受、想、行、識の五蘊のこと。

爾時、四部の衆の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等の大衆、舍利弗の佛の前に於て阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを以て、心大いに歡喜し、歸耀すること無量なり。各各に身に著たる所の上衣を脱ぎて以て佛に供養す。釋提桓因、梵天王等、無数の天子と與に、亦天の妙衣、天の曼荼羅華、摩訶曼荼羅華等を以て、佛に供養す。散ずる所の天衣、虚空の中に住して、南も自ら廻轉す。南天の伎樂百千萬種、虚空の中に於て一時に俱に作し、衆の天衆を用ひず。南も是言を作さく、佛、昔波羅奈に於て初めて法輪を轉じ、今乃ち復無上最大の法輪を轉じたまふ。

爾時、釋提桓因の天子、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、

昔波羅奈に於て、四諦の法輪を轉じ

分別して諸法の、五衆の生活を説きたまひき

今復最妙、無上の大法輪を轉じたまふ

是法は甚だ深奥にして、能く信する者有ること少なり

我等昔より來、數數世尊の説を聞きたてまつるに

未だ曾て是の如き、深妙の上法を聞かず

世尊是法を説きたまふに、我等皆隨喜す

大智舍利弗、今尊語を受くることを得たり



【因縁】前權後實の説法の次第。

【大長者】姓貴、位高等の十徳を具したる長者中の更に優秀なるもの。

【五】以下別譬。

【衣被】華を飾りて佛に供ふる具。

窟墮れ落ち、柱根腐ち敗れ、梁棟傾き危し、周匝して俱時に忽然に火起りて舍宅を焚燒す。長者の諸子、若し上、二十、或は三十に至るまで、此宅の中に在り

長者、是大火の因而起るを見て、顔ち大いに驚怖して是念を作さく、我能く此所燒の門より安隱に出づることを得たりと雖も、而も諸子等は、火宅の内に於て、嬉戯に樂著して、覺えず知らず驚かず怖ぢず。火來りて身を逼り、苦痛已を切らざれば、心も思はず。

出でんと求むる意無し。舍利弗、是長者是思惟を作さく、我身手に力有り。當に衣被を以てや、若しは机案を以てや、舍より之を出だすべき。復更に思惟すらく、是舍唯一門のみ有り、而も復狹小なり。諸子幼稚にして、未だ識る所有らず、戲處に著せり。是は當に墮

落して、火に燒かるべし。我當に爲に怖畏の事を説くべし。此舍已に燒く、宜しく時に疾く出でて、火に燒害せられしむること無かるべし。是念を作し已りて、思惟する所の如く具さに諸子に告ぐらく、汝等速に出でよ。と。父、憐愍して善言もて誘諭すと雖も、而

も諸子等は嬉戯に樂著し、背て信受せず。驚かず畏れず。了に出づる心無し。亦復何者か是れ火、何者か爲れ舍、云何なるを失ふと爲くるやを知らず。但東西に走り戯れて、父を

視て已に。爾時、長者即ち是念を作さく、此舍已に大火に燒かる。我及び諸子、若し

時に出でずんば必ず災ふべし。我今當に方便を設けて、諸子等をして斯室を免るることを

得しむべし。父、諸子の先心に各好む所有る、種種の珍奇異の物には情必ず樂著せ

んと知りて、之に告げて言はく、汝等が玩び好む所は、希有にして得難し。汝若し取ら



四六 以下合譬。

汝が意に於て云何。是長者等しく諸子に珍寶の大車を與ふること、寧ろ虚妄有りや不や。舍利弗の言さく、不、世尊。是長者、但諸子をして大車を與れ其軀命を全うすることを得しむとも、爲れ虚妄に非ず。何を以ての故に。若し身命を全うすれば、便ち爲れ已に玩好の具を得たるなり。況んや復方便して彼大宅より而も之を投濟せんや。世尊、若し是長者、乃至最小の一車を與へずとも、猶虚妄ならず。何を以ての故に。是長者、先には是意を作さく、「我方便を以て子をして出づることを得しめん」と。是因縁を以て虚妄無し。何に況んや長者自ら財富無量なりと知りて、諸子を僥益せんと欲して、等しく大車を與ふるをや。

佛、舍利弗に告げたまはく、善い哉善い哉、汝が言ふ所の如し。舍利弗、如來も亦復是の如し。則ち爲れ一切世間の父なり。諸の怖畏、衰惱、憂患、無明、闇蔽に於て永く盡して餘無し。而も悉く無量の知見、力、無所畏を成就し、大神力及び智慧力有りて、方便、智慧波羅蜜を具足せり。大慈大悲、常に憐愍無く、恆に善事を求めて一切を利益す。而も三界の朽ち故りたる大宅に生ずること、衆生の生老病死、變世苦惱、愚癡闇蔽、三毒の火を度して、教化して、阿耨多羅三藐三菩提を得しめんが爲なり。而も衆生を見るに、生老病死、憂患苦惱に燒煮せられ、亦五欲財利を以ての故に、種種の苦を受く。又貪著し追求するを以ての故に、現には樂苦を受け、後には地獄、畜生、餓鬼の苦を受く。若し、天上に生れ、及び人間に在りては、貧窮困苦、愛別離苦、怨憎會苦、是の如き等の





【獨善寂】 獨覺の境地。

【一切智】 薩婆若 (Samyaktva) の譯、一切法萬有を平等相に於て知了する智慧。

【自然智】 自然本有の智。

【大乘】 摩訶衍那 (Mahayana) の譯、大人の所乘にして大苦を滅し、大利益を興ふる教道。即ち菩薩の大機が佛果の大涅槃を得る法門なり。

も無量の安樂快樂を得べし。舍利弗、若し衆生有り、内に習性有りて、憍慢に復して、法を聞きて信受し、慳慳に精進し、速に三界を出でんと欲して、自ら涅槃を求む。是を聞きて、彼諸子の三車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。若し衆生有り、佛世に從ひて、法を聞きて信受し、慳慳に精進し、自然の慧を求め、獨善寂を學び、深く諸法の因縁を知る。是を辟支佛乘と名く。彼諸子の鹿車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。若し衆生有り、佛世に從ひて、法を聞きて信受し、勤修精進して一切智、佛智、自然智、無師智、如來の知見、力、無所畏を求め、無量の衆生を慈念安樂し、天人を利益し、一切を度脱す。是を大乘と名く。菩薩此乘を求むるが故に名けて摩訶薩と爲す。彼諸子の牛車を求むるが爲に火宅を出づるが如し。舍利弗、彼長者の、諸子等の安隱に火宅を出づることを得て無畏の處に到るを見て、自ら財富無量なることを惟うて、等しく大車を以て諸子に賜ふが如く、如來も亦復是の如し。爲れ一切衆生の父なり。若し無量億千の衆生の、佛敎の門を以て、三界の苦、怖畏の險道を出で、涅槃の樂を得るを見ては、如來爾時、便ち是念を作さく、「我に無量無邊の智慧、力、無畏等の諸佛の法藏有り。是諸の衆生は、皆是れ我が子なり。等しく大乘を興ふべし。人として獨り滅度を得ること有らしめじ。若如來の滅度を以て之を滅度せん。是諸の衆生の三界を脱れたる者には、悉く諸佛の禪定、解脱等の娛樂の具を興ふ。皆是れ一相一印にして、衆の稱歎したまふ所なり。能く淨妙第一の樂を生ず。舍利弗、彼長者の、初め三車を以て諸子を誘ひし、然る後但大車の寶物莊

一の樂を生ず。舍利弗、彼長者の、初め三車を以て諸子を誘ひし、然る後但大車の寶物莊



【蛇狼】 蛇、毒蛇

【惶惶】 まごつく

【魘魅魍魎】 物の精、化して妖鬼となる。山にあるを魘、家に隠るるを魅といふ。魍魎は山中木石の精怪。能く人聲を眞似て人を迷はすと云ふと。

【鳩槃荼鬼】 クムバーンダ(Kumbha)

諸の惡蟲の羣、交横馳走す

屎尿の臭き處、不淨流れ溢ち

蜂蟻諸蟲、雨も其上に集れり

狐狼野干、咀嚼踐踏す

死屍を齧齧して、骨肉狼藉し

是に由つて群狗、競ひ來りて搏撮し

飢餓惓惓して、處處に食を求め

鬪諍齧擊し、晝暝呻吠す

其舍の恐怖、變狀是の如し

處處に皆、魘魅魍魎有り

夜叉惡鬼、人の肉を食喫す

毒蟲の虜、諸の感離散

孚乳產生して、各自守護し護る

夜叉競ひ來りて、争ひ取りて之を食す

之を食すること既に飽きれば、惡心轉た熾んにして

脚靜の聲、甚だ怖畏すべし

鳩槃荼鬼、土堆に踞踞せり

(Hida) 陰囊、形卵と  
 譯す。此類の陰囊  
 は大にして、狀冬  
 瓜の如く、行くと  
 は、擧げて肩上行  
 き、坐する時は之  
 に據る。或は又瓶  
 肩鬼と譯す。頸貌  
 の狀狼卑なるを以  
 て此名あり。南方  
 増長天王の部下に  
 屬し、好んで人の  
 精氣を吸ふ鬼なり

【附】 大衆の意  
 なり

或時は地を踏むること、一尺二尺  
 往返遊行し、縦逸に時戯

或の兩足を掲げて、戯るて體を失はしめ  
 此を以て頸に加へて、狗を怖し、自ら樂した

復語の鬼有り、其身長大に

裸形黒瘦にして、常に其中に住せり

大聲を發して、呼んで食を求む

復語の鬼有り、其頸斜の如し

復語の鬼有り、音牛頭の如し

或は人の肉を食し、或は復語を吸ふ

頭髮蓬亂して、窟窟因縁たり

飢渴に通じらば、叫喚馳走す

夜叉餓鬼、諸國に鳥獸

飢饉せし二國に向ひ、両國を踏むる

是れ如き諸國、悉く然るなり

是れも散りたる宅屋、一人に賜せり

其大邊に出で、其大久しからざるの間に

後に生合に、忽然火起り

四面一時に、其焔俱に熾んなり

棒梁椽柱、爆々く聲震ひ裂け

撒け折れ墮ち落ちて、墻壁崩れ倒る

諸の鬼神等、聲を揚げて大いに叫び

鸞蓋諸鳥、鳩槃荼等

周惶怖して、自ら出づること能はず

惡獸毒蟲、孔穴に藏れ竄れ

毘舍闍鬼、亦其中に住せり

福德薄きが故に、火に逼められ

共に相殘害して、血を飲み肉を噉ふ

野下の屬、並に已に前に死す

諸の大惡獸、競ひ來りて食噉す

卓輝蓬葶、四面に充塞す

蜈蚣蝮蛇、毒蛇の類

火に燒かれて、争ひ走りて穴を出づ

鳩槃荼里、隨處取りて而も食ふ

【毘舍闍鬼】  
Pisācā  
ヤーチャヤカ (Pisācā  
ヤチヤカ) 噉精氣と譯す  
人及び五穀の精氣  
を噉ふ鬼なり。

【以下は別紙】

又、頭上の果、頭上に火、  
高懸欄にて、周閣走す

其宅の如く、甚怖畏すし

火災、衆難一に非ず

宅主、門外に在りて立ちて

人言を聞く、汝が諸子等

に戯せるに因りて、自宅に入し

種小無知にして、娛樂著せりと

きりて、即ち火宅に入る

方にもしく救済して、燒害無らむべし

諸子に告諭して、果の患を免く

三車蟲、災火蔓せり

受書大策に、相續して絶えず

及び諸の夜叉

鳩紫茶鬼、野干狐狗

鴨鷲、百足の

飢渴の相象にして、善の怖畏すべし

【批語】物事にふけること。

此苦すらたし、願し、況んや復大火を平と  
諸子無知にして、狂の言を聞くと雖も  
猶故樂著して、嬉戲すること已まず  
是時に長者、雨と是念を作さく  
諸子此の如く、我が愁惱を益す  
今此會宅は、一として樂しむべき無し  
而るに諸子等、嬉戲に耽溺して  
我が教を受けず、將に害せられんとす  
憐憫思惟して、諸の方便を設けて  
諸子等に言ふ、我に種種の  
珍玩の具は、妙寶の好車有り  
羊車鹿車、大牛の車なり  
今門外に在り、汝等出で來れ  
吾汝等爲に、此車を造作せり  
意の所樂に隨つて、以て遊戯すべし  
諸子、此の如き諸の車を説くを聞きて  
即時に奔競して、馳走して出で



宿願に到りて、諸の苦難を離る

長者子の、火宅を脱づることを得て

四衢に住するを見、諸子の座に坐せり

而も自ら慶んで言はく、我今快樂なり

此諸子等、生育すること甚だ難し

愚小無知にして、毒火の中に入り

諸の毒蟲多く、我今脱れしべし

大猛煙、四面に燃に燃たり

而るに此諸子、嬉遊を言著せり

我己に之を救ひて、難を脱るることを得りたり

我故に諸人、我今快樂なりと

時諸子、父の安んずるに語りて

昔父の所に語りて、爾父に白して言はく

願くば我等に、三種の寶草を賜へ

前に許したる玉所の如き、諸子出で來り

當に三草を以て、汝が所次に賜ふべしと

今正に是の時なり、唯給物を與れたまへ

長一丈六尺、いに宮んで、車輪多かり

金銀琉璃、種種珠

衆の寶物を以て、諸の大車を造り

莊校嚴飾して、周匝して欄楯あり

四面に鈴を懸け、金繩繫絡せり

眞珠の羅網、其上に張り敷し

金華の諸環、處處に垂下せり

衆彩雜飾し、周匝圍遶せり

柔軟の兜繡、以て茵褥と爲し

上妙の錦綺、價直千倍にして

鮮白淨潔なる、以て其上に覆へり

大白牛有り、肥壯多力にして

形體姝好なり、以て寶車を駕せり

諸の寶從多くして、而も之を侍衛せり

是妙車を以て、等しく諸子に賜ふ

諸子是時、歡喜踴躍して

是寶車に乗りて、四方に遊び

【繡】 絹と綿。  
又【繡】のこと。  
【細毛】 細毛の布。  
【厚細密】 細毛の織物。

下

嬉戲快樂して、自在無礙ならんが如し

舍利非に背く、我も亦是の如し

衆聖の中の尊、世間の父なり

一切衆生は、皆是れ我が子なり

深く世樂に著して、慧心有ること無し

三界は安きこと無し、猶し火宅の如し

衆苦充滿して、甚だ怖畏すべし

常に生老、病死の變患有り

是の如き火の火、熾然として息まず

如來は已に、三界火宅を離れ

寂然として閑居し、林野に處て

今此處は、我、有なり

其中の衆生は、悉く之を信受すべし

而も今此處は、衆聖の所居なり

唯我一人のみ、應く衆生を度す

復教誨すべし、佛、佛に

諸、諸に於て、諸法に於て

【三界】欲界、色界、無色界の三。

【二明】宿命明、天眼明、漏盡明の三、阿羅漢、辟支佛、菩薩皆之を有す。

【六神通】天眼、天耳、他心、漏盡、宿命、神足の六通。

【緣覺】師に依らずして悟るが故に獨覺とも云ふ、十二因縁を觀じて覺るが故に緣覺。佛乘、寶大乘の一切衆生をして悉く成佛せしむる法。

是を以て方便して、爲に三乘を説きて

諸の衆生をして、三界の善を知らしめ  
出世間の道を、開示し演説す

是諸子等、若し心決定しまれば

三明、及び六神通を具足し

緣覺、不羸の菩薩を得ること有り

汝舍利弗、我衆生の爲に

此譬喩を以て、一佛乘を説く

汝等若し能く、是語を信受せば

一切皆當に、佛道を成ずることを得べし

是乘は微妙にして、清淨第一なり

諸の世間に於て、爲めて上有ること無し

佛の悦可したまふ所、一切衆生の

應に稱讚し、供養し禮拜すべき所なり

無量億千の、諸力解脫

禪定智慧、及び佛の餘の法あり

是の如きの乘を得しめて、諸子等をして

日在劫數に、常に遊戯することを得

諸の菩薩、及び聲聞衆と

其實乘に乗じて、直ちに道場に至らしむ

是因縁を以て、十方に諦かに求むるに

更に餘乘無し、佛の方便を除く

舍利弗に告ぐ、汝諸人等は

皆是れ吾が子なり、我は則ち是れ父なり

法華集劫に、衆生に焼る

我佛無量阿僧祇劫、三摩を出でしむ

我父に、法華法界すと説くも

但生れを要して、爾も實には滅せず

今此地に作すべし所は、唯佛の智慧なり

若し善哉有らば、是れ中にて

能く説く、佛の實法を説け

諸佛世尊は、方便を以てしたまふと雖も

阿僧祇劫生れ、皆遊戯菩薩なり

若し大小智にして、深く愛敬に著せる

【苦諦】四諦の一  
三界有漏の果の苦  
なるは眞實にし  
て不磨の眞理なる  
を云ふ。

【第三の諦】滅諦  
のこと、三界の有  
漏法の畢竟じて滅  
したるところをい  
ふ。  
【道】道諦のこと  
有漏無漏の修行を  
云ふ。此修行に因  
りて無爲寂滅の境  
即ち滅諦を得得ず

非爲を爲ての故に、苦諦を説きたまふ

衆生、苦んで、未曾有なることを得

たの説きたまふ苦諦は、眞實にして異無し

智し衆生有りて、苦の木を知らず

深く苦の因に著して、暫くも捨つること能はず

是等の爲の故に、方便して道を説きたまふ

苦の所因は、貪慾を木と爲す

苦し貪慾を滅すれば、依止する所無し

諸苦を滅盡するを、第三の諦と名く

滅諦の爲の故に、道を修行す

諸の苦縛を離るるを、解脱を得と名く

是人何に於てか、而も解脱を得る

但虚妄を離るるを、名けて解脱と爲す

其れ實には未だ、一切の解脱を得ず

佛是人は、未だ實に滅度せずと説きたまふ

野人未だ、無上道を得ざるが故に

我が意にも、滅度に至らしめたりと欲はず

【阿耨多羅三藐三菩提】  
阿耨多羅三藐三菩提

【阿耨跋致】 アホ  
ニツルテイヤ (A-  
hūti) (不) 不  
阿耨多羅三藐三菩提  
阿耨多羅三藐三菩提  
阿耨多羅三藐三菩提  
阿耨多羅三藐三菩提  
阿耨多羅三藐三菩提

我は 阿耨多羅三藐三菩提、法に就て自在なり  
衆生を度脱せしめんが爲に、世に就て  
汝舍利弗、我が眞法阿耨  
世間を度脱せんも、汝するが爲に故に、汝  
所遊の方に在りて、妄りに言作するること勿れ  
若し聞くこと有らん者、隨喜して頂受せば  
當に知るべし是人は、阿耨跋致なり  
若し此經法を、信受すること有らん者  
是人は已に會て、阿耨多羅三藐三菩提を  
恭敬し奉養し、亦眞法を隨けるなり  
若し人能く、汝が所説を信することよし  
則ち爲れ我を見、奉養  
及び比丘等、并々に、阿耨多羅三藐三菩提を以て  
斯法華經を、隨喜して信し  
淺識は之を斷ずること、深識して信す  
一切の聲聞、及菩薩等は  
此經の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提なり

汝舍利弗、尙此經に於ては

信を以て入ることを得たり、況んや餘の聲聞をや

其餘の聲聞も、佛語を信するが故に

此經に隨順す、己が智分に非ず

又舍利弗、憍慢懈怠

我見を計する者には、此經を説くこと莫れ

凡夫の淺識にして、深く五欲に著せるは

聞くとも解ること能はじ、亦爲に説くこと勿れ

若し人信せずして、此經を毀謗せば

則ち一切、世間の佛種を斷せん

或は復擧擧して、而も疑惑を懷かん

汝當に、此人の罪報を説かんを聽くべし

若は佛の在世、若は滅度の後

其れ斯の如き、經典を誦講すること有らん

經を讀誦し、書持すること有らん者を見て

輕賤憎嫉して、而も結恨を懷かん

此人の罪報を、汝今復聽くべし



【一劫】カルバ(六  
 二)三三長時と譯す。  
 方四十里、城に  
 芥子を滿し、三年  
 毎に一粒を奪り去  
 りて遂に其鎖を  
 取り去す迄の間を  
 一劫と云ふ。  
 【劫】黒也。  
 【明】甚だ思きこ  
 と。  
 【奪】奪り、吹出  
 も。

【野】 踏踏に同  
 じ。

其人命懸して、阿鼻獄に入らん  
 一劫を具足して、劫盡さば更生れん  
 其の如く展轉して、無數劫に至らん  
 唯願より出でては、當に畜生に墮つべし  
 若し狗野干としては、其骨領瘦し  
 鬣疥癩にして、人に觸せられ  
 又漢人に、惡み賤しまひ  
 常に飢寒に困んで、骨肉皆竭せん  
 是にては楚毒を受け、置ては瓦石を被らん  
 毒を斷ずるが故に、斷罪報を受けん  
 毒を断ずると作り、或は驢馬の中に生れて  
 常に常に重きを負ひ、蹄の杖捶を加へられんに  
 但水草のみ念うて、餘計知る所無けん  
 毒を断ずるが故に、罪を獲ること是の如し  
 若し野干と作りて、毒薬に來入せば  
 其毒疥癩ありて、又一日からんに  
 毒の童子に、打斷せしむ

【一】 火蛇。

【二】 愚かなるこ

【三】 食すす

【肆】 短なり  
【伍】 手足の曲る  
【陸】 病  
【七】 世に  
【八】 せむし

痛の苦痛を受けて、最時は死を致さん  
痛に於て死に已りて、更に鱗身を受けん  
其形長大にして、五百由旬ならん  
野次無足にして、宛轉發行し

【九】 小蟲に、食せられん

晝夜苦を受くるに、休息有ること無けん

斯能を誘するが故に、罪を獲ることは是の如し

若し人と爲ることを得れば、諸根闇鈍にして

【一〇】 國舞、盲聾盲瞶ならん

言説する所有らんに、人信受せず

口の氣常に臭く、鬼魅に著せられん

貧窮下賤にして、人に使はれ

多病瘠瘦にして、依怙する所無く

人に親附すと雖も、人意に在かじ

若し所得有らば、尋で復忘失せん

若し醫道を修め、方に順じて病を治せば  
更に他の疾を増し、或は復死を致さん

【抄劫】 強盜

若し自ら強盜らば、人の救済するもの無く  
致し良法を限すとも、而も後増罰あり

若し他の反逆し、抄劫し竊盜せし

是の如き罪の罪、横に其の罪に據らん

斯の如き罪人は、永く佛

衆の外の、説法教化したまふを見ざらじ

斯の如き罪人は、常に難處に生れん

狂野心亂にして、永く法を聞かじ

抄劫せ、泥河沙の如きに於て

生れては雖も罪啞にして、諸根不具ならん

常に地獄に墮ること、同觀に遊ぶが如く

餘の惡法に在ること、已が舍宅の如く

豈に猪狗、是れ其行成ならん

斯時を訪ずるが故に、罪を種ふこと是の如し

若し人と爲ることを得れば、賢者階位にして

賢者階位、以て自ら莊嚴し

永く佛衆、皆稱讚す

【疥癩】 疥癩  
【乾癩】 疥癩  
【疥癩】 疥癩  
【疥癩】 疥癩

【多聞云云】徒に博覽強記して口耳の學を努むるのみなるを云ふ。

是の如き等の病、以て衣服と爲ん  
 身常に臭き處にして、垢穢不淨に  
 深く我見に著して、瞋恚を増益し  
 婬慾熾盛にして、禽獸を擇ばじ  
 斯經を謗するが故に、罪を獲ること是の如し  
 舍利弗に告ぐ、此經を謗せる者  
 若し其罪を説かんに、劫を究むとも盡させじ  
 是因縁を以て、我故に汝に語る  
 無智の人の中に、此經を説くこと莫れ  
 若し利根にして、智慧明了に  
 多聞強識にして、佛道を求むる者有らん  
 是の如きの人に、乃ち爲に説くべし  
 若し人曾て、億百千の佛を見たてまつりて  
 其の善本を植ゑ、深心堅固ならん  
 是の如きの人に、乃ち爲に説くべし  
 若し人精進して、常に慈心を修し  
 身命を惜まざらんに、乃ち爲に説くべし

【要知】 善知識に對するもの、邪法を説くもの

若し「恭敬して、異心有ること無く

凡愚を離れ、獨り山澤に處せん

是の如きの人に、乃至爲に説くべし

又舍利弗、若し人有りて

善知識を捨て、善友に親近するを見ん

是の如きの人に、乃至爲に説くべし

若し佛子の、持戒清淨にして

淨明、戒の如くにして、大乘經を求むるを見ん

是の如きの人に、乃至爲に説くべし

若し人、氣力無く、夏百柔軟にして

常に一處を坐せ、諸佛を恭敬せん

是の如きの人に、乃至爲に説くべし

佛子の、大衆の中に於て

清淨の心を以て、種種の因縁

佛の言應して、誦法すること無懈に有らん

是の如きの人に、乃至爲に説くべし

若し人、正行、一切智の道に

四方に法を求めて、合掌し頂受し、但樂ひて、大衆經典を受持して

乃至、餘經の一偈をも受けざる有らん

是の如きの人に、乃ち爲に説くべし

人の至心に、佛舍利を求むるが如く

是の如く經を求め、得已りて頂受せん

其人復、餘經を志求せず

亦未だ曾て、外道の典籍を念せざらん

是の如きの人に、乃ち爲に説くべし

舍利非に告ぐ、我是相にして

佛道を求むる者を説かんに、身を窮むとも甚きこと

是の如き等の人は、即ち能く信解せん

汝當に爲に、妙法華經を説くべし

信解品第四

信解品 此の品は譬說周中の第二四大聲聞領解段にして、謂ゆる長者窮子の譬を以て眼

爾時、慧命須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連、佛に復ひたてまつりて問ける



【二】以下正しく長者窮子の譬。初に廣く譬説を聞く

【刹利】具に刹帝利クシヤトリヤ(Ksatrya)土田主と譯す。印度四姓の第二位、王及び武士の種族なり。【居士】梵語、加羅越(Cihapati)の譯。出家せず家に居りて佛門に歸依せる男子の稱。

り。多く佛僧臣佐吏民有りて、象馬、車乘、牛羊無量たり。出入息利すること乃を富に遍し。商賈買客亦甚だ衆多なり。時に貧窮の子、諸の墜落に遊び、國邑を經歷して遂に其父の所止の地に到りぬ。父母に子を念ふ。子と離別して五十餘年、而も未だ貧乏人に向ひて此の如き事を説かず。但自ら思惟して心に悔涙を流す。自ら念はく、「老朽して多く財物あり。金銀珍寶倉庫に盈溢すれども、子息有ること無し。一旦に終没せば、財物散失して委付する所無けん。」是を以て懸懸に毎に其子を憶ふ。復是念を作さく、「我若し子を得て財物を委付せば、坦然快樂にして、復憂慮無けん」と。

世尊、爾時、窮子、備資展轉して遊父の舍に到りぬ。門の側に住立して遙に其父を見れば、師子の床に踞して寶机足を広げ、諸の婆羅門、刹利、居士、皆恭敬し圍遶せり。眞珠の璣珞の價直千萬なるを以て其身を莊嚴し、吏民僕候、手に白拂を執りて、左右に侍立せり。覆ふに寶帳を以てし、諸の華鬘を垂れ、香水を地に灑ぎ、衆の名華を散じ、寶物を羅

列して、出内取興す。是の如き等の種種の嚴飾有りて威德特尊なり。窮子、父の大力勢有るを見て、即ち恐怖を懷きて、此に來至せることを悔ゆ。竊に是念を作さく、「此れ或は是れ王か、或は是れ王と等しきか、我が傭力して物を得べきの處に非じ。如か貧里に往至して肆力に地有りて衣食得易からんには。若し久しく此に住せば或は逼迫せられん、強ひて

我をして作さしめんか」と。是念を作し已りて、疾く走りて去りぬ。時に富める長者、師子の座に於て、子を見て便ち識りぬ。心大いに歡喜して即ち是念を作さく、「我が財物庫藏今





【盆器】 盆器なり

【其所以云云】 心は依然として客作の主人の如し

他日をして意圖の中より遂に予の身を見れば、竊復憔悴して、糞土塵埃、汚穢不淨なり。即ち環者、無軌の上焉、諸の具を脱ぎて、更に塵垢垢膩の衣を著、塵土に身を空し、右の手に除糞の器を執持して、畏るる所有るに厭れ。諸の主人に謝らく、汝等勤作して懈怠することを得ること勿れ」と。方便を以ての故に、其子に近づくことを得ず、後に復告げて言はく、「嗚きや男子、汝常に此にして作せ、復餘に去ること勿れ。當に汝に價を加ふべし。諸の所須有る盆器、米器、鹽醋の器あり、自ら買ひ置ること莫れ。本老婦の使人あり、須ひば相給せん。好く自ら意を安うせよ。我は汝が父の如し、復憂慮すること勿れ。所以は何ん。我年老女にして汝は少壯なり。汝常に作さん時、欺怠、瞋恨、怨言有ること無かれ。而て汝が此諸惡有らんを、餘の作人の如くに見じ。今より以後、所生の子の如くせん」と。即時に長者、更に典に字を作り、之を名けて見と爲す。爾時、窮子此遇と欣ぶと雖も、猶故自らは客作の賤人と謂へり。是に由るが故に、二十年の中に於て常に糞を除はしむ。是を過ぎて已後、心相續信して入出に驚り無し。然れども其所止は猶木處に在り。世尊、爾時、長者疾有りて、自ら將に死せんこと久しからじと知りて、窮子に語りて言はく、「我今多く金銀珍寶有りて倉庫に盈溢せり。其中の多少、應に取與すべき所、汝悉く之を知れ、我が心是の如し。當に此意を體るべし。所以は何ん。今我と汝と便ち爲れ異ならず。宜く用心を加へて、漏失せしむること無かるべし」と。爾時、窮子、即ち教勅を受けて、衆物の金銀珍寶及び諸の庫藏を領知すれども、而も一毫を攝取するの意無し。

【俗傳】 孤獨の義

【三】 以下前習を合して説くを明す  
【三苦】 苦苦、壞苦、行苦の三を云ふ。苦苦とは自己の身心の苦たる内苦と外界より興へらるる外苦。壞苦とは樂の壞さるることによりて得ることには自然の變化の爲に生ずる主として精神上の不安。

然れども其所止は高本處に在りて、下劣の心亦未だ捨つること能はず。復少時を経て、又、子の意漸く已に過熟して、大志を成就し、自ら先の心を離れんと知りて、終らんと欲する時に臨んで、其子に命じ、並に親族、國王、大臣、刹利、居士を會むるに、皆悉く已に集りぬ。即ち自ら宣べて言はく、「諸君、當に知るべし、此は是れ我が子なり。我が所生なり。昔の城中に於て、我を捨てて逃走して、俗壽辛苦すること五十餘年、其本の名は某、我が名は某甲、昔、城中に在りて、要を懷きて兼ね覺めき。忽ちに此間に於て遇會にて之を得たり。此れ實に我が子なり。我は實に其父なり。今我が所有の一切の財物は皆是れ子の有なり。當に出内する所は、是れ子の所知なり。世尊、是時、窮子、父の此言を聞きて、即ち大いに歡喜して、未曾有なることを得て、是念を作さく、「我本心に希求する所有ること無かりき。今此寶藏、自然にして至りぬといはんが若し」

世尊、大富長者は則ち是れ如來なり。我等は皆佛に値たり。如來常に我等を責れりなりと説きたまへり。世尊、我等三苦を以ての故に、生死の中に於て、諸の熱惱を受け、迷惑無知にして小法に樂せり。今日世尊、我等をして思惟して諸法の戲論の獲を斷せしむ。我等中に於て勸加進して、涅槃にある一日の價を得たり。既此を得已りて、心大いに歡喜して、自ら以て足れんと爲し、即ち自ら言ひて言はく、「佛法の中に於て、勤め精進するが故に、所得弘かなり」と。然るに世尊、當に我等が心樂欲に著し小法を樂まを知らしめして、佛を捨せられて、爲に汝當に如來の正見、寶藏の所有るべしと分別す

【問】以下重ねて  
佛に法説を厭  
むるは童子の

【答】は童子の  
厭むるは童子の

たまはず。世尊、方便りを以て如來の智慧を説きたまふ。我等佛に従ひて、涅槃第一の價を得て、以て大いに得たりと爲して、此大乘に於て志求すること無かりき。我等又如來の智慧に因りて、諸の菩薩の爲に開示し演說せしかども、而も自らは此に於て志願すること無かりき。所以は何ん。佛、我等が心に小法を樂ふを知らしめして、方便力を以て我等に隨ひて説きたまふ。而も我等は眞に是れ佛子なりと知らず。今我等方に知んぬ、世尊は佛の智慧に於て憍惜したまふ所無し。所以は何ん。我等昔より來、眞に是れ佛子なれども、而も但小法を樂ふ。若し我等大を樂ふの心有らましかば、佛則ち我が爲に大乘の法を説きたまはまし。此經の中に唯一乘を説きたまふ。而も昔菩薩の前に於て、聲聞の小法を樂ふ者を毀訾したまへども、然も佛、實には大乘を以て教化したまへり。是故に我等説く、本心に怖求する所有ること無かりしかども、今法王の大寶、自然にして至れり。佛子の應に得べき所の如き者は皆已に之を得たり」と。

爾時、摩訶迦葉、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言さく、

我等今日、佛の音教を聞きて

歡喜踊躍して、未曾有なることを得たり

佛聲聞、當に作佛することを得べしと説きたまふ

無上の寶聚、求めざるに、自ら得たり

聖へば童子の、幼稚無識にして

得るが如し】開書

父を捨てて、諸國に周遊すること、五十年

其父を懐念して、四方に排求す

之を求めむに、既に死んで、一處に居らず

舎宅を造立して、互敬自ら修む

其室瓦に宮ありて、諸國の富貴

碑磔、磚、眞珠、瑠璃、多く

象馬、牛、羊、羴、輦、車、乘

田業、俸、銀、人が、聚、ま、り

田人、其、田、を、耕、す、る、こ、と、乃、ち、他、國、に、海、く、

商、賣、す、と、能、く、一、を、有、ら、ず、と、し、

其、財、を、以、て、其、財、に、財、を、

其、財、に、財、を、其、財、に、財、を、

其、財、に、財、を、其、財、に、財、を、

其、財、に、財、を、其、財、に、財、を、

其、財、に、財、を、其、財、に、財、を、

其、財、に、財、を、其、財、に、財、を、

【善壽】

ひぜん。

夙夜に念すらく、何の將に至らんとす

穢子我を捨てて、五十餘年

庫藏の諸物、當に之を如何すべき

爾時窮子、衣食を求索し

邑より邑に至り、國より國に至る

或は得る所有り、或は得る所無し

飢餓顛覆して、體には積弊を生ぜり

漸次に轉歴して、父の住む處に到り

傭賃展轉して、遂に父の舍に至る

爾時長者、其門の内に於て

大寶椀を施して、餓子の瘡に處し

眷屬圍遶し、諸人侍衛し

或は金銀、寶物を計算し

財産を出内し、法說安樂する有り

窮子父の、榮貴尊嚴なるを見て

謂はく是れ國王、若は國王と等しきかと

悲怖して自ら怪しむ、何が故に此に至れる

【題目】 すがめ。

禮かに自ら念言すらく、我若し久しく住せば

或は強ひて驅つて作さしめん

是を思ふに已りて、馳走して去り

貧里を借問して、往きて備作せんと欲す

長者是時、師子の座に在りて

遙かに其子を見て、歎しこゝを憐る

即ち長者に勸し、追ひ捉へて將て來らしむ

長者曰く、汝は是れ、迷開して地に墮る

聖人彼と歎ふ、女は當に殺さるべし

爾を哀哀と用て、我をして地に墮らしむる者

長者曰く、馬を決むに

伐が言を言せず、是れ父なりと言ぎまらるを知りて

即ち方便を以て、更に餘人の

少目淫質にして、威徳無き者を遣はず

汝に之を看りて、云ふべし當に相雇はる

長者の業を除はしむべし、倍して汝に價を與へんと

之を聞きて、歡喜して隨ひ來り

四 寶物 數物

爲に寶穢を離れ、諸の房舍を淨む  
長者獨より、常に其子を見て  
子の愚劣にして、樂ひて鄙事を爲すを念ふ  
是に於て長者、弊垢の衣を著  
除其の器を執りて、子の所に往き到り  
方便して附近し、語ひて勤作せしむ  
既に汝に價を益し、並に是に油を塗り  
飲食充足し、藁席厚煖ならしめん  
是の如く苦言すらく、汝當に勤作すべしと  
又以て軟語すらく、若を我が子の如くせんと  
長者智有りて、漸く入出せしめ  
二十年を経て、家事を兼作せしむ  
其に金銀、眞珠、玻璃  
諸物の出入を示して、皆知らしむれど  
猶門外に處し、草菴に止宿して  
自ら負事を念ふ、我には此物無しと  
父子の心、漸く已に曠大なるを知りて





佛我等に勅して、最上の道を説かしたまふ

此を修習する者は、常に成佛することを得べしと

我佛の教を承けて、大菩薩の行に

諸の因縁、種種の譬喩

若干の言辭を以て、無上道を説く

諸の佛子等、我に從ひて法を聞きて

日夜に思惟し、精勤修習す

是時諸佛、即ち共に詔を授けたまふ

汝來世に於て、當に作佛することを得べしと

一切諸佛の、祕藏の法をば

但菩薩の爲に、其實事を演べて

我が爲には、斯眞要を説かざりき

彼弟子の、其父に近づくことを得て

諸物を知ると雖も、心に捨取せざるが如く

我等、佛法の寶藏を説くと雖も

自ら志願無きこと、亦復是の如し

我等内の滅を、自ら足ることを爲たりと謂うて

【無漏】漏は煩惱のこと即ち煩惱の汚れなきを云ふ。  
【無爲】本來常住にして、何物にも造作せらるることなきを云ふ。

【有無】有は所依の体性を指し、無は所依を離れて得たる涅槃のこと。

唯法界の如く、更に諸事無し。

我等若し、佛の隨士を證す。

衆生を教化するを聞きては、即ち代受無かりき。

所以は何ん、一切の諸法。

皆悉く空寂にして、無生無滅。

無大無小、無減無増なり。

是の如く思惟して、喜樂を生ぜず。

我等長夜に、佛の智慧に於て。

貪無く著無く、後念願無し。

唯自法に於て、是れ究竟なりと證す。

我等長夜に、空法を修習して。

三摩の、善性の道を證すことを得。

唯法界、有法に於て。

佛の教化したる衆生は、得證し給ふ。

明かに、佛の思を證することを得たりと證す。

我等、諸の佛子の如く。

佛の法を證きて、以て佛道を求めしむと證す。

【調伏】心を調へて諸の業行を調伏すること

而も是法に於て、永く隨樂無かりき  
導師捨てられたることは、我が心を調へた事未だ故に  
初め勸進して、實を利有りと言きたまはず  
富める長者の、子の心こころの劣なるを知りて  
方便力を以て、其心を調伏し  
然る後乃ち、一切の財寶を付するが如く  
佛も亦是の如く、善行の事を現したまふ  
小を業ふ者なりと知らしめして、方便力を以て  
其心を調伏して、乃ち大智と教へたまふ  
我等今日、未曾有なることを得たり  
先の所望に非ざるを、而も今自ら得ること  
彼窮子の、無量の寶を得るが如し  
世尊我今、道を得果を得  
無漏の法に於て、清淨の眼を得たり  
我等長夜に、佛の淨戒じやうがいを持ちて  
始めて今日に於て、其果報を得  
法王の法の中に、久しく修行を修して

【佛尊は大恩まし  
ます】 以下は、  
佛尊を敬するの  
儀

【牛欄栴檀】 (牛欄  
cipran-lana) の譯  
印度に産する香木  
の名、赤色にし  
て、栴檀中最も香  
氣あるものなり

今佛尊、佛上の大恩を得

我々等、眞に思はば佛恩なり

佛道の聲を以て、一切として聞かむべし

我佛子者、眞に詞無遺なり

佛の世間、天人魔梵に於て

善く其中に於て、眞に供養を受くべし

世間は佛恩ましとて、希有の事を以て

佛恩敬化して、我等を利益したまふ

眞に恩劫にも、我等が能く報ずる者ならん

手足もて供給し、頭頂もて敬禮し

一切もて供養すとて、皆備すること能はじ

善に以て頂戴し、兩肩に荷担して

佛道場に於て、心を盡して恭敬し

又宝衣、無量の寶衣

又佛の臥具、佛坐の座を以てし

牛欄栴檀、及び諸の珍寶もて

以て佛尊に起て、寶衣を地に布く

【取相の凡夫】有  
所得の見に執著す  
る凡夫。

【一乗】佛乘。  
【三】三乗のこと  
即ち聲聞乘、緣覺  
乘、菩薩乘なり。

斯の如き等の事、以て用て供養すること  
 恆沙劫に於てすとも、亦報すること債はじ  
 諸佛は希有にして、無量無邊  
 不可思議の、大神通力まします  
 無漏無爲にして、諸法の王なり  
 能く下方の爲に、斯事を忍び  
 取相の凡夫に、宜しきに隨ひて爲に説きたまふ  
 諸佛は法に於て、最も自在を得たまへり  
 諸の衆生の、種種の欲樂  
 及び其志力を知ろしめして、堪任する所に隨ひて  
 無量の喻を以て、而も爲に法を説きたまふ  
 諸の衆生の、宿世の善根に隨ひ  
 又成熟と、未成熟の者を知ろしめし  
 種種に壽量し、分別し知ろしめし已りて  
 一乗の道に於て、宜しきに隨ひて三と説きたまふ



【三】以下譬を合して明す

【未だ度せざる者等】佛の四弘誓願なり

【解脫相等】煩惱生死を解脫したる相を解脫相、業の繫縛を捨離するを離相、分段生死、變易生死を滅するを滅相といふ。畢竟は唯一實なるを一相といふ。

有り、一雲の雨らす所、其種性に稱して生長することを得て、華果繁け富る。一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、雨も諸の草木各各別有るが如し。

迦葉當に知るべし、如來も亦復是の如し。世に出現すること大雲の起るが如く、大音聲を以て普く世界の天人阿修羅に遍せしこと、彼大雲の遍く三千大千國土に覆ふが如し。大衆の中に於て是言を唱ふは我は是れ如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊なり。未だ度せざる者をば度せしめ、未だ解せざる者をば解せしめ、未だ安んせざる者をば安んせしめ、未だ涅槃せざる者をば涅槃を得しむ。今世後世、實の如く之を知る。我は是れ一切知者、一切見者、知道者、問道者、證道者なり。汝等天人阿修羅衆、皆應に此に到るべし。法を聽かんが爲の故なり。爾時、無數千萬億種の衆生、佛の所に來至して法を聽く

如來時に、是衆生の、諸根の利鈍、精進懈怠を觀じ、其堪ふる所に隨ひて、爲に法を説くこと種種無量にして、皆歡喜し快く善利を得しむ。是諸の衆生、是法を聞き已りて現世安隱にして、後に善處に生じ、道を以て樂を受け、亦法を聞くことを得。既に法を聞き已りて諸の障礙を離れ、諸法の中に於て力の能ふる所に任せて、漸く道に入ることを得。彼大雲の一切の芥木、叢林及び諸の藥草に雨るに、其種性の如く、具足して潤を蒙り、各生長することをを得るが如し。如來の説法は一相一味なり。謂ゆる解脫相、離相、滅相なり。究竟して一切種智に至る。其れ衆生有りて如來の法を聞いて、若し持ち



讀誦し、彼の如く修行せんに、得る所の功徳は、覺知せず。所以は何ん。唯如来のみ有りて、如来生の地、相、體、性、何の事を修し、何の事を思し、何の事を修し、何の事に念き、三摩に思し、三摩に修し、何の法を以て念し、何の法を以て思し、何の法を以て修し、何の法を以て得しといふことを知れり。衆生の縁縁の地に住せんと、唯如来のみ有りて、何の法を以て得しといふことを知れり。彼草木、樹林、諸の藥草等の、而も自ら上中下の性を知らざるが如し。如来は是れ一相一味の法なりと知り、諸の心解脫相、無相、無相、究竟涅槃、常寂滅法にして、終に空に歸す。佛、是れ自ら得しといふことも、衆生の心念を離れ、而も之を將えず。是故に即す爲に一切種智を獲て、

汝等逆、甚だ異れ希有なり。如來の所宣の法を修して、能く信じ能く受く。所以は何ん。唯佛世尊の遺宣の法は、解り難く知り難く得難く、爾時、世尊、重ねて此法を宣べんと欲して、偈を誦して言はく、

有を破するは正、而も此に取用して、  
 衆生の欲に隨ひて、種種の法を説く  
 如來は衆生にして、智慧深遠なり

久しと如來を敬して、解らずに説かず  
 智有るは若し聞きて、則ち能く信解し

智無きは愚昧して、則ち亦く失ふべし

【經】 如來は衆生にして、智慧深遠なり。衆生の欲に隨ひて、種種の法を説く。如來は衆生にして、智慧深遠なり。久しと如來を敬して、解らずに説かず。智有るは若し聞きて、則ち能く信解し。智無きは愚昧して、則ち亦く失ふべし。



一切の諸煩、上中下等しく

其大小に指ひて、各生長するごとし、得

ゆる花実、華果光也。

一雨の及ぼす所、皆鮮澤することを得

其體相、性の大小に分れたるが如く

潤す所是れ一なれども、雨も亦是の如し、世に出現すること

譬へば大雲の、普く一切を覆ふが如し

既に世に出でば、諸の衆生の爲に

諸法の寶を、等しく演說す

大聖世尊、諸の衆生

一切衆の中に於て、而も諸法を宣ぶ

我は世に出現す、爾は衆生に於て

世間に出現すること、爾は衆生の爲に

一切の諸煩の衆生に充潤して

若苦を離れ、安樂の樂

世間の樂、及び涅槃の樂を得しむ

【佛も亦是の如し】  
以下は菩薩を指す

諸の天人衆、一心に善く聽け

皆座に此に到りて、無上尊を觀るべし

我は爲れ世尊なり、能く及ぶ者無し

衆生を安隱ならしめんとして、故に世に現じて

大衆の爲に、甘露の淨法を説く

其法は一味にして、解脫涅槃なり

一の妙音を以て、斯義を演暢す

常に大蓮の爲に、而も因縁を作す

我一切を觀するに、善く皆平等なり

彼此、愛憎の心有ること無し

我貪著無く、亦厭礙無し

恆に一切の爲に、平等に法を説く

一人の爲にするが如く、衆多も亦然なり

常に法を演説して、曾て他事無し

去來坐立、終に疲厭せず

世間に充足すること、雨の普く潤すが如し

貴賤上下、損減毀滅

威儀具足止る、及び具足止る

正見邪見、利根鈍根に

等しく法雨を雨にして、雨も憍慢無し

一、衆生の、我法を聞く者は

力の受くる所に遍ひて、諸の地に住す

或は入天、轉輪聖王

釋尊諸王に處す、是れ心の藥なり

無漏の法を知りて、能く涅槃を得

六神通を起し、及び三明を得

獨山林に處し、常に禪定を行じて

緣起の證を得る、是れ中の藥草なり

世間の處を求めず、我常に作佛すべしと

精進定を行す、是れ上の藥草なり

又、佛の佛子、心を佛性に專にした

常に慈悲を行じ、自ら憍せんこと

決定して疑ひ無しと知ん、是を八徳と名く

神通に安住して、不退轉を轉す

【六神通】 六種の

神通。天眼通、天

耳通、他心通、宿

命通、神足通、漏

盡通。

【三明】 三昧とも

云ふ。六神通の中

の宿命通、天眼通、

漏盡通に同じ。

無量億、百千の衆生を度する

其の如き菩薩を、名けて大樹と爲す

佛の平等の説は、一味の雨の如し

衆生の性に隨ひて、受くる所同じからず

彼草木の、稟くる所 各異なるが如し

佛 此喻を以て、方便して開示す

種種の言宣もて、一法を演説すれども

佛の智慧に於ては、海の一漚の如し

我法雨を降らして、世間に充滿す

一味の法を、力に隨ひて修行すること

彼叢林、藥草諸樹

其大小に隨つて、漸く茂好を増すが如し

諸佛の法は、常に一味を以て

諸の世間をして、普く具足することを得

漸次に修行して、皆道果を得しめたまふ

聲聞緣覺の、山林に處し

最後身に住して、法を聞きて果を得る

【諸法】  
因縁所生一切法  
有なるを謂ひ、  
執を除くすを  
謂ふ。

是を藥草の、各増長することを得と名く  
若し諸の、  
三界を了達し、最上乘を求むる

是を小樹の、増長することを得と名く  
復禪に住して、神通力を得

諸法の空を聞きて、心大いに歡喜し  
無數の光を放ちて、諸の衆生を度することを得

是を大樹の、而も増長することを得と名く  
是の如く迦葉、佛の説きたる所の法は

譬へば大雲の、一味の雨を以て  
人華を謂して、各實を成ずることを得しむるが如し

迦葉當に知るべし、諸の因縁  
種種の譬喩を以て、佛道を開示す

是れ我が方便なり、諸佛も亦然なり  
今汝等が爲に、最上乗を求む

佛の發聞衆は、皆成はせしに非ず  
汝等が所行は、是れ最上乗の道なり

漸漸に修學して、悉く當に成佛すべし。

### 授記品第六

【授記品】 前品に次ぎて迦葉等の五大聲聞に授記を與ふるを明す。辨説の第三授記段なり。

【一】 初に摩訶迦葉に記別を授くるを明す。

爾時、世尊、是偈を説き已りて、諸の大衆に告げて是の如き言を唱へたまはく、我が此弟子摩訶迦葉は、未來世に於て、當に三百萬億の諸佛世尊を奉覲して、供養し恭敬し、尊重し讃歎して、廣く諸佛の無量の大法を宣ぶることを得べし。最後身に於て、佛と成爲ることを得ん。名をば光明如來、應供、正遍知、明行足、善道、世間無、無上正、覺、妙、樂、天人師、佛、世尊と曰はん。國をば光徳と名け、劫をば大莊嚴と名けん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。國界廣し、人民の穢惡、瓦礫荆棘、便利の不淨無く、其土平正にして、高下、坑坎、坑草有ること無けん。琉璃を地と爲して、寶樹行列し、黃金を繩と爲して、以て道の側を界ひ、諸の寶華を散じて、周遍して清淨ならん。其國の菩薩無量千億にして、諸の聲聞衆亦復無數ならん。魔事有ること無けん、魔及び魔民有りと雖も、若佛法を護らん。爾時、世尊、重ねて此義を宣へんと欲して、偈を説きて言はく、

諸の比丘に告ぐ、我佛眼を以て

此迦葉を見るは、未來世に於て



【修行】 善は善行  
の善、善行なる行  
ひのこと

無數劫を過して、當に作佛することを得べし  
而も來世に於て、三百萬億の

諸國世界を、供養し奉觀して

佛の智慧を爲て、淨く修行を修し

結して、一足尊を供養し已りこ

一切の、無上の慧を修習し

其後身に於て、佛と成爲ることを得ん

其を清淨にして、琉璃を地と爲し

佛の流轉多くして、道の側りに行列し

金剛山を昇りて、見る尊散喜せん

常に華鬘を散らし、衆の名華を散じて

佛國の奇蹟を以て莊嚴と爲し

其地を正にして、丘坑有ること無けん

帝の甘露を、稱讚すべからず

其心調柔にして、大願遂に逮り

諸國の、衆衆を奉持せん

佛の禁闍を、無漏の後身に於て

二〇二 日觀連等三人 記別を請ふ

法王の子なる、亦計るべからず

乃ち天眠を以ても、眞へ知ることを能はし

其佛は當に、壽十二小劫なるべし

正沙世に住すること、二十小劫

像法亦住すること、二十小劫たらん

光明世尊、其事是の如し

爾時、大日觀連、須菩提、摩訶迦旃延等、皆悉く悚慄して、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、目暫らくも捨てず、即ち共に聲を同うして、偈を説きて言さく、

大雄猛世尊、諸釋の法王

我等を哀愍したまふが故に、而も佛の音聲を賜へ

若し我が深心を知ろしめし、授記せられなば

甘露を以て灑ぐに、熱を除きて清涼を得るが如くならん

飢をたる國より來つて、忽ち大王の饌に遇へらんが如く

心猶疑懼を懷きて、未だ敢て即ち食せず

若し復王の教を得ては、然る後に乃ち敢て食せんが如く

我等も亦是の如し、毎に小乘の過を惟うて

當に云何にして、佛の無上慧を得べきかを知らず

佛の言はく、我等作佛すること言ふことを聞くと雖も  
心尙驚怖を懐くことを、我が故て便ち食せざる事如し

若し故に眞正を蒙りたば、無乃ち快く事ならん

雄に非ず、常に世間を空んせんと外

誰くは我が心に望を懐へ、彼に就を須つて食するが如くならん

爾時、世尊、諸の大弟子の心が所念を知らしめして、諸の比丘に言けたまはく、是謂善

提は常來世に於て、二百萬億那由他の佛を親遇して、供養に恭敬し尊重し讚歎し、常に覺

行を生じ、善妙具を具して、最後身に於て、佛と成爲ることを得ん、號をば名須如來、

供、正遍知、明行足、善解、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん

劫をば有寶と名け、國をば寶土と言けん。其土平正にして、頗梨之地と爲し、寶樹莊嚴し

て、諸の丘坑、險澗、荆棘、便利の穢無く、淨地に覆ひ、周廻に清淨ならん。非土

の人罵、賢寶、諸の諸羅に於て、聲聞の弟子、無量無算にして、算數譬喩を知ることを

能はざる所ならん。諸の諸羅、無數千萬那由他の諸の善士、正法に

住すること二十小劫、無法亦住すること二十小劫ならん。其佛常に虚空に居して、衆の爲

に法を説き、無量の衆及び聲聞衆を變ぜん。

爾時、世尊、取次て非説を宣べんと欲して、佛を説きて言はく、

須菩提、今汝等に言

皆當みな一心いつしんに、我が説く所ところを聴くべし

我わが大弟子だいとし、須菩提すぼだいは

當まさに作佛むすぶつすることを得べし、號なづをば名相みやうさうと曰いははん

當まさに無量むりやう、萬億まんいつの諸佛しよぶつを供くぐして

佛ぶつの所行しよかうに隨したがひて、漸すすく大道だうだうを具ぐすべし

最後さいご身に、三十二相さんじふにさうを得て

端正たうせい殊妙しゆめうなること、猶なほし寶山ほうざんの如ごとくならん

其その佛ぶつの國土こくどは、嚴淨げんじやう第一だいいちにして

衆生しゆじやうの見る者もの、愛樂あいらくせずといふこと無なけん

佛ぶつ其中そのちゆうに於おて、無量むりやうの業ごうを度たせん

其その佛ぶつの法ほふの中ちゆうには、常とこの菩薩ぼさつ多く

皆みな悉しつく利根りこんにして、不退ふたいの輪りんを轉まぜん

彼國かこくは常に、菩薩ぼさつを以もつて莊嚴じやうげんせり

其その國こくの聲聞しやうもん衆しゆも、稱數しやうすうすべからず

皆みな三明さんめいを得え、六神通ろくじんつうを具ぐし

八解脫はつげだつに住じゆうして、大威徳だいゑとく有あらん

其佛そのぶつの説法しやくぽふには、無量むりやうの

【八解脫】 八種の解脫の方法、八種の捨とも云ふ。八背觀色、内無色相外觀色、淨背捨身作證、虚空處背捨、識處背捨、無所有處背捨、非有想非無想背捨、滅受想背捨の八なり。

不可思議なる

諸人民、數恆沙の如く

皆共に合掌して、讚誦を絶えず

其佛は當に、十二小劫なるべし

正法世に住すること、二十小劫

正法亦住すること、二十小劫ならん

爾時、世尊、夜摩の比丘衆に告げたまはく、「我今汝に語る。是は迦梅羅、雪山に

在りて、諸の諸君を以て、八千億の佛に供養し奉事して、恭敬尊重せしむ。諸の諸君に、各

一廟を起て、八千由旬、縱廣正等にして五百由旬ならん。皆金、銀、琉璃、水晶、

瑪瑙、眞珠、珊瑚、琥珀、寶を以て合成し、衆華、瓔珞、塗香、抹香、鬘香、鬘鬘、

佛に供養せん。佛を圍ぎて已後當に復二萬億の佛を供養すること亦是の如くすべし。是

諸佛を供養し奉事して、菩薩道を具して、當に作佛することを得べし、號をば閻浮那提金光

如來、應供、正覺、明行、足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と

曰はん。其土平正にして、玻瓈を地と爲し、寶樹莊嚴し、黃金を繩と爲して、以て道の側

りを界ひ、四天王守衛し、周遍清淨にして、見る者歡喜せん。四道の、地獄、餓鬼、

畜生、阿修羅、鬼、多く天人有らん。諸の聲聞衆、及び諸の菩薩、無量無億にして其

國を莊嚴せん。佛の壽は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、作佛に住すること二十

【釋】次に大迦梅羅に記を授くるを

小劫なるふり

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、  
諸の比丘衆、皆一心に聽け

我が説く所の如きは、眞實にして異なること無し  
是迦鞠行は、常に種種の

妙好の供具を以て、諸佛を供養すべし  
諸佛の滅後に、七寶の塔を起て

亦華香を以て、舍利を供養し  
其最後身に、佛の智慧を行て

等正覺を成じ、國土清淨にして  
無量萬億の、衆生を度脱し

若十方に、供養せらるることを爲ん  
佛の光 明、能く勝る者無けん

其佛の號をば、閻浮金光と曰はん  
菩薩聲聞の、一切の有を斷ぜる

無量無數、其國を莊嚴せん

爾時、世尊、復大衆に告げたまはく、我今汝に語る、是大日變蓮は、常に種種の供具を

【五】次に大日變蓮に記別を授く。

以て、八千の諸佛を供養し、恭敬尊重したてまつるべし。諸佛の滅後、各塔廟を建てて、  
 高き千由旬、麗麗正等に於て五百由旬なるを、骨金、銀、珊瑚、瑪瑙、瑠璃、寶珠、珠  
 璣の七寶を以て造らし、雲華、網珠、塗香、鉢香、鬘香、網香、幢幡を以て供養せん。  
 是を過ぎては後、當に復た百萬億の諸佛を供養すること亦復是の如くすべし。當に成佛す  
 ることを得べし、佛をば多量に禮讃稱揚喜如來、轉供、正遍知、明行足、善哉、世間寶、  
 無上王、明淨七寶、天人師、佛、世尊と曰はん。劫をば著滿と名け、國をば意樂と名けん。  
 其上正にして、支障を地と号し、寶樹莊嚴し、寶珠華を散じ、周遍清淨にして、見る  
 者人みな、諸の天人多く、菩薩摩訶薩、其數無量たらん。諸の淨は二十四小劫たらん、正  
 法時にして、諸佛の滅後、七寶の塔を出して、

二百萬億の、諸佛世尊を見たてまつることを得て

諸佛の所に於て、常に修行を修し、  
 供養恭敬に於て、禮讃稱揚喜如來、  
 諸佛の滅後に、七寶の塔を出して

【金刹】金幡、金  
華を以て柱頭を飾  
ること。

【我が諸の弟子の】  
以下は下根の受記  
並に許説の宿縁を  
説く。

長く金刹を表し、華香伎樂もて  
而も以て、諸佛の塔廟に供養し  
漸次に、菩薩の道を具足し已りて  
意樂園に於て、作佛することを得て  
多摩羅、梅檀の香と焚けん  
其佛の壽命は、二十四劫ならん  
常に天人の爲に、佛道を演説せん  
聲聞無量にして、恆河沙の如く  
三明六通ありて、大威徳有らん  
菩薩無数にして、志固く精進し  
佛の智慧に於て、皆退轉せじ  
佛の滅度の後、正法當に住すること  
四十小劫ならべし、像法亦爾なり  
我が諸の弟子の、威徳具足せる  
其數五百なるも、皆當に授記すべし  
未來世に於て、咸く成佛することを得ん  
我及び汝等が、宿世の因縁



言今當に讀くべし、汝等普く覺け

化城喻品第七

【化城喻品】次に  
四輪周を擧ぐる中  
今品は正に正説段  
なり、法説、譬説  
の二周によりて、  
上中二根は聖意を  
領解せしむ、更に  
下根をして解せし  
めん爲に過去大通  
佛の時の結縁を説  
き、之に授記する  
由縁を明すなり。  
【三千大千世界等】  
この三千大千世界  
の摩訶薩を遶門  
の三千諸佛といふ  
十方諸佛の本地の  
久遠なり。

（二）佛、諸の比丘に告げたまはく、「乃持過去無量阿僧祇劫、處處、佛有しき、大通智度無來、摩訶、正覺如、明行足、清淨、無上士、聖師丈夫、天人國、佛、世尊ともよく、北國をば好施と名け、劫をば末劫と名けき。諸の比丘、彼佛の法受より已來、其の身に久遠たり。當へば、三千大千世界の有る諸國を、假使人有して、磨りて以て墨を以し、東方千の國土を造りて、乃ち一點を下さん。大いさ微細の如し。又千の國土を過て二滴一點を下さん。其の如く其轉して國土の墨を盡さん。が如し、汝等が意に於て二何、是の國土とは、若は寶國、若は尊勝の弟子、能く總持を得て、其數を知らんや。今に佛、諸の比丘、是人の觀る所の國土の、若は點を造ると、點を造ると、造りて、佛と爲して、一點を一點をせむ。彼佛の法受より已來、復是教に遇はざること、無量阿僧祇劫阿僧祇劫なり。我如來の智慧力を以ての故に、彼久遠を觀ること猶し今日の如し。」

爾時、佛復重はて此義を宣べんと欲して、佛を説きて言はく、  
假使阿僧祇、阿僧祇諸佛を造ると云ふに

【二】結縁の由終  
を明す、初に大通  
智勝佛の成道を述  
ぶ。

佛兩足尊有しき、大通智勝と名く

如し人の力を以て、三千大千の土を磨りて

此諸の地種を盡くして、皆悉く以て墨と爲して

千の國土を過ぎて、乃ち一の塵點を下さん

是の如く展轉し點じて、此諸の塵の墨を盡さん

是の如き諸の國土の、點せると點せざる等を

復盡く抹して塵と爲して、一塵を一劫と爲さん

此諸の微塵の數よりも、其劫は復是に過ぎたり

彼佛の滅度より來、是の如く無量劫なり

如來の無礙智、彼佛の滅度

及び聲聞菩薩を知ること、今の滅度を見るが如し

諸の比丘當に知るべし、佛智は淨くして微妙に

無漏無所礙にして、無量劫に通達す

佛、諸の比丘に告げたまはく、大通智勝佛は壽五百四十萬億那由他劫なり、其佛、本

道場に坐して、魔軍を破し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまはんずるに、而も諸佛の法

現在前せず。是の如く一小劫、乃至十小劫、結跏趺坐して、身心動じたまはず。而も諸佛

の法、猶在前せざりき。爾時、初利の諸天、先より彼佛の爲に菩提樹の下に於て師子の座

【國王】東方持國南方增長西方廣目北方多聞の四天王のこと。

を敷けり。高さ一由旬なり。佛此座に於て常に阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべしと。遊めて此座に坐したまふ。時に佛の梵天王、衆の天衆を雨らすこと、雨ごとに百由旬なり。香ばしき風時に乘りて、萎める華を吹き去りて、更に鮮しき華を雨らす。是の如く絶えず十小劫を満じて佛を供養したてまつる。乃至阿耨多羅三藐三菩提を雨らしき。四王の諸天、佛を供養したてまつらんが爲に常に天鼓を撃つ。其餘の諸天、天の伎樂を作すこと十小劫を満す。阿耨多羅三藐三菩提に至るまで亦復是の如し。諸の比丘、大通智勝佛十小劫を過きて諸佛の法乃し現在前して、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまひき。其佛未だ出家したまはざりし時に十六の子有り、其第一をば名を智積と曰ふ。諸子皆種種の珍異玩好の具有り。父の阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまふと聞きて、皆所珍を捨てて佛の所に往詣す。諸母涕泣して隨ひて之を送る。其祖轉輪聖王、一百の大臣及び餘の百千萬億の人民と異に、皆佛に圍遶して隨ひて道場に至る。或く大通智勝如来に親近して、供養し恭敬し尊重し讚歎したてまつらんといひ、到り已りて、頭面に足を禮し、佛を過り畢已りて、一心に合掌し、佛を讚仰して、偈を以て頌して曰さく、

大威德世尊、衆生を度せんが爲の故に  
無量億劫に於て、爾乃し成佛することを得たまへり  
諸佛に具足したまふ、善い世尊最上なり  
供養に堪た希有なり、一たび遊して十小劫

【惡趣】 善惡の對  
惡業によりて惡く  
所の場所、三惡趣、  
五惡趣等なり。

身體及び手足、靜然として安んじて動せず  
其心常に警惕にして、未だ曾て散亂行らず  
究竟して永く寂滅し、無漏の法に安住したまへり

今昔世尊の、安隱に佛道を成じたまふを見て

我等善利を得、稱慶して大に歡喜す

衆生は常に苦惱し、盲冥にして導師無し

苦盡の道を識らず、解脱を求むることを知らずして

長夜に惡趣を増し、諸の天衆を滅損す

冥きより冥きに入りて、永く佛の名を聞かず

今佛最上の、安隱無漏の法を得たまへり

我等及び天人、爲に最大利を得たり

是故に咸く稽首して、無上尊に歸命したてまつる

爾時、十六王子、偈もて佛を讚め已りて、世尊に法輪を轉じたまへと勸請しき、咸く

是言を作さく、「世尊法を説きたまへば、安隱ならしむる所多からん。諸天人民を憐愍し饒

益したまへ。」重ねて偈を説きて言さく、

世尊は等倫無し、百福もて自ら莊嚴し

無上の智慧を得たまへり、願くば世間の爲に説きて

我等、及び諸の衆生類を度脱し  
爲に分別し顯示して、其智慧を得しめたまへ  
若し我の佛を得ば、衆生亦復然ならん

世尊は衆生の、深心の所念を知り  
亦所縁の道を知り、又智慧の力を施らしめせり  
欲樂及び修福、宿命所行の業

世尊は悉く知るし如し已れり、當に無上輪を轉じたまふべし  
佛、諸の比丘に告げたまはく、「大智勝佛、阿耨多羅三藐三菩提を得たまひし時、十  
方各五百萬億の諸佛の世界、六種に震動し、其國界中諸佛の處、日月の威光も照らす  
こと能はざる所、而も諸天に明なり。其中の衆生、亦亦如是ことを得て、咸く是言を  
作さく、「此中云何が故に衆生を生ぜ。」又其國界の諸天の宮殿、乃至梵宮まで、六種に  
震動し、大光普く照して世界に輝滿し、諸天の光に勝れり。爾時、東方五百萬億の諸佛の  
國土の中の梵天の宮殿、亦亦照曜して、常の明に倍れり。諸の梵天王、亦是言を作さ  
く、「今言説の光明、昔より未だ有らざる所なり。何の因縁を以て而も此明を現する。」  
其時、諸の梵天王、即ち各相詣りて、共に此事を議す。時に彼衆の中に、一梵天王有り、  
故一切を悉く、諸の梵天の處に候を説きこははく、  
我等が諸の宮殿、光明昔より未だ有らざる

【二】十方の諸天  
諸佛に説法を勸  
請するを明す。

【六種に震動し】  
六種は六種に震動  
あること、震、動、  
揺、震、動、震な  
り。

此は是れ何の因縁ぞ、宜しく各共に之を求むべし

爲れ大徳の天の生せるや、爲れ佛の世間に出でたまへるや

而も此大光明は、遍く十方を照らす

爾時、五百萬億の國土の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣冠を以て諸の天華を盛り

て、共に西方に詣りて、是相を推尋するに、大通智勝如來の道場菩提樹下に處し、師子の

座に坐して、諸の天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の恭敬し圍遶せるを見

及び十六王子、佛に轉法輪を請するを見る。即時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、還

ること百千師して、即ち天華を以て、佛の上に散す。其所散の華、須彌山の如し。并に以

て佛の菩提樹に供養す。其菩提樹、高さ十山句なり。華を供養すること已りて、各宮殿を

以て彼佛に奉上して是言を作さく、唯我等を哀愍し饒益せられて、獻つる所の宮殿、願く

ば納受を垂れたまへ。時に諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同うして、偈を以て

頌して曰さく、

世尊は甚だ希有にして、值遇するを得べきこと難し

無量の功徳を具して、能く一切を救護し

天人の大師として、世間を哀愍したまふ

十方の諸の衆生、普く皆饒益を蒙る

我等從來せる所は、五百萬億の國なり

涅槃の樂を捨てたることば

佛を侍養せん亦法の故なり

我等先世の福ありて、宮殿甚だ嚴飾せり

今以て我身に奉る、唯願くば哀れんで納受したまへ

爾時、諸の梵天王、偈もて佛を讚めば、各是言を作さく、唯願くば世尊、法輪を

轉じて衆生を度脱し、涅槃の道を開きたまへ。時に諸の梵天王、一心に聲を聞うして、

偈を説きこひさく、

世雄兩足尊、願出せば法を演説し

大慈悲の力を以て、苦惱の衆生を度したまへ

爾時、大智勝如来默然として之を許したまふ。又諸の比丘、東南方の百首無億の國

土の諸の大梵王、各自ら宮殿の光明照耀して若より未だ有らざる所なるを見、歡

喜踴躍して、希有の心を奉じ、即ち各相詣りて共に此事を説す。時に彼衆の中に、一大

梵天王有り、名けて大悲と曰ふ。諸の梵王の聲に偈を説きこひさく、

是事何の因縁ぞ、此の如き相を現す

我等諸の諸の宮殿、光明昔より未だ有らざる

爲れ大佛の天の坐せざる、爲れ佛の世間に出でたまへるや

未だ嘗て此相を見ず、當に共に一心に求むべし

【衣被】衣標ともいふ。華を盛る器。

【迦陵頻伽】カラベンカ(Kalavinka)好聲、妙聲等と譯す、鳥の名。

千萬億の土を遍ぐとも、光を尋ねて共に之を推ねん

多くは是れ佛の世に出でて、昔の衆生を度脱したまふなるん

爾時、五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣被を以て、諸の天華を盛りて、共に

西北方に詣つて是相を推尊するに、大通智勝如来の道場菩提樹下に處し、師子の座に坐し

て、諸の天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人非人、等の恭敬し圍遶せるを見、及び十

六王子の佛に轉法輪を請するを執る。時に、諸の梵天王、頭面を禮し、遶ること百千

匝して、即ち天華を以て、佛の上に散す。散する所の華、須彌山の如し。並に以て佛の菩

提樹に供養す。華を供養すること已りて、各宮殿を以て、彼佛に奉上して、是言を作さく、

「唯我等を喜樂し饒益せられて、歡つる所の宮殿、爾今は納受を蒙れたまへ」

爾時、諸の梵天王、即ち佛前に於て一心に聲を同うして、偈を以て頌して曰さく、

聖乎天中天、迦陵頻伽の音にして

衆生を哀愍したまふ者、我等今敬禮したまつる

世尊は甚だ希有にして、久遠に乃し一たび現じたまふ

一百八十劫、空しく過ぎて佛有すこと無し

三惡道充滿し、諸天衆減少せり

今佛世に出でて、衆生の爲に眼と作り

世間の歸趣する所として、一切を救護し



衆生の父を爲りて、哀愍し憐れしたまふ者なり

我々宿願の願ありて、今世に於てはたてまつることを得たり

爾時、諸の梵天王、偈もて佛を讃め奉りて、各是言を作さく、「唯願くは世尊、一切を眞

摺しては佛を轉じ衆生を度脱したまへ

時に諸の梵天王、一心に佛を向うして偈を説きて言さく、

大聖法輪を轉じて、佛法の相を顯示し

苦悩の衆生を度して、大歡喜を得しめたまへ

衆生此法を聞かば、佛を得若は天に生じ

諸の惡道減少し、要善の者増益せん

爾時、大通智勝如來、默然として之を許したまふ。又諸の比丘、南方五百萬億の諸

の諸の大梵王、各自に宮殿の光を照曜して、佛より佛行の所なるを見て、

歡喜踴躍し、希有の心を生じて、即ち各相詣りて共に眞事を説す。佛の因縁を以てか

等が宮殿此光顯る。而も彼佛の中に一大梵王有り、名けて是と曰ふ。諸の梵王

に偈を説きて言はく、

我等が諸の宮殿、光甚だ眞麗せり

此れ因縁無きに非じ、甚宜しく之を求むべし

百千劫を過されども、未だ曾て是相を見ず

爲れ大徳の天の生せりや、爲れ佛の世間に出でたまへるや

爾時、五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣襪を以て諸の天華を盛りて、共に

北方に詣りて是相を推講するに、大通智勝如來の道場菩提樹下に處し、師子の座に坐して

諸の天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の恭敬圍遶せるを見、及び十六王

子の佛に轉法輪を請するを見る。時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、遶ること百千匝し

て、即ち天華を以て佛の上に散ず。散ずる所の華、須彌山の如し。並に以て佛の菩提樹に

供養す。華を供養すること已りて、各宮殿を以て彼佛に奉上して、是言を作さく、「唯我等

を哀愍し澆益せられて、獻る所の宮殿願くば納受を垂れたまへ」

爾時、諸の梵天王、即ち佛の前に於て一心に聲を同うして、偈を以て頌して曰さく、

世尊は甚だ見たてまつること難し、諸の煩惱を破したまへる者なり

百三十劫を過ぎて、今乃ち一たび見たてまつることを得

諸の眞渴の衆生に、法雨を以て充滿したまふ

昔より未だ曾て見ざる所の、無量の智慧ましませる者

修曼鉢華の如くなるに、今日乃ち値遇したてまつる

我等諸の宮殿、光を蒙るが故に嚴飾せり

世尊大慈悲もて、唯願くば納受を垂れたまへ

爾時、諸の梵天王、偈もて佛を讚る已りて、各是言を作さく、「唯願くば世尊、法輪を

轉て、一切世間の諸天、魔、婬、淫、欲、瞋、恚、闘争をして皆安んずることを得たまへ。一時に諸佛、諸菩薩、一切の衆生を向うして、偈を以て頌して曰さく、

唯願くば天人尊、無上の法輪を轉じ

大法の教を轉じ、大法の理を説き

普く大法の雨を雨らして、無量の衆生を度したまへ

我等はよく歸請したてまつる、當に法法を普く演べたまふべし

爾時、大通智勝如来、默然として之を許したまふ。西南方、乃至下方も、亦復たの如し。

爾時、上方五百四千萬億那由他の諸の衆生、皆悉く自ら止。摩竭の宮殿の中、明・覺・覺して、

昔より未だ有らざる所なるを覩て、歡喜踴躍し、希有の心を生じて、即ち奔相詣りて、

共に此事を説す、何の因縁を以てか我等が言説を演べたまふべし

而して彼衆の中に一、梵天王有り、名を一切衆と曰ふ。諸の梵衆の爲に偈を説て言はく、

今何の因縁を以て、我等の諸の宮殿

威徳光・明・曜き、照曜せむこと未曾有なむ

是の如きの妙相は、昔より未だ聞き見とる所なかり

爲れ大地の天の生ぜざるを、爲れ佛の世間に由たまへるや

爾時、五百萬億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣服を以て諸の天華を盛りて、共に

下方に詣りて是相を標するに、大通智勝如来の道場を標樹下に從し、獅子の座に坐して

諸の天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の恭敬圍繞するを見、及び十六王子の佛に轉法輪を請するを見る。時に諸の梵天王、頭面に佛を禮し、跪ること百千匝して、即ち天華を以て佛の上に散す。散する所の華、須彌山の如し。並に以て佛の菩提樹に供養す。華を供養すること已りて、各宮殿を以て彼佛に奉上して、是言を作さく、「唯我等を哀愍し、饒益せられて、獻つる所の宮殿、願くば納受を垂れたまへ。」

時に諸の梵天王、即ち佛の前に於て一心に華を同うして、偈を以て頌して曰さく、

善い哉諸佛、救世の聖尊を見たてまつる

能く三界の獄より、勉めて諸の衆生を出だしたまふ

普智天人尊、群萌の類を哀愍して

能く甘露の門を開きて、廣く一切を度したまふ

昔の無量劫に於て、空しく過ぎて佛有すこと無し

世尊未だ出でたまはざりし時は、十方常に闍闕にして

三惡道増長し、阿修羅亦盛なり

諸の天衆轉た滅じて、死して多く惡道に墮つ

佛に従ひて法を聞かず、常に不善の事を行じ

色力及び智慧、斯等皆減少す

罪業の因縁の故に、樂及び樂の想を失ふ

【群萌】 衆生を指す。

邪見の法に住して、善の儀則を識らず

佛の變化を蒙らずして、常に惡道に墮つ

佛は爲れ世間の眼なり、久遠に時に乃し出でたまへり

諸の衆生を哀愍したまふが故に、世間に現じ

超出して正覺を成じたまへり、我等甚だ欣慶す

及び餘の一切の衆も、喜んで未曾有なりと歎す

我等が一切の宮殿、光を蒙るが故に嚴飾せり

今以て眞寶に歸する、唯哀みを垂れて納受したまへ

願くば此功徳を以て、普く一切に及ぼして

我等と衆生と、皆共に佛道を成せん

爾時、五百萬億の諸の梵天王、傷もて佛を讚じ已りて、各々に白して言さく、「唯願

くば世尊、法華を講じたまへ。安んじならしむる所多く、度脱する所多からん」

時に諸の梵天王、而も偈を説きて言さく、

世尊法華を講じ、甘露の法鼓を擧ちて

苦惱の生死を度し、涅槃の道を開示したまへ

唯願くば我に法を受け、大徳の音を以て

哀愍して、無量劫に習ひたまへる法を敷演したまへ

【四】半字の法輪を轉せんと請ふを受けて、正しく轉ずるを明す

【三たび】四諦の法を三轉に説くを言ふ。即ち示(四諦の理を示す)一轉、勸(苦樂は斷ずべく、正道は修すべしと勸む)一轉、證(この真理を證せしむ)一轉

【十二行】前の三轉四諦に該當する各々の行なり

【謂ゆる是れ苦等】之を四諦と云ふ。苦とは生死の苦、集は其原因たる業煩惱、滅は苦集の滅し了りたる悟境道はその境地に到達する修行なり

【一切の法】一切の邪見のこと

【五】半字を廢して滿字を明すの法輪を轉せんことを請ふ

【沙彌】シユラマネーラ (Sramanera)

爾時、大通智勝如來、十方の諸の梵天王及び十六王子の請を受けて、即座に三たび十二行の法輪を轉じたまふ。若は沙門、婆羅門、若は天、魔、梵、及び餘の世間の轉ずること能はざる所なり。謂ゆる是れ苦、是れ苦の集、是れ苦の滅、是れ苦の滅する道なり。及び廣く十二因縁の法を説きたまふ。無明は行に縁たり、行は識に縁たり、識は名色に縁たり、名色は六入に縁たり、六入は觸に縁たり、觸は受に縁たり、受は愛に縁たり、愛は取に縁たり、取は有に縁たり、有は生に縁たり、生は老死の憂悲苦惱に縁たり。無明滅すれば即ち行滅す、行滅すれば則ち識滅す、識滅すれば則ち名色滅す、名色滅すれば則ち六入滅す、六入滅すれば則ち觸滅す、觸滅すれば則ち受滅す、受滅すれば則ち愛滅す、愛滅すれば則ち取滅す、取滅すれば則ち有滅す、有滅すれば則ち生滅す、生滅すれば則ち老死の憂悲苦惱滅す。佛、天人大衆の中に於て、是法を説きたまひし時、六百萬億那由他の人、一切の法を受けざるを以ての故に、而も諸漏に於て、心解脫を得、皆深妙の禪定、三明、六通を得、八解脫を具しぬ。第二、第三、第四の説法の時も、千萬億恆河沙那由他の衆生、亦一切の法を受けざるを以ての故に、而も諸漏に於て心解脫を得。是より已後、諸の聲聞衆無量無邊にして、稱數すべからず。

爾時、十六王子、皆童子を以て出家して沙彌と爲りぬ。諸根通利にして、智慧明了なり。已に曾て百千萬億の諸佛を供養し、淨く梵行を修して、阿耨多羅三藐三菩提を求む。俱に佛に白して言さく、世尊、足諸の無量千萬億の大徳の聲聞は、皆已に成就しぬ。世尊、

勤息男と譯す。出家して十戒を持つも未だ修行熱せず比丘となるまでをいふ。

【六】以下直しく結陳す、初にその法說、昔日共に結陳するを明す。

亦當に我等が爲に阿耨多羅三藐三菩提の法を説くべし。我等聞き已りて、皆共に修學せん。世尊、我等は如來の知見を志願す。深心の所念は、佛自ら證知したまはん。

爾時、佛は阿耨多羅三藐三菩提の法を説き已りて、乃ち四衆の中に於て、王即ち聽言しき。爾時、彼佛沙彌の謂を受け、二萬劫を過ぎ已りて、乃ち出家を求む。

是大乘の妙法蓮華、教旨甚深、佛所護念と名くるを説きたまふ。是經を説き已りて、十六の沙彌、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、皆共に受持し、諷誦通利しき。是經を説きたまひし時、十六の菩薩沙彌、皆悉く信受す、聲聞衆の中にも、亦信解する者有り。其餘の衆生の、千萬億所なるは、皆疑惑を生じき。佛、是經を説きたまふこと、八千劫に於て、未だ會て休廢したまはず。此經を説き已りて、即ち靜室に入りて、禪定に住したまふこと八萬四千劫なり。

是時、十六の菩薩沙彌、佛の室に入りて寂然として禪定したまふを知りて、各法座に昇りて、亦八萬四千劫に於て、四部の衆の爲に、廣く妙法華經を講を分別す。一一に皆六百萬億那由他恆河沙等の衆生を度し、示教利喜して、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。

大道智勝佛、八萬四千劫を過ぎ已りて、三昧より起ちて、法座に往詣し、安詳として坐して、普く大家に出げたまはく、是十六の菩薩沙彌は講が爲れ希有なり、諸根通利にして、智慧明了なり、已に會て無量千萬億口の諸佛を供養し、諸佛の所に於て常に梵行を修し、佛智を受持し、衆生に開示して、其中に入らしむ。汝等皆常に數數親近して之を供養すべ

【六】以下直しく結陳す、初にその法說、昔日共に結陳するを明す。

【七】次に中間の  
無量並に今日還、  
法華を説くを明す

し。所以は何ん。若し聲聞、辟支佛、及び諸の菩薩、能く是十六の菩薩の所説の經法を  
 信じ、受持して毀らざらん者は、是人皆當に阿耨多羅三藐三菩提の如來の法を得べし」と  
 (モ)佛、諸の比丘に告げたまはく、「是十六の菩薩は、常に樂ひて是妙法蓮華經を説く、  
 一の菩薩の所化の六百萬億那由他恆河沙等の衆生、世世に生るる所は菩薩と俱にして、其  
 に從ひて法を聞きて、悉く皆信解せり、この因縁を以て、四萬億の諸佛世尊に値ひたま  
 つることを得たり、今に盡きず。諸の比丘、我今汝に語る、彼佛の弟子の、十六の沙彌は、  
 今皆阿耨多羅三藐三菩提を得て、十方の國土に於て、現に在して法を説きたまふ。無量百  
 千萬億の菩薩聲聞有りて、以て眷屬と爲せり。其二りの沙彌は、東方にして作佛す。一を  
 ば阿闍と名く、歡喜國に在す。二をば須彌頂と名く。東南方に二佛あり、一をば師子音と  
 名け、二をば師子相と名く。南方に二佛あり、一をば虚空住と名け、二をば常滅と名く。  
 西南方に二佛あり、一をば帝相と名け、二をば梵相と名く。西方に二佛あり、一をば阿彌  
 陀と名け、二をば度一切世間苦惱と名く。西北方に二佛あり、一をば多摩羅跋梅檀香神通  
 と名け、二をば須彌相と名く。北方に二佛あり、一をば雲自在と名け、二をば雲自在王と  
 名く。東北方の佛をば境一切世間怖畏と名く。第十六は我釋迦牟尼佛なり。娑婆國土に於  
 て、阿耨多羅三藐三菩提を成せり。諸の比丘、我等沙彌爲りし時、各に無量百千萬億恆  
 河沙等の衆生を教化せり。我に從ひて法を聞きしは阿耨多羅三藐三菩提の爲なり。此諸  
 の衆生、今に聲聞地に住せる者あり。我常に阿耨多羅三藐三菩提に教化す、是諸人等、應



是法を以て漸く無道に入るべし。所以は何ん。如來の智慧は、信じ難く解し難ければなり。爾時、住する所の無量恒河沙等の衆生は、汝等諸の比丘、及び我が滅度の後の、未來の中の、空間の弟子是なり。我が滅度の後、汝弟子有りて、是經を聞かず、菩薩の所行を知らず、自ら所得の功徳に於て、滅度の想を生じて、當に涅槃に入るべし。我餘國に於て作佛して、更に異者有らん。是人、滅度の想を生じ涅槃に入ると雖も、而も彼土に於て、佛の智慧を求めて、是經を聞かざらん。唯佛乘を以て滅度を得、更に餘業無し。諸の如來の方便の說法をば聽く。諸の比丘、若し如來、自ら涅槃の時到り、衆又清淨に、信解堅固にして來法を了達し、深く經法に入りて知りぬれば、便ち諸の菩薩及び聲聞衆を率めて、共に菩提を證く。世間に二乘として滅度を得ること有ること無し。唯一佛乘もて滅度を得るのみ。比丘當に知るべし、如來の方便は深く衆生の性に入れり。其小法を志樂し、深て在經に著するを知りて、此の功の候に涅槃を證く。是人若し聞かば、則便信受す。

【八】次に結縁を説く。

譬へば五百山旬の、諸山道あり、曠かに起きて人無き怖畏の處あらん。若し多くの衆有りて、此道を過きて、悉く山嶺に至らんと欲せん。一導師有り、善巧明慧にして、善く險阻の通塞の相を知り、衆人を導いて、此道を通さんと欲す。將ある所の人家、中路に留意して、導師に白して言はく、「我を導いて復怖畏す。復進むことばは、前路遠く、今道を過らんと欲す」と。導師諸の方便をくして、是念を悟さく、「此等畏れむべし、云何

が大珍寶を捨てて、而も退き還らんと欲するや」是念を作し已りて、方便力を以て、論道の中に於て、三百由旬を過ぎて、一の城を化作す。衆人に告げて言はく、「汝等怖るること勿れ。退き還ることを得ること莫れ。今此大城の中に於て止りて、意の所作に隨ふべし。若し是城に入らば、快く安隱なることを得ん。若し能く前みて寶所に至らば亦去ることを得べし。是時、寶樹の衆、心大いに歡喜して、未曾有なりと歎す。我等今昔、斯惡道を勇れて、快く安隱なることを得つ」と。是に於て衆人、前みて化城に入りて、口底の想を生じ、安隱の想を生ず。爾時、導師、此人衆の、既に止息することを得て、復疲倦無きを知りて、即ち化城を滅して、衆人に語りて、「汝等去來や、實處は近きに在り、向の大城は、我が化作せる所なり、止息の爲ならんのみ」と言はんが如し。

【九】次に譬喩を合す。

【一】涅槃有餘涅槃と無餘涅槃となり。【二】二涅槃を證得したる境地。

諸の比丘、如來も亦復是の如し。今汝等が爲に、大導師と作りて、諸の生死煩惱の惡道、險難長遠にして去るべく度すべきを知れり。若し衆生、但一佛業を聞かば、則ち佛を見んと欲せず、親近せんと欲せじ。便ち是念を作さく、「佛道は長遠なり。久しく勤苦を受けて乃し成ずることを得べし」と。佛、是心の怯弱下劣なるを知りて、方便力を以て、中道に於て止息せしめんが爲の故に、二涅槃を説く。若し衆生二地に住すれば、如來、爾時、即ち便ち爲に説く、「汝等は所作未だ斷せず、汝が住する所の地は佛慧に近し、當に觀察し勝量すべし。得る所の涅槃は眞實に非ず、但是れ如來方便の力もて、一佛業に於て分別して」と説く。一彼導師の止息せしめんが爲の故に大城を化作し、既に息み已をぬと知りて、之

【三〇】先に説きしを承ねて傷もて頌す。初より我及び一切に充てたまへまては大通佛の成道を説く。

に言けて、寶蓋は近きに在り、此城は實に華嚴、我が化身ならんのみ」と言はんが如し。

【三一】世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

大通智度佛、十劫道場に住したまへき

佛法現前せず、佛道を成ずることを得たまはず

諸の天龍神王、阿修羅羅刹等

常に天華を雨らして、以て我佛に供養す

諸天天衆を撃ち、並に衆の伎藝を作す

香風萎める華を吹きて、更に新しき好香を雨らす

十小劫を過ぎりて、乃し佛道を成ずることを得たまへり

諸天及び世人、心に轉動躍を擧げり

寶佛の十六の子、佛具各屬

千萬億の圍遶せると、俱に佛の所に行き至り

四面に佛足を禮して、佛法輪を請す

師子法雨もて、我及び一切に充てたまへ

尊は甚だ値ひたてまつること難し、久遠に時に一たび現じ

衆生を覺悟せんことを、一切を蒙賜したまふ

東方の諸の世界、五百萬億那由他の

【三二】以上は上の法華の  
經に引くまへては日  
下五劫の事なり

梵の宮殿光曜して、昔より未だ曾て有らざる所なり

諸梵此相を見て、尋ねて佛の所に來至して

華を散じて以て供養したてまつり、並に宮殿を奉上し

佛に轉法輪を請じ、偈を以て讚歎す

佛は時未だ至らずと知ろしめして、請を受けて默然として坐したまへり

三方及び四維、上下も亦復爾なり

華を散じ宮殿を奉り、佛に轉法輪を請す

其意は甚だ値ひたてまつること難し、願くば大慈悲を以て

廣く甘露の門を開き、無上の法輪を轉じたまへ

無量慧の世尊、彼衆人の請を受けて

爲に種種の法、四諦十二緣を宣べたまふ

無明より老死に至るまで、皆生緣に従ひて有り

是の如きの衆の過患、汝等應當に知るべし

是法を宣揚したまふ時、六百萬億姪

諸苦の際を盡すを得て、皆阿羅漢と成る

第二の說法の時、千萬恆沙の衆

諸法に於て受けずして、亦阿羅漢を得

【無量慧の世尊等】  
以下其澤を付るこ  
と能はじまは半  
字の法輪を轉ぜん  
と請ふを明す

【姪】 萬億のこと

【時に十六王子等】  
以下八萬四千劫な  
りまでは滿字の法  
輪を轉せんと請ふ  
を明す。  
【脅從】 衛護の從  
者。

【是語の少編等】  
以下慎して驚懼を  
懐くこと勿れまて  
は法説を明す。

是より後の得道、其數算有ること無し  
蓋劫に算算すとも、其流りを得ること能はじ  
時に十六王子、出家して沙彌を作り  
皆共に從佛に、大乘の法を演説したまへと請す  
我等及び脅從、皆當に得道を成すべし  
爾くば世尊の如く、慧眼第一淨なることを得ん  
佛弟子の心、宿世の所行を知ろしめして  
無量の因縁、種種の諸の譬喩を以て  
六度羅網、及び四の神變の事を説き  
是の以、菩薩所行の道を分別して  
是は華嚴の、恆河沙の如きの偈を説きたまひき  
佛の、其を説き已りて、靜室にして禪定に入り  
一心に一處に坐したまふこと、八萬四千劫なり  
是は心沙彌等、佛の禪より出でたまはるるを顯りて  
無量億衆の爲に、佛の無上法を説く  
佛に法座に坐して、是大乘經を説き  
佛の安樂の後に於て、宣揚して法化を助く

【是故に方便を等】  
以下譬喩を説く。

一一の沙彌等の、度する所の諸の衆生  
六百萬億、恆河沙等の衆有り  
彼佛の滅度の後、是諸の法を聞ける者  
在在の諸の佛土に、常に調と俱に生ず  
是十六の沙彌、具足して佛道を行して  
今現に十方に在りて、各正覺を成ずることを得たまへり  
爾時法を聞ける者、各諸佛の所に在り  
其聲聞に住すること有るは、漸く教ふるに佛道を以てす  
我十六の數に在りて、曾て亦汝が爲に説けり  
是故に方便を以て、汝を引きて佛慧に趣かしむ  
是木因縁を以て、今法華經を説きて  
汝をして佛道に入らしむ、願んで對權を懷くこと勿れ  
譬へば險惡の道の、廻かに絶えて毒獸多く  
又復水草無く、人の怖畏する所の處あらん  
無數千萬の衆、此險道を過ぎんと欲す  
其路甚だ曠遠にして、五百由旬を經  
時に一導師有り、強識にして智慧有り

明了にして心決定せり、險に在りて、軍を河よ  
衆人疲懼して、導師に白して言さく

我等今此を以て、此より退き還らんと欲す

導師是命を作さく、此軍甚だ憐れむが如し

何何が退き還りて、大珍寶を失ふること多し

尋で時に方便を思はく、當に前道方を設くべしと

大城を化して、諸の命を救ふ

周匝して園林、菓樹及び浴池

重門高樓開闢りて、男女皆を誦す

即ち是化を印し已りて、衆を慰めて言はく、懼ること勿れ

汝等此城に入りたば、有用樂に盡ふべし

諸人既に城に入りて、心怖大いに歡喜し

皆安んずるを生じ、自ら心に度することを得たりと謂へり

導師息み已んずと知りて、衆を集めて告げて

汝等當に前進せし、此は是れ化城ならんのみ

我汝が疲極して、中路に思き還らんと欲すを見る

故に方便力を以て、懼に此城を化すべし

汝今勤めて精進して、當に共に寶所に至るべしと言はんが如し  
 我も亦復是の如し、爲れ一切の導師なり  
 諸の道を求むる者、中路にして懈廢し  
 生死、煩惱の諸の險道を度すること能はざるを見る  
 故に方便力を以て、息めんが爲に涅槃を説きて  
 汝等の苦滅し、所作皆已に辦せりと云ふ  
 既に涅槃に到り、皆阿羅漢を得たりと知りて  
 爾して乃し大衆を集めて、爲に眞實の法を説く  
 諸佛は方便力もて、分別して三乘を説きたまふ  
 唯一佛乘のみ有り、息慮の故に二を説く  
 今汝が爲に實を説く、汝が得る所は滅に非ず  
 佛の一切智の爲に、當に大精進を發すべし  
 汝一切智、十力等の佛法を證し  
 三十二相を具しなば、乃ち是れ眞實の滅ならん  
 諸佛導師は、息めんが爲に涅槃を説きたまふ  
 既に是れ息み已んぬと知れば、佛慧に引入したまふ



妙法蓮華經 卷第四

姚秦三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

五百弟子受記品第八

【五百弟子受記品】  
 中千二百人授記章  
 乃爾富樓那、橋  
 等如來に別して記  
 別を興ふるを明す  
 【一】富樓那歎し  
 て、佛を念す。  
 【二】富樓那彌多羅尼  
 子、アールナマイ  
 ト、アールヤニブト  
 子、(Paranimitray  
 aputra) 滿願子と  
 稱す。佛十大弟子  
 といふ。說法第一と  
 稱する。

【三】次に如來の  
 宣説、富樓那の聲  
 に過去無量阿僧祇  
 劫に於て、佛に遇  
 して、佛の行じ不違を  
 明すことを明す。

爾時、富樓那彌多羅尼子、佛に従ひて、是智慧方便隨宜の設法を聞き、又諸の大弟子に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまふを聞き、復宿世の因縁の事を聞き、復諸佛の大自然に通達し、行すことを聞きたたまつりて、未曾有なることを得、心淨く踊躍す。即ち座より起ち、佛の前に至り、頭面に足を禮して却りて一面に住し、尊顔を瞻仰して曰く、らくも捨て奉る。我も是念を作さく、「世尊は甚だ奇特にして所爲希有なり。世間の若干の類性に隨順して、方便知見を以て爲に法を説きて、衆生の盡處の食着を拔出したまふ。我等は佛の功德に於て、言もて宜ぶること能はず。唯佛世尊のみ能く我等が深心の本願を成しめせり。」

爾時、佛、諸の比丘に告げたまはく、「汝等、富樓那彌多羅尼子を見るや不や。我常に其說法人の中に於て最も第一なるを得たりと稱し、亦常に其種種の功德を歎す。轉寫して我法を宣傳し助宣し、能く四衆に於て示教利喜し、其見して佛の正法を解釋して、其いに

五百弟子受記品第八

【四無礙智】四無礙智のこと。如來の四種の智智。

【三】富樓那三世の佛處に因行を修して滿ずるに約し又佛これに記別を授くるを明す。

【七佛】毘婆尸、尸棄、毘舍浮、俱留孫、拘那含牟尼、迦葉、釋迦牟尼の七佛なり。之を過去七佛と通稱す。

【賢劫】現在の劫の名、この間に千佛或は千五百佛の出世ありといふ。【當來の諸佛】釋尊以後賢劫中出世

同覺行著を饒益す。如來を以て一より、能く其言論の辯を盡すもの無けん。汝等、富樓那は但能く我法を護持し助宣すと謂ふこと勿れ。亦過去の九十億の諸佛の所に於て、佛の正法を護持し助宣し、彼諸法人の中に於ても、亦最も第一なりき。又諸佛の説きたまふ所の空法に於て明了に通達し、四無礙智を得て、常に能く審諦に清淨に法を説きて、疑惑有ること無し。菩薩の神通の力を具足し、其壽命に隨ひて常に梵行を修しき。彼佛世の人、或は皆之を實に是れ聲聞なりと謂へり。而も富樓那は、斯方便を以て、無量百千の衆生を饒益し、又無量阿僧祇の人を化して阿耨多羅三藐三菩提を立せしめ、佛土を淨めんが爲の故に、常に佛事を作して衆生を教化しき。

諸の比丘、富樓那は、亦七佛の説法人の中に於て第一なることを得、今我が所の説法人の中に於ても、亦第一なることを爲、賢劫の中の當來の諸佛の説法人の中に於ても、亦復第一にして皆佛法を護持し助宣せん。亦未來に於ても、無量無邊の諸佛の法を護持し助宣し、無量の衆生を教化し饒益して、阿耨多羅三藐三菩提を立せしめん。佛土を淨めんが爲の故に、常に勤めて精進して衆生を教化せん。漸漸に菩薩の道を具足して、無量阿僧祇劫を過ぎて、當に此土に於て阿耨多羅三藐三菩提を得べし。號をば法明如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。其佛恆河沙等の三千大千世界を以て一佛土と爲し、七寶を地と爲し、地の平かなること掌の如くにして、山陵、聲澗、溝壑有ること無けん。七寶の臺觀其中に充滿し、諸天の宮殿、近く虚空

の諸佛のこと。

【二食】心の二種の食物。一に法喜食とて開法を食となす。二に禪悦食とて修禪を食となす。

【四】偈もて略説を重頌す。

に處し、人天交捷はりて、兩に相見ることを得ん。諸の惡道無く、亦女人無くして、一切業生皆以て化生し、經欲有ること無けん。大神道を得て、身より光明を出だし、飛行自在ならん。志念堅固に、精進智慧ありて、普く黄金色に、三十二相もて自ら莊嚴せん。其國の衆生は、常に二食を以てせん。一には法喜食、二には禪悦食なり。無量阿僧祇千萬億那由他の諸の善業有りて、大神通四無礙智を得て善能く衆生の類を教化せん。其聲聞衆は、算數估計すとも知ること能はざる所なり。精六通、三明、及び八禪脫を具足することを得ん。其佛の國土は蓋の如き等の無量功徳有りて莊嚴し成就せん。劫をば寶明と名け、國をば寶淨と名けん。其佛の壽は阿僧祇劫、法住すること甚だ久しからん。佛の法度の衆土寶の塔を起てて其國に迴滿せん。動轉、昇降、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を言きて言はく、

佛の比丘跡かに繼げ、佛子所行の道は  
善く方便を想するが故に、思獲することを得べからず  
衆の小法を學んで、大智を具あることを知れり

佛に、諸の善徳は、佛學の徳と作る  
衆の方便を以て、諸の衆生の類を化して  
自ら是れ善問なり、佛道を具ること甚だ速しと聞き  
知覺の衆を成就して、皆悉く成就することを得しめ

【三毒】善根を毒害する三煩惱なり、即ち貪欲、瞋恚、愚癡。

少欲無意なりと雖も、漸く當に作佛せしむべし、内に菩薩の行を秘し、外に是れ聲聞なりと現じ、少欲にして生死を厭へども、實には自ら佛土を淨む、衆に三毒有りと示し、又瞋見の相を現す、我が弟子是の如く、方便して衆生を度す、若し我具足して、種種の理化の事を説かば、衆生の是を聞かん者、心則ち疑惑を懷きなん、今此富樓那は、昔の千億の佛に於て、所行の道を勤修し、諸佛の法を宣護し、無上慧を求むるを爲て、而も諸佛の所に於て、弟子の上に居し、多聞にして智慧有りと現じ、所説畏るる所無く、能く衆をして歡喜せしめ、未だ曾て疲倦有らずして、而も以て佛事を助く、已に大神通に度り、四無礙智を具し、諸根の利鈍を知りて、常に清淨の法を説き、是の如き義を演暢して、諸の千億の衆を教へ、大乘の法に住せしめて、而も自ら佛土を淨む。

未來にも亦、無量無数の佛を供養し

正法を説いて助宣して、亦自ら佛土を淨め

常に諸の方便を以て、法を説くに畏るる所無く

不可計の衆を度して、一切智を成就せしめ

諸の知衆を供養し、法の寶藏を護持して

其後に成道することを得ん、衆をば名けて法明と曰はん

其國をば淨土と名け、七寶の合成せる所

處をば名けて寶明と爲さん、菩薩衆甚だ多く

其數無算にして、皆大神通に度り

威徳立其にして、其國土に充滿せん

聲聞衆無數にして、三明八解脫ありて

阿耨羅智を得たる、是等を以て偈と爲さん

其國の諸の衆生は、婬欲書に斷じ

純一に變化生にして、相を具して身を莊嚴せん

法喜深重にして、更に餘の貪想無けん

諸の女人有ること無く、亦一の惡道無けん

富樓那其正、功德悉く成就して

【五】總じて千二百の比丘に説を授く。

【迦留陀夷】カーローダイイン (Kalpa) 黒光と譯す  
【優陀夷】ウダイイン (Uddaya) 出現、出生と譯す  
【沙彌陀】スアメリター (Sattva) 善來、善業と譯す

當に斯淨土の、賢聖衆甚だ多きを得べし  
是の如き氣量の事、我今但略して説く

爾時、千二百の阿羅漢の心自在なる者、是念を作さく、我等歡喜して、未曾有なることを得べし。若し世尊、各授記せらるること餘の大弟子の如くならば、亦快からずや。

佛、此等の心の所念を知ろしめして、摩訶迦葉に告げたまはく、是千二百の阿羅漢に、我今當に現前に次第に、阿耨多羅三藐三菩提の記を與へ授くべし。此衆の中に於て、我が大弟子、橋陳如比丘は、當に六萬二千億の佛を供養し、然る後に佛と成爲ることを得べし。

我をば普明如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。其五百の阿羅漢の、優樓頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、迦留陀夷、優陀夷、阿室樓駄、離婆多、具賓那、薄拘羅、周陀、莎伽陀等皆當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、  
橋陳如比丘、當に無量の佛を見たてまつり

阿僧祇劫を過ぎて、乃ち等正覺を成すべし  
常に大光明を放ち、諸の神通を具足し

名聞十方に遍じ、一切に敬はれて  
常に無上道を説かん、故に號けて普明と爲さん

其國王清淨にして、菩薩皆勇猛たらん

成、轉法輪に昇りて、諸の十方の國に遊ず

無上の佛性を以て、諸佛に奉獻せん

其佛性を信しばりて、心に大歡喜を懷き

軍吏に本國に歸らん、是の如き神力有らん

佛の言は六萬劫たらん、正法住すること壽に信し

像法住は二億せん。法滅せば天人變へなん

其五百の比丘、次第に當に作佛すべし

同じく擧げて其の如と曰ひ、轉次して授記せん

佛が滅する後、某甲當に作佛すべし

其佛出世無間、亦我が今日の如くならん

佛の言は、及び其の神通力

佛の言は、正法及び像法

佛の言は、少、情上に説く所の如くならん

是の如く、佛の言は自在の書を知りぬ

佛の言は、亦當に其の如くなるべし

其此言に在らざるに、汝當に佛に宣説すべし

【六】諸神等内心に得解して自ら解を造ぶるを身

爾時、五百の阿羅漢、佛の前まへに於て受記うけぎを得え已りて歡喜踴躍くわんぎゆうたつす。佛の直ただより起たちて佛の前まへに對り、頭面かぶらに足あしを禮らいし、過あやまを悔くいて自ら責せむ。世尊よそん、我等われら常に是念このまねを作なして、自らみづかに究竟くわんぎゆうの滅度めつたうを得えた。と謂いわひき。今乃いまち之これを知りぬ、無智むちの者ものの如ごとし。所以ゆゑは何ん。我等われら應まかに如來にょらいの智慧ちゐを得うべかりき。而しかるを便べんち自ら小智せうちを以もつて足たりぬと爲なしき。世尊よそん、譬たとへば人有ひとり、親友おんゆうの家いへに至いたりて酒さけに酔よひて臥ふせり。是時このとき、親友おんゆう官事くわんじの當あたりに行いくべきありて、無價むげの寶珠ほうしゆを以もつて其衣そのえの裏うらに繫つぎ之これを與あたへて去いりぬ。其人そのひと酔よひ臥ふして覺さ知ちせず。起たき已まりて遊行ぎゆぎやうし、他國たこくに對りぬ。衣食えいじきの爲ための故ゆゑに勤力ごんりき求索きうさくすること甚ただ大おほいに艱難げんなんなり、若し少し得える所有しよいうれば便べんち以もつて足たりぬと爲なす。後のちに親友おんゆう會あひ遇あつて之これを見て、是言このことばを作なさく、咄はない哉や、丈夫ぢゆうぶ何ぞ衣食えいじきの爲ために乃すなはち是このごとの如ごとくなるに至いたる。我われ昔むかし汝にをして安樂あんらくなることを得え、五欲ごよく自らみづか悉しつならしめんと欲ほつして、某そのとの年月日ねんげつじつに於おて、無價むげの寶珠ほうしゆを以もつて汝にが衣えの裏うらに繫つぎたり。今故現いまこゝにあらに在あり。而しかるを汝に知らずして、勤苦ごんく憂惱ゆうなうして以もつて自活じかくを求もとむること、甚ただ爲なれ癡ちなり。汝に今いま此寶このたからを以もつて所須しよじゆに變易へんぎすべし。常に意こころの如ごとく乏短ふたんなる所ところ無なかるべし」と。佛ほとけも亦是またの如ごとし。菩薩ぼさつ爲なりし時とき、我等われらを教化けわして、一切智いっせつちの心こころを獲とりたまひき。而しかるを尋たづねて廢忘はいわうして、知らず覺さらず。既に阿羅漢道あらかんどうを得えて、自ら滅度めつたうせりと謂いわひ、資生銀しせいぎん難たがにして、少しきを得えて足たりぬと爲なす。一切智いっせつちの願ねん、猶なほ在ありて失うせせず。今者世尊いまよそん、我等われらを覺悟げくわして、是このごとの如ごとき言ことばを作なしたまはく、「諸しよの比丘びく、汝等にが得えたる所ところは究竟くわんぎゆうの滅めつに非あらず。我われ久ひさしく汝等にをして佛ほとけの善根ぜんこんを種うゑしめたれども、方便ほうべんを以もつての故ゆゑに、涅槃ねはんの相さうを示しす。



而るを汝、爲れ實に波聲を得たりと謂へり。世尊、我今乃ち知んぬ、實に是れ善哉なり。阿南多羅三藐三菩提の道を受くることを得て、其内縁を以て、甚だ大いに歡喜して、未曾有なることを得たり。

時、阿若憍陳如等、重て此義を宣べんと欲して、偽を説きて言さく、我等、無上安隱の授記の聲を聞きたてまつり

未曾有なりと歡喜して、無量智の佛を親しくしてまつべし

今世尊の前に於て、自ら諸の過咎を海

無量の佛寶に於て、少しき涅槃の分を得

無智の愚人の如し、便も自ら以て足なりと爲す

譬へば貧窮の人ありて、親友の家に往き至る

其家甚だ大いに富み、其に諸の飾物を取

無價の寶珠を以て、內衣の裏に繫著し

臥して與へて捨て去り、時に臥して覺醒せず

是人既に已に起きて、遊行して他國に詣り

衣を求めて自ら濟す、其生甚だ銀羅にして

少しきを得て是れ足りぬと爲して、更に財寶を乞ふ國はす

內衣の裏に、無價の寶珠を以て繫著す

佛經の卷第八

珠を與へし親友、後に此貧人を見て

苦切に之を責め已りて、示すに繋ぐる所の珠を以てす

貧人此珠を見て、其心大いに歡喜し

諸の財物を富有して、五欲に而も自ら恣ならんが如し

我等も亦是の如し、世尊長夜に於て

常に憊んで教化せられて、無上の願を種ゑしめたまへり

我等無智なるが故に、覺らず亦知らず

少しき涅槃の分を得て、自ら足りぬとして餘を求めず

今佛我を覺悟して、實の滅度に非ず

佛の無上慧を得て、爾して乃ち爲れ眞の滅なりと言ふ

我今佛に従ひて、長記莊嚴の事

及び轉次に受決せんことを聞きたてまつりて、身心遍く歡喜す

授學無學人記品第九

【授學無學人記品】前品と同じく今品も亦下根の授記を明す、即ち阿難、羅睺羅及び學、無學の二千人に記を授くるを明す。

爾時、阿難、羅睺羅、而も是念を作さく、「我等毎に自ら思惟すらく、設し授記を得ば、亦快からざらんや。」即ち座より起ちて佛の前に到り、頭前に足を禮し、俱に佛に白して



我今偈中にして説く、阿耨多羅三藐三菩提法者は、當に諸佛を供養して、然る後に正覺を成ずべし

孰をば、山海慧自在通王佛と曰はん

其國王清淨にして、常立勝幢と名けん

諸の菩薩を教化すること、其數恆沙の如くならん

佛大威徳有して、名聞十方に滿ち

壽命は量有ること無けん、衆生を慈むを以ての故に

正法壽命に信し、像法復是に信せん

恆河沙等の如き、無数の諸の衆生

此佛の法の中に於て、佛道の因縁を種ゑん

爾時、會中に新發意の菩薩八千人あり、咸く是念を作さく、我等は尚諸の大菩薩の

是の如き記を得ることを聞かず、何の因縁有りてか、諸の聲聞、是の如きの法を得る

爾時、世尊、諸の菩薩の心の所念を知ろしめて、之に告げて曰はく、諸の善男子、

我と阿耨とは、與に等しく空王佛の所に於て、同時に阿耨多羅三藐三菩提の心を發しき。

阿耨は常に多聞を樂ひ、我は常に勤めて精進す。是故に我は、已に阿耨多羅三藐三菩提を

成ずることを得たり、而るに阿耨は我が法を護持し、亦將來の諸佛の法藏を護りて、諸

の菩薩衆を教化し成就せん。其本願の如し、故に斯記を獲

【新發意】 新に上  
水善具下化衆生の  
心をさす。

阿難、面り佛の前にて、自ら誓願すに、諸佛の法を聞き、所願具足し、心大いに歡喜して未曾有なることを得たり。即時に過去無量阿僧祇劫の諸佛の法を憶念するに、無礙なること今聞く佛の如し。來本劫を尋り、

爾時、阿難、偈を説て言さく、

世尊は甚だ希有なり、我をして過去の

無量の諸佛の法を念せしめたまふこと、今日聞く所の如し

我今復疑無くして、佛道に安住しぬ

方便もて侍者と侍り、諸佛の法を護持せん

爾時、佛、羅睺羅に告げたまはく、汝、來世に於て當に作佛することを得べし、第七寶

如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、無雙

を號けん。當に十世微塵等の諸佛如來を供養すべし。常に諸佛の所に隨て供養すること猶し今の如くならん。是猶七寶華佛の因土の莊嚴、壽命の長、勳化の功、其法、佛

法、亦山海慧自在通如來の如くにして異なること無けん。亦上闍維に爾と見よと示らん。

是を過ぎて已後、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。一

爾時、世尊、重ね 此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

我太子爲りし時、羅漢は我より侍り

我今佛道 成ずれば、法を受け、太子と爲らん

【四】二千の學無  
學人に授記す。

未來世の中に於て、無量億の佛を見たてまつりて

皆其長子と爲りて、一心に佛道を求めん

羅漢等の密行は、唯我のみ能く之を知れり

現に我が長子と爲りて、以て諸の衆生に示す

無量億千萬、功德數ふべからず

佛法に安住して、以て無上道を求む

爾時、世尊、學無學の二千人を見たまふに、其意柔順に、寂然清淨にして、一心に

を觀たてまつる。

佛、阿難に告げたまはく、「汝、是學無學の二千人を見るや不や。」唯然なり、已に見る。

阿難、是諸人等は、當に五十世界微塵數の諸佛如來を供養し、恭敬し、尊重し、法藏を護

持し、末後に同時に十方の國に於て、各成佛することを得べし。皆同じく一法にして、

名けて寶相如來、寶供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、

佛、世尊といはん。壽命一劫ならん。國土の莊嚴、聲聞、菩薩、正法、像法、皆悉く同

等ならん。

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

是二千の聲聞、今我が前に於て住せし

悉く皆記を與へ授く、未來に當に成佛すべし









當に知るべし佛の所使として、諸の衆生を愍念するなり  
諸の能く、妙法華經を受持すること有らん者は  
清淨の土を捨てて、衆を愍むが故に此に生れたり  
當に知るべし是の如き人は、生れんと欲する所に自在なれば  
能く此惡世に於て、廣く無上の法を説くなり  
應に天の華香、及び天寶の衣服  
天上の妙寶聚を以て、説法者に供養すべし  
吾が滅後の惡世に、能く是經を持たん者をば  
當に合掌し禮敬して、世尊に供養するが如くすべし  
上饌の衆の甘美、及び種種の衣服を  
是佛子を供養して、須臾も聞くことを得んと冀ふべし  
若し能く後の世に於て、是經を受持せん者は  
我遣はして人中に在らしめて、如來の事を行ぜしむるなり  
若し一劫の中に於て、常に不善の心を懷きて  
色を作して而も佛を罵らんは、無量の重罪を獲ん  
其れ是法華經を、讀誦し持つこと有らん者に  
須臾も惡言を加へんは、其罪復彼に過ぎん

人有りて佛道を求めて、而も一劫の中に於て合掌して我が前に在りて、無数の偈を以て讀めん

是禮佛に由るが故に、無量の功德を得ん

持經者を讃美せんは、其福復彼に過ぎん

八十億劫に於て、美妙の色聲

及與香味觸を以て、持經者に供養せよ

是の如く供養し已りて、若し須臾も聞くことを得んば

則ち應に自ら歎歎すべし、我今大利を得ん

藥王今汝に告ぐ、我が持經の諸經

海も且經の中に於て、法華最も第一なり

爾時、佛、百千萬億那由他の諸佛に於て、我が所説の經典は無量千萬億にして、已

説、宣説、當説あり、而も其中に於て此法華經は最も爲れ難信難解なり。佛王、此經は是

れ諸佛の秘密の法なり。分布して安りに人に授與すべからず。諸佛世尊の守護したまふ所

なり。假令三千大千世界、諸佛の現に在にすら輪廻するも、況んや滅

びの法を學ぶ。佛王、當に知るべし、未來の世に具れ能く書持し、讀誦し、供養し、他人

の惡に説かざる者、如来則ち我を以て之を賞はたまふべし。又他方の現在の諸佛に護念せ

らるることを得ん。是人は大信心乃至大解力、諸善根有りらん。當に知るべし、是人は如

【三】所持の法を  
【已説】この文  
【佛王】唯佛  
【衆信】唯佛  
【佛の】唯佛  
【佛の】唯佛

來と共に宿するなり。則ち如來の手もて其頭を承でたまふことを爲す。藥王、在在處處に若し讀み、若し讀み、若し誦し、若し書き、若し經を所住の處には、皆隨に七寶の塔を起して、極めて高廣嚴淨ならしむべし。復舍利を安ずることを實たされ。所以は何ん。此中には已に如來の全身有す。此塔をば隨に一切の華鬘、瓔珞、綵蓋、幢幡、伎樂、歌頌を以て供養し恭敬し尊重し讚歎したたまふるべし。若し人有りて此塔を見たてまつることを得て、稱讃し供養せん。當に知るべし、是等は皆阿耨多羅三藐三菩提に近づきぬ。藥王、多く人有りて在家出家の菩薩の道を行せん。若し是法華經を見聞し、讀誦し、書寫し、供養すること得ること能はずんば、當に知るべし、是人は、未だ善く菩薩の道を行せざるなり。若し是經典を聞くことを得ること有らば、乃ち能く善く菩薩の道を行するなり。其れ衆生の佛道を求むる者有りて、是法華經を若し見、若し聞き、聞き已りて信解し受持せば、當に知るべし、是人は阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと。

藥王、譬へば人有りて、渴乏して水を須ひんとして、彼高原に於て、穿鑿して之を求むるに、猶乾ける土を見ては、水尙遠しと知る。功を費すこと已ますして、持た濕へる土を見、遂に漸く泥に至りぬれば、其心決定して、水必ず近しと知らんが如く、菩薩も亦復是の如し。若し是法華經を未だ聞かず、未だ解らず、未だ修習すること能はざらん。當に知るべし、是人は阿耨多羅三藐三菩提を去ること尙遠し。若し聞き解り、思惟し、修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ。所以は何ん。一切



口の懈怠を捨てんと欲せば、應當に此經を聽くべし

是經を聞くことは得難し、信受する者亦難し

人の渴して水を須ひんとして、高原を穿鑿するに

猶乾燥ける土を見ては、水を去ること尙遠しと知り

漸く濕へる土泥を見ては、決定して水に近きぬと知らんが如し

業王汝當に知るべし、是の如き諸人等

法華經を聞かずんば、佛智を去ること甚だ遠し

若し是深經の、聲聞の法を決了する

是れ諸經の王なるを聞き、聞き已りて諦かに思惟せん

當に知るべし此人等は、佛の智慧に近づきぬ

若し人此經を説かば、應に如來の室に入り

如來の衣を著、而も如來の座に坐して

衆に處して畏るる所無く、廣く爲に分別し説くべし

大慈悲を室と爲し、柔和忍辱を衣とし

諸法空を座と爲す、此に處して爲に法を説け

若し此經を説かん時、人行りて惡口もて罵り

刀杖瓦石を加ふとも、佛を念するが故に應に忍ぶべし

我千萬億の土に、淨堅固の身を現して  
無量億劫に於て、衆生の爲に法を説く  
若し我が滅度の後に、能く此經を説かん者には  
我化の四衆、比丘比丘尼

及び清信士女を遣はして、法師を供養せしむ

諸の衆生を引導して、之を集めて法を説かしめん

若し人惡に、刀杖及び瓦石を加へんと欲せば

則ち變化の人を遣はして、之が爲に變身して作さん

若し説法の人、翳り空閑の處に在りて

喜笑として人の聲無からんに、此經典を誦讀せば

其爾時時に、清淨光明の身を現さん

若し曼陀を流奏せば、爲に現きて勸利せしめん

若し人曼陀を具して、或は四衆の爲に説き

空處にして經を誦讀せば、皆我身を見ることを得ん

若し人空處に在らば、我天鼓を

夜叉東動等を遣はして、爲に摩訶の樂と作さん

是人法を宣説し、分別して聖處無けん

【見寶塔品】前品

と共に法華經弘通の功德甚深を説いて流通を勸むるなり。【一】多寶塔の涌現を説く。

【善い哉……眞實なり】多寶の法華證明にして證前の寶塔たる所以なり

諸佛護念したまふが故に、能く大衆をして喜ばしめん。若し法師に親近せば、速に菩薩の道を得。是師に隨順して學せしむ、恆々の佛を見たてまつることを得ん。

見寶塔品第十一

(一)の時、爾時、佛の前に、七寶の塔有り。高さ五百山旬、縱廣二百五十山旬なり。地より涌出して空中に住在于、種種の寶物もて而も之を莊嚴せり。五千の欄楯ありて、籠室千萬なり。無數の幢幡、以て嚴飾と爲し、寶の璣珞を垂れ、寶鈴萬億にして其上に懸けたり。四面に若多摩羅跋梅檀の香を出だして、世界に充溢せり。其諸の幡蓋は、金、銀、瑠璃、犍磲、瑪瑙、眞珠、玫瑰の七寶を以て合成し、高く閻天王宮に至る。三十三天は、天の曼陀羅華を雨らして寶塔に供養す。餘の諸の天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩羅羅伽、人、非人等の千萬億の衆は、一切の華香、璣珞、幡蓋、伎樂を以て寶塔に供養し恭敬し、尊重し、禮敬したてまつる。

爾時、寶塔の中より、大音響を出だして、歎じて言はく、善い哉善い哉、釋迦牟尼世尊、前く平等大慧、教菩薩法、佛所護念の妙法華經を以て、大衆の爲に説きたまふ。是の如し是の如し。釋迦牟尼世尊の説きたまふ所の如きは皆是れ眞實なり。



高時、高聲、空界の雲中に住在此こと見、乃塔の中より出たまふ所の音聲を聞き、  
佛法者を得、未曾有なりと信じ、座より前へたどり、恭敬し、合掌して、却りて一面  
に伏す。

爾時、佛摩訶薩有り、大衆成と名く、一切諸國の天、人、阿修羅等の心の所疑を知り  
て、佛に白して言さく、「世尊、何の因縁を以て此寶塔有りて地より涌出し、空界中より  
是言聲を發したまふ。」

爾時、佛、大衆摩訶薩に告げたまはく、「此寶塔の中には阿耨多羅三藐三菩提の身有す。乃往過去に東  
方の一處に千億那由他の世界に國あり、寶淨と名く。彼中に佛有す。號をば多寶と曰ふ。  
其佛、本無量阿僧祇劫、大菩薩を作したまはく、「若し我佛供して滅没したん後、十  
力の諸人に於て法華經を説く者有らば、我が塔崩是經を聽かんが爲の故に、其前に出現し  
て、佛に證明と有りて、説じて善い哉と言はん」と。

爾時、佛直に以て、滅没の時に臨んで、天人大眾の中に於て、諸の比丘に告げたま  
はく、「我が滅没の時、我が全身を供養せんと欲せん者は、佛に一の火塔を建つべし」と。  
其佛、神通の神力を以て、十方世界の徧在處處に、若し法華經を説くこと有らば、彼寶塔  
佛前より涌出して、其身塔の中に在して、説じて、「善い哉善い哉」と言ふ。又佛滅、今を  
當り來の時、法華經を説くを聞きたまはんが故に、佛より涌出して、説じて「善い哉善  
い哉」と言ふ。」

【二】如來分身を  
集むるを明す。謂  
ゆる以後の寶塔た  
る意義を論ず。

是時、大樂說菩薩、如來の神力を以ての故に、佛に白して言さく、「世尊、我等願くば眞  
佛身を見たてまつらんと欲す。」

佛、大樂說菩薩摩訶薩に告げたまはく、「是多寶佛は深重の願有り、若し我が寶塔、法華  
經を聽かんが爲の故に、諸佛の前に出でん時、其れ我が身を以て四象に示さんと欲するこ  
と有らば、彼佛の分身の諸佛、十方世界に在して說法したまふを、盡く一處に還し集め  
て、然る後に我が身乃ち出現せんのみ。大樂說、我が分身の諸佛、十方世界に在して說法  
したまふ者を、今應當に集むべし。」

大樂說、佛に白して言さく、「世尊、我等亦願くば世尊の分身の諸佛を見たてまつり、禮  
拜し供養せんと欲す。」

爾時、佛、白毫の一光を放ちたまふに、即ち東方五百萬億那由他恆河沙等の國土の諸佛  
を見たてまつる。彼諸の國土は、皆玻璃を以て地と爲し、寶樹、寶衣、以て莊嚴と爲し  
て、無數千萬億の菩薩其中に充滿せり。遍く寶幢を張り、寶網を上に羅けたり。彼國の諸  
佛、大なる妙音を以て諸法を説きたまふ。及び無量千萬億の菩薩の、諸國の國に遍滿して  
衆の爲に法を説くを見る。南西北方、四維上下、白毫相の光の所照の處も亦復是の如し。

爾時、十方の諸佛、各衆の菩薩に告げて言はく、「善男子、我今應に娑婆世界の釋迦牟  
尼佛の所に往き、並に多寶如來の寶塔を供養すべし。」

時に娑婆世界、即ち變じて清淨なり。瑠璃を地と爲して寶樹莊嚴せり、黄金を繩と爲

【三】分身來ると



【圖】 諸佛、如來に塔を圍かんとす。如來のためにとを圍き見聞せしむ

億那由他の國を移して、皆清淨ならしめたまふ。地窟、鐵鬼、畜生、及び諸國有るこ  
 と無し。又諸の天人を移して他土に置く。所化の國、亦瑠璃を以て地と爲して寶樹莊嚴  
 せり。樹の高さ五百由旬、枝葉華果、次第に莊嚴せり。樹下に寶寶の童子の座有り。高さ  
 五由旬、亦大寶を以て之を校飾せり、亦大海、江河、及び日月摩訶陀山、摩訶目真隣陀山、  
 鐵圍山、大鐵圍山、須彌山等の諸の山王無く、通じて一佛國土と爲りて、寶地平正な  
 り。寶してを蓋せる樓、遍く其上に覆ひ、諸の幡蓋を懸け、大寶の香を燒き、諸の方  
 の寶華、遍く其地に布けり

爾時、東方の釋迦牟尼佛の所分の身、百千萬億那由他恆河沙等の國土の中の諸佛、各  
 各に說法したまふ。眞に來集したまへり。是の如く次第に、十方の諸佛皆來く來集して  
 八方に坐したまふ。爾時、一方の四百萬億那由他の國土に、諸佛如來其中に遍滿した  
 まへり。

是時、諸佛各寶華の下に在り、師子の座に坐して、持持者を遣はして釋迦牟尼佛を問  
 訊したまふ。各寶華を覆らして地に滿じて、之に告げて言はく、「善男子、汝耆闍崛山の  
 釋迦牟尼佛の所に往詣して、我が辭の如くに曰せよ。少病少惱にして、氣力安樂にまします  
 や、及び菩薩、聲聞等、悉く安隱なりや不や」と、此寶華を以て、佛に散じ供養して、  
 是言を作せ、「彼某甲の佛、此寶塔を圍かんと與欲したまふ」と、諸佛徒を遣はしたまふに  
 亦復是の如し。」

爾時、釋迦牟尼佛、兩分身の諸佛の、悉く已に來集して、各各に獅子の座に坐したる  
ふを以て是は、無諸佛の同じく寶塔を開かんと與欲したまふを聞しめして、即ち座より  
起ちて、虚空の中に付したまふ。一切の四衆、起立し合掌し、一心に佛を觀たてまつる。  
是に於て釋迦牟尼佛、右の足を以て七寶の塔の門を開きたまふ。大菩薩を出すこと、圓  
鑪を却けて大城の門を開くが如し。爾時に一切の衆會、皆多寶如來の寶塔の中に於て、  
獅子の座に坐したまひ、全身散ぜざることを禱に、入るが如くなるを見、又此一會の諸菩薩、  
釋迦牟尼佛、性く是の妙法を説きたまふ。我是觀を證かみ菩薩の法に、南方此に來至せ  
り」と言ふを聞く。

爾時、四衆等、過去の如く千五百劫に造したる善業の、是の如き言を説きたまふと  
見、有り餘りなく、天の寶聚を以て、多寶佛及び釋迦牟尼佛の上に散す。

爾時、釋迦牟尼佛、寶塔の中に於て半座を分ち、釋迦牟尼佛に與へて、是を坐したまはく、  
釋迦牟尼佛、寶塔の座に就きたまふべし。爾時に釋迦牟尼佛、其塔の座に入り、其座に坐し  
て結跏趺坐したまふ。

爾時、大衆、一和衆の七寶の塔の座の中に獅子の座の上に着して、結跏趺坐したまふを見、  
てまつりて、皆是の言を信じて、佛は高座に坐したまへり。釋迦牟尼佛、即ち手を以て  
我が等輩をして俱に虚空に坐らしめたまへ。爾時に釋迦牟尼佛、神力を以て、諸の衆會  
を接して、皆虚空に在きたまふ。

【五】初めて本經の付屬を説く。

【六】偈もて重ねて頌す。初に多寶の滅度を述ぶ。

【又我が分身等】以下分身の遠く集るを頌す。

大菩薩を以て、普く四衆に告げたまはく、誰か能く此要婆國土に於て説く、妙法蓮華を説かん。今正しく是れ時なり。如來久しからずして當に涅槃に入るべし。佛、此妙法蓮華を以て、付屬して在ること有らしめんと思す。

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、  
聖主世尊、久しく滅度したまふと雖も

寶塔の中に在して、尙法の爲に來りたまへり

諸人云何が、勤めて法に爲はざらん

此佛滅度したまひて、無央數劫なり

處處に法を聽きたまふことは、還は難きを以ての故なり

彼佛の本願は、我滅度の後

在在所往に、常に法を聽かんが爲なり

又我が分身の、無量の諸佛

恆沙等の如き、來りて法を聽き

及び滅度の、多寶如來を見たてまつらんと欲して

各妙土、及び弟子衆

天人龍神、諸の供養の事を捨てて

法をして久しく住せしめんが故に、此に來至したまへり

【諸の大衆に告ぐ】  
以下律の目録に引  
ず。諸の諸を引  
けて諸の諸を引

諸を坐せしめしが爲に、神通力を以て  
無量の衆を移して、國をして清淨ならしむ  
諸佛各各に、寶樹の下に詣りたまふ  
清淨の地の、蓮華莊嚴せるが如し  
其寶樹の下に、一の獅子の座あり  
佛其上に坐したまはして、光明嚴飾せること  
夜の闇の中に、大なる炬火を然せるが如し  
身より妙香を出だして、十方の國に遍じたまふ  
衆生熏を蒙りて、眞に自ら勝へず  
譬へば大風の、小樹の枝を吹くが如し  
是方便を以て、説をして久しく住せしむ  
【諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後  
我が能く斯經を、讀みし讀み説かん  
今法の論に於て、自ら妙香を受け  
其れを寶樹、久しく清淨したまふと稱す  
大菩薩を以て、自ら獅子吼したまふと  
多寶如來、其の如し也】

集むる所の化佛、當に此意を知るべし

諸の佛子等、誰か能く法を護らん

當に大願を發して、久しく住することを得しむべし

其れ能く此經法を、護ること有らん者は

則ち爲れ、我及び多寶を供養するなり

此多寶佛、寶塔に處して

常に上方に遊びたまふは、是經の爲の故なり

亦復、諸の來りたまへる化佛の

諸の世界を、莊嚴し先飾したまふ者を供養するなり

若し此經を説かば、即ち我

多寶如來、及び諸の化佛を見たてまつるなるべし

諸の善男子、各諦かに思惟せよ

此は爲れ難事なり、宜しく大願を發すべし

諸餘の經典、數百沙の如し

此等を説くと雖も、未だ難しと爲すに足らず

若し須臾を接りて、他方の

無數の佛土に擲け置かんも、亦未だ難しと爲さず

【諸の善男子等】  
以下難持の法を擧  
げて流通を勸む



若し足の指を以て、大千界を動かして、遠く他國に擲げんも、亦未だ難しと爲さず

若し有頂に立ちて、衆の爲に

無量の餘を演說せんも、亦未だ難しと爲さず

若し佛の後、惡世の中に於て

能く此經を説かん、是れ則ち難しと爲す

假使人有りて、手に虚空を把りて

而も以て遊行すとも、亦未だ難しと爲さず

我が滅後に於て、若は自らも書き持ち

若は人をしても書かしめん、是れ則ち難しと爲す

若し大地を以て、足の甲の上に置きて

梵天に昇らんも、亦未だ難しと爲さず

佛の滅度の後、惡世の中に於て

暫くも此經を讀まんは、是れ則ち難しと爲す

假使劫燒に、乾ける草を擔ひ負きて

中に入りて燒けざらんも、亦未だ難しと爲さず

我が滅度の後に、若し此經を携もて

【劫燒】 世界最終劫盡の時、大火發してこの世界を燒盡することありと云はる。

【八萬四千の法藏】  
八萬四千の煩惱に對して稱するを通例とす。

【十二部經】 長行、重頌、授記、孤起、偈、無問自說、因緣、譬喻、本事、本生、方廣、未曾有、論議の十二。

一人の爲にも證かん、是れ則ち難しと爲す

若し八萬四千の法藏

十二部經を轉じて、人の爲に演説して

諸の聽かざる者をして、六神通を得しめん

能く是の如くすと雖も、亦未だ難しと爲さず

我が滅後に於て、此經を聽受して

其義趣を問はんは、是れ則ち難しと爲す

若し人法を説きて、千萬億

無量無數、恆沙の衆生をして

阿羅漢を得、六神通を具せしめん

是益有りと雖も、亦未だ難しと爲さず

我が滅後に於て、若し能く

對の如き經典を奉持せん、是れ則ち難しと爲す

我佛道の爲に、無量の土に於て

始より今に至るまで、廣く諸經を説く

而も其中に於て、此經第一なり

若し能く持つこと有らば、則ち佛身を持つたり

【三】ブータ  
 (Jhuta) 修治と譯す。煩惱の垢を拂ひ去りて佛道を求むること。修行と同義。之に十二種の行あり。即ち往閉靜處、常行乞食、次第乞食、一中飲、節量食、獨中不飲、眼、著弊衲衣、但三衣、露地坐、但樹下坐、露地坐、但坐不限なり。

諸の諸君、我が滅後に於て  
 誰か能く、其業を愛持し護國せん  
 今佛の前に於て、自ら誓言を説け  
 此國は佛の國を奉じ、若し暫くも持て置かば  
 我國を滅す、諸君も亦然なり  
 若し如き人法、諸佛の歎めたをみれば  
 是れ則ち其國なり、是れ則ち其國なり  
 是を戒を行も、佛道を行する者と行く  
 則ち爲れども、如上の佛道を得たり  
 能く來世に於て、其國を護るべし  
 是れ眞の佛子、諸佛の理に任するなり  
 佛の滅度の後、佛の遺教を解せんは  
 是れ諸の天人、佛の遺教なり  
 惡長の世に於て、佛の遺教も説かんは  
 一切の天人、佛の遺教に奉じ奉じ



【阿私仙】 アシタ (Aśita) 無比と譯す。釋尊降誕の時、之を占相して、出家せば大塚沙門となり、俗に在らば轉輪聖王となるべしと豫言せし仙人なり。

【二】 古今を會して師弟の功報俱に満ずるを明す。【菩提婆沙】 デーラダツタ (Devadatta) 天授、其與等と譯す。佛の從弟

誰か大徳を有たん者なる  
若し我が爲に情説せば、身當に眞僕と爲るべし

阿私仙有り、來りて王に白さく

我の法を有てり、世間に希有なる所なり

若し而も修行したまはば、吾當に汝が爲に説くべし

時に王、仙の言を聞き、心に大喜悅を生じ

阿私仙人に瞻ひて、所を供養し

阿私仙、歳を採りて、時に歸つて恭敬して與へき

我の法を存せるが故に、身心慍懣無かりき

若くは、衆生の爲に、大法を説求して

亦己が身、以五欲の樂の爲にせず

故に天國の王と爲りて、勤求して此法を獲て

時に阿私仙を得ることを説せり、今故に汝が爲に説く

【三】 此丘に告ぐたまはく、當時の王とは則ち我が身是なり、阿私仙とに今の我

婆達多なり。世婆達多の莫知識に由るが故に、我をして、六波羅蜜、善行を修、三

相、八十億那由、寶勝金色、十力、四無所畏、四攝法、十八不共、神通等を具足せしめ

り。佛正覺を成て、衆生を度すること、佛の道に因るが故に、今も

なるも佛の威勢なるを疑み、阿閼世王と名づ、常に佛に敬し、種種の罪過を犯す。

【八波羅蜜】 布施、持戒、忍辱、精進、智慧をいふ。次、慈悲喜捨をいふ。十波羅蜜といふ。

【十力】 如来及び菩薩には十力ありと云ふ。

【四無所畏】 如来及菩薩に各四無所畏あり、如来の四無所畏とは佛の說法の時畏怖の相なきこと、菩薩の四無所畏とは菩薩の衆中にありて說法する時畏怖することなきを云ふ。

【四攝法】 菩薩の衆生を度脱せしめんとする時用ふる所の四種の攝法、即ち布施、愛語、利行、同事の四なり。

【三】 今日文殊の通言、女の成佛を

の四衆に告げたまはく、一、波達多は、法つて後、無量劫を過ぎて、當に成佛することを得べし、腕をば天王如来、魔供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上王、無雙丈夫、天人師、佛、世尊と曰はん。世界をば天道と名けん。時に天王佛、世に住すること二十中劫、恒河沙の衆生の爲に妙法を説かん。恒河沙の衆生阿羅漢果を得、無量の衆生緣覺の心を發し、恒河沙の衆生無上道の心を發し、無生忍を得て、不退轉に住せん。時に天王佛、般若涅槃の後、正法世に住すること二十中劫、全身の舍利に、七寶の塔を起つ。高さ六十由旬、縱廣四十由旬ならん。諸天人民、悉く雜華、抹香、燒香、塗香、衣服、瓔珞、幢幡、寶蓋、伎樂、歌頌を以て七寶の妙塔を繞舞し供養せん。無量の衆生阿羅漢果を得、無量の衆生辟支佛を悟り、不可思議の衆生菩提心を發して不退轉に至らん。佛、諸の比丘に告げたまはく、未來世の中に、若し善男子善女人有りて、妙法華經の提婆達多品を聞きて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄、餓鬼、畜生に墮ちずして十方の佛の前に生ぜん。所生の處には、常に此經を聞かん。若し人天の中に生ぜば、勝妙の樂を受け、若し佛の前に在らば、蓮華より化生せん。

時に下方の多寶世尊の所從の菩薩、名を智積と曰ふ、多寶佛に白さく、當に本土に還りたまふべし。

釋迦牟尼佛、智積に告げて曰はく、善男子、且く須臾を待て。此に菩薩あり、文殊師利と名く。與に相見るべし。妙法を論説して、本土に還るべし。

明す、初に文殊の  
【娑竭羅】サーガ  
ラ（Sattva）海と  
譯す。八大龍王の  
一。鹹海に居す。  
其宮殿は七寶もて  
嚴飾せられ天と異  
ることなしと。雨  
を司る神として敬  
はる。

爾時、文殊師利、千葉の蓮華の大いさ東輪の如くたるに坐し、俱に來れる菩薩も亦寶蓮華に坐して、大海の寶滿摩訶宮より、自然に涌出して、虚空の中に住し、寶珠山に當りて、蓮華より下りて佛の前に至り、頭禮して、目連の如く、佛禮したてまつる儀敷すること已畢りて、寶積の所に往き、共に相對問して、却きて一面に坐し、

寶積菩薩、文殊師利に問はく、住、摩訶宮に住きて化す所の衆生、其寶積何ぞ。文殊師利の言はく、其寶積衆にして佛計すべからず。口の宣ぶる所に非ず。心の證る所に非ず。自ら當に證有るべし。

所言未だ知らざるに、無數の菩薩寶蓮華に乗じて蓮より涌出し、寶珠山に當りて虚空に住せり。此諸の菩薩は枯梵れ文殊師利の化度する所なり。菩薩の行を具して、皆共に六波羅蜜を成ず。本誓願なりし人は虚空の中に在りて、無間の行を説くり、今皆大衆の爲め義を行す。

文殊師利、寶積に問いて曰はく、佛に於て教化すること其衆生の如し。

佛、寶積菩薩、佛を以てして曰はく、

大智徳の如にして、無量の衆を化度せり

今此諸の菩薩、及び我佛に坐す

寶積菩薩演暢し、一衆の衆を問問して

廣く諸の衆生を度きて、遂かに寶積を成ぜしむ

【圖】次に龍女の  
行益を問す。

交殊師利の言はく、我、海中に於て、唯常に妙法華經を宣説す。智積、交殊師利に問うて言はく、此經は甚深微妙にして諸經の中の寶、世に希有なる所なり。願し衆生の勤加精進し、此經を修行して、速かに相を得る有りや不や。交殊師利の言はく、有り。婆竭羅龍女の女、年始めて八歳、智慧利根にして、善く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得、諸佛の所説の甚深の秘藏、悉く能く受持し、深く禪定に入りて諸法を了達し、利那の頃に於て菩提心を發し、不退轉を得たり。辯才無礙にして衆生を慈念すること、猶し赤子の如し。功德具足し、心に念ひ口に演ぶること、微妙廣大なり。慈悲仁讓、志意和雅にして、能く菩提に至れり。

智積菩薩の言はく、我、釋迦如來を見たまふ時に、無量劫に於て、難行苦行し、功を積み徳を累ねて、菩提の道を求むること、未だ曾て止息したまはず、三千大千世界を觀るに、乃至摩訶の如き許も、是れ菩薩にして壽命を捨てたまふ處に非ざること有ること無し。衆生の爲の故なり。然る後、乃ち菩提の道を成ずることを得たまへり。此女の、須臾の頃に於て、便ち正覺を成ずることを信ぜず。」

言論未だ訖らざる時に、龍女の女、忽ち前に現じて、頭面に禮敬したたまひり、却きて一面に任して、偈を以て讚じて曰さく、

深く罪福の相を達して、遍く十方を照らしたまふ  
微妙の淨き法身、相を具すること三十二



八十種好を以て、用て法身と莊嚴したまへり  
天人の裁斷する所、龍神も成く恭敬す  
一切衆生の類、宗奉せざる者無し

又聞きて提を成すること、唯佛のみ當に證知したまふべし  
我大乘の言を闡きて、苦の衆生を度脱せん

爾時、舍利、龍女に語りて言はく、「汝、久しからずして無上道を得たりと謂へり。是  
事信じ難し。所以は何ん。女身工垢穢にして、是れ法器に非ず。云何が能く無上菩提を得  
ん。佛道は懸崖なり。無量劫を経て勤苦して行を積み、具に諸度を修して、然る後乃ち  
す。又女人の身には猶五障有り、一には天王と作ることを行はず。二には帝釋、三には魔  
王、四には轉輪聖王、五には佛身なり。二何が速に成佛することを得ん。」

爾時、龍女、一の寶珠有り、價直三千大千世界なり。持以一佛に上つる。佛即ち之を  
受けたまふ。

龍女、智積菩薩、尊舍利弗に請ひて言はく、「我寶珠を獻する。世尊の納受、是事疾し  
や不や。」答へて言はく、「甚だ疾し。」

女の言はく、「汝が神力を以て、我が成神を觀よ、復此より速かならん。」

當時の衆會、皆龍女を忽然の間に變じて男子と成りて、菩薩行を具して、即ち南無  
塔世界に往き、寶蓮華に坐して正覺を成じ、十二相、八十種好ありて、普く十方に

受けたまふ。

【法華】 法を人  
信するは  
信するは  
信するは

切衆生の爲に、妙法を演説するを見る。

爾時、娑婆世界の菩薩、曇聞、天龍、八部、人と非人と、皆遙かに彼觀女の威徳して、普く時の會の人の爲に法を説くを見て、心大いに歡喜して、悉く遙かに敬禮す。無量の衆生、法を聞きて解悟し、不退轉を得、無量の衆生道の記を受くることを得たり。無垢世界六反震動す。娑婆世界の三千の衆生、不退の地に住し、三千の衆生、菩提心を發して而も受記を得たり。智積菩薩及び舍利弗、一切の衆會默然として信受す。

勸持品第十三

【勸持品】 他土、此上に今經の流通勸進を明す。  
【一】 初に受持を明す中、今菩薩等此主他土に弘經さんと誓ふを明す。

爾時、霸王菩薩摩訶薩、及び大樂等說菩薩摩訶薩、二萬の菩薩眷屬と俱に、皆佛の前に於て是哲言を作さく、唯願くば世尊、以て慮ひしたまふべからず。我等佛の滅後に於て當に此經典を奉持し、讀誦し、説きたてまつるべし。後の惡世の衆生は、善根轉た少くして増上慢多く、利供養を貪り、不善根を増し、解脱を遠離せん。教化すべきこと難しと雖も、我等當に大忍力を起して、此經を讀誦し、持説し、書寫し、種種に供養して、身命を惜まざるべし。

爾時、衆中の五百の阿羅漢の受記を得たる者、佛に白して言さく、「世尊、我等亦自ら誓願すらく、異の國土に於て、廣く此經を説かん。」復學無學の八千人の受記を得たる者有

【二】 佛の徳を讃揚して、其の徳を讃揚するを明す。

【三】 佛の徳を讃揚して、其の徳を讃揚するを明す。

【四】 佛の徳を讃揚して、其の徳を讃揚するを明す。

【五】 佛の徳を讃揚して、其の徳を讃揚するを明す。

【六】 佛の徳を讃揚して、其の徳を讃揚するを明す。

【七】 佛の徳を讃揚して、其の徳を讃揚するを明す。

り、座より立ち起ちて合掌し、佛に向ひたてまつりて、是等言を作さく、世尊、我等亦當に佛の國土に於て佛を讃揚すべし。所以は何ん。是婆娑國の中は、人繁盛多く、増上慢を懷き、時に深處に、深處諸曲にして、心不直なるが故に。

三時、佛は迦提婆の國政提其丘尼、摩訶摩訶比丘尼六千人と俱に、座より而も起ちて一心に合掌し、佛頭を禮仰して、目撃くも情不直。時に世尊、佛光輝に背けたまはく、何故に佛の國にして爾來を離る。汝の心に、時に佛法が者を説きて阿耨多羅三藐三菩提の道を授けずと説ふこと無しや。佛光輝、佛光輝に、佛光輝一切の佛國に皆已に授記すと説きき。

今汝記を知らんとせば、將來の世、當に八萬八千億の諸佛の法の中に於て大法師と爲るべし。其等六千の摩訶摩訶比丘尼も俱に法師と爲るべし。汝等の如く諸佛に菩薩の道を具して、當に作佛することを得べし。一切衆生善使知衆、佛侍、正觀、明行足、善慧、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と讃げん。情念無、正一切衆生具足時、及び六千の菩薩、毎次に佛出でて阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

爾時、佛國の世間諸佛具丘尼、是念を得さく、世尊は授記の中に於て我れ我が名を説き奉るはす。

佛、即ち佛國の世間諸佛具丘尼、汝等六千菩薩の諸佛の法の中に於て、佛國の行を修し、大法師と爲り、深く佛道を具し、善國の中に於て當に作佛することを得べし。具足千億那由他の佛、佛侍、正觀、明行足、善慧、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、

佛、即ち佛國の世間諸佛具丘尼、汝等六千菩薩の諸佛の法の中に於て、佛國の行を修し、大法師と爲り、深く佛道を具し、善國の中に於て當に作佛することを得べし。具足千億那由他の佛、佛侍、正觀、明行足、善慧、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、

佛、即ち佛國の世間諸佛具丘尼、汝等六千菩薩の諸佛の法の中に於て、佛國の行を修し、大法師と爲り、深く佛道を具し、善國の中に於て當に作佛することを得べし。具足千億那由他の佛、佛侍、正觀、明行足、善慧、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、

世尊と號けん。佛の壽は無量阿僧祇劫ならん。

爾時、摩訶波闍波提比丘尼、及び耶輸陀羅比丘尼、並びに其眷屬、皆大いに歡喜し、未曾有なることを得て、即ち佛の前に於て偈を説きて言さく、

世尊導師、天人を安隱ならしめたまふ

我等記を聞きて、心安く具足しぬ

諸の比丘尼、是偈を説き已りて、佛に白して言さく、世尊、我等亦能く他方の國土に於て、廣く此經を宣べん。

爾時、世尊、八十萬億那由他の諸の菩薩摩訶薩を觀そなます。是諸の菩薩は皆是れ阿惟越致にして、不退の法輪を轉じ、諸の陀羅尼を得たり。即ち座より起ちて佛の前に至り、一心に合掌して、是念を作さく、若し世尊、我等に此經を持護せよと告轉したまはば、當に佛の教の如く廣く斯法を宣まべし。復是念を作さく、佛今默然として告轉せられず、我當に云何がすべき。

【三】次に勸持を明す、初に長行。【阿惟越致】(Amvayati) 阿鞞跋致に同じ。不退。菩薩の地位より退轉せざるの義。

時に諸の菩薩、佛意に歡喜し、並に自ら本願を滿せんと欲して、便ち佛の前に於て師子吼を作して、誓言を發さく、世尊、我等如來の滅後に於て、十方世界に周旋往來して、能く衆生をして此經を書寫し、受持し、讀誦し、其義を解説し、法の如く修行し、正憶念せしめん。若し佛の威力ならん。唯願くば世尊、他方に在すとも遙かに守護せられん。

即時に諸の菩薩、俱に同じく聲を發して、偈を説きて言さく、

【四】勸持を偈もて頌す。初より持

て頌す。初より持

當に是事を忍ぶべし、  
しまで、惡縁の衣を被て、  
孤獨するを明す。

【諸の無智の人云】  
三、  
一俗業第一慢なり

【惡智の中比丘云】  
三、  
第二門増上慢なり。

【或は阿練若云】  
三、  
聖増上慢なり。

【阿練若】  
アーラ  
ニヤテ (Aranya)

無諍高、閉居處等と譯す。  
世間の僧  
解家を離れたる林中  
静寂の處をいふ。

【納衣】  
僧の衣  
【第六】  
在家の人

「阿練若」は、  
惡物、世の中に於て、我等當に廣く説くべし

【無智の人の、惡口罵詈等し】

其の可杖を加ふる者有らん、我等皆當に忍ぶべし

惡世の中の比丘は、邪智にして心詭曲に

未だ得ざるを爲れ得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん

或は阿練若に、納衣にして空閑に在りて

自ら世の道を行ずと謂ひて、人間を輕賤する者有らん

利著に貪著するが故に、白衣の與に法を説きて

世に其敬せらるること、六通の羅漢の如くならん

是人の心を懷き、常に世俗の事を念ひ

名を阿練若に假りて、好みて我等が過を出ださん

而も是の如き言を作さん、此諸の比丘は

利養を貪るを爲ての故に、外道の論議を

経典を作りて、世間の人を誑惑す

名を求むるを爲ての故に、分別して是を説くと

常に衆の中に在りて、我等を毀らんとするが故に

國王大臣、婆羅門居士

及び餘の比丘衆に向ひて、誹謗して我が惡を説きて

是れ邪見の人、外道の論議を説くと謂はる

我等佛を敬ひたてまつるが故に、悉く是の惡を忍ばん

斯に轉めて、汝等は皆是れ佛なりと言はれん

此の如き輕慢の言を、皆當に忍んで之を受くべし

濁劫惡世の中には、多く諸の恐怖有らん

惡鬼其身に入りて、我を罵詈毀辱せん

我等佛を敬信したてまつりて、當に忍辱の徳を修るべし

是經を説かんが爲の故に、此諸の難事を忍ばん

我身命を愛せず、但無上道を積まん

我等來世に於て、佛の所囑を護持せん

世尊自ら當に知ろしめすべし、濁世の惡比丘は

佛の方便、隨宜所説の法を知らずして

惡口して瞋覺し、數數擯出せられ

塔寺を遠離せん、是の如き等の衆惡をも

佛の告勅を念ふが故に、皆當に是事を忍ぶべし

【諸の聚落城邑云】如來の室に入りて經を弘むるを述べ。  
【我は是れ世尊の使云云】如來の座に坐して弘經するを明す。次四句は誓を佛に知らしめせと請ふを明す。

諸の聚落城邑に、其れ法を求むる習有れば  
我皆其所に到りて、佛の所屬の法を説かん  
我は是れ世尊の使なり、衆に處して畏るる所無し  
我當に善く法を説くべし、爾くば佛安隱に住したまへ  
我世尊の前、諸の來りたる十方の佛に於て  
是の如き誓言を發す、佛自ら我が心を知ろしめせ

# 妙法蓮華經

卷第五

姚秦三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

## 安樂行品第十四

【安樂行品】前本頌を宗じて安樂淺行初心の菩薩の弘對方便を問ふるに對し、佛國一身口意誓願の四安樂行を開說せるを明す。蓮門流瀉の第四段なり。

【一】支殊如來に初心者の弘經の方法を問ふ。

【二】佛之に答へて四安樂行を説す。初は身安樂行に就て、中に菩薩の行處並に親近處を説く。

【外道】九十五箇外道といふは、富蘭那迦葉の親見外道等謂ゆる六師外道をのたまはるものなり。

【禁志】ブラフマチャールン（Brahmanic）淨行と譯す。禁律門が前につきて生活する期間をハス。

【星提子】ニレゲランタブトラ（Nirgrantha）(Nirgrantha) 齋禁

【一】爾時、文殊師利法王子菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、是諸の菩薩は甚だ爲れ有り難し。佛に敬願したてまつるが故に、大誓願を發す。後の惡世に於て是法華經を護持し、讀誦し、説かん。世尊、菩薩摩訶薩、後の惡世に於て、六何が能く是經を説かん。」

【二】佛、文殊師利に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、後の惡世に於て是經を説かんと欲せば、當に四法に安住すべし。一には菩薩の行處、及び親近處に安住して、能く衆生の爲に是經を演說すべし。文殊師利、云何なるをか菩薩摩訶薩の行處と名くる。若し菩薩摩訶薩忍辱の地に住し、柔和善順にして辛暴ならず、心亦散かず、又復法に於て行する所無くして、諸法如實の相を觀じ、亦不分別を行せざる、是を菩薩摩訶薩の行處と名く。云何たるをか菩薩摩訶薩の親近處と名くる、菩薩摩訶薩は國王、王子、大臣、官長に親近せざれ。諸の外道、梵志、尼提子等、及び世俗の文筆詠の外書を造る、及び路伽耶陀、逆路伽耶陀の者に親近せざれ。亦諸の有ゆる兎戲の相叙、相撲、及び那羅等の種種の變現の戲に





者、四變、男性變  
じて女性となりた  
る者、五半、半月  
男にして半月女な  
る者。  
【若し菩薩有りて  
等】以下、偈もて  
菩薩の行處、親近  
處、並にその行成  
を重ねて頌す。

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

若し菩薩有りて、後の惡世に於て  
無怖畏の心もて、是經を説かんと欲せば

應に行處、及び親近處に入るべし。

常に國王、及び國王子

大臣官長、兇論の戲者

及び梅陀羅、外道梵志を離れ

亦、増上慢の人

小乘に貪著する、三藏の學者

破戒の比丘、名字の羅漢

及び比丘尼の、戲笑を好む者に親近とこれ

深く五欲に著して、現の滅度を求むる

諸の優婆夷に、皆親近すること勿れ

是の若き人等、好心を以て來り

菩薩の所に到りて、佛道を聞かんが爲にせば

菩薩則ち、無所畏の心を以て

希望を懷かずして、爲に法を説け

【乳婦】肉食の料  
理人かしらるる云

【上中下の法云云】  
藏通別三教の善儀  
を行ぜず、諸儀  
の善儀を行すべ  
し之意。  
【有爲無爲、實不實  
云云】二道を離れ  
て開教中道の妙行  
を修すべし之意。

【女處女、及び諸の不男に  
皆親近して、以て親厚を爲すこと勿れ  
水、屠兒魁倫

【穢漁捕、利の爲に殺害するに關し、  
尚を販つて白活、女色を街賣する  
是の如きの人に、皆親近すること勿れ  
果險の相撰、種粟の嬉戲

【諸の姪女等に、盡く親近すること勿れ  
隔屏處にして、女の爲に法を説くこと莫れ  
若し法を説かん時には、戲笑することを得ること無かれ  
里に入りて乞食せんには、一りの比丘を將るよ  
若し比丘無くんば、一心に佛を念ぜよ  
二處を以て、行處近處と爲す  
又復上中下の法

【有爲無爲、實不實の法を行ぜざれ  
亦、是れ男是れかと分別せざれ

【有爲無爲、實不實の法を行ぜざれ  
亦、是れ男是れかと分別せざれ

諸法を得ず、知らず見ざれ

是を聞ち名けて、菩薩の行處と爲す

一切の諸法は、空にして所有無し

常住有ること無く、亦起滅無し

是を智者の、所親近處と名く

顛倒して、諸法は有なり無なり

是れ實なり非實なり、是れ生なり非生なりと分別す

聞かなる處に在りて、其心を修攝し

安住して動ぜざること、須彌山の如くせよ

一切の法を觀するに、皆所有無し

猶し虚空の如し、堅固なること有ること無し

不生なり不出なり、不動なり不退なり

常住にして一相なり、是を近處と名く

若し比丘有りて、我が滅後に於て

是行處、及び親近處に入りて

斯經を説かんと時は、怯弱有ること無けん

菩薩時有りて、靜室に入りて

正憶念を以て、善に歸して法を觀じ

神定より歸ちて、諸の國王

王子臣民、婆羅門等の諸に

開化し演説して、斯經典を説かば

其心安隱にして、怯弱有ること無けん

文殊師利、是を菩薩の初の法に安住して

能く後の法に於て、法華經を説くと名く

【二】次に口安樂 下文殊師利、如來の滅後、末法の中に於て、是經を説かんと欲せば、直に安樂行に住す

一、若は口に宣説し、若は經を讀まん時、樂みて人及菩薩等の過を其かされ、亦諸餘の

法門を輕慢せされ、他人の罪惡長短を説かされ、餘聞の人に於ても、亦名を稱して其過惡

を説かされ、亦名を稱して其美きを讃歎せされ。又亦惡嫌の心を生ぜされ。善く是の如

き安樂の心を修するが故に、諸の聽くこと有らん者、其意に違はじ。難問する所有らば、

小乘の法を以て答へざれ。但大乘を以て、巧に解説して、一切種智を得しめよ

【三】時、佛告、善哉。此法を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

善哉常に、安樂をらしめんことを樂ひて法を宣け

清淨の地に於て、床座を備し

油を以て身に塗り、摩羅を洗浴し

【四】善哉の云々 以下は安樂行の事

【二】次に口安樂 行を明す

質淨の衣を著、内外俱に淨くして

法座に安處して、問に隨ひて爲に説け

若し比丘、及び比丘尼

諸の優婆塞、及び優婆夷

國王王子、群臣士民有らば

微妙の義を以て、和順にして爲に説け

若し難問すること有らば、義に隨ひて答へよ

因縁譬喩もて、敷演し分別せよ

其方便を以て、皆發心せしめ

漸漸に増益して、佛道に入らしめよ

懶惰の意、及び懈怠の想を除き

諸の憂惱を離れて、慈心もて法を説け

晝夜に常に、無上道の教を説け

諸の因縁、無量の譬喩を以て

衆生に開示して、咸く歡喜せしめよ

衣服臥具、飲食醫藥

而も其中に於て、懈怠する所無かれ



と甚だ遠し、終に一切種智を得ること能はじ、所以は何ん、汝は是れ放逸の人なり、道に於て懈怠なるが故に。と言ふこと得ること無かれ。又亦諸法を戲論して、淨觀する所有るべからず。當に一切衆生に於て、大悲の想を起し、諸の如來に於て、慈父の想を起し、諸の菩薩に於て、大師の想を起すべし。十方の諸の大菩薩に於て、常に應に深心に恭敬禮拜すべし。一切衆生に於て、平等に法を説け、法に順ずるを以ての故に、多くもせず少くもせざれ。乃至深く法を愛せん者にも、亦爲に多く説かざれ。文殊師利、是菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て、是第三の安樂行を成就すること有らん者は、是法を説かん時、能く憫亂するもの無けん。好き同學の、共に是經を讀誦するを得ん。亦大眾の、而も來りて聽受し、聽き已りて能く保ち、持ち已りて能く誦し、誦し已りて能く説き、説き已りて能く書き、若は人をしても書かしめ、經卷を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎することを得ん。

【若し是經等】以下は意安樂行の重頭。

雨時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく。

若し是經を説かんと欲せば、常に嫉妬慢

論誑邪偽の心を捨てて、常に質直の行を修すべし

人を輕蔑せず。亦法を戲論せざれ

他をして疑悔せしめて、汝は佛を得じと云はざれ

是佛子法を説かんに、常に柔和にして能く忍び



一切を慈悲して、懈怠の心を生ぜざれ

十方の大菩薩は、衆を憐れ我が法に導くはすべしに

應に恭敬の心を生ずべし、是れ則ち我が大徳に

諸佛世尊に於ては、無上の父の如く生ぜ

橋慢の心を破して、法を説くに障礙無からしめと

第三の法是の如し、智者應に守護すべし

一心に安樂に行ぜば、無量の衆に救はれん

又文殊師利、菩薩摩訶薩の末世の法を説くと欲せん時に於て、法を説くを受持すること

難しき者は、在家出家の人の中に於て、大慈の心をもたせ、菩薩に於て人の中に於て、大

徳をもたせ、衆に法を説くべし。是の如き人は、其の法を説くに障礙も無く、

宜く法を説くべし。又文殊師利、菩薩摩訶薩、初出家、學ぶ時、明はす、信ぜず、解せず、

はす、信ぜず、解せずと雖も、我阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、諸位を何れに在りて

も、神通力、智慧力を以て、之を引きて、其法の中に住せしむることを得しめん。又殊師利、

是菩薩摩訶薩如來の滅後に於て、此箇間の法を成就することを得ん人は、其法を説かん時

過失有ること無けん。常に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、大臣、人民、

羅門、居士等に、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せしむることを得ん人は、其法を説かん時

難かんが爲の故に、亦常に隨侍せん。若し墮落、城邑、空閑、林中に在らん、人有りて

【八】法華經の  
妙なるを第一  
明珠の譬を以て  
説く。

與りて難問さんと欲せば、諸天晝夜に、常に法の爲の故に、而も之を衛護し、能く聽かん者をして、皆歡喜することを得しめん。所以は何ん、此經は、是れ一切の過去、未來、現在の諸佛の神力して説りたまふ所なるが故に。

文殊師利、是法華經は、無量の國の中に於て、乃至名字をも聞くことを得べからず。何に況んや見ることを得、受持し、讀誦せんをや。文殊師利、譬へば聖力の轉輪聖王の、威勢を以て、諸國を降伏せんと欲せんに、而も諸の小王、其命に顧はざらん。時に轉輪王種種の兵を起して、往きて討伐するに、王、兵衆の戰ふに、功有る者を見ては即ち大いに歡喜し、功に隨ひて賞賜して、或は田宅、聚落、城邑を與へ、或は衣服、寶身の具を與へ、或は種種の珍寶、金、銀、琉璃、磲磲、碼碯、珊瑚、琥珀、寶馬、車乘、奴隸、人民を與ふ。唯發中の明珠のみ、以て之を與へず。所以は何ん。獨り一の頂上に、此一の珠有り。若し以て之を與へば、王の諸の眷屬、必ず大いに驚き怪せんが如く、文殊師利、如來も亦復是の如し。禪定智慧の力を以て、法の國土を得て、三界に在り。而も諸の魔王皆て應伏せず。如來の賢聖の諸將、之と共に戰ふに、其功有る者には、心亦歡喜して、四衆の中に於て、爲に諸經を説きて、其心をして悦ばしめ、賜ふに神宏、解脫、無漏根力の諸法の旨を以てし、又復涅槃の境を賜與し、滅度を得たりと言ひて、其心を引導して皆歡喜せしむ。而も爲に是法華經を説かず。文殊師利、轉輪王の諸の兵衆の大功有る者を見ては心甚だ歡喜して、此難信の珠の久しく發中に在りて、安りに人に與へざるを

【五濁塵】色等の五塵をいふ。

【三摩塵】三界の一切の煩惱能く生死の命を奪ふをいふ。

【死塵】四大分散してよく智慧の命を奪ふをいふ。以上二に天塵を加へて十塵といふ。

【三欲】貪、瞋、癡。

【三欲】欲、色、無常の三界。

【七】善願安樂行並に微妙を歎ずるの勝願。初めより其中に住せしめんまで善願安樂行の傳

【出世家】在家と

以て、而も今之を以てんが如く、無常亦復舊の如し。一草の中に於て大法王有り。法を以て一切衆生を教化す。賢者の軍の在る處、憍魔、瞋魔と共に戰ふに、大功ありて、此三毒を滅し、三界を出でて、重刹を成するを以ては、壽時、阿耨多羅三藐三菩提を證して、此法華經の能く衆生をして一切智に至らしめ、一切世間に多多くして信し、信く、實に未だ説かざる所なるを、今之を説く。文殊師利、法華經は是れ諸の如來の第一の説なり。諸經の中に於て最も甚深なり。末に要するに、彼佛の王の久しく護れる明珠を、今乃ち之を與ふるが如し。文殊師利、法華經は諸佛如來の密寶の寶なり。諸經の中に於て最も其上に在り。其夜に宣説して、佛りに宣説せざるを、佛に今日に於て、乃ち宣説す。與に之を宣説す。

【世尊】重ねて此義を宣べんと欲して、佛を尊き言はく、當に忍辱を行じ、一切の哀愍し、乃ち能く、佛の密を以て演説せよ。

【末世】末世時、此經を尋たし、佛は出家、及び非佛處に於て、佛に慈悲を以てすべし。佛等、佛に同く信じて、佛の如く大衆なり。我佛の如く得て、佛の如く以て

【譬へ……汝等が爲に説く】今經の妙を讚歎するの偈

爲に此法を説きて、其中に住せしめんと

譬、は強力の、轉輪の王

其の轉じて功有るに、諸物の

象馬車乘、嚴身の具

及び、田宅、聚落城邑を賞賜し

或は衣服、種種の珍寶

奴婢財物を與へ、歡喜して賜與す

如し勇健にして、能く難事を爲すこと有るには

王の鬘中の、明珠を解きて之を賜はんが如し

如來も亦爾なり、爲れ諸法の王

忍辱の大力、智慧の寶藏あり

大慈悲を以て、法の如く世を化す

一切の人の、諸の苦惱を受けて

解脫を欲求し、諸の魔と戰ふを見て

是衆生の爲に、種種の法を説き

大方便を以て、此諸經を説く

既に衆生、其力を得已んぬと知りては

【我が減度の後】  
以下は總じて四安  
樂行の成ずる由を  
明すの偈頌。中初  
に四行を結勸し、  
是經を讀まん者は  
以下は三障（苦業  
惑）清淨即ち是れ  
三報轉なるを明す

末後乃爲に、法華を讀きたまふ

王、譬の、明珠を解きて之を與へんが如し

此經は爲れ尊、衆經の中の上なり

我常に守護して、妄りに開示せず

今しく是れ時なり、汝等が爲に説く

我が減度の後に、佛道を定めん者

安樂に、此經を演説することを得んと欲せば

應に是の如き、四法に却近すべし

是經を讀まん者は、常に憐愍無く

又痛無く、顔色鮮白なるん

貧窮卑賤、醜陋に生されど

衆見んと樂ふこと、賢聖を慕ふが如くならん

天の諸の童子、以て給使を爲さん

刀剣も加へず、毒も害すること能はず

若し人惡み罵らば、口即ち閉塞せん

實行するに覺れ無きこと、師子王の如く

智慧の光明、日の照す如くならん

若し夢の中に於ても、但妙なる事を見ん

諸の如來の、師子の座に坐して

諸の比丘衆に、圍繞せられて説法したまふを見ん

又龍神、阿修羅等

難恆沙の如くにして、恭敬し合掌し

自ら其身を見るに、而も爲に法を説くを見ん

又諸佛の、身相金色にして

無量の光を放ちて、一切を照し

梵音聲を以て、諸法を演説し

佛四衆の爲に、無上の法を説きたまふ

身を見るに中に處して、合掌して佛を讃じ

法を聞きて歡喜して、供養を爲し

陀羅尼を得、不退智を證す

佛其心、深く佛道に入れりと知しめして

即ち爲に最正覺を、成ずることを授記して

汝善男子、當に來世に於て

無量阿僧祇劫、佛の大道を得て

國土淨にして、廣大なること比無く

亦四無有りて、合掌して法を聽くべしとのたまふを見ん

又貞雄、山林の中に在りて

善法を修習し、諸の實相を證し

深く禪定に入りて、十方の佛を見たてまつると見ん

諸佛の身金色にして、百福の相莊嚴したまふ

法を講き人の爲に説く、常に是好き有らん

又尊びらく國王と作りて、宮殿香園

及び七妙の五欲を捨てて、道場に行詣

菩提樹下に在りて、獅子の座に處し

道を求むること七日を過ぎて、諸佛の智を得

無上道を成り已りて、起ちて法輪を轉じ

四生の爲に法を説くこと、千萬億劫を經

無量の妙法を説きて、無量の衆生を度し

眞に眞に涅槃に入ること、聲聞等二種の波ゆるが如し

若し諸の經律の中に、是第一の法を説出ば

是人大利を得んこと、上の諸の功德の如くならん

從地涌出品第十五

【從地涌出品】本  
化大菩薩の涌出よ  
り久遠實成の開顯  
に至るを明す。  
【一】涌出序、初  
に他土弘經を請う  
て本化の涌出を促  
すを明す。

【二】下方より本  
化の涌出する相を  
明す。

爾時、他方の國土の諸の來れる菩薩摩訶薩の八恆河沙の數に過ぎたる、大衆の中に於て起立し、合掌し、禮を作して、佛に白して言さく、「世尊、昔、我等、佛の滅後に於て、此娑婆世界に在りて、勤加精進して、是經典を護持し、讀誦し、書寫し、供養せんことを盡したまはば、當に此土に於て廣く之を説きたてまつるべし。」

爾時、佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまはく、「止むれ、善男子、汝等が此經を説き止んことを須ひじ。所以は何ん、我が娑婆世界には、自ら六萬恆河沙等の菩薩摩訶薩有り。一一の菩薩に、各六萬恆河沙の眷屬有り。是諸人等能く我が滅後に於て、護持し、讀誦し、廣く此經を説かん。」

佛是を説きたまふ時、娑婆世界の三千大千の國土、地皆震裂して、其中より無量千萬億の菩薩摩訶薩有りて同時に涌出せり。是諸の菩薩は身皆金色にして、三十二相、無量の光明あり。先より盡く此娑婆世界の下、此界の虚空の中に在りて住せり。是諸の菩薩、釋迦牟尼佛の説きたまふ所の音聲を聞きて、下より發來せり。一一の菩薩、皆是れ大衆の唱導の首なり。各六萬恆河沙の眷屬を將ひたり。況んや五萬、四萬、三萬、二萬、一萬、一萬恆河沙等の眷屬を將ひたる者をや。況んや復乃至一恆河沙、半恆河沙、四分の一、乃至





否や。世尊をして疲勞を生さしめざるや。」

爾時、四大菩薩、前も備を言きて言さく、

世尊は安樂にして、少病少惱にましますや

衆生を教化したまふに、苦惱無きことを得たまへりや

又世尊の衆生、化を受くこと易しや否や

世尊をして、疲勞を生さしめざるや

爾時、世尊、諸の菩薩大衆の中に於て、是言を作したまはく、「是の如し是の如し。諸の

善男子、如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は、化度すべきこと易し。疲勞有る

こと無し。所以は何ん。是諸の衆生は、世世より已來、常に我が化を受けたり。亦過去

の諸佛に於て供養し尊重して諸の善根を種ふたり。此諸の衆生は好め我が身を見、我

が所説を聞きて、即ち皆信受して如來の慧に入りなき。先より修習して小乘を學べる者を

ば除く。是の如きの人も、我今亦是經を聞きて佛慧に入ることを得しむ。

爾時、諸の大菩薩、而も偈を説きて言さく、

善哉善哉、大雄世尊

諸の衆生等、化度したまふべきこと易し

能く諸佛の、甚深の智慧を問ひたてまつり

聞き已りて信解せり、我等隨喜す

【四】疑念序。此土の菩薩涌出の事について疑念を起して問へるを明す

時に佛、上方の華の文菩薩を成就したまはく、「昔い流音の戦、萬男子、汝等も亦來に於て、隨喜の心を發せり。」

爾時、彌勒菩薩及び八千恆河沙の諸の菩薩、皆疑念を作さく、「我輩昔より已來、是の如き大菩薩無量無算の地より涌出して、世間の處に住して、合掌し、供養して、如來を問訊したてまつるを見ず聞かず。」

時に彌勒菩薩、彌勒、八千恆河沙の諸の菩薩、皆疑念の心の所念を知り、共に自ら所疑を問せん」と欲して、合掌し、佛に向ひて、佛を以て問ふは曰く、

彌勒菩薩、諸の菩薩、

昔も我だ實に見ざる所なり、爾時に彌勒菩薩等、

是れ何れの所より來れる、何の所疑を以てか集まれる

其の如しき大菩薩あり、智慧如鏡の如し

其の如しき大菩薩あり、智慧如鏡の如し

其の如しき大菩薩あり、智慧如鏡の如し

其の如しき大菩薩あり、智慧如鏡の如し

其の如しき大菩薩あり、智慧如鏡の如し

其の如しき大菩薩あり、智慧如鏡の如し

其の如しき大菩薩あり、智慧如鏡の如し

是諸の大賢等、六萬恒河沙あり

俱に來りて佛を供養し、及て是經を聽持す

五萬恒沙を寫したる、其數是よりも過ぎたり

四萬及び三萬、二萬より一萬に至る

一千一百等、乃至一恒沙

半及び三四分、億萬分の一

千萬那由他、萬億の諸の弟子

乃し半億に至る、其數復上よりも過ぎたり

百萬より一萬に至り、一千及び一百

五十と一十と、乃至三三二一

單已にして眷屬無く、獨處を樂ふ者

俱に佛の所に來至する、其數轉た上よりも過ぎたり

是の如き諸の大衆、若し人壽を行いて數ふること

恆沙劫を過ぐとも、猶盡して知ること能はじ

是諸の大威徳、精進の菩薩衆

誰か其が爲に法を説きて、教化して成就せる

誰に従ひて初めて發心し、何れの佛法をか稱揚し

【釋】物を數ふる時、記憶の爲、數とするもの、計數の矣。

阿耨多羅三藐三菩提  
一切衆生悉皆成佛

此の如き諸の菩薩、神通大智力あり

四方の諸國として、皆中より涌出せり

諸國共昔より來、未だ曾て是事を見ず

爾くは其國從り、阿耨の名號を説きたまへ

我當に諸國に起てとも、未だ曾て是事を見ず

我亦衆の中に於て、乃し一人をも識らず

忽然に地より出たり、願くば其因縁を説きたまへ

今此大會の、阿耨三千位なる

是諸の菩薩、皆此事を知らんと欲す

是諸の菩薩衆の、本末の因縁あるべし

阿耨の國、阿耨くは衆の疑を決したまへ

爾時、阿耨坐相佛の分身の諸佛、無量千萬億の諸佛の國土より來りたまへる者、八方の

諸の菩薩の如く座の上に在して、結跏趺坐したまへる、其佛の侍者、各に是菩薩

大衆の一千大千世界の四方に於て、地より涌出して虚空に坐せしを見て、各其佛に白し

て言さく、世尊、此諸の無量無阿僧祇の菩薩大衆は何れの所より來れる乎

爾時、諸佛の侍者に言けたまはく、一諸の菩薩、是く諸佛を行て。菩薩摩訶薩有り、

【六】 佛の誠言を明す。

【阿逸多】 アシタ(阿逸多) 無能譯と譯す。彌勒の字なり。

【七】 以下正しく開近、遠を説く、初に略して彌を聞

名を彌勒と曰ふ。彌勒牟尼佛の略記したまふ所なり。次で後に作持すべし。已に前事を問ひたてまつる。佛、今之に答へたまはん。汝等自ら當に是に因りて聞くことを得べし。爾時、釋迦牟尼佛、彌勒菩薩に告げたまはく、善い哉善い哉、阿逸多、乃し能く佛に基の如きの大事を問へり。汝等當に共に一心に精進の鏡を被、堅固の意を發すべし。如來、今諸佛の智慧、諸佛の自在神通の力、諸佛の師子奮迅の力、諸佛の威猛大勢の力を顯發し宣示せんと欲す。

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を讀みて告げく、

當に精進して一心なるべし、我此事を説かんと欲す

疑悔有ることを得ること勿れ、佛智は思議し可し

汝今信力を出だして、忍辱の中に住せよ

昔より未だ聞かざる所の法、今皆當に聞くことを得べし

我今汝を安慰す、疑懼を懐くことを得ること勿れ

佛は不實の語無し、算量量るべからず

得る所の第一の法は、甚深にして分別し可し

是の如きを今當に説くべし、汝等一心に聽け

爾時、世尊、此偈を説き已りて、彌勒菩薩に告げたまはく、我、今此大衆に於て、汝等に

宣告す。阿逸多、是諸の大菩薩摩訶薩の無量無數阿僧祇にして地より涌出する、汝等、

昔より未だ見ざる所の者は、我、是娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得たりて、是諸の菩薩を教化し、示導し、其心を調伏して道の意を興さしめたり。此諸の菩薩は皆是娑婆世界の王、此界の虚空の中に於て住せり。諸の經典に於て讀誦通利し、愚智分別し、正覺を得り。阿耨多、是諸の善男子等は、樂に在りて多く所説有ることを樂はす。常に靜たる處を樂ひ、勤行精進して未だ曾て休息せず。亦人々に依止して住せず。常に深智を樂はす。佛の言ふこと無し。亦常に諸佛の法を樂ひ、一心に精進して無上道を求め。

爾時、世尊、更以て此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

阿耨汝當に知るべし、是諸の菩薩は

無殺劫よ、無、佛の毀譽を修習す。

悉く是れ我が教化をして、大道心を發さしめたり

此處に是れ我が子なり、是世界に依止す。

常に阿耨多羅三藐三菩提を求む、靜に其身を安樂し。

大業の積留を捨てて、所定なきを樂はす。

其の如き諸の菩薩は、我に依止して

日夜に常に佛に隨ひ、佛の法を求むるを爲すの故に

是諸世界の、下方の國中に在りて住す。

志の堅固にして、常に佛の法を求む。

【伽耶城】ガヤ  
印度摩揭  
陀國パト  
ナの西南  
六十二哩  
の地なり  
率成道の  
地なり。

【八】大衆如來の  
疑を解せずして  
久遠を聞顯せられ  
んと請ふ。即ち動  
執生疑の段なり。

種種の妙法を説きて、其心畏るる所無し

我伽耶城、菩提樹下に於て坐して

最正覺を成ずることを得て、無上の法輪を轉じ

滿して乃し之を教化して、初めて道心を發さしむ

今皆不退に住せり、悉く當に成佛することを得べし

我今實語を説く、汝等一心に信ぜよ

我久遠より來、是等の衆を教化せり

(八) 爾時、彌勒菩薩摩訶薩、及び無數の諸の菩薩等、心に疑惑を生じ、未曾有なりと怪し

んで、是念を作さく、云何が世尊、少時の間に於て是の如き無量無邊阿僧祇の諸の大菩

薩を教化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたまへる。即ち佛に白して言さく、「世尊、

如來太子爲りし時、釋の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅

三藐三菩提を成ずることを得たまへり。是より已來、始めて四十餘年を過ぎたり。世尊、

云何が此少時に於て大いに佛事を作したまへる。佛の勢力を以てや、佛の功德を以てや、

是の如き無量の大菩薩衆を教化して當に阿耨多羅三藐三菩提を成じし、たまふ。世尊、此

大菩薩衆は、假使人有りて千萬億劫に於て數ふとも盡すこと能はず、其邊りを得じ。斯等

は久遠より已來、無量無邊の諸佛の所に於て、諸の善根を種ゑ、菩薩の道を成就し、常に

梵行を修せり。世尊、此の如きの事は世の信じ難き所なり。譬へば人有りて色美しく髮黒



くして年二十五なる、百歳の人を指して、是れ我が子なりと言ひ、其百歳の人亦年少を指して、是れ我が父なり、我等を生育せりと言はん、是事信じ難きが如し。佛も亦是の如し。道を得たまひてより已來、其れ實に未だ久しからず。而るに此大衆の諸の菩薩等は已に無量千萬億劫に於て、佛道の爲の故に勤行精進し、善く無量百千萬億の三昧に入、出仕し、大神通を得、久しく梵行を修し、善能く次第に諸の善法を習ひ、問答に巧に、人中の寶として、一切世間に善だ爲れ希有なり。今日世尊、方に佛道を得たまひし時、初めて真心せしめ、教化し示導して阿耨多羅三藐三菩提に向はしめたりと云ふ。世尊、佛を得たまひてより未だ久しからざるに、乃し能く此大功徳の事を作したまへり。我等は復佛の隨宜の所説、佛の所出の言、未だ信て成要ならずと信じ、佛の所説は皆悉く通達すと雖も、然も佛の智慧の善徳は、佛の滅後に於て、若し是語を聞かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯然なり、世尊、爾くば爲に厭離して、我等が疑を除きたまへ。及び未來世の諸の善男子、此事を聞き已りなば亦疑を生ぜじ。

爾時、彌勒菩薩、重ねて此教を宣べんと欲して、佛を説きて言まく、

佛事釋尊より、出家して無耶に近く、  
 菩提樹に坐したまへり、圓りしより、未だ未だ久しからず。  
 此諸の善男子等は、其數量るべからず。  
 久しく已に佛道を行じて、神通智力に任せり。

善く菩薩の道を學して、世間の法に染まらざること  
蓮華の水に在るが如し、地より而も涌出し  
皆恭敬の心を起して、世尊の前に住せり  
是事思議し難し、云何が信すべき  
佛の道を得たまへることは甚だ近く、成就したまへる所は甚だ多し  
願くば爲に衆の疑を除き、實の如く分別し説きたまへ  
譬へば少く壯なる人の、年始めて二十五なる  
人に百歳の子の髮白くして面皺めるを示して  
是等は我が所生なりといひ、子も亦是れ父なりと説かん  
父は少くして子は老いたる、世擧りて信ぜざる所ならんが如く  
世尊も亦是の如し、道を得たまひてより 來甚だ近し  
是諸の菩薩等は、志固くして怯弱無し  
無量劫より來、而も菩薩の道を行ぜり  
難問答に巧にして、其心畏るる所無く  
忍辱の心決定し、端正にして威徳有り  
十方の佛の讚めたまふ所なり、善能く分別し説けり  
人衆に在ることを樂はず、常に好みて禪定に在り



三誠三請といふ。更に一請一誠ありて即ち四請四誠なり。方便品の三請一誠と合して前後五誠七請を以て一期の大事の故を以てなりと知るべし。

【二】如來の三世益物中過去益物を明す。【如來の秘密神通力】この一句は本品の極要、天台は如來の二字は三身相即の佛、祕は一身即三身、密は三身即一、神通力の三字は法報應の三身を表はすと判ず。即ち俱體俱用の三身なり。日蓮久之に依て三大秘法を立す。

『汝等諦かに聽け、如來の秘密神通の力を。一切世間の天人、及び阿僧祇は、皆今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり。然るに善男子、我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由他劫なり。譬へば百千萬億那由他阿僧祇の三千大千世界を、假使人有りて抹して微塵と爲して、東方百千萬億那由他阿僧祇の國を過ぎて乃ち一塵を下し、是の如く東に行きて是微塵を盡さんが如し。諸の善男子、意に於て云何。是諸の世界は思惟し、校計して其數を知ることを得べしや不や。』

彌勒菩薩等、俱に佛に白して言さく、『世尊、是諸の世界は、無量無邊にして、算數の知る所に非ず。亦心力の及ぶ所に非ず。一切の聲聞、辟支佛、無漏智を以ても、思惟して其限數を知ること能はず。我等阿惟越致地に住すれども、是事の中に於ては、亦達せざる所なり。世尊、是の如き諸の世界は、無量無邊なり。』

爾時、佛、大菩薩衆に告げたまはく、『諸の善男子、今當に分明に汝等に宣語すべし。是諸の世界の若し微塵を著き、及び著かざる者を盡く以て塵と爲して、一塵を一劫とせ

ん。我成佛してより已來、復此に過ぎたること百千萬億那由他阿僧祇劫なり。是より來、我常に此娑婆世界に在りて說法し教化す。亦餘處の百千萬億那由他阿僧祇の國に於ても衆生を導利す。諸の善男子、是中間に於て我燃燈佛等と説き、又復其れ涅槃に入ると言ひき、是の如きは皆方便を以て分別せしなり。諸の善男子、若し衆生有りて、我が所に來至する

【信等の諸根】信、進、念、定、慧の五根。

【名字の不同等】佛名の不同、佛壽の長短を云ふ。

【三】次に現在縁物を指す。

【小法】法戒を説いて久遠を以てさるる諸法以前の諸法に於て、小乘の義に非ず。

【佛薄伽梵】佛子二種の異出、東方を以て娑婆、世界の彌陀と云ふされざるを以て用

【成は己身等】佛の身を成するを己身、九界の身を成するを他身と云ふ。是れ佛身中に成するは己身、他身に成するは他身。

【如来は梵天】如来は梵天に於て示す。

【如来は梵天】如来は梵天に於て示す。

【如来は梵天】如来は梵天に於て示す。

【如来は梵天】如来は梵天に於て示す。

【如来は梵天】如来は梵天に於て示す。

には、我、佛眼を以て其信等の諸根の利鈍を觀じて、應に度すべき所に隨ひて、虚處に自ら名字の不同等、佛の大小を説き、亦復現じて常に涅槃に入るべしと言ひ、又復種の方便を以て微妙の法を説きて、能く衆生をして救済の心を發さしめき。

諸の善男子、如来は、諸の衆生の小法を掌へる、佛薄伽梵の者を見て、是人の身に、我少くして出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く。然るに我實に成佛してより以來、久遠なること斯の若し。但方便を以て衆生を教化して佛道に入らしめんとして是の如き説を作す。諸の善男子、如来の演ぶる所の妙法は皆衆生を度脱せんが爲なり。我は己身を説き、我は他身を説き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は他事を示す。諸の言説する所は、皆實にして虚ならず。所以は何ん。如来は實に三界の相を知悉するに、生死の智は現若は用有ること無し。亦在世及び滅度の若無し。實に非ず虚に非ず。我に非ず異に非ず。三界の三界を見るが如くならず。斯の如きの者、何處に於て見ず。佛眼を以て觀じて、諸の衆生の、種種の性、種種の欲、種種の行、種種の智解分別有るを以ての故に、諸の言説を生ぜしめんと欲して、若干の因縁、譬喩、言辭を以て佛眼に法を説く。

所作の如事、未だ行て暫くも廢せず。是の如く我成辨してより以來、甚大いに久遠なり。諸の衆生の佛眼助なり。常法にして滅せず。諸の善男子、我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命、今猶未だ盡せず。彼上の説に依せり。然るに今實の滅度に非ざれども、而も佛の唱へて、常に滅度を期するべしと言ふ。如来、是方便を以て衆生を教化す。所以は何ん。若

【如来は梵天】如来は梵天に於て示す。

【如来は梵天】如来は梵天に於て示す。

し。如來、三界の相を見るに就て六の知見あり。即ち(一)如來の知見によれば三界の生死因果あることなし。(二)在世間度後の衆生に差別なし。(三)生死は虚なるに非ず。業は實なるに非ず。(四)三界の差別相即ち道の體なるが故に如に非ず異に非ず。(五)如來の三界を見るは衆生の三界を見るが如くならず。(六)如來の知見は衆生の妄見と異なるが故に眞謬あることなし。  
 【四】譬を以て三世諸物を述す。良醫の譬なり。

し佛久しく世に住せば、薄徳の人は善根を盡さず、貧窮下賤にして五欲に貪著し、體相を  
 見の網の中に入りなん。若し如來は常に在りて滅せざるを見ば、便ち憍恣を起して、軍意  
 を懷き、難離の想、恭敬の心を生ずること難はじ。是故に如來方便を以て説く。此正當に  
 知るべし、諸佛の出世には值遇すべきこと難し」と。所以は何ん。諸の薄徳の人は、無量  
 百千萬億劫を過ぎて、或は佛を見ること有り。或は見ざる者あり。此事を以ての故に、我  
 是言を作す。一者の比丘、如來を見ることを得べきこと難し」と。斯業生等、是の如き語を  
 聞きては、必ず當に難遣の想を生じ、心に纏慕を懷き、佛を渴仰して、便ち善根を積むべ  
 し。是故に如來實に滅せずと雖も而も滅度すと言ふ。又善男子、諸佛如來は法皆是の如し。  
 衆生を度せんが爲なれば皆實にして虚しからず。

譬へば良醫の智慧聰達にして、明かに方藥に練し、善く衆病を治す。其人諸の子息多  
 し、若し十、二十乃至百數なり、事の縁有るを以て遠く餘國に至りぬ。諸の子、後に他の  
 毒藥を飲む。藥發し、悶亂して地に宛轉す。是時、其父還り來りて家に歸りぬ。諸の子、  
 を飲みて、或は本心を失へる、或は失はざる者あり。遙に其父を見て皆大いに歡喜し、環  
 跪して問訊すらく。善く安隱に歸りたまへり。我等愚癡にして誤りて毒藥を服せり。願く  
 ば救癒せられて更に壽命を賜へし。

父、子等の苦惱すること是の如くなるを見て、諸の經方に依りて、好き藥草の色香美味  
 皆悉く具足せるを求めて、擗篩和合して、子に與へて服せしむ。而も是言を作さく。此



【法】 法爾。自然の意。

【五】 偈もて前の法説、譬説を共に頌す。初より久しく業を修して得る所なりまては三徳の益物を頌す。

【靈鷲山】 梵にグリドラクータ(Gridhrakuta)者闍闍山のこと。此山には靈仙多く居住す又鷲鳥遊集するが故に名くと種種の説有り。中印度摩揭陀國王舎城の東北に聳ゆる山にして釋尊説法の地として有名なり。

佛の言はく、我も亦是の如し。成傳してより已來、無量無邊百千萬億那由他阿僧祇劫なり。衆生の爲の故に、方便力を以て當に滅度すべしと言ふ。亦能く法の如く我が虚妄の過を説く者有ること無けん。

爾時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

我偈を得てより來、經たる所の諸の劫數、無量百千萬億載阿僧祇なり

常に法を説きて、無數億の衆生を教化して

佛道に入らしむ、闍りしより來無量劫なり

衆生を度せんが爲の故に、方便して涅槃を現す

而も實には滅度せず、常に此に住して法を説く

我常に此に住すれども、諸の神通力を以て

顛倒の衆生をして、近しと雖も而も見えざらしむ

衆我が滅度を見て、廣く舍利を供養し

成く皆戀慕を懷きて、渴仰の心を生ず

衆生既に信伏し、質直にして意柔軟に

一心に佛を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜まず

時に我及び衆僧、俱に靈鷲山に出づ



【常に靈鷲山……】

【住持に云り】第一

句は「光土實報土」

界を示すもりに

して之を香量の四

土に云ふ。

【我が師は……】

【我が師は……】

【我が師は……】

【我が師は……】

【我が師は……】

【我が師は……】

我時に衆生に語る、常に此に在りて滅せず

方便力を以ての故に、滅不滅有りて現す

餘國に衆生の、恭敬し信樂する者有らば

我復彼の中に於て、爲に無上の法を説く

汝等此を聞かずして、但我滅度すと謂へり

我々の衆生を見るに、苦惱に没在せり

故に身に身を現せずして、具をして潜御を生かすむ

其心の懸礙するに因りて、乃ち出でて爲に法を説く

願勝力是の如し、阿僧祇劫に於て

常に靈鷲山、及び餘の諸の住處に在り

衆生劫盡きて、大火に燒かるると見る時も

我が此土は安隱にして、天人常に充滿せり

園林諸の堂閣、種種の寶もて莊嚴せり

寶樹華果多くして、衆生を遊樂する所なり

諸の天鼓を撃ちて、常に衆の伎樂を作し

曼陀羅華を雨として、佛及び衆に散す

我が淨土は燃れざるに、而も衆は燒け盡きて

【三寶】 佛法僧。

恐怖諸の苦惱、是の如き悉く充滿せりと見る  
是諸の罪の衆生は、惡業の因縁を以て

阿僧祇劫を過ぐれども、三寶の名を聞かず

唯の行ゆる功德を修し、柔和質直なる者は

則ち皆我が身、此に在りて法を説くと曰る

或時は此業の爲に、佛壽無量なりと説く

久しくして乃ち佛を見たまつる者には、爲に佛には値は難しと説く

我が智力是の如し、慧光照すこと無量にして

壽命無數劫なり、久しく業を修して得る所なり

汝等智有らん者、此に於て癡を生ずること勿れ

常に斷じて永く盡さしむべし、佛語は實にして虚しからず

醫の善き方便もて、狂子を治せんが爲の故に  
實には在れども而も死すと云ふに、能く虚妄を説くもの無きが如く

我も亦爲れ世の父、諸の苦患を救ふ者なり

凡夫の顛倒せるを爲て、實には在れども而も滅すと云ふ

常に我を見るを以ての故に、而も憍恣の心を生じ

放逸にして五欲に著し、惡道の中に墮ちなん

【汝等智有らん者】  
以下四句は上述の  
實にして虚しから  
ざるを結す。  
【醫の善き方便等】  
以下良醫の譬喩説を  
頌す。



訶薩有りて二生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復一四天下微塵數の菩薩摩訶薩有りて一生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。復八世界微塵數の衆生有りて皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發しつゝ。

佛は是の菩薩摩訶薩の大法利を得ることを説きたまふ時、虚空の中より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華を雨らして、以て無量百千萬億の寶樹の下の師子の座の上の諸佛に散じ、並にじ寶塔の中の、師子の座の上の釋迦牟尼佛、及び久滅度の多寶如來に散じ、亦一切の諸の大菩薩、及び四部の衆に散す。又細抹の梅檀、沈水香等を雨らし、虚空の中に於て天鼓自ら鳴りて妙聲深遠なり。又千種の天衣を雨らし、諸の瓔珞、眞珠瓔珞、摩尼珠瓔珞、如意珠瓔珞を垂れて九方に遍ぜり。衆寶の香爐には無價の香を燒き、自然に開く至りて大會に供養す。一一の佛の上に諸の菩薩有りて、幡蓋を執持し、次第に上りて梵天に至る。是の諸の菩薩、妙なる音聲を以て、無量の頌を歌して諸佛を讚歎したてまつる。爾時、彌勒菩薩、座より而も起ちて、偏に右の肩を袒き、合掌し佛に向ひたてまつりて偈を説きて言さく、

佛希有の法を説きたまふ、昔より未だ曾て聞かざる所なり

【佛希有の法等】  
以下歡喜身に充遍すまでは時衆の領解を述べ。

世尊は大力有して、壽命量るべからず  
無數の諸の佛子、世尊の分別して  
法利を得る者を説きたまふを聞きて、歡喜身に充遍す

【或は不盡の地等】  
以下無量の無量なる  
地等ありては相  
束の分別を明す。

或は不盡の地に住し、或は梵羅尼を得

或は無量の樂説、萬億の旋總持あり

或は大千界、微塵数の菩薩有りて

各に堪能く、不盡の法輪を轉す

復中千界、微塵数の菩薩有りて

各に堪能く、清淨の法輪を轉す

復小千界、微塵数の菩薩有りて

餘り、各八生有りて、當に補道を成ずることを得べし

或は四三三、此の如き四天下

微塵数の菩薩有りて、衆の生に隨じて成佛せん

或は一四八下、微塵数の菩薩

餘り一生存心こと有りて、當に一阿僧祇を得べし

是の如き等の樂生、佛壽の長遠なることを聞きて

無量無漏の清淨の果報を得

復八寶界、微塵数の衆生有りて

佛の壽命を説きたまふを聞きて、皆無上の心を發す

世尊無量、不可思議の法を説きたまふに

【天の曼陀羅等】  
以下は時摩の供養  
を明す。

多く僉益する所有ること、虚空の無邊なるが如し  
天の曼陀羅、摩訶曼陀羅を雨らして  
釋梵恆沙の如く、無數の佛土より來れり  
梅檀沈水を雨らして、繽紛として亂れ墜つること  
鳥の翔んで空より下るが如くにして、諸佛に供散し  
天鼓虚空の中にして、自然に妙なる聲を出だし  
天衣千萬億、旋轉して來下し  
衆寶の妙なる香爐に、無價の香を燒きて  
自然に悉く周遍して、諸の世尊に供養す  
其大菩薩衆は、七寶の幡蓋の  
高妙にして萬億種なるを執りて、次第に梵天に至る  
一一の諸佛の前に、寶幢に勝幡を懸けたり  
亦千萬の偈を以て、諸の如來を歌詠したてまつる  
是の如き種種の事、昔より未だ曾て有らざる所なり  
佛壽の無量なることを聞きて、一切皆歡喜す  
佛の名十方に聞えて、廣く衆生を僉益したまふ  
一切善根を具して、以て無上の心を助く

【三】 初四の功  
を明す、初に現  
在の四信中、今一  
念信解を説く。

【檀波羅蜜】 ダー  
ラパーラミター  
Dānapāramitā) 布  
施なり

【尸波羅蜜】 シ  
パーハミター  
Śīlāpāramitā) 戒  
律なり

【三波羅蜜】 ク  
ンティンイパー  
スケー Kānti  
pāramitā) 施、戒、忍なり

【持波羅蜜】 ドヤ  
ミヤラミター  
Dharmapāramitā) 智識なり

【般若波羅蜜】 プ  
ラーヤーラー  
Prajñāpāramitā) 智識なり

爾時、佛、勸善薩摩訶薩に言げたまはく、「阿逸多、其れ衆生有りて、佛の壽命の長遠なること是の如くなるを聞きて、乃至能く一念の信解を生ぜば、得る所の功德、限量有ること無けん。若し善男子善女人有りて、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、八十萬億那由他劫に於て、五波羅蜜を行ぜん。檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜なり。般若波羅蜜をば除く。是功德を以て前の功德に比ぶるに、百分、千分の百千萬億分にして、其にも及ばず。乃至算數譬喩も知ること能はざる所なり。若し善男子、是の如き功徳有りて、阿耨多羅三藐三菩提に於て退すといはば、是處有ること無けん。」

若し人徳を求めて、八十萬億那由他の功徳に於て、五波羅蜜を行ぜん

是の功徳の中に於て、佛の壽命の長遠に布施し供養せん

檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜なり、並に般若波羅蜜に布施し供養せん

檀波羅蜜を以て、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、八十萬億那由他劫に於て、五波羅蜜を行ぜん

檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜なり、並に般若波羅蜜に布施し供養せん

無上道の、諸佛の教じたまふ所なるを求めん

若し復忍辱を行じて、調柔の地に住し

設ひ衆の惡來り加ふとも、其心傾動せざらん

諸の有ゆる得法の者の、増上慢を懐ける

斯に輕しめ惱されん、是の如きをも亦能く忍ばん

若し復勤めて精進し、志念常に堅固にして

無量億劫に於て、一心に懈怠せざらん

又無數劫に於て、空閑の處に住して

若は坐し若は經行し、睡を除きて常に心を攝めん

是因縁を以ての故に、能く諸の禪定を生じ

八十億萬劫に安住して心亂れず

此一心の福を持ちて、無上道を願求す

我一切智を得て、諸の禪定の際を盡さんと

是人百千、萬億の劫數の中に於て

此諸の功徳を行すること、上の所説の如くならん

善男女等有りて、我が壽命を説くを聞きて

乃至一念も信せば、其福彼に過ぎたらん





【閻浮檀金】 ジャムブナダヌヅルナ (Jambhuna yvna) 閻浮樹の下を流るる河に生ずる沙金のこと。

【五】 滅後の五品を列ねて四品の功德を格量す。

【何に況や等】 受持誦誦する者の功德を説く、是れ第二誦誦品。

【四事】 衣服、飲食、臥具、醫藥の四種の供養。

【阿逸多、若し我が等】 他を勸め受持誦誦せしむる者、功德を説く。是れ第三説法品。

【赤梅檀】 チヤンダナ (Chandana) 赤色梅檀なり。

供養せんをや。是人の功德は、無量無邊にして、能く一切種智を生ぜん。阿逸多、若し善男子、善女人、我が壽命の長遠なるを説くを聞きて、深心に信解せば、即ち爲れ佛、常に眷屬無由に在して、大菩薩の眷屬來ると共に説法するを見、又此寶樹、寶樹行樹、諸寶樹觀、若悉地琉璃にして坦然平生に、閻浮檀金、以て八道を具ひ、寶樹行樹、諸寶樹觀、若悉く寶樹を成じて、其菩薩衆、其中に處せるを見ん。若し能く是の如く觀すること有らん者は、當に知るべし、是を深信解の相と爲く。

又復如來の滅後、若し是經を聞きて而も野營せずして隨喜の心を起さん。當に知るべし、已に深信解の相と爲く。何に況んや讀誦し、受持せん者をや。此人は、即ち爲れ如來を頂戴したてまつるなり。阿逸多、是善男子、善女人は我が爲に復營寺を起て、及び僧坊を作り、四事を以て衆僧を供養することを須たされ。所以は何ん。是善男子、善女人の是經典を受持し、讀誦せん者は、爲れ已に塔を起て、僧坊を造立し、衆僧を供養するなり。則ち爲れ佛舍利を以て七寶の塔を起て、高廣漸小にして梵天に至り、諸の幡蓋及び衆の寶鈴を懸け、華香、瓔珞、栴檀、栴檀、塗香、燒香、衆寶、伎樂、簫笛、箏琴、種種の樂ありて、妙なる音聲を以て讚頌讚頌するなり。則ち爲れ已に無量千萬億劫に於て是供養を作し已るなり。

阿逸多、若し我が滅後に、是經典を聞きて能く受持し、若し自らも書き、若し人をしても書かしむること有らんは、則ち爲れ僧坊を起立し、赤梅檀を以て諸の殿堂を作ること

【八多羅樹】八の多羅樹なり、多羅ターラ（トシ）は重と譯す。高さ七十尺に及ぶ。印度にては之を以て物の高さを量る尺度に用ふ。一多羅樹の高さを七倍（四十九尺）と定む。

【泥んや復等】六度を兼行する者の功徳を説く。第四兼行六度は、若し人は是の六度を正行し、五正行六度

三十有二、高八多羅樹、百嚴好にして、百千の其正其中に於て止み、園林、浴池、經行、二齋、衣、飲食、床、湯藥、一切の樂具其中に充滿せん。是の如き僧坊、堂閣、若干百千僧位にして其數無量なる、其を以て現前に我及び比丘僧に供養するなり。其に我、如來の滅後に若し持し、誦誦し、他人の爲に説き、若し自らも書き、若し人をして誦誦し、能く供養すること有らんは、四塔寺を起て、及び僧坊を造り、衆僧を養ふこと須たされ。泥んや復人有りて、能く持し、戒、忍辱、一心、智慧を行ぜんをや。其徳勝にして無量邊ならん。譬へば虚空の東、西、南、北、四州、上り、無量邊なるが如く、是人の功徳も、亦復是の如し。無量無邊にして、一に一切僧位に供らん。若し人は是を讀誦し、愛護し、他人の爲に説き、若し自らも誦き、若し人をして誦き、復能く塔を起て、僧坊を造り、聲聞の衆僧を供養し、衆僧を養ふ高徳の如き法を以て、菩薩の功徳を讚歎し、又他人の爲に種種の因縁の義に踏みて此法を説き解説し、復能く清淨に戒を護ち、柔和の者と共に同止し、忍辱にして隨り無く、衆僧に同にして、常に坐禪を貴び、精進勇猛にして、衆僧を誦し、衆僧にして善く問答を答へん。阿闍多、若し我が滅後に、諸の男子、女人、是經典を受持し、讀誦せん者は、復是の如き衆の善功徳有らん。當に知るべし、是人は此の法に於て、百千多羅樹三藐三菩提に近づきて道樹の下に坐するなり。阿闍多、世尊弟子有女人の、若し此の法を誦し、若し此の法を行せしむれば、其中に於ても佛を起

【六】 滅後の五品  
中四品の功德を明  
すの偈。初めより  
諸の供養を具足す  
るなりまでは第二  
讀誦品。

【七】 塔の上の  
【八】 塔の上の

【九】 若し能く此の經を  
以下種種に宣説す  
に於ては如くして  
は第三説法品。

つべし。一切の天人、菩薩に供養すること佛の塔の如くすべし。時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、若し我々滅度の後に、能く此經を奉持せし、斯人の無量なること、上の所説の如し。是れ則ち爲らば、一切の諸の供養を具足し、舍利を以て塔を建て、七寶して莊嚴し、表裏を以て高廣に、漸小にして塔の上に置り、寶鈴千萬懸にして、風の動かすに妙なる音を出だし、又無量劫に於て、此塔に、香諸の瓔珞、天衣衆の伎樂を供養し、香油燈を燃して、周匝して常に照明なり。惡世に法の時、能く是經を持たん者は、則ち佛の上に上の如く、諸の供養を具足するなり。若し能く此經を持たんは、則ち佛の現在に牛頭栴檀を以て、僧坊を起てて供養し、堂三十二有りて、高さ八多羅樹、上饌妙なる衣、床臥皆具足し。



又應に是念を作すべし、久しからずして道場に詣りて  
無漏無爲を得、廣く諸の天人を利せんと

其所住止の處、經行し若は坐臥し

乃至一偈を誦かん。其中には應に學をばてて

莊嚴し妙好ならしめて、種種に以て供養すべし

佛子此處に住すれば、則ち是れ佛受用したまふ

常に其中に在して、經行し若は坐臥したまはん

妙法蓮華經

卷第六

總持三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

隨喜功德品第十八

【隨喜功德品】前品中に説ける滅後諸品の初品隨喜品。功徳を明す。【一】彌勒の問。

【二】内心に隨喜の心を明す。

爾時、彌勒菩薩摩訶薩、仰止白して曰く、世尊、若し男子若し女人有りて、是の如く、隨喜せん者は、幾所の功を成就す。世尊、佛を説きて言さく、

世尊、滅度之後に、其れ是經を讀むこと有りて、

若し能く隨喜せん者は、幾所の功を成就すべき。

爾時、佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げたまはく、阿難、多、諸天の衆中に、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び在家の智者、若し長、若し幼、是經を聞きて、隨喜し已りて、法會より出で、餘處に在らん。若し僧坊に在り、若し空の處、若し城邑、若し村、若し田里にして、其所に在り、父母、宗親、善友、知識の爲に、力に隨ひて演説せん。其諸人等聞き已りて、隨喜して、演説して轉教せん。其人隨喜して、亦隨喜して轉教せん。是の如く、隨喜して、第五十に在らん。阿難、其第五十の善男子善女人の隨喜の功徳を、我今之を

【四生】 胎、卵、

濕、化の四生。

【有形無形】 有形

は色界色界、無形

は空處天、有想

は無所有處天、

無有想非無想は無

色界の第四天非想

非非想處。

【四浮提】 シヤム

ブドギーバ(シヤム)

【八寶】 八種の

寶を以て、三摩耶を

を以て、三摩耶を

を以て、三摩耶を

を以て、三摩耶を

證かん。汝當に善く聽くべし。若し四百萬億阿僧祇の六變四生の衆生、卵生、胎生、化生、若は有形、無形、有想、無想、非有想、非無想、無足、二足、四足、多

足、是の如き等の衆生の數に在らん者に、人有りて福を求めて、其新羅に歸つて娛樂の具

を皆之に給ふせん。一一の衆生に、鬘浮提に滿てらん金、銀、瑪瑙、神髓、碼碯、珊瑚、

琥珀、諸の妙なる珍寶、及び象馬、車乘、七寶所成の宮殿、樓閣等を與へん。是王施主、

是の如く布施すること八十年を滿じ已りて、是念を作さず、我已に衆生に娛樂の具を施す

こと盡の所に歸へり。然るに此衆生、皆はに衰老して、年八十を過ぎ、廢白く齒落して、法

將に厭せんこと久しからじ。我當に佛法を以て之を訓導すべし。即ち此衆生を集めて、法

化を宣布し、示教利喜して、一時に皆須陀洹道、聲聞合道、阿羅漢道、阿羅漢道を得、諸

の有漏を盡し、阿羅漢に於て持自在を得、八無脫を具せしめん。汝が意に於て云何。是王

施主の所得の功德等々爲れ多しや不や。

爾時、佛に白して言さく、世尊、是人の功德は甚だ多くして無量無邊なり。若是施主、

但衆生に一切の樂具を施さんすら功德無量なり。何に況んや阿羅漢果を得しめんを。

佛、勸助に善言たまはく、我今分明に汝に語らん。是人一切の樂具を以て四百萬億阿僧

祇の世界の六變の衆生に施し、又阿羅漢果を得しめん。得る所の功德は第五十の人の法

華經の一偈を聞きて隨喜せん功德には如かじ。百分、千分、百千萬億分にして其一にも及

ばず。乃至算數譬喩も知ること能はざる所なり。阿逸多、是の如く第五十の人の屍骨して





【四】 上述を偽もて重頌す、初めより初めて聞きて隨喜せん者をやまては内心に隨喜の人の述べ、以下は外の聽法人の功德を明す。

を觀望よ、一人を勸進して往きて法を轉かしむる功德此の如し。何に況んや、一心に法を聽きて讀誦し、而も大衆に於て人の爲に分別、説の如く修行せんをや。」  
爾時、世尊、重ねて是義を宣べんと欲して、偈を誦きて言はく、  
若し人法會に於て、是經典を聞くことを得て  
乃至、傷に於ても、隨喜して他の爲に説かん  
是の如く覺悟して喜ふること、第五十に至らん  
最後の人の法を獲んこと、今當に之を分別すべし  
如し大衆主有りて、無量の衆に供給すること  
其に八十歳を満じて、意の所欲に隨ひて  
彼衰老の如し、髮白くして面皺み  
齒疎にして形枯渴せるを覺て、其れ死せんこと久しかるじ  
我今應當に覺へて、道果を得しむべしと念うて  
即ち爲に方便して、涅槃真實の法を説かん  
世は皆牢固ならざること、水法泡焰の如し  
汝等如く應當に、疾く離世の心を生ずべしと  
諸人は法を聞きて、皆阿羅漢を得て  
六神通、三明八解脫を具足せん

最後第五十四、一偈を聞きて随喜せん

是人の福報に勝れたること、譬喩を爲べからず

是れ如く譬喩して聞くすら、其福報無量なり

何に況んや、實に於て、初めて聞きて随喜せん者をや

若し一人を説きて、將引して法華を聽かしむること有りて

言はまじく是れは甚妙なり、高劫に遇ひ難しと

即ち教を受けし往きて聽きて、乃至須臾も聞かん

斯人の福報、今當に分別して説くべし

佛に口の邊に、齒は疎に黄み置ます

鼻は平く高きを、惡むべきの相有ること無けん

舌は乾く、鼻は高く、目は直からん

顔は廣く、平止に、面目悉く端嚴にして

人に見えしこと言はれん、目の氣は臭穢無くして

佛法華の音、常に其口より出でん

若し佛に佛所に詣り、法華經を讀かんと欲して

佛も聞きて歡喜せん、今當に其福を説くべし

佛は天人の中に生れて、妙なる象馬車

【優鉢華】 ウト:

【法師功德目】隨喜の果の功徳を明して流通を勸む、五種法師各六根清淨の功徳を得るを明す。

【一】總じて六根の功徳の盈縮を列し、又別して六根の清淨を得るを明す、初に眼根。

【有頂】無色界第一の事、非想非非想處天のこと。

珍寶の輩與を得、及び天の宮殿に坐せん  
 若し諸法の處に於て、人を勸めて坐して經を講かしまん  
 是福の因縁もて、釋梵轉輪の座を得ん  
 何に混んや一心に聽き、其義趣を解し  
 説の如く修行せんをや、其福限るべからず

法師功德目第十九

(一)爾時、佛、常精進菩薩摩訶薩に告げたまはく、若し善男子善女人、五佛法華經を受持し、若し讀み、若し誦し、若し解説し、若し書寫せん。是人は、當に八百の眼の功徳、千二百の耳の功徳、八百の鼻の功徳、千二百の舌の功徳、八百の身の功徳、千二百の意の功徳を得べし。是功徳を以て六根を普蒙して、皆清淨ならしめん。是善男子善女人は、父母所生の清淨の肉眼もて、三千大千世界の内外の、有つる山、林、河、海を見ることが、下は阿鼻地獄に至り、上は有頂に至らん、亦其中の一切衆生を見、及び業の因縁、果報の生處、悉く見、悉く知らん。

爾時、世尊、重ねて其義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、  
 若し大衆の中に於て、無所畏の心を以て

思法<sup>シフ</sup>平<sup>ヘイ</sup>報<sup>ヘ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ル</sup>、汝<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>功<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>

凡人<sup>ニ</sup>は八<sup>ノ</sup>百<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>功<sup>ノ</sup>徳<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>得<sup>ル</sup>

思<sup>ハ</sup>を<sup>以</sup>て<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>する<sup>ノ</sup>が<sup>故</sup>に、其<sup>ノ</sup>日<sup>ヲ</sup>其<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>清<sup>ク</sup>淨<sup>ク</sup>する<sup>ノ</sup>

又<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>して、<sup>其</sup>久<sup>ク</sup>三<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>界<sup>ノ</sup>

内外<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

要<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>に<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>日<sup>ヲ</sup>其<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>清<sup>ク</sup>淨<sup>ク</sup>すること

下<sup>ニ</sup>は<sup>其</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>に<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>日<sup>ヲ</sup>其<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>清<sup>ク</sup>淨<sup>ク</sup>すること

其<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

其<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

三<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>界<sup>ノ</sup>に、<sup>其</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

、<sup>其</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

、<sup>其</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

、<sup>其</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

、<sup>其</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

、<sup>其</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

、<sup>其</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

、<sup>其</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>、<sup>其</sup>切<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>受<sup>ケ</sup>す<sup>ル</sup>

天耳を得ずと雖も、父母所生の清淨の常の耳を以て、指悉く聞き知らん。其の如く  
 種種の音聲を分別すとも而も耳根を壞らじ。一  
 時、其聲、頓て此處を宣べんと欲して、獨を説きて言はく、

父母所生の耳、清淨にして濁穢無く

此常の耳を以て、三千世界の聲を聞かん

象馬車牛の聲、鐘鈴螺鼓の聲

琴瑟笙篔の聲、簫笛の音聲

清淨好世の聲、之を聴きて而も著せず

無量諸の人の聲、聞きて悉く能く解了せん

又諸の聲、微妙の歌の音を聞き

及び男女の聲、童子童女の聲を聞かん

由田嶮谷の中の、迦陵頻伽の聲

命命等の諸鳥、悉く其音聲を聞かん

地獄の衆の苦痛、種種の塗炭の聲

彼等の飢渴に逼められ、飲食を求索するの聲

山の阿修羅等の、大海の邊に居在して

自ら共に言語する時、大音聲を出すをも

【迦陵頻伽】カラ  
 マンカ(Kalavinka  
 其の妙聲と稱す、鳥  
 の名。  
 【命命】梵にジ  
 ヲムジ(二)イ  
 ヲムジ(三)といふ、  
 鳥の名、その音聲  
 だまなりといふ。

是の如き法善は、此間に安住して

諸の衆の衆を聞き、而も耳根を離れし

十有餘劫の中、無常の相を相呼べる

其説法の人、此に於てよく之を聞かん

其の梵天上、言及び過行

乃至有頂天の、言及び過行

法師此に住して、よく其之を聞くことを得ん

一切の比丘等、及び諸の比丘等の

若は經典を聞かば、其は他人の爲に善ん

法師此に住して、よく其之を聞くことを得ん

復た其の法を説いて、其法を説いて

其は他人の爲に善ん、其は他人の爲に善ん

其は他人の爲に善ん、其は他人の爲に善ん

其は他人の爲に善ん、其は他人の爲に善ん

其は他人の爲に善ん、其は他人の爲に善ん

其は他人の爲に善ん、其は他人の爲に善ん

其は他人の爲に善ん、其は他人の爲に善ん

下は濁聲はに知り、上は有韻又に至るまで  
皆其音聲を聞きて、而も其義を尋らじ

其の音聲は其の故に、悉く能く分別して知らん

此法華を其の音聲は、未だ其耳を得ずと雖も

但所生の耳を用ふるに、功徳に是の如くたらん

次に、常精進、若し善男子善女人、其法華を讀し、若は讀み、若は誦し、若は稱念

し、若は其處せんに、八百の鼻の功徳と成就せん。其清淨の鼻根を以て、三千大千世界

の上下内外の種種の一切の香を聞かん、阿耨多羅三藐三菩提の香、開提華の香、末利華の香、蓮華

の香、波提華の香、赤蓮華の香、青蓮華の香、白蓮華の香、寶樹の香、氣樹の香、栴檀

の香、沈水の香、多伽藍の香、多伽藍の香、及び千五百種の和せる香、若は採せる、若は

和せる、若は摩訶、摩訶を清ん若は、其間に於てはして、悉く能く分別せん。又復衆

生の香、象の香、馬の香、牛等々の香、男の香、女の香、童子の香、童女の香、及び草木

叢林の香を聞へ知らん。若は近き、若は遠き、有ゆる諸の香、悉く皆聞ふことを得

て、分別して錯をらじ。是の如く若し、覺にはせりと其の香は、上の諸の香を聞が

ん。波利沙華の香、栴檀の香、及阿耨多羅三藐三菩提の香、摩訶鉢摩華の香、曼殊沙華の香、

摩訶摩訶沙華の香、栴檀、沈水、蓮華の香、諸の種種の香、是の如き等の天香より和

合して出す所の香、聞ぎ知らざること無けん。又諸天の身の香を聞かば、種種の天の勝

【二】 次二節

【須曼那】スマナ (Sumanā) 一轉音とす。樹の名。

【チカ】(chika) 金銭とす。

【末利華】マツリカ (Muhika) 曼華

【末利】チャム (Canyaka)

【多摩羅】タマ

【多摩羅】タマ  
一ラバットラ (二)



maññatta) 焚香と譯す。

【香伽羅】 タガ

【三芳】 根香と

【波利質多羅】

【三利質多羅】

【波利質多羅】

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

【勝殿】 具に殊勝

殿の上に在りて、法座に坐し、精進する所の香、若しは法堂の上に在りて、切利の諸天

の法に説き、其の香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

香、若しは諸の法に説き、遊戯する所の香、及び餘の天等の男女の身の香、及び餘の天等の

以て三十三天を成

諸人の嚴身のみ、大環及び瓔珞

の塗る所の香、聞きて則ち其身を知らん

諸人の若し行ける者、遊戯及び神變

等法を施したる者、香を聞きて悉く能く知らん

諸人の華鬘實、及び香油の香氣

持經者は鼻に付して、悉く其所在を知らん

諸山の深く險しき處に、梅檀樹の華敷き

草生の中に在る者、香を聞きて悉く能く知らん

諸山大樹、地中の諸の衆生

其無香は香を聞きて、悉く其所在を知らん

諸修羅の男女、及び其山の眷屬の

諸神、遊する時、香を聞きて皆能く知らん

諸野禽隘の處に、虎狼

野牛水牛等、香を聞きて所在を知らん

若し懷妊する者有りて、未だ其男女

無形及び非人を辨へざるを、香を聞きて悉く能く知らん

香を聞く力を以ての故に、其初めて懷妊し



【无香等】 光音天は色界十八天の第六、無淨天はその第九。

【圖】 次に香世。

是の如く展轉し上りて、乃ち梵天に至る  
 入出神の香、香を聞きて、悉く能く知らん  
 光音、遍淨天、乃し有頂に至るまでの  
 初生及び退没、香を聞きて、悉く能く知らん  
 諸の比丘等々の、法に於て常に精進し  
 若し坐し若し經行し、及び經法を讀誦し  
 或は林樹の下に在りて、車轉にして坐禪せる  
 持經者は香を聞きて、悉く其所在を知らん  
 菩薩の、心堅固にして、坐禪し若し讀經し  
 或は人の前に誦法する、香を聞きて、悉く能く知らん  
 在在方の世界の、一切に恭敬せられて  
 衆を悉くて誦法したまふ、香を聞きて、悉く能く知らん  
 衆生の佛の前に在りて、經を聞きて皆歡喜し  
 法の如く修行する、香を聞きて、悉く能く知らん  
 未だ菩薩の、無漏法生の鼻を得ずと雖も  
 而も是の香は、先づ此鼻の相を得ん

〔白〕 復次に、常精進、若し善男子善女人、是經を受持し、若し讀み、若し誦し、若し解



【羅刹】 ラークシヤ  
 ヤリ(Rei)を可  
 畏、食人鬼等と譯  
 す、惡鬼の名  
 【毘舍闍】 ビシヤ  
 一チヤ(Shi)數  
 精氣と譯す、食人  
 鬼なり。

【五】 次に身根

諸の因縁喻を以て、衆生の心を引導せん  
 問く者皆歡喜して、諸の上供養を設げん  
 諸の天龍夜叉、及多阿修羅等

皆恭敬の心を以て、共に來りて法を聽かん

是說法の人、若し妙音を以て

三千界に遍滿せんと欲せば、意に隨つて即ち響く至らん

大小の轉輪王、及び千子眷屬

合掌し恭敬の心もて、常に來りて法を聽受せん

諸の天龍夜叉、羅刹毘舍闍

亦歡喜の心を以て、常に樂ひて來りて供養せん

梵天王魔王、自在七自在

是の如き一切の天衆、常に其所に來至せん

諸佛及び弟子、其說法の音を聞きて

常に念じて守護し、或時は爲に身を現じたまはん

〔復次に、常精進、其し善男子善女人、是經を受持し、若は讀み、若は誦し、若は解說

し、若は書寫せん。八百の身の功德を得て、清淨の身、淨瑠璃の如くにして、衆生見んと意を得ん、其身淨きが故に、三千大千世界の衆生の、生ずる時、死する時、上下、好



【六】 次に意趣

若し獨り若し衆に在りて、説法する時、普現衆に未だ無漏、法性の妙を得ずと雖も

清淨の常の體を以て、一切中に於て現せん

〔大意〕 復次に、常精進、若し青男子、青女人、如來の滅後に、其教をて得し、實に讀み、書は誦し、若は解讀し、若は書寫せんに、千二百の意の功德を得ん。是清淨の意趣を以て、乃至一偈一句を聞くに、無量無邊の衆に遍達せん。是義を釋りて、經く一句、一偈を演説すること、一月、二月、乃至一歲に達せん。諸の所説の法、其義趣に隨ひて、佛實相と相違せず。若し俗間の經書、治世の語言、養生の業を爲さんに、實法に隨はん。三千大千世界の六趣の衆生の心を行する所、心の動轉する所、心の戲論する所、皆悉く之を知らん。經は無漏の智慧を得ずと雖も、而も其意趣の清淨なること此の經くならん。是人の思惟し、籌量し、演説する所有らん、皆是れ佛法にして眞實ならざること無く、亦是れ先佛の經の中の所説ならん。

爾時、世尊、重ねて此經を宣べんと欲して、偈を説き二百に曰く、

是人は意の清に、明利にして微濁無

此妙なる意趣を以て、上中下の法を知

乃至一偈を聞くに、無量の義に通達せん

次第に法の趣く聞くこと、月四月より歳に至らん



是世界の内外の、一切の諸の衆生

者は天龍及び人、夜叉鬼神等

其六趣の中に在る、所念の若干の種

法華を持たん報は、一時に皆悉く知らん

十方無数の佛、百福莊嚴の相ありて

衆生の爲に說法したまふ、悉く聞きて能く受持せん

無量の我を思惟し、說法すること亦無量にして

終始忘れ錯らず、法華を持つを以ての故に

悉く諸法の相を知り、義に隨ひて次第を識り

名字語言を達して、知れる所の如く演說せん

此人の所説有は、皆是れ先佛の法ならん

此法を演説るを以ての故に、衆に於て畏るる所無けん

法華經を講ずるは、意樂持てて之を演説するは、

是人の徳を尊んで、衆生の地に責任し

一應衆生、歡喜して敬することを得ん

衆生を敬ふ、善巧の徳を以て

分別して演說せん、法華經を持つが故なり

常不輕菩薩品第二十

【常不輕菩薩品】本品は信毀罪福を引いて證し、以て流通を勸む、謂ゆる如來往古の因縁を説きて弘經流通を勸むることを明す

爾時、佛、得大勢、法華經に告げたまはく、汝今當に知るべし、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の法華經を持たざる者、若し惡口罵詈譎誘すること行らば、大いなら罪惡を犯すこと、前に説く所の如し。其所得の功徳は、向に多く所の如く、眼、耳、鼻、舌、身、意清淨ならん。得大勢、乃往古昔に無量無量不可思議阿僧祇劫を過ぎて佛有しき。威音王如來、廣供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と名をたてまつる。劫を離衰と名け、國を大成と名く。其威音王佛、彼世の中に於て、天、人、阿修羅の爲に法を説きたまふ。衆生を求むる者には、應ぜる四諦の法を説きて、生、老、病、死を度し、涅槃を究竟せしめ、轉法輪を求むる者には、應ぜる十二因縁の法を説き、諸の菩薩の爲には、阿耨多羅三藐三菩提に因せて、應ぜる六波羅蜜の法を説きて、佛慧を究竟せしむ。得大勢、是威音王佛の壽は、四十萬億那由他恆河沙劫なり。正法世に住せる劫數は一閻浮提の微塵の如く、像法世に住せる劫數は四天下の微塵の如し。其佛衆生を饒益し已りて、然して後に滅盡したまひき。正法佛法滅盡の後、此國土に於て復傳出でたまふこと有りき。亦威音王如來、廣供、正遍知、明行足、善逝、世

阿闍世王、調御士夫、天人師、佛、世尊と號けてまつる。是の如く大劫に二萬億の  
 佛有り。其同じく一號なり。最初の威音王佛に於て、比丘已に滅度したまひて、正法滅して後、佛  
 法の中に於て、増上慢の比丘大勢有力。爾時、一りの菩薩比丘有り、常不輕と名く。得  
 大勢、何の縁を以てか常不輕と名く。比丘、凡そ見る所有る、若は比丘、比丘尼、  
 優婆塞、優婆夷を、皆悉く禮拜し、讃美して、是言を作さく、「罪深く汝等と名ふ、敢て  
 禮拜せず、所以は何ん。汝等皆菩薩の尊貴にして、當に作禮することを得べし」と。而も  
 其比丘、覺して經典を讀誦せずして、其禮拜を行す。乃至經を四卷を見ても、奉復説らに  
 律を二卷を讀誦して、是言を作さく、「釋尊、汝等を輕しめ、故に當に作禮することを得べし」と。  
 又、因衆の中に瞋恚を生じて、不淨な  
 れの所より来りてか、自ら我法を輕しむ」と言ひて、我等佛世尊に作禮することを得  
 る」と。其記すも、我等是の如き中女の授けし言を用ひすと。此の如く當年を讀誦して、常に  
 作禮せらるることも、瞋恚を生ずずして、當に是言を作す、「汝等に作禮すべし」と。是語を  
 説く時、天人或は軟木、瓦石を以て之を打擲すれば、皆皆走り退く比し、高聲に稱  
 へて言はく、「我敢て汝等を輕しめず、汝等佛當に作禮すべし」と。其時に見請を作すを以  
 ての故に、増上慢の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、之を稱して常不輕と名く。  
 一、比丘、佛りなんと敬する所に聽み、佛苦の中に於て、其に敬言主佛の如くに説きたま  
 へり。其の法を讀誦す二十千の如く、佛に對して、佛に比く受持して、即ち上の如き眼見の如く、

【大善般若力】 忍辱力をいふ。

耳、鼻、舌、身、意根清淨を得たり。是六根清淨を得りて、更に禪念を増すこと、  
 百萬億那由他劫、廣く人の爲に法華經を説きて、時に増上慢の四衆の比丘、比丘尼、優  
 婆塞、優婆塞の是人を輕賤して爲に有徳の者を作せし者、其大神通力、樂善好力、大善  
 力を得たるを以、其所説を聞きて、皆信伏隨從す。是菩薩復千萬億の衆を化して、阿耨多  
 羅三藐三菩提に住せしむ。命終の後二千億の佛に値ひたてまつることを得、皆日月燈明  
 と號く、其法の中に於て是法華經を説く。是因縁を以て復二千億の佛に値ひたてまつる、  
 同じく自在燈王と號く。此諸佛の法の中に於て受持し、讀誦して、諸の四衆の爲に此  
 經典を説くが故に、是常眼清淨、耳、鼻、舌、身、意の諸根の清淨を得て、四衆の中  
 に於て法を説くに、心畏るる所無かりき。得大勢、是常不輕菩薩摩訶薩は、是の如き若干  
 の諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎して、諸の善根を種う。後に復千萬億の佛に値  
 ひたてまつり、亦諸佛の法の中に於て、是經典を説きて、功德成就して、當に百佛するこ  
 とを得たり。得大勢、意に於て云何。爾時の常不輕菩薩は、發覺したるんや、即ち我が身は  
 なり。若し我宿世に於て此經を受持し、讀誦し、他人の爲に説かずば、疾に阿耨多羅三  
 藐三菩提を得ること能はし。我先佛の所に於て此經を受持し、讀誦し、人の爲に説きしが  
 故に、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得たり。得大勢、彼時の四衆の比丘、比丘尼、優婆塞、  
 優婆塞は、瞋恚の意を以て我を輕賤せしが故に、二百億劫常に佛に値はず、法を聞かず、  
 俗を見ず、千劫阿鼻地獄に於て大苦惱を受く。是罪を畢へばりて、復常不輕菩薩の阿耨多

【其陀婆羅】(Jihvāra) 賢護と譯す。

【大勢、當に知る者等】滅後の傳持を勸む。

【信毀の因果】前もて重ねて頌す、初に因果を明し、億億萬劫より以下は勸持を明す。

三三三三を教化するに遇はにき。得大勢、汝が意に於て云何。爾時の因果の當に於て、諸佛の遺教を承け、思佛等の五百の婆塞の、皆阿耨多羅三藐三菩提に於て、見佛なき者、當に知るべし、是法華經大いに諸の菩薩摩訶薩を饒益し、諸の菩薩摩訶薩、如來の滅後に於て、當に經に於て、

重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、

去世有しき、威音王と號けたまはつる、  
智慧にして、一切を引導したまふ、  
夫人の、共に供養す所なり、  
是佛の、法盡きなん欲する時、  
一り菩薩有り、常不輕と名く、  
其に諸の因衆、法に計言せり、  
正法、其所に往き到りて、  
如も、語りて言はく、我汝を輕めず、  
汝當に行じ、當に佛すべしと、  
諸人聞き、已りて、輕罵罵言せしに

不解菩薩、能く之を成就しき

其罪畢へ已りて、命終の時に臨みて

此經を聞くことを得て、六根高淨なり

神通力の故に、壽命を増進して

復諸人の爲に、廣く是經を説く

諸の著法の衆、皆菩薩の

教化し成就して、佛道に住せしむることを蒙る

不離命終して、無數の佛に值ひたてまつる

是經を説くが故に、無量の福を得

漸く功徳を具して、疾に佛道を成ず

管時の不輕三、則ち我が身是なり

時の四部の衆の、著法の衆の

不輕の、汝當に作佛すべしと言ふを聞きしは

是因縁を以て、無數の佛に值ひたてまつる

此會の菩薩、五百の衆

黄及に四部、清信士女の

今我が前に於て、法を聽く者は是なり

【清信士女】優婆塞を清信士と云ひ優婆夷を清信女と云す。



【一】菩薩伽來の命を受け、誓を發して弘經するを明す。

【二】佛神力を現と給ふを明す、具に十神力を現す。

【廣長舌】吐長舌相三名、十神力の第一。

【一切の毛孔】十神力の第二、通身放光と名く。

【然して後】第三に廣長之聲と名く、俱共に聲と名く。

【是の衆生】第五地六種の如と名く。

【其中の衆生】第六、普賢大會と名く。

【即時に誦天】第七、空中唱聲と名く。

の座に於て、雲に廣く其經を讀くべし。所以は何ん。我等も亦自ら眞淨の大法を得て、受持し、讀誦し、傳説し、書寫して之を供養せんと欲す。

爾時、世尊、文殊師利等の無量百千萬億の舊住娑婆世界の菩薩摩訶薩、及諸百千丘、其丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の一切の衆の前に於て、大神力を現じたまふ。廣長舌を出して上梵世に至らし

め、一切の毛孔より無量無數色の光を放ちて、皆悉く遍く十方世界を照したまふ。衆の寶樹の下の師子の座の上の諸佛も亦復是の如く、廣長舌を出し、無量の光を放ちたまふ。釋迦牟尼佛及び寶樹の下の諸佛、神力を現じたまふ時百千歳を滿す。然して後に還りて舌相を掲めて、一時に警歎し、俱共に彈指したまふ。是二つの普聲、遍く十方の諸佛の

世界に至りて、地皆六徑に震動す。其中の衆生、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等、佛の神力を以ての故に、皆此娑婆世界の無量無邊百千萬億の衆の寶樹の下の師子の座の上の諸佛を見、及び釋迦牟尼佛、多寶如來と共に寶塔の中

に在して師子の座に坐したまへるを見たてまつり、又無量無邊百千萬億の菩薩摩訶薩、及び諸の四衆の釋迦牟尼佛を恭敬し、圍遶したてまつるを見る。既に是を見已りて、皆大

いに歡喜して未曾有なることを得。即時に誦天、虚空の中に於て高聲に唱へて言はく、此無量無邊百千萬億阿僧祇の世界を過ぎて圓あり、娑婆と名く。其中に佛有す、釋迦牟尼と名けたてまつる。今諸の菩薩摩訶薩の爲に、大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念



【彼等の衆生】第八、或普歸皈と名く。

【南無】ナムス(ン)ニ(ム)歸命と釋す。信願を表する敬禮の詞。

【種種の華】第九、遼哉諸佛と名く。【時に十方】第十、同一佛土と名く。

【三】以下は結要して持を勸む、未化什囑の文なり。中、四あり、初より勸誡すること能はば、以て之を言はば、より宣示顯說す。是は結要付囑、是は汝等より供養すべし、所以は勸莫付囑、所以は何ふにては釋付囑なり。

と名く、汝等當に淨心に隨喜すべし、亦當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべし。衆生の衆生、虚空の中の聲を聞き、言す、一、愛婆世界に向ひて、是の如き言を宣さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛。と、種種の香、瓔珞、幡蓋及び諸の嚴飾の具、寶、妙物を以て、皆共に此に隨喜隨喜、歡する所の前物より來ること、實、雲の集まるが如し。變じて清涼となりて、過く此間の諸佛の上に覆ふ。時に十、前達無礙にして一佛土の如し。

【三】、上行、菩薩、大衆に言けたまはく、諸佛の神力は是の如く、量無邊不可思議、我は神力を以て、無量無邊菩薩を發行祇勅に於て、累の累の諸に、此經の功徳を説くとも、稱讚すること能はず。是を以て之を言はば、如來の一切の所、如來の一切の秘要の義、如來の一切の甚深な事、當此に於て、自來の神力、如來の一切の秘要の義、如來の一切の甚深な事、當此に於て、是は汝等來の滅後に於て、應當に一心に受持し、讀誦し、書寫し、説く、修持すべし。所立の國土に、若は又、讀誦し、解説、書寫して説の如く、發行すること有らん、是は卷所住の處、實は國の中に於ても、若は林の中に於ても、若は別の上に於ても、若は竹房に於ても、若は白木の舎にても、若は殿堂に在りても、若は山谷、野にても、草中に皆塔を起てて供養すべし。所以は何ん、當に知すべし、是處は、是もまた、是場なり。當に此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、諸佛、此に於て法輪を轉じ、諸佛、此に於て教涅槃したまふ。

【四】前二の重頌初に神力を現ずるを要して、次に是經を累さん等以下は明して、最後六句は總じて結意を終す。

時、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、  
諸教異者、大神通に住して

衆生を悦ばしめんが爲の故に、無量の神力を現じたまふ。

舌相梵天に至り、身より無數の光を放ちて

佛道をまむる者の爲に、此希有の事を現じたまふ。

諸佛響歎の聲、及び彈指の聲

周く十方の國に聞えて、地皆六種に動ず

佛の滅度の後に、能く此經を持たんを以ての故に

諸佛皆歡喜して、無量の神力を現じたまふ。

是經を累せんが故に、受持の者を讚美すること

無量劫の中に於てすとも、猶故盡すこと能はし

是人の功德は、無邊にして窮り有ること無けん

十方の虚空の、邊際を得べからざるが如し。

能く是經を持たん者は、則ち徧れ已に我を見

亦多寶佛、及び諸の分身者を見

又我が今日、教化せる諸の菩薩を見らなむ

能く是經を持たん者は、我及び分身

阿耨多羅三藐三菩提をして、一切皆歡喜せしめ  
十方現在の佛、並に過去未來

亦は見亦ほ供養し、亦是歡喜することを得しめん

菩薩清淨に生じて、得たまへる所の祕要の法

能く是經を習たん者は、久しからずして亦當に得べし

能く是經を習たん者は、正法の義

行て及ぶ言辭に於て、常是窮盡無きこと

阿耨多羅三藐三菩提に於て、一切皆歡喜しが如くならん

如來の滅後に於て、佛の所説の經の

阿耨多羅三藐三菩提を知りて、衆に隨ひて實の如く説かん

日月の光明の、能く諸の幽冥を除くが如く

衆人世界に行じて、能く衆生の闇を滅し

無量阿僧祇をして、畢竟して一乘に住せしめん

是當に習有らん者、此功徳の利を聞きて

我無量阿僧祇に於て、應當に受持すべし

是に隨順して、決定して一乘有ること無けん

【囑累品】前品につきて本品は如來の摩頂付囑を明す

囑累品第二十二

爾時、釋迦牟尼佛、法座より起ちて大神力を現じたまふ。右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて、是言を作したまはく、「我無量百千萬億阿僧祇劫に於て、是得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付囑す。汝等當に一心に此法を流布して廣く増益せしむべし。」

是の如く三び、叫の菩薩摩訶薩の頂を摩でて、是言を作したまはく、「我無量百千萬億阿僧祇劫に於て、是得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付囑す。汝等當に受持し、讀誦し、廣く此法を宣べて、一切衆生をして普く聞知することを得しむべし。所以は何ん。如來は大慈悲有りて、諸の聲格無く、亦畏るる所無くして、能く衆生に佛の智慧、如來の智慧、自然の智慧を與ふ。如來は是れ一切衆生の大施主なり。汝等亦衆に隨ひて如來の法を學すべし。聲格を生ずること勿れ。未來世に於て、若し善男子善女人有りて、如來の智慧を信ぜん者には、當に爲に此法華經を演說して、聞知することを得しむべし。其人をして佛慧を得しめんが爲の故なり。若し衆生有りて、信受せざらん者は、當に如來の餘の深法の中に於て示教利喜すべし。汝等若し能く是の如くせば、則ち爲是已に諸佛の恩を報するなり。」

時に諸の菩薩摩訶薩、佛の是説を作したまふを聞き已りて、皆大いに歡喜し、具身に遍滿して、益恭敬を加へ、躬を曲げ頭を低れ、合掌して佛に向ひたてまつりて、俱に聲を發けて言さく、「世尊の勸の如く當に具に奉行すべし。唯然なり世尊、願くば應したまふこと有さされ。」諸の菩薩摩訶薩衆、是の如く三反、俱に聲を發けて言さく、「世尊の勸の如く當に具に奉行すべし。唯然なり世尊、願くば應したまふこと有さされ。」

爾時、釋迦牟尼佛、十方より來りたまへる諸の分身の佛をして、各本土に歸らしめんとして、是言を作したまはく、「諸佛各所安に隨ひたまへ。多寶佛塔、還りて其の如くしたまふべし。」

是語を説きたまふ時、十方無量の分身の諸佛の寶樹の下に師子の座の上に坐したまへる者、及び多寶佛、並に上行等の無邊阿僧祇の菩薩大衆、舍利弗等の聲聞四衆、及び一切世間の天、人、阿修羅等、佛の説きたまふ所を聞きて、皆大いに歡喜す。

藥王菩薩本事品第二十三

【藥王菩薩本事品】以後五品は第二に化他流通を明す、今品は苦行乘義を明して弘通を勧め、藥王菩薩の本事を説り、その燒身供養を説くなり。

爾時、佛の諸菩薩、佛に白して言さく、「世尊、藥王菩薩は云何がしてか要要世尊に對し、世尊、是菩薩は苦行の百千億億由量の難行苦行有らん。善哉、世尊、願くば此の解説し、我等、諸の天、人、阿修羅、夜叉、乾闥婆、迦樓羅、緊羅、摩竭羅、

王の遊化、苦行等を問ふ。  
【二】如來藥王の苦行を答ふ、初に本事。

【一箭道】弓箭の射道の百二十歩を一箭道と云ひ、或は百三十歩、百五十歩の異説あり。

【三】次に本事を明す中、初に現在に供養を修することとを明す。

【海此岸】須彌山の内海の南岸を海

人、非人等、又他の國土の諸の來れる菩薩、及び此聲聞衆、聞きて皆歡喜せん。爾時、佛、宿王華菩薩に告げたまはく、「乃往過去無量恆河沙劫に佛有しき、日月淨明德如來、魔供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けたてまつる。其佛に八十億の大菩薩摩訶薩、七十二恆河沙の大聲聞衆有り。佛の壽は四萬二千劫、菩薩の壽命も亦等し。彼國には女人、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅等及び諸難有ること無し。地の平かなること掌の如くにして、瑠璃の所成なり。寶樹莊嚴し、寶帳上に覆へ、寶の華幡を垂れ、寶窟、香爐國界に周遍せり。七寶を臺と爲して、一樹に一臺あり。其樹、臺を去ること一箭道を盡せり。此諸の寶樹に皆菩薩、聲聞有りて其下に坐せり。諸の寶臺の上に各百億の諸天有りて天の伎樂を作し、佛を歌歎して以て供養を爲す。

爾時、彼佛、一切衆生意見菩薩及び衆の菩薩、諸の聲聞衆の爲に、法華經を説きたまふ。是一切衆生意見菩薩衆ひて苦行を習ひ、日月淨明德佛の法の中に於て、精進經を行して一心に佛を求むること萬二千歳を滿じ已りて、現一切色身三昧を得、此三昧を得已りて、心大いに歡喜して、即ち念言を作さく、「我現一切色身三昧を得たる、皆是れ法華經を聞くことを得る力なり。我今當に日月淨明德佛及び法華經を供養すべし。即時に是れ昧に入りて、虛空の中に於て曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、細抹堅黑の旃檀を雨らし、虛空の中に滿じて雲の如くにして下し、又海此岸の梅檀の香を雨らす。此香の六錢は價直婆娑世



【觀世羅】カムラ  
ヲ(Anuradha) 常  
常に大なる數の  
と。

【頻婆羅】ビムバ  
ヲ(Himbara) 觀  
迦羅より大なる  
と。

【阿の婆】アクン  
ヨービヤ(Vajra) 大  
なる數。

世尊を供養して、爲に無上の慧を求めき

其偈を讀き已りて、父に白して言さく、日月淨明德佛今故現に在す。我先に佛を供養

し、已りて解一切衆生語言陀羅尼を得、復法華經の六百千萬億那由他、眞迦羅、頻婆羅、

阿婆婆等の偈を聞けり。大王、我今當に還りて此佛を供養すべし」と。白し已りて即ち七

寶の臺に坐し、虚空に上昇すること高さ七多羅樹にして、佛の所に往到し、頭面に足七

轉し、上の指爪を合せて、偈を以て佛を讚めたてまつる。

容顏甚だ奇妙にして、光明十方を照したまふ

我猶昔供養し、今復還りて親近したてまつる

爾時、一切衆生意見菩薩、是偈を讀き已りて、佛に白して言さく、「世尊、世尊猶故世に

在す」爾時、日月淨明德佛、一切衆生意見菩薩に告げたまはく、「善男子、我涅槃の時到

り波盡の時至りぬ。汝床座を安施すべし。我今夜に於て當に般涅槃すべし。又一切衆生

意見菩薩に勸したまはく、「善男子、我佛法を以て汝に囑累す。及び諸の菩薩大弟子并

に阿耨多羅三藐三菩提の法、亦三千大千の七寶の世界、諸の寶樹、寶臺、及び給侍の諸

天を以て悉く汝に付す。我が滅度の後、所有の舍利亦汝に付囑す。當に涅槃せしめて廣

く供養を設くべし」應に若干千の塔を起つべし。是の如く日月淨明德佛、一切衆生意見

菩薩に勸し終りて、夜の後分に於て涅槃に入りましたまふ。

爾時、一切衆生意見菩薩、佛の滅度を見て、悲感懊惱して佛を戀慕したてまつり、即ち



【百三十三】 三十一  
心行は、百三  
三十一

滅盡岸の怖懼を以て藪と爲して、伽藍を建造して以て之を焼きたてまつる。火滅えて已後  
舍利を収め取りて、八萬四千の寶瓶を有りて、以て八萬四千の塔を起つること三世界より  
高くして、寶利莊嚴して、諸の幡蓋を懸け、諸の寶鈴を懸けたり。爾時、一切衆生意見  
菩薩、各自自言すらく、「我は供養を作すと雖も心行未だ足らず。我今當に更舍利を供養  
すべし。便ち諸の菩薩、大弟子、及び天、魔、夜叉等の一切の大衆に語らく、「汝等當に  
一心に志すべし。我今、日月淨明德佛の舍利を供養せん」是語を作し已りて、即ち八萬  
四千の塔の前に於て、百福莊嚴の臂を然すこと七萬二千歳にして以て供養す。無數の聲  
聞を求むる衆、無量阿僧祇の人をして、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめ、皆現一切色  
身三昧に住すことを得しむ。爾時、諸の菩薩、天、人、阿修羅等、其臂無きを見て、  
憂惱悲泣して是言を作さく、「此一切衆生意見菩薩は是れ我等が師、我を教化したまふ者な  
り。而今に今臂を修きて身具足たては、一時に一切衆生意見菩薩、大衆の中に於て此誓  
言を立、「我兩つの臂を捨てて必ず當に佛の金色の身を得べし。若し實にして虚しからず  
んば、我が兩つの臂をして還復すること故に切ならしめん」是誓を作し已りて自然に還  
復しぬ。斯は菩薩の福德、智慧、淳厚なりに出りて致す所なり。爾時に當りて三千大千世  
界六種に震動し、天より寶華を雨らして、一切の天、人、未曾有なることを得たり。佛、宿  
王華菩薩に告げたまはく、「汝、意に當りて一切衆生意見菩薩は豈異人ならんや、今の  
藥王菩薩是なり。其身を捨て、勇施するは、其の如く無量百千萬億那由他數なり。宿王華

【五】以下經佛を歡す、初に能持者を歡す、次に所講の法を歡するを明す。

【雲へば以下】こ

れを華王品の上と、須彌、月天子、轉輪聖王、帝釋、大梵天王、四果、支佛、菩薩、佛の十餘なり。

【土山】土石の諸

【黑山】南閻浮提の中央より北方に三重の黒山ありといふ。

【小鐵圍山】小千

世界を遮るを小鐵圍山といふ。

【大鐵圍山】大千

世界を遮るを大鐵圍山といふ。

【千寶山】雪山、

香山、阿耨羅山、

若し發心して阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すること有らん者は、能く手の指、乃至足の一指を然して佛塔に供養せよ。國境、妻子及び三千大千國土の山林、河池、諸の珍寶物を以て供養せん者に勝らん。

若し復人有りて、七寶を以て三千大千世界に滿じて、佛及び大菩薩、辟支佛、阿羅漢に供養せん。是人の得る所の功德も、此法華經の乃至一四句偈を受持する、其福は最も多きには如かじ。

宿王華、譬へば一切の川流江河の諸水の中に、海爲れ第一なるが如く、此法華經も亦復是の如し。

諸の如來の所説の經の中に於て最も爲れ深大なり。又土山、黑山、小鐵圍山大鐵圍山及び千寶山の衆山の中に、須彌山爲れ第一なるが如く、此法華經も亦復是の如し。

諸の經の中に於て最も爲れ其上なり。又衆星の中に、月天子最も爲れ第一なるが如く、此法華經も亦復是の如し。千萬億種の諸の經法の中に於て最も爲れ照曜なり。又日天子の能く諸の闇を除くが如く、此經も亦復是の如し。能く一切不善の闇を破す。又諸の小王の中に、轉輪聖王最も爲れ第一なるが如く、此經も亦復是の如し。衆の經の中に於て最も爲れ其尊なり。又帝釋の三十三天の中に於て王なるが如く、此經も亦復是の如し。諸の經の中の王なり。又大梵天王の一切衆生の父なるが如く、此經も亦復是の如し。一切の賢、聖、學、無學及び菩薩の心を發す者の父なり。又一切の凡夫人の中に、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛爲れ第一なるが如く、此經も亦復是の如し。一切

仙樂山、由陀陀  
馬山、尼陀陀  
慧山、羅陀陀

【六】次に持經よ  
り得る福の深きを  
歎す。  
【藥師油】 ナヤム  
ガキ (Carrotaka) 黄  
色草。  
【須臾】 スマナ  
一 (Arinna) 悅意  
草。

如來の所説、若は菩薩の所説、若は聲聞の所説、諸の難法の中に最も爲れ第一なり。若く是經典を授け付すことしらん者も亦復是の如し。一切衆生の中に於て亦爲れ第一なり。一切の聲聞、辟支佛の中に、菩薩爲れ第一なり。此經も亦復是の如し。一切の諸の難法の中に於て最も爲れ第一なり。佛は爲れ諸法の王なり。如く、此經も亦復是の如し。一切の經の中の止なり。宿王業、此經は能く一切衆生を救いたまふ事なり。此經は能く一切衆生をして諸の苦難を離れしめたまふ。此經は能く一切の病を癒盛して、其願を充滿せしめたまふ。清凉の池の如く一切の渴の者に清つゝが如く、寒き者の衣を得たるが如く、細なる者の衣を得たるが如く、商人の貨を得たるが如く、子の母を得たるが如く、波に船を得たるが如く、病に醫を得たるが如く、暗に燈を得たるが如く、賣じきに寶を得たるが如く、其の王を得たるが如く、賣賣の海を得たるが如く、炬の暗を除くが如く、難法難事も亦復是の如し。能く衆生をして一切の苦、一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛を解かしめたまふ。

若し人此法華を聞くことを得て、若は自ら書き、若は人をしりて、かしまん。得る所の功得は、佛の智慧を以て少を量すとも其邊を得。若し人此經を書きて華香、璣、燒香、抹、塗香、經、衣、種種の燈、蘇燈、油燈、諸の香油燈、瞻蔔油燈、曼那由燈、波羅羅油燈、波利迦迦油燈、那婆利油燈、供養を所得の功德亦復無量ならん。宿王業、若し人有りて、是藥王菩薩の事品を聞かん者は、亦復無邊の功德を

【波羅羅】ハータ

【波利師迦】グアイ

【夏生華】

【那婆摩利】ナブ

【マリーカー】

【後の五百歳】滅

【後の五百歳】中、

【最後の五百歳】即

ち本法をいふ。

得ん。若し女人有りて、是藥王菩薩本物品を聞きて能く愛持せし者は、是女身を盡して後に復受けし。若し如來の滅後、後の五百歳の中に、若し女人有りて、是經典を聞きて能く修行せば、此に於て命終して、即ち安樂世界の阿彌陀佛の大菩薩衆の圍繞せる住處に往きて、蓮華の中の寶座の上に生ぜん。復貪欲に惱されず、亦復瞋恚、愚癡に惱されじ。亦復憍慢、嫉妬、諸垢に惱されじ。菩薩の神通、無生法忍を得ん。是忍を得じりて、眼根清淨ならん。是清淨の眼根を以て、七百萬二千億那由他恆河沙等の諸佛如來を見たまつらん。是時、諸佛、遙に共に讚じて言はん、「善哉善哉、善男子、汝能く釋迦牟尼佛の法の中に於て、是經を受持し、讀誦し、思惟し、他人の爲に説けり、得る所の福德無量無邊なり。火も焼くこと能はず、水も漂はずこと能はず。汝の功德は、千佛共に説きたまふとも、盡さしむること能はず。汝今已に能く諸の魔賊を破し、生死の軍を壞し、諸餘の怨敵皆悉く摧滅せり。善男子、百千の諸神、神通力を以て共に汝を守護したまふ。一切世間の天、人の中に於て汝に如く者無し。唯如來を除きて、其諸の聲聞、辟支佛、乃至菩薩の智慧、禪定も、汝と等しき者有ること無けん」と。宿王華、此菩薩は是の如き功德智慧の力を成就せり。若し人有りて是藥王菩薩本物品を聞きて、能く隨喜して善しと讚せば、是人現世に口の中より常に青蓮華の香を出し、身の毛孔の中より常に牛頭栴檀の香を出さん。得る所の功德上に盡く所の如し。是故に宿王華、此藥王菩薩本物品を以て汝に囑累す。我が滅度の後、後の五百歳の中、闍浮提に廣宣流布して、斷絶して惡魔、魔民、諸

の天、體、表又、萬物等々に其便を得しむること無し。宿王華、汝當に神通の力を以て是經を守護すべし。爾以は尙也。此經は問を爲れ濁淨處の人の病の良藥なり。若し人病有らんに、是經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不覺不死ならん。宿王華、汝若し世尊を愛護すべし。自ら心智を見れば、經に青蓮華を以て長香を燒り滿じて、其上に坐すべし。經を讀んで是念言を作すべし、此人久しからずして、必ず當に華を取りて道場に坐して諸の魔衆を滅すべし。然に法の縁を以て、大法の教を離れず、一切衆生の老、病、死の海を度脱すべし。是經に經道を求めん者、是經經を受持すべし。自ら人を見ては、應當に是經を讀み恭敬の心を修すべし。

是藥王菩薩本事流を及きたる時、佛爲て諸菩薩、第一阿彌陀生諸菩薩等を得たり。多寶如來菩薩の申に於て、宿王華菩薩を以て言はく、善哉善哉、宿王華、汝不可思議の功徳を成就して、乃し能く諸衆生に善如き事を問はたてまつりて、無量の一切衆生を利益すべし。

# 妙法蓮華經

卷第七

姚秦三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

## 妙法蓮華經第二十四

【妙法蓮華經】次品と共に三昧乗を明して法華三昧の妙用を顯す、中心は東方の妙法蓮華なり。  
【一】如來東方淨光莊嚴國を照して召す。

【二】妙法蓮華經此土に發來の緣を明す。

(一)爾時、釋迦牟尼佛、大人相の肉髻の光明を放ち、及び眉間白毫相の光を放ちて、遍く東方百八萬億那由他恆河沙等の諸佛の世界を照したまふ。是數を過ぎ已りて世界有り、淨光莊嚴と名く。其國に佛有す、淨華宿玉智如來、廣供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號けたてまつる。無量無邊の菩薩大衆の恭敬し、圍繞せるを爲て、而も爲に法を説きたまふ。釋迦牟尼佛の白毫の光明、遍く其國を照したまふ。

(二)爾時、一切淨光莊嚴國の中に一りの菩薩有り、名を妙音と曰ふ。久しく已に華の徳木を植えて、無量百千萬億の諸佛を供養し親近してまつりて、悉く甚深の智慧を成就し、妙幢相三昧、法華三昧、淨徳三昧、宿王戲三昧、無緣三昧、智印三昧、解一切衆生語言三昧、集一切功德三昧、清淨三昧、神通遊戯三昧、慧炬三昧、莊嚴王三昧、淨光明三昧、淨藏三昧、不共三昧、日旋三昧を得。是の如き等の百千萬億恆河沙等の諸の大三昧を得



【三】佛菩薩正し、發來するを明

【那羅延】ナローヤナ(Narayana)堅固と譯す。天の力量にして、その倍にして、力を求むる者、此神に祈れば多量力を與へらるといふ。毘紐天の異名。

し、禮拜せんと欲し、亦法華經を供養し聽きたてまつらんと欲せりたり。文殊師利、佛に白して言さく、世尊、是菩薩は何なる善本を積ゑ、何なる功徳を修めてか能く是大神通ある。何なる三昧を行する。願くは我等が爲に是三昧の名字を説きたまへ。我等亦之を勤め修行せんと欲す。此三昧を行じて、乃ち能く是菩薩の色相の大小、威儀、進止を見ん。唯願くは世尊、神通力を以て、彼菩薩の來らんに、我をして見んことを得しめたまへ。

爾時、釋迦牟尼佛、文殊師利に告げたまはく、此久遠度の多寶如來、當に汝等が爲に而も其相を現じたまふべし。時に多寶佛、彼菩薩に告げたまはく、善男子來れ、文殊師利法王子、汝が身を見んと欲す。

時に妙音菩薩、彼國に於て没して、八萬四千の菩薩と俱に共に發來す。經る所の諸國六種に震動して、皆悉く七寶の蓮華を雨らし、百千の天樂鼓せざるに、自ら鳴る。是菩薩の目は廣大の青蓮華の葉の如し。正使百千萬の月を和合せりとも、其面貌端正なること復此に過ぎんや。身は眞金の色にして、無量百千の功徳莊嚴なり。威徳嚴饒にして、光明照耀し、諸相具足して那羅延の堅固の身の如し。七寶の臺に入りて虚空に上昇し、地を去ること七多羅樹、諸の菩薩衆恭敬し、圍繞して、此娑婆世界の耆闍崛山に來詣す。到り已りて七寶の臺を下り、價直百千の瓔珞を以て、持ちて釋迦牟尼佛の所に至り、頭面に足を禮し、瓔珞を奉上して、佛に白して言さく、世尊、淨華宿王智佛、世尊を問訊したまふ。「少病、少惱、起居輕利にして安樂に行じたまふや不や。四大調和なりや不や。世事は忍びつ





佛に値ひたてまつる。華徳、汝但妙音菩薩其身に在りとのみ見る。而るに是菩薩は種種の身を現して處處に諸の衆生の爲に是經典を説く。或は梵王の身を現じ、或は帝釋の身を現じ、或は自在天の身を現じ、或は大自在天の身を現じ、或は天大將軍の身を現じ、或は毘沙門天王の身を現じ、或は轉輪聖王の身を現じ、或は諸の小王の身を現じ、或は長者の身を現じ、或は居士の身を現じ、或は宰官の身を現じ、或は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の身を現じ、或は長者居士の婦女の身を現じ、或は宰官の婦女の身を現じ、或は婆羅門の婦女の身を現じ、或は童男、童女の身を現じ、或は天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の身を現じて是經を説く。諸有の地獄、餓鬼、畜生及び衆の難處皆能く救濟す。乃至王の後宮に於ては、變じて女身と爲りて是經を説く。華徳、是妙音菩薩は能く娑婆世界の諸の衆生を救護する者なり。是妙音菩薩は是の如く種種に變化し身を現じて、此娑婆國土に在りて諸の衆生の爲に是經を説く。神通、變化、智慧に於て損減する所無し。是菩薩は若し智慧を以て明かに娑婆世界を照して、一切衆生をして各所知を得しむ。十方恆河沙の世界の中に於ても亦復見の如し。若し應に聲聞の形を以て得度すべき者には、聲聞の形を現じては法を説き、應に菩薩の形を以て得度すべき者には、群支佛の形を現じては法を説き、應に菩薩の形を以て得度すべき者には、菩薩の形を現じて爲に法を説き、應に佛の形を以て得度すべき者には、佛の形を現じて爲に法を説く。是の如く種種に度すべき所の者に隨ひて爲

に勝を現す。以て得度すべき者には滅度を示現す。華嚴、妙音菩薩摩訶薩は、神通、智慧の行を成就せること、其事是の如し。

是菩薩何なるに住してか、能く是の如く、世尊、是妙音菩薩は深く善根を積るなり。世尊、華嚴、華德、華嚴、華嚴に白して言さく、世尊、是妙音菩薩は深く善根を積るなり。世尊、華嚴、華德、華嚴、華嚴に白して言さく、世尊、是妙音菩薩は深く善根を積るなり。

能く是の如く無量の衆生を饒益す。妙音菩薩此の如く一切色身と名く。妙音菩薩此の如く一切色身と名く。

を得、此娑婆世界の無量の衆生を饒益す。妙音菩薩此の如く一切色身と名く。妙音菩薩此の如く一切色身と名く。

衆生を饒益し、妙音菩薩此の如く一切色身と名く。妙音菩薩此の如く一切色身と名く。

し、又文殊師利菩薩、妙音菩薩此の如く一切色身と名く。妙音菩薩此の如く一切色身と名く。

衆生を饒益し、妙音菩薩此の如く一切色身と名く。妙音菩薩此の如く一切色身と名く。

衆生を饒益し、妙音菩薩此の如く一切色身と名く。妙音菩薩此の如く一切色身と名く。

【觀世音菩薩】普門品中、觀世音菩薩の普門の妙用を説く。

【觀世音の名】觀世音の名、佛の切してその名號を授けしことを説く。

【觀世音の普門】觀世音の普門、東方不閻浮洲の普賢佛の普門なり。

【觀世音の普門】觀世音の普門、觀世音菩薩の普門なり。

【觀世音の普門】觀世音の普門、觀世音菩薩の普門なり。

【觀世音の普門】觀世音の普門、觀世音菩薩の普門なり。

【觀世音の普門】觀世音の普門、觀世音菩薩の普門なり。

【觀世音の普門】觀世音の普門、觀世音菩薩の普門なり。

【觀世音の普門】觀世音の普門、觀世音菩薩の普門なり。

觀世音菩薩普門品第二十五

【觀世音菩薩】觀世音菩薩、即ち座より起ちて、假に右の肩を視き、合掌し、佛に向ひたてまつりて、是言を作さく、世尊、觀世音菩薩、何の因縁を以てか觀世音と名くる。

佛、無盡意菩薩に告げたまはく、善男子、若し無量百千萬億の衆生有りて、諸の苦惱を脱すに、是觀世音菩薩を稱して一心に名を稱せば、觀世音菩薩、即時に其身を觀じて、皆解脱することを得しめん。若し是觀世音菩薩の名を稱すること有らば、若し、設ひ大火

に入るとも火も燒くこと得はず。是菩薩の威神力に由るが故に。若し、大水に漂はされんに、其名號を稱せば、即ち淺き處を得ん。若し、百千萬億の衆生有りて、金、銀、珊瑚、琥珀、瑪瑙、瑠璃、水晶、摩磲等の寶を失つるを爲て大海に入らんに、假使風浪其船動を吹きて

羅刹鬼の國に墮落せんも、其中に若し一人有りて觀世音菩薩の名を稱せば、是諸人等皆羅刹の難を解脱することを得ん。是因縁を以て觀世音と名く。

若し、復人有りて當に宮中らるべきに、臨みて觀世音菩薩の名を稱せば、欲往する所の刀杖尋で假段に墮れて無所することを得ん。若し、三千大千國土の中に、鬪てらるる夜叉、羅刹來りて人を害さんと欲せんにも、其觀世音菩薩の名を稱するを聞かば、是諸の惡東尙惡眼を以て之を視ること得ず。況んや復害を加へんをや。



具、醫藥を傳へてん。汝が意に於て、何。凡善男子善女人の功德多しや不や。無盡意の言  
さく、「佛の言はく、若し復人有りて觀世音菩薩の名號を受持し、乃至一時、禮讃し、讚歎し、

佛の言はく、若し復人有りて觀世音菩薩の名號を受持し、乃至一時、禮讃し、讚歎し、  
是二人の福、正等にして異なること無けん。言千萬億劫に於て、能く盡すべき事、無量、

觀世音菩薩の名號を受持せば、是の如き無量無盡の福徳の利を得ん。』  
無盡意菩薩、佛に白して言さく、「世尊、觀世音菩薩は云何がしてか、娑婆世界に遊び、

云何がしてか衆生の爲に法を説く、方便の力、其事云何。佛、無盡意菩薩に告げたまは  
く、善男子、若し居士の衆生有りて、應に佛身を以て得度すべき者には、觀世音菩薩即ち

佛身を遣じて爲に法を説き、應に辟支佛の身を以て得度すべき者には、即ち辟支佛の身を  
現じて爲に法を説き、應に聲聞の身を以て得度すべき者には、即ち聲聞の身を現じて爲に

法を説き、應に梵王の身を以て得度すべき者には、即ち梵王の身を現じて爲に法を説き、  
應に帝釋の身を以て得度すべき者には、即ち帝釋の身を現じて爲に法を説き、應に自在天

の身を以て得度すべき者には、即ち自在天の身を現じて爲に法を説き、應に大自在天の身  
を以て得度すべき者には、即ち大自在天の身を現じて爲に法を説き、應に天大將軍の身を

以て得度すべき者には、即ち天大將軍の身を現じて爲に法を説き、應に毘沙門の身を以て  
得度すべき者には、即ち毘沙門の身を現じて爲に法を説き、應に小王の身を以て得度すべ

き者には、即ち小王の身を現じて爲に法を説き、應に長者の身を以て得度すべき者には、

以下觀音の  
三十三身に變じて  
十九說法を説き、  
普門示現の妙用を  
明すを述ぶ。



【以下佛もて前之を宣ぬ】

【波流して觀音等】  
以下六句は總じて行願を教す

【我亦如之等】  
以上五十六句は觀音の徳明を頌す

即時に觀世音菩薩、諸の四衆、及び天、龍、人、非人等を憐愍が故に其處所を受くべし、  
と作して、一分は釋迦牟尼佛に在り、一分は多寶勝塔に在る。無量阿僧祇劫、觀世音菩薩は  
星の如き自在神力有りて娑婆世界に遊ぶ。

爾時、無量阿僧祇、佛を以て問うて曰さく、

世尊は妙田具はりたまふ、我今重ねて佛を問ひたてまつる

佛子何の因縁ありてか、名けて觀世音と爲す

妙相を具是したまへる尊、佛もて無量劫に答へたはく

汝聽け觀音の行、善く諸の方所に演じて

弘誓の深きこと法の如し、劫を歴とも異議せられず

多の千億の佛に侍へて、大清淨の印を發せり

我汝が爲に略して説かん、名を聞き及び身を見

心に念じて空しく過さざれば、能く諸有の苦を滅したまふ

假使害意を興して、大火坑に推し落されんにも

彼觀音の力を念すれば、火坑は變じて池と成らん

或は巨海に漂流して、龍魚諸鬼の難あらんにも

彼觀音の力を念すれば、波浪も没すること能はざらん





【神通力を等】以下廿四句は普門示現を明す。

彼觀音の力を念ずれば、聲に尋で自ら鎮り去らん  
 雲雷鼓擊雷し、雷を降らし大雨を澍がふにも  
 彼觀音の力を念ずれば、時に應じて消散することを得ん  
 衆生困厄を拂りて、無量の苦身を逼めんにも  
 觀音妙智の力は、諸く世間の苦を救はん  
 神通力を具足し、廣く智の方便を修して  
 十方の諸の國土に、利として身を現せざること無し  
 種種の諸の惡趣、地獄鬼畜生  
 生老病死の苦、以て漸く悉く滅せしめん  
 眞觀、清淨觀、廣大智慧觀  
 悲觀及び慈觀あり、常に願じて常に瞻仰すべし  
 無垢清淨の光ありて、慧日品の闇を破し  
 能く災の風火を伏して、普く明かに世間を照らす  
 悲愍の戒雷震のごとく、慈念の妙大雲のごとく  
 甘露の法雨を澍ぎて、煩惱の毒を滅除す  
 諍訟して官處を經、軍陣の中に怖畏せんにも  
 彼觀音の力を念ずれば、衆の怨悉く退散せん











【一】初に轉じて  
事奉を明す。

【二】能化の方化  
明す。

「久しく菩薩所行の道を修せり。謂ゆる檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、  
般若波羅蜜、淨觀波羅蜜、般若波羅蜜、方便波羅蜜、慈、喜、捨、乃至三十七品の助  
道法、若悉く明了に通達せり、又菩薩の淨三昧、日星三昧、淨光三昧、淨色三昧、  
淨照三昧、長莊嚴三昧、大威德藏三昧を得、此三昧に於て亦悉く通達せり。」

爾時、彼佛、妙莊嚴王を引導せんと欲し、及父衆生を慈念したまふが故に、是法華經を  
説きたまふ。時に淨藏、淨眼の二子其母の所に到りて、五指爪掌を合せて白して言さく、  
「善くは母、雲雷音宿王華智佛の所に往詣したまへ。我等亦當に侍從し、親近し、供養し、  
瞻養したてまつるべし、所以は何ん。此佛、一切天人衆の中に於て法華經を説きたまふ、  
宜しく敬受すべし。」母、子に告げて言はく、「汝が父外道を信受して、深く婆羅門の法に著  
せり。汝等往きて父に白して眞に供俱に去らしむべし。」淨藏、淨眼五指爪掌を合せて母に

曰さく、「我等は是れ法王の子なり。爾るに此那見の家に生れたり。母、子に告げて言はく、  
「汝等當に汝が父を愛念して爲に善事を現すべし。善しむることを得ば、必ず清淨ならん。  
或は我等が佛の所に往至することを聽されん」是に於て二子其父を念ふが故に、虚空  
に存在すること高さ七多羅樹にして、種種の神變を現す。虚空の中に於て行、住、坐、臥

し、身の上より水を出し、身の下より火を出し、身の下より水を出し、身の上より火を出  
し、或は大身を現じて虚空の中に満ち、爾して復小を現じ、小にして復大を現じ、空中に  
於て滅して、忽然として地に在り、地に入ること水の如く、水を履むこと地の如し。是の



如き等の相續の成るを現して、其父の言をして心淨く信解せしか。

時に父、子の神力是の如くなるを見て、心大いに歡喜し、未曾有なることを得、合掌して

て子に對して言はく、「汝等が師は爲めて是れ事を、誰が弟子ぞ。」二子白して言はく、「大王、

彼雲雷音宿王菩薩は、今七寶菩提樹下の法座の上に在して坐したまへり。一切世間の天人

衆の中に當て廣く法華經を説きたまふ。是れ我等が師なり。我は是れ弟子なり。」父、子に

語りて言はく、「我亦汝等が師を見たてまつらん」と言はず、其俱に往くべし。」是に二子空中

より下りて、其はの所に到りて、合掌して母に白さく、「父の今已に信解して、阿耨多羅三

藐三菩提の心を發すに堪任せり。我等父の爲に已に此事を信しつ。願くば母、彼佛の所に

於て、出家し修成せんことを聽されよ。」

爾時、二子、重々て其意を宣べんと欲して、偈を以て母に白さく、

願くば母身共に、出家して淨門と作らんことを成したまへ

諸佛には善知識ひたてまつること難し、我等佛に隨ひたてまつりて學せん

佛を離離の如く、佛に値ひたてまつることは復是より難し

諸難を脱すること亦難し、願くば我が出家を成したまへ

母佛も告げて言はく、「汝が出家を聽す。所以は何ん。佛には値ひたてまつること難きが

故に。」是に二子、父母に白して言はく、「善い、父母、願くば時に雲雷音宿王菩薩の所に

往詣して、親觀し、其意したまへ。所以は何ん。佛には値ひたてまつることを得ること難

し。

し。優曇鉢羅華の如く、又一眼の龜の浮木の孔に値へるが如し。而して我等宿福深厚にして佛法に生れ値へり。是故に父母、當に我等を聽して出家することを得しめたまふべし。所以は何ん。諸佛には値ひたてまつること難し。時にも亦遇ふこと難し。彼時に妙莊嚴王の後宮の八萬四千人、皆悉く是法華經を受持するに堪任しぬ。淨眼菩薩は法華三昧に於て久しく已に通達せり。淨藏菩薩は已に無量百千萬億劫に於て、離諸惡趣三昧に通達せり。一切衆生をして諸の惡趣を離れしめんと欲するが故に、其王の夫人は諸佛集三昧を得て能く諸佛の祕密の藏を知れり。二子は是の如く方便力を以て善く其父を化して、心に信解し佛法を好樂せしむ。

是に妙莊嚴王は群臣眷屬と俱に、淨德夫人は後宮の婬女眷屬と俱に、其王の二子は四萬二千人と俱に、一時に共に佛の所に詣る。到り已りて頭面に足を禮し、佛を遙ること三匝して、却りて一面に住す。

爾時、彼佛、王の爲に法を説きて示教利喜したまふ。王大いに歡悅す。爾時、妙莊嚴王及び其夫人、頸の眞珠瓔珞の價直百千なるを解きて、以て佛の上に散したてまつるに、虚空の中に於て化して四柱の寶臺と成る。臺の中に大寶の床ありて、百千萬の天衣を敷けり。其上に佛有して結跏趺坐して大光明を放ちたまふ。爾時、妙莊嚴王是念を作さく、佛身は希有にして端嚴殊特なり。第一微妙の色を成就したまへり。時に雲雷音窟王華智佛、四衆に告げて言はく、汝等、是妙莊嚴王の我が前に於て合掌して立てるを見るや不や。此王



【頻婆果】ビムバ  
(Bimba) 樹名、その果赤くして美なりといふ。

【四】以下古今を會し、得益を述べ

【法眼淨】分明に諸法の眞諦をみるをいふ。

【普賢菩薩勸發品】この品は一經の總結にして、自行流通を明す。即ち普賢菩薩の行願を説き、信訪兩者の罪福を述べて、其後の流布を勵む。

紺青の色なり。眉間の毫相白きこと珂月の如し。齒白く齊密にして常に光明あり。唇の色赤好にして瓔珞果の如し。爾時、妙莊嚴王、佛の是の如き等の無量百千萬億の功徳を讚歎し、已りて、如來の前に於て一心に合掌して、復佛に白して言さく、「世尊、未曾有なり。如來の法は不可思議微妙の功徳を具足し成就したまへり。教戒の所行安隱快善なり。我今日より復自ら心行に隨はじ。邪見、憍慢、瞋恚、諸惡の心を生ぜじ」是語を説き已りて、佛を禮したてまつりて出でにき。

佛、大衆に告げたまはく、意に於て云何。妙莊嚴王は景異人ならんや、今の華徳菩薩是なり。其淨徳夫人は今佛の前にある光照莊嚴相菩薩是なり。妙莊嚴王、及び諸の眷屬を哀愍せんが故に、彼中に於て生ぜり。其二子は今の藥王菩薩、藥上菩薩是なり。是藥王藥上菩薩は此の如き諸の大功徳を成就し已りて、無量百千萬億の諸佛の所に於て衆の徳本を植ゑ、不可思議の諸善功徳を成就せり。若し人有りて是二菩薩の名字を識らん者は一切世間の諸天人民亦應に禮拜すべし。

淨を得たり

佛、是妙莊嚴王本事品を説きたまふ時、八萬四千人遠塵離垢して、諸法の中に於て法眼

普賢菩薩勸發品第二十八

【一】普賢請問して勸發するを明す  
 【普賢】サマంతパドマ (Samanthapadma) 又遍吉とも譯す。

【二】譽頌して法後に受持者並に經法を守護するを明す。

【毘舍闍】ピシヤ一チヤ (Pishāca) 敬稱氣と譯す、食人鬼なり。

【摩訶羅】モハタ一タ (Mahā) 毘

爾時、普賢菩薩、自在願前方、威儀名聞を以て、大菩薩の無量無算不可稱數なると與に東方より來る。經行所の諸國普く轉動し、寶蓮華を雨らし、無量百千萬億の種種の伎樂を作す。又無數の諸天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽人、非人等の大衆を隨逐せると與に、各威儀神勇の力を現じて、娑婆世界の普聞願の中に對りて、頭前に釋迦牟尼佛を禮し、右に遶ること七匝して、佛に白して言て、「世尊、我は具徳上王佛の國に於て、善に此娑婆世界に法華經を説きたまふを聞きて、無量無算百千萬億の諸の普賢と共に來りて受す。世尊、當に當に之を説きたまへし。若し善男子、女人、如來の滅後に於て、善願して能く是法華經を得ん。佛、普賢菩薩に告げたまはく、「善し善男子、善女人、四生を成就せば、如來の滅後に於て、當に是法華經を得べし。一には善佛に禮念せらるること、二には諸の善本を植ふこと、三には正法にに入り、四には一切衆生を救ふの心を起さざらん。善男子、女人、是の如く四法を成就せば、如來の滅後に於て、是法華經を得ん。」

【三】此、普賢菩薩、佛に白して言て、「世尊、後の五百億濁世の中に於て、此法華經典を受持すること有る者は、我當に守護して其衰患を離し安穩なることを得しむ。復ひ求むるに其便を得る者、佛からしむべし。若は魔、若は魔子、若は魔民、若は魔に對する者、若は夜叉、若は阿修羅、若は緊那羅、若は毘舍闍、若は吉羅、若は摩訶羅、若は摩訶羅の諸の人を惱す者、其便を得ざらん。某人若は行き、若は立きて、此經を

經羅に同じく起屍  
鬼なり。

讀誦せば、我爾時、六牙の白象王に乗りて、大菩薩衆と俱に其所に詣りて、自ら身を現  
 て、供養し、守護して其心を安慰せん。亦法華經を供養せんが爲の故なり。其人若し坐し  
 て此經を思惟せば、爾時、我復白象王に乗りて其人の前に現ぜん。其人若し法華經に於て  
 一句一偈をも忘失する所有らば、我當に之を教へて與共に讀誦し、盡りて通利せしむべし。  
 爾時、法華經を受持し、讀誦せん者、我が身を見ることを得て、甚だ大いに歡喜して轉た復  
 轉進せん。我を見るを以ての故に即ち三昧及び陀羅尼を得ん。名けて旋陀羅尼、百千華鬘  
 旋陀羅尼、法音方便陀羅尼と爲す。是の如き等の陀羅尼を得ん。世尊、若し後の世の後の  
 五百歲濁惡世の中に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の求索せん者、受持せん者、讀誦せ  
 ん者、書寫せん者、是法華經を修習せんと欲せば、三七日の中に於て心に一心に轉進すべ  
 し。三七日を滿じ了りて、我當に六牙の白象に乗りて、無量の菩薩の雨も自ら圍遶せると  
 與に、一切衆生の見んと稱ふ所の身を以て、其人の前に現じて、爲に法を説きて示教利喜  
 すべし。亦復共に陀羅尼咒を與へん。是陀羅尼を得るが故に非人の能く破壞する者有らこ  
 と無けん。亦女人に惑亂せられず。我が身亦自ら常に是人を護らん。唯願くば世尊、我が  
 此陀羅尼を説くことを聽したまへ。〔爾ち佛の前に於て咒を説きて曰さく、

阿檀地、檀陀婆地、檀陀婆帝、檀陀婆薩、檀陀修陀隸、修陀隸、修陀羅婆盧、佛跋  
 波羶彌、薩婆陀羅尼阿婆多尼、薩婆婆婆、阿婆多尼、修阿婆多尼、僧伽婆盧又尼、僧  
 伽涅伽陀尼、阿僧祇、僧伽婆伽地、帝祿阿僧伽僧伽兜略阿羅帝波羅帝、薩婆僧伽三摩地

伽蘭地、（一）摩修波利刹帝、（二）薩婆薩婆摩訶吉路阿究伽地、（三）寶真吉利地帝。

世尊、（一）行りて此陀羅尼を聞くことを得ん者は、當に知るべし、普賢菩薩の力な

り。若し法華經の闍浮提に行ぜんを受持することを得らん者は、應に此念を作すべし、皆覺

自普賢威徳の力なりと。若し受持し、讀誦し、正憶念し、其義趣を解し、其の如く修行す

ること有しん。當に知るべし、是人は普賢の行を行するなり。無量無邊の諸佛の所に於て

深く善根を積まざるなり。諸の如来の手中に其頌を摩づることを爲ん。若し但讀誦せば、

是人命終して當に初利天上に生ずべし。世尊、八萬四千の天女、其の伎樂を作して歌りこ

とと二へん。其人即ち七寶の冠を著て、宝衣の中に於て娛樂快樂せん。何に泥んや受持

し、讀誦し、正憶念し、其義趣を解し、其の如く修行せんをす。若し人有りて受持し、讀

誦し、其の頌を解せん。是人命終して、千佛の所に於て、恐怖せず、惡趣に墮ちざらし

めたまふことを爲て、即ち兜率天上の彌勒菩薩の所に往かん。彌勒菩薩は三十二相有りて

大菩薩に共に閑遊せらる。百千萬億の天人普賢有り。而も中に於て生ぜん。是の如き等

の功德利益有らん。是故に智者、應當に一切に自ら當き、若し人をして善かしめ、受持

し、讀誦し、正憶念し、説の如く修行すべし。世尊、我今神力を以ての品に是經を守護

して、如来の滅後に於て、闍浮提の内に、其の法をせしめて斷絶せざらしめん。

爾時、釋迦牟尼佛讚じて言はく、「善い哉善い哉、普賢、汝能く是經を護助して、衆生の

樂樂をして安樂し利益せしめん。汝已に不可思議の功徳、深大の慈悲を成就せり。久遠よ

【兜率天】 ヲ、見等し譯す、六欲天の第四、彌勒此に住すといふ。

【三】 佛自ら持護者の得安と諸衆生の安樂を説く。





【瘰癧】手足屈曲してのびざるをいふ。  
 【角膝】計測のこと。  
 【一會】一會の得を得るを謂ふ。

若し人有りて之を輕蔑して言はる、汝は狂人ならくのみ。空しく是行を作して終に獲る所無けん」と。是の如き罪報は當に現世に眼無かるべし。若し之を信受し、讀誦すること有らん言は、當に今世に於て現の罪報を得べし。若し復是經典を支持せん者を見て其過惡を出ださん。若し實にもあれ、若し不實にもあれ、此人は現世に白癩の病を得ん。若し之を輕笑せん者は、當に現世に牙齒缺け、顴脣、平鼻、手脚、縛足し、眼目、角膝に、身體、瘰癧にして、惡毒、膿血、水瘻、短氣、諸の惡重病あるべし。是故に善賢、若し是經典を支持せん者を見ては、當に罷ちて遠く迎ふべきこと、當に稱を奉ふべきことすべし。是普賢勸發經を説きまはし時、恆河沙等の無量無邊の菩薩百千萬億那由他の諸佛を得、三千大千世界微塵等の諸の菩薩普賢の道を具しぬ。

此の經の經名は、



佛說觀普賢菩薩行法經

經典部  
第一卷





【胡舍會堂】左右の臂を垂につけ左右の掌を合するをいふ。

【長名】 テーラ、(Tihara) 智徳の具はれる僧。

【摩訶蓮華】 マハ一カーンヤバ(Manakanyapa) 大衆光と譯す。十大弟子中觀行第一と稱せらる。

【阿難】 マイトレ氏と譯す。當來作佛すべき菩薩。

【三太子】 阿難、迦葉、彌勒の三人、迦葉は開法持の人、迦葉は結集の正主、彌勒は當來の化主、故にこの三太子を尊ぐ。

【瞋恚を斷ず等】 不瞋煩惱、不瞋五欲、得淨諸根、滅除諸罪。

【以下正宗分】 普賢菩薩觀と六相識佛法とを明す。初に普賢菩薩觀の中依報觀を明す。

こと、今汝等が爲に當に廣く分別すべし。阿彌、普賢菩薩は乃し東方の淨妙國土に生ず。其國土の相は法華經の中に已に廣く分別せり。我今此に於て略して辨說せん。阿彌、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、八部、一切衆生の大乘經を讀せん者、大木を修せん者、大乘の意を發せん者、普賢菩薩の色身を見んと樂はん者、多寶如の塔を見たまつらんと樂はん者、釋迦牟尼佛及び分身の諸佛を見たまつらんと樂はん者、六波羅蜜を得んと樂はん者は、當に是觀を學すべし。此觀の功德は、諸の障礙を除いて上妙の色を見る。三昧に入らざれども、但誦持するが故に、心を専らにして修習し、心心相次いで大乘を離れざること、一日より三七日に至れば、普賢を見ることを得。重寶有らん者は、七七日を誦して然して後見ることを得。復重きこと有らん者は、一生に見ることを得。復重きこと有らん者は、一生に見ることを得。復重きこと有らん者は、三生に見ることを得。是の如く種種に業報不同なり、是故に異說す。普賢菩薩は身量無邊、音聲無邊、色像無邊なり。此國に來らんと欲して、自在神通に入り、身を促めて小ならしむ。開淨提の人は三障重きが故なり。智慧力を以て、化して自象に乗れり。其象に六牙あり、七支地を踏へたり。其七支の下に七蓮華を生ぜり。象の色鮮白にして、白の中の上れたる者なり。鬘梨雪山も比と爲すことを得ず。身の長さ四百五十由旬、高さ四百由旬、六牙の端に於て六つの浴池有り、一一の浴池の中に十四の蓮華を生ぜり。池と與に正等にして、其華開敷せること天の樹王の如し。一一の華の上に一りの玉女有り、顔色紅輝にして天女に過ぎたる有り。



の珠寶、雪山はカ  
イラーサ山の異稱  
即ち雪山の異稱  
にして華雪の白美  
を以て名あり。

【玉の谷池】 六度  
に喻ふ。

【十四の蓮華】 四  
無畏、四無礙、六  
神通を喻ふ。

【天の樹王】 一切  
天上の頗利質多羅  
パーリヤト多羅  
(Pariyāta) 樹の  
こと。

【懺悔】 梵にシヤ  
マ (Sama) と云ひ  
己が往昔の過非を  
發露して改悔する  
をいふ。

【寶水迦寶】 キム  
シユカ (Kimsuka)  
赤色と譯す。珠寶  
の名。

【摩尼】、ニミタ  
【妙意珠】と譯す。

【金剛寶】 ここに  
は帝釋所持の寶、  
即ち那羅延金剛寶  
を指す。

【金剛杵】 ヲゾラ  
【印度古代  
の武器、現に密教

一の七寶の蓮華有り、其蓮華鬚は百寶もて共に成せり。其蓮華臺は是れ大摩尼なり。

一の菩薩有りて結跏趺坐す、名を普賢と曰ふ。身は白玉の色にして五十種の光あり、

光ごとに五十種の色あり、以て頂の光と爲せり。身の諸の毛孔より金光を流出す、其

金光の端に無量の化佛ましまして、諸の化菩薩を以て眷屬と爲せり。安庠として徐ろに

歩み、大なる寶華を雨らして、行者の前に至らん。其象口を開くに、象の牙の上に於て、諸

池の玉女鼓樂絃歌す。其聲微妙にして、大乘一實の道を讚歎す。行者見已りたば、歡喜し

敬禮して、復更に甚深の經典を誦讀し、遍く十方無量の諸佛を禮し、多寶佛塔及び釋迦牟

尼佛を禮したてまつり、并に普賢、諸の大菩薩を禮して、是誓言を發せ、若し我宿福あ

りて、應に普賢を見つべくんば、願くば尊者過昔、我に色身を示したまへ。是願を作

し已りて、晝夜六時に十方の佛を禮して懺悔の法を行せよ。大乘經を誦し、大乘經を

讀み、大乘の義を思ひ、大乘の事を念じ、大乘を持つ者を恭敬し供養し、一切の人を視る

こと猶し佛の想の如くし、諸の衆生に於て父母の想の如くせよ。是念を作し已りたば、普

賢菩薩即ち眉間より大人相の白毫の光明を放たん。此光現する時に、普賢菩薩身相嚴

にして紫金山の如く、端正微妙にして、三十二相皆悉く備行し、身の毛孔の毛孔より大

光明を放ちて其大象を照らして金色と作らしめん。一切の化象も亦金色と作り、諸の

化菩薩も亦金色と作らん。其金色の光、東方無量の世界を照らして皆同じく金色たらん。

南西北方、四維上下も亦復是の如くならん。爾時、十方、一方、一方の方に一りの菩薩有り、





【十力】佛の有りたる十種の特別の力。一、十住心、二、十慧、三、十力、四、十智、五、十行、六、十願、七、十力、八、十智、九、十行、十、十願。【十八不共】佛特有の十八種の特別の力。一、十住心、二、十慧、三、十力、四、十智、五、十行、六、十願、七、十力、八、十智、九、十行、十、十願、十一、十力、十二、十智、十三、十行、十四、十願、十五、十力、十六、十智、十七、十行、十八、十願。【三念處】一、心念處、二、受念處、三、心念處。【四念處】一、身念處、二、受念處、三、心念處、四、法念處。【六度】一、檀那、二、持戒、三、忍辱、四、禪定、五、智慧、六、方便。【四無所畏】一、無畏、二、無畏、三、無畏、四、無畏。【十力】佛の有りたる十種の特別の力。一、十住心、二、十慧、三、十力、四、十智、五、十行、六、十願、七、十力、八、十智、九、十行、十、十願。【十八不共】佛特有の十八種の特別の力。一、十住心、二、十慧、三、十力、四、十智、五、十行、六、十願、七、十力、八、十智、九、十行、十、十願、十一、十力、十二、十智、十三、十行、十四、十願、十五、十力、十六、十智、十七、十行、十八、十願。【三念處】一、心念處、二、受念處、三、心念處。【四念處】一、身念處、二、受念處、三、心念處、四、法念處。【六度】一、檀那、二、持戒、三、忍辱、四、禪定、五、智慧、六、方便。【四無所畏】一、無畏、二、無畏、三、無畏、四、無畏。

にて遍く十方の佛を禮せよ、諸佛を禮し已りて、胡跪し合掌して普賢菩薩を禮せよ、諸佛菩薩は十力、無畏、十八不共、大慈、大悲、三念處をします。常に世間を在して佛、中の上の佛なり。我何の罪有りてか而も覺たてまつることを得ざる」と。是語を聞て已りて、復更に禮せよ。悔滅清淨なること已りなば、普賢菩薩復更に現前して行、住、坐、臥に其體を顯現せよ。乃至夢の中にも常に覺に法を説かんと。此人覺め已りては喜ぶ樂を得ん。是の如くして晝夜三七日を經て、然して復に方に旋陀羅尼を得ん。旋陀羅尼を得るが前に、諸佛、菩薩の所説の妙法を擯して失はば、亦常に夢に過去の七佛を見たてまつらんに、唯釋迦牟尼佛のみ其爲に法を説きたまはん。是諸佛の世尊、各各の經典を稱讃したまはん。爾時、行者復更に懺悔して、遍く十方の佛を禮せよ。十方の佛を禮し已りなば、普賢菩薩其人の前に住して、教へて宿世の一切の業縁を説きて、惡業の一切の罪事を發露せしめ、諸佛の世尊に懺悔したてまつりて自ら發露せしめん。眞に發露し已りなば、尋いで時に即ち諸佛現前三昧を得ん。是三昧を得已りて、東方の阿闍佛及び妙喜國を見たてまつること了了分曉ならん。是の如く十方各諸佛の上妙の國土を見たてまつることを了了分明ならん。【四念處】一、心念處、二、受念處、三、心念處、四、法念處。【六度】一、檀那、二、持戒、三、忍辱、四、禪定、五、智慧、六、方便。【四無所畏】一、無畏、二、無畏、三、無畏、四、無畏。【十力】佛の有りたる十種の特別の力。一、十住心、二、十慧、三、十力、四、十智、五、十行、六、十願、七、十力、八、十智、九、十行、十、十願。【十八不共】佛特有の十八種の特別の力。一、十住心、二、十慧、三、十力、四、十智、五、十行、六、十願、七、十力、八、十智、九、十行、十、十願、十一、十力、十二、十智、十三、十行、十四、十願、十五、十力、十六、十智、十七、十行、十八、十願。【三念處】一、心念處、二、受念處、三、心念處。【四念處】一、身念處、二、受念處、三、心念處、四、法念處。【六度】一、檀那、二、持戒、三、忍辱、四、禪定、五、智慧、六、方便。【四無所畏】一、無畏、二、無畏、三、無畏、四、無畏。



て、是言を作せ、「我何の罪有りてか但寶地、寶座及び寶樹を見て、諸佛を見たてまつらざる」とし、是語を作しじりなば、一一の座の上に一一の世尊有さん、端嚴微妙にして寶座に坐したまへり。諸佛を見たてまつりじりて、心大いに歡喜して、復更に大乘經典を誦習せむ。大乘の力の故に、空中に聲有りて讚歎して、「いはん、善い哉善い哉、善男子、汝大乘を行ずる功德の因縁もて能く諸佛を見たてまつる。今諸佛世尊を見たてまつることを得たりと雖も、而も釋迦牟尼佛、分身の諸佛、及び多寶佛塔を見たてまつること能はずして、空中の聲を聞きじりて、復勤めて大乘經典を誦習せん。大乘方等經を誦するを以ての故に、即ち夢中に於て釋迦牟尼佛、諸の大衆と與に、普闍維山に在して、法華經を説き一實の義を演べたまふを見ん。我じりなば懺悔し渴仰して見たてまつらんと欲し、合掌而跪して、普闍維山に向ひて是言を作せ、「如來世尊は常に世間に在す。我を憐念したまふが故に、我爲に身を現じたまへ」と。是語を作しじりて、普闍維山を見るに、七寶莊嚴して無數の比丘羅闍大衆あり、寶樹行苑し、寶地平坦に、復妙寶師子の座を鋪けり。釋迦牟尼佛眉間の光を放ちたまふ。其光遍く十方世界を照らし、復十方無量の世界を過ぐ。此光の至る處の十方分身の釋迦牟尼佛一時に雲のごとく集り、廣く説きたまふこと妙法華經の如し。一一の分身の佛、身は紫金の色なり。身量無邊にして師子の座に坐し、百億無量の諸の大菩薩を以て眷屬と爲したまへり。一一の菩薩、行普賢に同じ。此の如く十方無量の諸師の菩薩の眷屬も亦復是の如し。大衆集りじりて、釋迦牟尼佛を見たてまつれば、舉



【七】次に眼根識  
法。

【此經の中等】法  
華經壽量品を指す

【說羅尼菩薩】陀  
羅尼を具足せる菩薩。

(七) 無量世に於て、眼根の因縁もて諸色に貪著す。色に著するを以ての故に諸法を貪著す。塵を受するを以ての故に、女人の身を受け、世世に生ずる處にして諸色に著著す。色汝が眼を壞りて恩愛の奴と爲る。色使汝をして三界を經歷せしむ。此弊使の爲に盲にして見る所無し。今大乘方等經典を誦す。此經の中に十方の諸佛色身滅せずと説けり。汝今見ることを得つ、審實にして離りや不や。眼根の不善汝を傷害すること多し。我が語に隨順して、諸佛、釋迦牟尼に歸向したてまつり、汝が眼根の所有の罪咎を説け、諸佛、菩薩の慧眼の法水、願くば、以て洗滌して、我をして清淨ならしめたまへ」と。是語を作し已りて、遍く十方の佛を禮し、釋迦牟尼佛、大乘、如來に向ひたてまつりて、復是言を説け、「我が今憶する所の眼根の重罪、障蔽穢濁にして、盲にして見ろ所無し。願くば佛大慈もて哀愍説したまへ。普賢菩薩大法船に乗つて、普く一切の十力無量の諸の菩薩の伴を度したまへ、唯願くば慈哀して我が眼根の不善惡業障を海過する法を説きたまへ」と。是の如く三たび説きて、五體を地に投じて、大乘を正念して心に忘捨せざれ。是を眼根の罪を懺悔する法と名く。諸佛の名を稱し、燒香、散華して、大乘の意を發し、妙華蓋を懸けて、眼の過患を説き、罪を懺悔せば、此人現世に釋迦牟尼佛を見たてまつり、及び分身、無量の諸佛を見たてまつり、阿僧祇劫に惡道に墮せじ。大乘の力の故に、大乘の願の故に恆に一切の陀羅尼菩薩と共に眷屬と爲らん。是念を作す者界を正念と爲す。若し他念する者を名けて邪念と爲す。是を眼根の初の境界の相と名く。眼根を淨むること已りて、復更









【大慈悲及び喜捨】  
四、慈悲の心のこと。

【愛護】 四攝法中の一をあく。外に布施、利行、同事これなり。

【六和敬】 同戒、同見、同行、身慈、口慈、意慈の六種の義法。

【五無間】 無間地獄に就て、趣果、受苦、時、命、形の五の無間の義あるをいふ。

【納勝】 とりもちとにしは。

【十二の苦事】 十二の苦事をいふ。

【八業】 生、滅、一

百劫、手段にあらば、安着を以ての故に大地獄に墮す。我今南方の諸佛に歸向してまづりて、累世を毀謗せん」と。是念を作す時、空中に響有る。南方に歸着す。爾時諸佛名けたことある。彼佛に亦無量の身有りて。一切の諸佛名を説きて、罪業を除滅したまふ。此の如き聖解を、今十方無量の諸佛大慈普賢に向ひて説きつゝ、累世を毀謗し、誠心に懺悔せよ」と。是語を説き已りたば、五體を地に投じて復諸佛を禮したるべし。是時、諸佛、法光明を放ちて行者の身を照らして、其身心をして自然に懺悔せしむ。大慈悲を發し言く一切を念せしめん。爾時、諸佛、廣く行者の爲に大慈悲及び喜捨の法を説き亦愛護を教へ、六和敬を修せしめん。

爾時、行者、此發勅を聞き心大いに歡喜して、復更に誦習して、終に懈怠せざらん。空中に復微妙の音響有りて、是の如き言を出さん。汝今應當に身心を懺悔すべし。身とは殺盜、婬なり。心とは諸の不善を念するなり。十惡業及び五無間を造ること、實に發獄の如く、亦種種の如く、處處に貪著して、遍く一切六情根の中に至る。此六根の業、其修華業悉く三界、二十五有、一切の生處に滿てり。亦能く無明、老、死、十二の苦事を増長す。八邪、八難中に經ざること無し。汝今應當に是の如き惡不善の業を懺悔すべし」と。爾時、行者此語を聞き已りて、空中の響に問ひたてまつる。我今何れの佛にしてか、懺悔の法を行ぜん」と。時に空中の聲即ち是語を説かん。釋迦牟尼佛を毘盧遮那遍一切處と名けたてまつる。其佛の住處を常寂光と名く。常波羅蜜に成就せられたる時、我波羅蜜に安立せ



【具色常住の法なるが故】これ釋するに

常任不滅なることを示す、この色常住の三字は本門事圓の妙旨を彰す。

【二】機悔の總結【三】以下正宗分中の勸物令修分に

して、讀誦、持戒、懺悔等の諸行を修行すべきを明す、初は大乗經典の功德力を説き讀誦を勸む。

【五眼】肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼。

【三種の身】法、報、變、または自性、受用、變化の三種身。

と有らば、但當に大乘經典を讀誦すべし。此方等經は是れ菩薩佛の眼たり。諸佛は是に因りて五眼を具することを得たまへり。佛の三種の身は方等より生ず。是れ大法印なり。涅槃海を印す。此の如き海中より驚く三種の佛の清淨の身を生ず。此三種の身は、天の田、應供の中の最なり、其れ大方等經、典を讀誦すること有らば、當に知るべし、此人は佛の功徳を具し、諸惡永く盡して佛地より生ずるなり。

爾時、世尊、而も偈を説きて言はく、

若し眼根の憑有りて、業障の眼不生ならん

但當に大乘を讀し、第一義を思念すべし

是を讀を懺悔して、諸の不善業を盡すと名く

耳根は亂聲を聞きて、和合の義を壞亂す

是に由りて狂亂を起すこと、猶し癡なる猿猴の如し

但當に大乘を誦し、法の空無相を觀すべし

永く一切の惡を盡して、天耳もて十方を聞かん

鼻根は諸香に著して、染に隨ひて諸觸を起す

此の如き狂惑の鼻、染に隨ひて諸塵を生ず

若し大乘經を誦し、法の如實際を觀ぜば

永く諸の惡業を離れて、後世に復生すべし

【五條の道】 一、思  
二、修、三、戒、四、定、五、慧

【六慧】 六慧は、一、見、二、聞、三、思、四、修、五、慧、六、智

【六法】 六法は、一、戒、二、定、三、慧、四、捨、五、忍、六、進

吾根は五塵の、選口の不善を現す  
若し自ら調順せんを欲せば、斷めて瞋心を除し  
其の眞寂の義を思きて、諸の分別の想滅か  
根は猿猴の如くにして、暫くも存るる事無し  
若し折伏せんを欲せば、當に調心して業を誦し  
體の大覺身、力無畏の所成を念したてまつべし  
身は爲れ機關の主、心の境に轉ひて轉する如し  
六賊中に遊戯して、盲瞶にして至極無  
若し此の道して、永く此の道に勤め  
常に智慧の城に處し、空しくして富貴ならんと欲せば  
當に未だを誦して、其の善業の徳を念すべし  
無業の勝方便は、實用を思ふより得  
此の如き等の法を、善くして六情根を誦す  
一切の業障海は、空しくして  
若し懺悔せんと欲せば、當に三業を誦す  
業罪は霜露の如し、朝日乾く如し  
是故に應に中心に、六情根を懺悔すべし

【阿耨若】アール  
スヤ (Arhaya) 離  
離處、阿耨處も  
す。

【賢劫】現在の生  
劫をいふ、この劫  
中に千佛出世す  
いふ。

是佛を説き已りて、佛、阿難に告げたまはく、「汝今是六度を修習し、普賢菩薩を讚嘆す。法を講じて、百千十方の諸天、俱人及び鬼神に廣く分別して説け。佛の滅度の時、佛の諸の弟子若し方等經典を受持し讀誦し解講すること有らば、佛に勝處の者も亦出、若し佛の阿耨若處に在りて、方等を讀誦し大乘の義を思ふべし。念力強きが故に我が身又て普賢菩薩、十方分身の無量の諸佛、普賢菩薩、文殊師利菩薩、藥王菩薩、藥上菩薩を見たりしつることを得ん。法を恭敬するが故に、諸の妙華を授けて空中に住立して、行菩薩の者を讚歎し恭敬せん。但大乘方等經を誦するが故に、諸佛菩薩晝夜に是持法の者を讚嘆したまはん。」

佛、阿難に告げたまはく、「我賢劫の諸の菩薩及び十方の諸の佛と與に、大菩薩實の義を思ふに因るが故に、百萬億億劫阿僧祇數の生死の罪を除却しき。此勝妙の賢菩薩の法に因るが故に、今十方に於て、佛と爲ることを得たり。若し疾に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんと欲せん者、若し現身に十方の佛及び普賢菩薩を見んと欲せば、當に淨く沐浴して淨潔の衣を著、衆の名香を燒き、空閑の處に在るべし。應當に大乘經典を讀誦し大乘の義を思ふべし。」

佛、阿難に告げたまはく、「若し衆生有りて普賢菩薩を觀せんと欲せん者は、當に是觀を作すべし。是觀を作す者は是を正觀と名く。若し他觀する者は是を邪觀と名く。佛の滅度の後、佛の諸の弟子、佛の語に隨順して懺悔を行ぜん者は、當に知るべし、是人は普賢の



し、羯磨、傳戒、皆阿闍梨なるも、今別して支殊を指

【六重の法】不淫、不盜、不飲酒、不妄語、不飲酒、不

【八重の法】不淫、不盜、不飲酒、不妄語、不

【白羯磨】戒作法

の白四羯磨をいふ

【二五】以下出家

破戒の羅の儀作法

【三歸】歸依佛、

歸依法、歸依僧の

【五戒】殺生、偷

盜、邪淫、妄語、

飲酒。

【八戒】前の五戒に塗飾香鬘、歌舞

大乗經、甚深の妙義に依りて、佛に歸依し、佛に歸依す」と、是の如く、

ひ、實に歸依したてまつることになりて、次に其當に自ら誓ひて、六重の法を受くべ

し。六重の法を受けりて、次に其當に勤めて無量の善行を修し、廣濟の心を發し、八重の法

を受くべし。此誓を立てりて、空闕の處に於て、衆の名香を燒き、衆を敬し、一切の諸佛

及び諸の菩薩、大乗方等に供養したてまつりて、是誓を作せ、「我今日に於て菩提心を發

しつ。此功德を以て普く一切を度せん」是語を作し、はりて、復更に一切の諸佛及び諸の

菩薩を頂禮し、方等の義を思へ。一日乃至三七日、若は出家にもあれ、在家にもあれ、和

上を須へず、諸師を用ひず、白羯磨せざれども、大乗經典を受持し、讀誦する力の故に、

普賢菩薩の勸發の故に、是れ十方の諸佛の正法の眼目なれば、是法に因り由りて、自

然に五分法身の戒、定、慧、解脱、解脱知見を成就す。諸佛如来は此法より生じ、大乗

經に於て記別を受くることを得たまへり。

是故に智者、若し經中の三歸及び五戒、八戒、比丘戒、比丘尼戒、沙彌戒、沙彌尼戒、

式叉摩尼戒、及び諸の威儀を毀破し、愚癡、不善、惡慧心の故に多く、諸の戒及び威儀

の法を犯さん。若し除滅して過患無からしむ、還つて比丘と爲りて沙門の法を具せんと欲

し、當に勤修して方等經典を讀み、第一義甚深の密法を思うて、此密慧をして心と相應

せしむべし。當に知るべし、此人は念念の頃に於て、一切の罪垢永く盡きて餘無けん。是

を沙門の法式を具足し、此の威儀を具すと名く、應に天人一切の供養を受くべし。





【六】以下は在家  
破戒の罪の懺悔法  
を明す。

【七】殺父、  
殺母、殺阿羅漢、  
破和合僧、出佛身  
血

【有利】クンヤト  
リヤ(Kuntiva)印  
度神姫の一、王種  
の婦。

【八】齋日 白月の  
八、十四、十五の  
三日、黒月の二十  
三日、二十九、三十  
の三日を合せいふ

この日四天王の四  
天下を巡按する日  
なれば齋戒すべし  
と。

【二七】以下論通分  
【法臘】分明に  
諸法の眞諦を諦觀  
するをいふ。

の段たらきなることなきに、  
摩多羅三藐三菩提を成ずべしと。言定語を説きたまふ時、十千の天子、法眼淨を得、彌勒菩薩等の諸大菩薩及び阿羅漢は、佛の所説を聞きたてまつりて、歡喜し、奉行せり。

佛說觀普賢菩薩行法經 終

梵網菩薩戒經

經  
一  
卷



梵網經菩薩戒序

【菩薩戒序】波羅提木叉(Upasika)清信女と譯す。佛道に入りたる在家の女子。

【優婆塞】ウパシカ(Uparika)清信士と譯す。佛道に入りたる在家の男子。

【波羅提木叉】プラティモクシャ(Pratimoksha)別解脱と譯す。

【波羅提木叉】ウパシカ(Upasika)清信女と譯す。佛道に入りたる在家の女子。

諸の諸子等、掌を合せて至心に聽きたまへ。我今諸佛の大戒の序を説かんと欲す。衆集れども、默然として聽きたまへ、自ら罪有りと知らば當に懺悔すべし。懺悔すれば即ち安樂なり、懺悔せざれば罪益深し、罪無くんば默然せよ、默然するが故に當に知るべし、業清淨なりと、諸の諸子等、優婆塞、優婆夷等諸かに聽け、佛滅度の後、像法の中に於て、應當に波羅提木叉を修敷すべし。波羅提木叉とは、即ち是れ此戒なり、此戒を得つ時は、當に明に遇へるか如く、貧人の寶を得たるが如く、病者の差ゆることを得たるが如く、囚繫の獲を出でたるが如く、遠行の者の歸ることを得たるが如し。當に知るべし、眞實に是れ樂事なり、眞實に善なり、若し佛世に信したまふとも、此に異ること無けん。嗚心は生に難く、嗚心は發し難し。故に經に云はく、小罪を犯んじて以て、殃無しと爲ること勿れ、水に一滴微なりと、一滴の器に盈へ、迦那の海に殃無間に墮す。一たび人身を失つれば、劫にも取らず、此たる色の停らざること難し奔る馬の如し、人の命の無常なることは山の火より、過ぎたり。今日を存すと雖も明けなんまで亦保ち難し。衆等各各一心に勤修精進して、慎しんで悔意相續斷絶して息を繼にすること勿れ、夜は即ち心を攝め、寶を存せよ、眞て空しく過して其らに疲勞を設け後代に深く悔ゆること莫れ、衆等各各一心に讀んで此戒に依て、當法に修行し、應當に修すべし。

# 梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品

第十卷下

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【梵網經云云】 佛  
 華の序に依れば梵  
 網經は本一百二十  
 卷六十一品あり。  
 其中菩薩心地戒品  
 第十は專ら菩薩行  
 地を明すを以て此  
 品のみに世に流通す  
 の。菩薩心地戒品  
 の卷に上下あり。  
 然るに各宗に於て  
 は卷下のみに執つ  
 て梵網菩薩戒經と  
 云ふ。今之に従ふ  
 【一】序分に於て  
 盧舍那佛が尊尊と  
 應現して本經を説  
 くを明す。

【盧舍那】 ツイロ  
 ーチヤナ(アミテヒ  
 ヲ)光明遍照して  
 す。佛の身光、智  
 光が遍く理事無礙  
 の法界を照して開  
 明なるの義。

【蓮華藏世界】  
 蓮華藏世界のこと  
 即ち盧舍那佛の嚴  
 淨せし處に大蓮華  
 切の物悉く大蓮華  
 に含藏せらるる故  
 に云ふ。

【師子座】 佛の坐

爾時、盧舍那佛、此大衆の衆に略して百千恆河沙不可說法門の中の心地を開きたまふ。こ  
 と毛頭許りの如し。是れ過去一切の佛、已に説きたまふ。未來の佛も當に説きたまふべし。  
 現在の佛、今説きたまふ。三世の菩薩、已に學し、當に學すべし、今學せり。我已に百  
 劫に見心地を修行せしをもて、吾を號して盧舍那と爲す。汝諸佛、我所説を轉じて一切衆  
 生の與に心地の道を開くと爲たまふ。時に蓮華藏世界の赫赫たる天光師子座上、盧舍那  
 佛、光光を放ちて千華上の佛に告げたまはく、我が心地法門品を講ちて、而も去りて復轉  
 じて、千百億の釋迦及び一切衆生の爲に、次第に我が上の心地法門品を説きて、汝等受持  
 し、讀誦して一心に行ぜよ。と。

爾時、千華上の佛、千百億の釋迦、蓮華藏世界の赫赫たる師子座より起ちて、各各辭し  
 て退かんとし、擧身より不可思議の光光を放ちて、皆無量の佛を化して、一時に無量の  
 青黃赤白の華を以て盧舍那佛を供養し、上の所説の心地法門品を受持し、各各此  
 華藏世界より没し、没し已りて體性虚空華光三昧に入りて、本源の世界閻浮提の菩提樹下  
 に還りて、體性虚空華光三昧より出でぬ。出で已りて方に金剛千光玉座に坐し、及び妙光

し給ふ床座を云ふ  
佛は人中の獅子な  
るが故に名く  
【閻浮提】 閻浮提洲の  
一。商人の住  
する世界一と云

【摩醯首羅】 ママ  
イシユツラ、Maha  
Swara) 自在天のこ  
と。

堂にして、十世界海を説き、復座より起ちて帝釋宮に至りて十住を説き、復座より起ちて  
梵天の中に至りて十行を説き、復座より起ちて第四天の中に至りて十趣向を説き、復座よ  
り起ちて他天に至りて十禪定を説き、復座より起ちて他化天に至りて十地を説き、復一  
觀の中に至りて十金剛を説き、復二禪の中に至りて十忍を説き、復三禪の中に至りて十願  
を説き、復四禪の中の摩醯首羅天主の宮に至りて、我が本國の蓮華觀世音菩薩所居  
の心持法門品を説きたまふ。其餘の千百億の釋迦も本説の如く無二無別なり、寶珠品の  
中に説くが如し。

爾時、釋迦牟尼佛、在初妙觀三續世界に現じ、東方より來りて天王宮の中に入りて、經  
受化尊を説き已りて、南閻浮提の迦葉菩薩に下生したまふ。爾を摩耶と名け、父を白淨王  
と名け、母を摩耶と名く。以故にして摩耶に、二十にして成道す。其を説して釋迦牟尼佛と  
名す。眞は眞理に於て、念釋迦牟尼に對し、乃至摩醯首羅天主宮にして、其中次第に  
十の住處にして受く所たり。時に佛、佛の妙化天の無量衆を説て、因て當に説きたま  
ふ。無量の世界廣し刹土の如し。一一の刹土、亦各不同別異なること無量なり。佛の法門  
本國の如し。現今此世界に現ること八十億なり。此娑婆世界の時に念釋迦牟尼佛に集  
じ、我が佛の眞理を天王宮に對し、其中の一切の妙法を衆の爲に略して心持法門品を説きたまひ  
給ふ。南天宮より下りて閻浮提の菩提樹下に坐りて、此地球上の一切衆生凡夫聖賢の人  
の爲に、我が本國念釋迦の心持の中より、當に説きたまふ所の一切法門を

誠く。金剛寶尊は是れ一切佛の本願、一切菩薩の本願、佛性種子なり。一切の衆生皆佛性  
 性あり、一切意識心、是情是心あるは、皆佛性の中に入らん。當常に常に因あるが  
 故に、當常住の法身あり。是の如きの十波羅提木又をもて世界に出づ。是法戒は是れ  
 世一切の衆生頂戴受得せよ、當常に此大衆の爲に重ねて十無盡藏妙品を説くべし。是  
 れ一切衆生衆の本願自性清淨なり。

我今盧舍那、方に蓮華臺に坐す

周匝せる千花の上に、復千蓮池を現す

一花に百億の國あり、一國に一釋迦まします

各菩提樹に坐して、一時に佛道を成ず

是の如き千と百億とは、盧舍那を本身となす

千と百億の釋迦、各微塵の衆を接して

俱に我が所に來至して、我が佛戒を誦するを覺きて

甘露の門即ち聞けぬ、是時千と百億と

遶りて本道場に至りて、各菩提樹に坐して

我が本師の戒、十重四十八を誦す

戒は明かたること日月の如く、亦瓔珞珠の如し

微塵の菩薩衆、是に由りて正覺を成じたまふ

【二】 盧舍那佛經  
 此の身を現じて戒  
 戒を誦するを頌す





當時の菩薩摩訶薩、摩訶陀等十六國をいふ。後心の菩薩、十信のこと。

【十長】十行のこと、慈喜捨施、好語利益、同定慧、心し、也。この十種去れ初に發心して大乘に趣入するを以て名く。

【十金剛】十堅固のこと、位堅く善根を修する故に名く。即ち信、念、進、持、定、慧、無相、不退、不壞、これなり。

【十地】平等地、善慧地、光明地、寶炎地、慧照地、華光地、華足地、佛光地、華嚴地、入佛境界、これなり。

【十地】平等地、善慧地、光明地、寶炎地、慧照地、華光地、華足地、佛光地、華嚴地、入佛境界、これなり。

是故に戒光日より出づ。緣有りて因無きに非るが故に。光光は青黃赤白黒に非ず、色に非ず、心に非ず、有に非ず、無に非ず、因果の法に非ず、是れ諸佛の本源、菩薩道を行ずるの根本、是れ大衆諸佛子の根本なり。是故に大衆諸佛子應に受持すべし、應に讀誦すべし、應に善學すべし。佛子諸かに聽け、若し佛戒を受けん者は國王王子、百官宰相、比丘比丘尼、十八梵天、六欲天子、庶民貴門、婿男姪女、奴婢八部、鬼神金剛神、畜生乃至變化人までも、但法師の語を解するものは盡く戒を受得すれば皆第一清淨の者と名く。佛諸の佛子に告げて言はく、「十種の波羅提木叉あり、若し菩薩戒を受けて此戒を誦せざる者は、菩薩に非ず、佛種子に非ず、我も亦是の如く誦す、一切の菩薩に學し、一切の菩薩當に學し、一切の菩薩今學す。我已に略して菩薩の波羅提木叉の相貌を説きつ。是事應當に學し、敬心に奉持すべし。」

佛の言はく、「佛子若は自ら殺し、人を殺へて殺さしめ、方便して殺し、殺すを讀誦し、作すを見て隨喜し、乃至咒して殺さば、殺の因、殺の縁、殺の法、殺の業あらん、乃至一切有命の者故らに殺すことを得ざれ。是れ菩薩は應に常住の慈悲心、孝順心を起して、方便して一切衆生を救護すべし。而るを反つて更に自ら恚なる心、快き意を以て殺生するは是れ菩薩の波羅夷罪なり。」

若し佛子、自ら盜み、人を殺へて盜ましめ、方便して盜み、乃至咒して盜まば、盜の因、盜の縁、盜の法、盜の業あらん、乃至鬼神と有主と劫賊の物、一切の財物、一針一草をも

【比丘】ビクシャウ  
【比丘尼】ビクシャニ  
【居士女】ウシヤメ  
【家女】ケヤメ

【黄門】ウヤム  
【八部】ハツブ

【夜叉】ヤシヤ  
【夜叉女】ヤシヤメ  
【夜叉鬼】ヤシヤキ

【金剛】コンガウ  
【密跡】ヒツセキ

【第一】ダイイチ  
【初】ハツメ

【波羅夷】ハラヒ  
【無遮】ムシヤ

【住持】ジュウヂ  
【法外】ホウガイ  
【捨身】シヤン

故に得たことを得され、前も菩薩は既に無量の善心、慈悲心を生じて、常に一切の人を助け、憐れむことを生ぜしむべし、而るをばつて更に人の財物を奪はば是れ菩薩の波羅夷なり。

若し佛子其の教し、人を殺へて姪せしめ、乃ち一級の人殺に類することを得され。佛の理、佛の徳、佛の法、佛の業あらん、乃ち畜生の心、諸天鬼神の心、交て非道に墮き行せしや、而も菩薩に類に善心を生じ、一切衆生を救護して淨法を人に興ふべし、而るをばつて更に一切の心障を断し、畜生鳥獣を轉生六道を離ぼす、罪を行じて惡業心無きは是れ菩薩の波羅夷罪なり。

若し佛子、自ら飲酒し、人を殺へて姪せしめ、方便して妄言せば、妄言の因、妄言の縁、妄言の果、妄言の業あらん、乃ち畜生を殺かりと言ひ、見たるを母子と得り、身心を殺す、而も菩薩は常に善心を生じ、亦一級衆生の正命正法を生ぜしむべし、而るをばつて更に一切衆生の善業を興ふべし、乃ち佛の徳の波羅夷罪なり。

若し佛子、自ら飲酒し、人を殺へて姪せしめば、佛の徳の縁、佛の徳の業、佛の徳の果、佛の徳の業あらん、一級の酒、飲ふことを憎まみ、是れ酒は三途を起すの因なり、而も菩薩は常に一切衆生の善業を生ぜしむべし、而るをばつて更に一切衆生の善業を興ふべし、乃ち佛の徳の波羅夷罪なり。

若し佛子、自ら出家在家の菩薩、比丘、比丘尼の罪過を説き、人を殺へて罪過を説かしめ

といふ。

【六】二、盜戒。

【七】三、姦戒。

【八】四、妄語戒。

【九】五、酤酒戒。

【一〇】六、說四衆過戒。

【一一】七、自言毀他戒。

【一二】八、慳惜加毀戒。

【一三】九、瞋心不受悔戒。

ば、罪過の因、罪過の縁、罪過の法、罪過の業あらん、而も菩薩は外道惡人及び二乘の惡人の佛法中の非法非律を説くを聞きては、常に慈心を生じ、是惡人の輩を教化して、大乘の善信を生ぜしむべし、而るを菩薩反つて更に自ら佛法中の罪過を説くは、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

若佛子、自讚毀他し、亦人を教へて自讚毀他せしめば、毀他の因、毀他の縁、毀他の法、毀他の業あらん、而も菩薩は應に一切衆生に代りて毀辱を加ふるを受け、惡事をば自ら已に向へ、好事をば他人に與ふべし。若し自ら已が徳を揚げて他人の好事を隠し、他人をして毀を受けしめば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

若佛子、自ら慳み、人を教へて慳ましめば、慳の因、慳の縁、慳の法、慳の業あらん、而も菩薩は一切貧窮の人の來り乞ふ者を見ては、前の人の須むる所に隨ひて一切給與すべし、而るを菩薩、惡心、瞋心を以て、乃至一錢、一針、一草をも施さず、法を求むる者有らんに、爲に一句、一偈、一微塵計りの法をも説かず、而るを反つて更に罵辱せば、菩薩の波羅夷罪なり。

若佛子、自ら瞋り、人を教へて瞋らしめば、瞋の因、瞋の縁、瞋の法、瞋の業あらん、而も菩薩は應に一切衆生の中の善根無諍の事を生ぜしめ、常に慈悲心、孝順心を生ぜしむべし、而るを反つて更に一切衆生の中に於ても、乃至非衆生の中に於ても惡口を以て罵辱し、加ふるに、手打及以刀杖を以てして意猶息まず、前の人、悔を求めて善言懺謝すれど

【四】上、誘三寶  
或三寶とは佛寶  
法寶、信寶なり。

【五】諸仁者  
以下十重戒を結す

【佛性常住の妙果】  
佛性の果をいふ也  
【地獄、畜生】  
地獄、畜生

【六】次に四十八  
重戒を列す、無に  
【七】方中の僧  
【八】ウバ

も猶瞋りて解けざるは、是れ菩薩の波羅夷罪なり。

若佛子、自ら三寶を誇り、人を教へて三寶を誇らしめば、誇り因、誇の緣、誇り法、誇の業あらん、而も菩薩は外道及以惡人の一言、誇佛の音聲を見ては、三百の障もて心を刺すば如くたるべし。況んや口に自ら誘じて信心、孝順心を生ぜざらんや、爾を反つて更に罵人、邪見人を助けて誘ぜしめば是れ菩薩の波羅夷罪なり。

善學の諸仁者、是れ菩薩の十波羅提木又なり、應當に學すべし。中に於て一一犯すると微塵計りの如くもすべからず、何に況んや具足して十重を犯せんをや。若し犯すること有らん者は、現身に菩提心を發すことを得ず、亦國王の位、轉輪土の位を失ひ、亦比丘比丘尼の位を失ひ、亦十發趣、十長養、十金剛、十地、佛性帝住の妙果をも失ふ、一は皆失ひて三惡道の中に墮し、二劫三劫父三寶の名をも聞かず、是を以て一一犯すべからず。汝等一切の諸菩薩今學し、當に學し、已に學す、是の如きの十重應當に學し、當心に奉持すべし、八萬威儀品に實に廣く明すべし。

佛諸の菩薩に告げて言はく、已に十波羅提木を説き盡んぬ、四十八重應當に廣くべし。

佛の言はく、若し佛子、國王の位を受けんと欲せん時、國師の位を受けん時、百官の位を受けん時、應に先づ菩薩戒を受ふべし。一切の鬼神、及び身、百官の身を敬重し、諸佛敬著したまふ。既に得戒し已らば、應に孝順心、恭敬心を生ずべし。上座、和上、闍

【一】(Upari)親教師と譯す。

【阿闍梨】アーチヤールヤ(Acarya) 軌範師と譯す。

【大同學】同學の座をいふ。

【同見】同一の正見をいふ。

【同行】同一の行者をいふ。

【六】二に飲酒戒

【七】三に食肉戒

【八】四に食五辛

【大蒜等】大蒜は

んにんにく、葱は

めびる、葱はね

き、蘭葱は山に

なく、興渠はから

【九】五に不教悔  
【八戒】不殺生戒

梨、大同學、同見、同行の者を見ては、當に起ちて承迎禮拜問訊すべし。而も其菩薩、反つて憍心、慢心、癡心、瞋心を生じて、起ちて承迎禮拜問訊せず。一一に如法に、供養せざらんや、自ら身を賣り、國城男女、七寶百物を以ても、而も之を供給すべし。若し自らずんば、垢罪を犯す。

若し佛子、故に酒を飲まんや。而も酒の過失を生ずること無量なり。若し自身の手より酒器を過して、人に與へて酒を飲ましめば、五百世まで手無し。何に況んや自ら飲まんをや。一國の人を教へて飲ましめ、及び一切衆生に酒を飲ましむることを得ざれ。況んや自ら酒を飲まんをやし。若し故に自ら飲み、人を教へて飲ましめば、輕垢罪を犯す。

若し佛子、故に肉を食せんや。一切の肉食することを得ざれ。夫れ肉を食せば、大慈悲の佛性種子を斷ず。一切衆生、見て捨て去る。是故に一切の菩薩、一切衆生の肉を食することを得ざれ。肉を食せば無量の罪を得。若し故に食せば輕垢罪を犯す。

若し佛子、五辛を食することを得ざれ、大蒜と、葱と、蘭葱と、興渠となり、是五種、一切の食中にも食することを得ざれ、若し、故に食せば輕垢罪を犯す。

若し佛子、一切衆生の八戒五戒十戒を犯じ、禁を毀り七逆八難一切犯戒の罪を見ては、教へて懺悔せしむべし、而るを菩薩、教へて懺悔せしめずして同住し、僧の利養を同うし、而して共に布薩し、同一衆中に説戒して、而も其罪を擧げず、教へて悔過せしめずんば輕垢罪を犯す。



夜の各各に別ちた

【七】七に憚忘不

【法毘尼經律】法

毘尼を誣するを誣、毘

尼を誣するを律と

【八】八に普大向

【小戒】九に不看病

【八福田】佛、聖

人、和尚、阿闍梨

信父、母、病人。

【四】十に毒殺衆

生具戒。

【五】十一に國使

【六】十二に販賣

【六畜】馬、牛、

羊、犬、豕、鷄。

【七】十三に誘毀

【障不如意處】地

鼠のこ。

一切言ふることを得され、而も菩薩は乃至父母を殺さるとも尙報を加へされ、況んや一切衆生を殺さんや、若し故に一切の刀杖を蓄へば輕垢罪を犯す。

是の如き十戒當に學し、敬心に奉持すべし、下の六品の中に當に廣く明すべし。

佛の言はく、「佛子、利養憍心の爲の故に、國の使命を通じて軍陣會し、師を興して

相伐ち、無量の衆生を殺さしむることを得され、而も菩薩は尙軍中に入りて往來すること

を得ず、況んや故らに國賊を作さんや、若し故に作さば輕垢罪を犯す。

若佛子、故に良人奴婢六畜を販賣し、棺材板木死を盛るるの具を市易せんや、尙自ら

作すべからず、況んや人を殺へて作さしめんや、若し故に作さしめば輕垢罪を犯す。

若佛子、惡心を以ての故に、事無きに他の良人善人、法師師僧、國王貴人を謗して七逆

十重を犯せりと言はんや、父母兄弟六親の中に於て、孝順心、慈悲心を生ずべし、而るを

反つて更に逆害、障不如意處を加へば輕垢罪を犯す。

若佛子、惡心を以ての故に、大火を放ちて山林曠野を焼くこと、四月より乃至九月に至

らんや、火を放たば若は他人の家、屋宅城邑、僧房田木を焼いて鬼神官物、一切有主物に

及ばん、故に焼くことを得され、若し故に焼かば輕垢罪を犯す。

若佛子、佛弟子より外道惡人、六親、一切善知識に及ぶまで、應に一一に教へて大乘經

律を受持せしむべし、應に教へて義理を解せしめ、菩提心、十發心、十長養心、十金剛心

を發し、三十心の中に於て、一一に其次第法用を解せしむべし、而るを菩薩惡心瞋心を以

て

て

て



【十六に爲り倒す戒】

て、横に二乗聲聞の經律、外道邪見の論等を倒へば輕垢罪を犯す。  
若し好心を以て先づ大乘の威儀經律を學し、廣く義味を聞解すべし、後の新學の菩薩、百千里より來りて大乘經律を求むる有るを見ては、如法に爲に一切の言行を説くべし、若し身を觸き、臂を燒き、指を燒くべし、若し身臂指を燒いて諸佛に供養せずんば出家菩薩に非ず、乃至餓たる虎狼獅子、一切の餓鬼に悉く身肉手足を捨てて、而も之を養すべし、然して後に、一次第に爲に正法を説きて、心閑意解せしめよ、而るを菩薩得養の爲に、答ふべきを答へず、經律を倒説して文字に前無く後無し、三寶を謗じて言かば、輕垢罪を犯す。

【十七に恃乞】

若し自ら飲食錢財、利養着替の爲の故に、國王王子、大臣百官に親近し、恃んで形勢を作して、索し、打拍し、牽挽して、横に錢物を取り一切利を求むるを、名けて惡求多末と爲す、人を教へて求めしめ、都て惡心無く、孝順心無ければ、輕垢罪を犯す。  
若し戒を學誦せん者は、日夜六時に菩薩戒を持し、其義理佛性の實を解すべし、而るを薩、一句一偈及び戒律の緣を解せずして、詐りて能く解せりと言はば、即ち自ら欺誑し、亦他人を欺誑すと爲す、一一解せず、一切法知らずして、而も隨人の言に師と作りてを授けば、輕垢罪を犯す。

【十九に兩舌戒】

若し惡心以ての故に、其戒の行、下に香爐を提りて、菩薩の行を行ふるを見て而も舌を兩頭に挿しめ、實を謗欺して惡として造らざる無し。若し戒に傳さば輕垢

【三】二十に不行  
救求也。

【六】罽獄、餓  
鬼、畜生、修羅、  
人、天。

【七】廿一に瞋打  
報他戒。

【三】身業、口  
業、意業。

【六】廿二に憍慢  
不善法戒。

罪を犯す。

若佛子、慈心を以ての故に、放生の業を行すべし、應に是念を作すべし、一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母、我生生に是に從つて受生せざることを無し、故に六道の衆生は皆是れ我が父母なり、而るを殺し、而るを食せば、即ち我が父母を殺し、亦我が前身を殺すなり。一切の地水は是れ我が先身、一切の火風は是れ我が木石なればなり。故に常に放生を行すべし、生生に受生する常住の法なり、人を教へても放生せしめよ、若し世人の畜生を殺すを見ん時は、方便して教護し、其苦難を解くべし。常に教化し菩薩戒を講説して、衆生を救度せよ、若し父母兄弟死亡の日は、法師を請じて菩薩戒經律を講せしめ、福を以て亡者を資け、諸佛を見たてまつり、人天上に生ずることを得しむべし、若し爾らずんば輕垢罪を犯す。

是の如き十戒當に學し敬心に奉持すべし、滅罪品の中に廣く一一の戒相を明すが如し。佛の言はく、「佛子、瞋を以て瞋に報じ、打を以て打に報ずることを得ざれ。若し父母兄弟六親を殺さるとも、報を加ふることを得ざれ。若し國主他人の爲に殺されんも、亦報を加ふることを得ざれ、生を殺して生に報せば孝道に順せず。尙奴婢を善へて打拍罵辱せざれ、日日三業を起し口罪無量なり。泥んや故に七過の罪を作らんや、而るを出家の菩薩、慈思無くして讎を報じ、乃至六親にも故に報せば輕垢罪を犯す。

若佛子、初始めて出家し、未だ所解有らざるに、而も自ら聰明有智を恃み、或は高貴年



【正見等】正見は能知の智、正性は動所縁の境、正法身とは境智不二物に應じて形を現するに正法に非るはなきなり。

【七寶等】金、銀、瑠璃、珊瑚、瑪瑙、琥珀、水晶、七種の法門に應ずる聲聞等、聲聞等。

【阿毘曇】阿毘曇無比法と譯す。

【九】廿五に不善衆戒。

【夏安居】安居は梵にウツラジャヤ、ゾサナ(ウツラヤ)ニゴトといひ夏行、夏籠等と譯す。僧侶が四月十五日より九十日間禁して家に籠り、係に修業すること。

【擲擲】ダーナバティ(Dāna-pāṭi)と施主と譯す。布施を行ずる人。

と能はずして、而も七寶を捨てて、反つて罪見の二乘、外道、俗典、阿毘曇、雜論、一切の書記を學ぶは、是れ斷佛性障道の因縁にして、菩薩道を行ずるにあらず。若し故に作らば、輕垢罪を犯す。

若佛子、佛滅度の後、説法の主と爲り、行法の主となり。僧房の主、教化の主、坐禪の主、行來の主と爲らん、慈心を生じて善く閑訟を和し、善く三寶物を守つて、度無く用ひて、自己の有の如くすること莫るべし。而るを反つて衆を亂して閑訟せしめ、恚なる心にて、三寶物を用ひば、輕垢罪を犯す。

若佛子、先に僧房中に在つて住せんは、後に谷、菩薩比丘の僧房舍宅城邑、若は國王宅舍の中、乃至夏生安居の處、及び大會の中に衆入するを見ては、先住の僧、迎來送去し、飲食供養し、房舍臥具、繩床、木床、事事給與すべし。若し物無くんば自身及び男女の身を賣り、自身の肉を割き、賣りて供給し、所須悉く以て之を與ふべし。若し檀越來りて衆僧を請すること有らば、客僧にも利養の分有らしめよ。僧房の主、次第に客僧を請して、

受請せしむべし。而るを先住の僧、獨り受請して、而も客僧を差さずんば、房主無量の罪を得ん。畜生と異なることなく、沙門にあらず、釋、種姓にあらず、若し故に作さば輕垢罪を犯す。

若佛子、一切別請を受けて、利養を己に入ることを得ざれ。而も此利養は、十方僧に屬せり。而るを別に受請せば、即ち十方僧物を取りて、己に入るなり。八福田の中、諸佛

【沙門】 シヨウマ

ナ (Sramana) 勤息

と譯す。出家して

佛道を修むる人

【七】 廿七に受割

【八】 廿八に別請

【九】 アルハシ

【十】 聖僧と譯

【十一】 王子イ

【十二】 王子イ

【十三】 王子イ

【十四】 王子イ

【十五】 王子イ

【十六】 王子イ

【十七】 王子イ

【十八】 王子イ

【十九】 王子イ

【二十】 王子イ

【二十一】 王子イ

【二十二】 王子イ

【二十三】 王子イ

【二十四】 王子イ

上人、一一の師僧、父母病人の物を、自己に用ふるに及ぶが故に、輕垢罪を犯す。

若佛子、出家の菩薩、在家の菩薩、及び一切諸佛有りて、僧の福田を請じて、求願する

の時は、僧房に入りて、知事の人に問ふべし。今請僧求願せんと欲すと。知事報じて言ふ

べし。大軍に請せば、即ち十方の賢聖僧を得ん。而も世人五百の羅漢菩薩僧を別請せば、

僧次の一凡天僧に如かず。若し僧を別請せば、是れ外道の法なり。七佛に別請の法無し。

若道に請せず。若し其に僧を別請せば、輕垢罪を犯す。

若佛子、風心を以ての故に、利養の爲に男女の色を販賣し、白手作食して、自ら喫り自

食す。男女を賣出して、夢の青黄を解き、是れ男、是れ女と咒術し、工巧し、調師の方

法をし、百種の惡業、千種の惡業、百毒を和合せば、都て惡心無し。若し

此に犯せば、輕垢罪を犯す。

若佛子、風心を以ての故に、自身に三寶を請し、許して親用を現じ、日復々家を造いて

修行の中に在り、白衣の爲に、男女を通致して、輕色を交會し、諸の綺著を作す。六齋日

と年の三時、四月とに於て殺生劫盜淫殺戒を作さば、輕垢罪を犯す。是の如き者十戒、

常に犯し、惡心に事せずべし。制戒品の中に廣く解くが如し。

若佛子、佛滅度の後、惡貴の中に於て、若し外道、一切の惡人、劫賊、淫菩薩女

等の惡徒を賣り、及び雜種を賣り、比丘、比丘尼、亦發心の菩薩道人を賣り、或は賣の爲

に使はせ、一人人の肉に、蚊蟻と作さんものを見ては、而も菩薩事を見知りて、慈悲心

【六六】三十二に損  
害家室者

を生じて、方便救護し、處處に教化して物をとり、佛菩薩の形像及び比丘比丘尼、真心の菩薩、一切の經律を贈ふべし。若し贈はずんば、輕垢罪を犯す。  
若し佛子、刀杖弓箭を畜へ、輕秤小斗を販賣し、官の形勢に回りて、人の財物を取り、害心を以て繫縛し、成巧を破壊し、猪狸猪狗を長養することを得ざれ。若し、一に作さば、輕垢罪を犯す。

【六七】三十三に邪  
淫戲樂者

若し佛子、惡心を以ての故に、一切男女等の隣、軍陣兵將、劫賊等の隣を觀んや、亦吹貝鼓角、琴瑟箏笛篳篥、歌叫伎樂の聲を聴くことを得ざれ。輕蒲圍碁、波羅塞戲、彈碁六博、拍毬擲石投壺、空道八道行成じ、爪鏡草楊枝、鉢盂、觸膝を以て卜筮を作すことを得ざれ。盜賊の使命を作すことを得ざれ。一一作すことを得ざれ。若し、故に作さば、輕垢罪を犯す。

【六八】三十四に輕  
念小乘戒

若し佛子、禁戒を護持して、行住坐臥、日夜六時に其戒を讀誦し、猶し金剛の如く、淨寶を帶持して、大海を渡らんと欲するが如くし、草繫比丘の如くすべし。常に大乘の善信を生じて、自ら我は是れ未成の佛、諸佛は是れ已成の佛なりと知るべし。菩提心を發して、念念の心に去てざるべし。若し一念二乘、外道の心を起さば、輕垢罪を犯す。

【六九】三十五に不  
發願戒中に父母師

若し佛子、常に一切の願を發して、父母、師僧三寶に孝順し、好師と同學善友知識とを得て、常に手に大乘經律を教へ、十發趣、十長養、十金剛、十地を、我に聞解せしめ、如法に修行し、佛戒を堅持せんことを願ふべし。寧ろ身命を捨つれども、念念に心に去てざ

【七〇】三十五に不  
發願戒中に父母師

を斷たんことを恐れて動かざりし故事。

僧に孝ならんと願ふ等の十大願を發して勝事を求むる類は次につきて知るべし。

【六】三十六に下後誓戒の内十三前十二は戒を守るの誓、後一は他の成佛を得しめんとなすなり。

若し一擧の破戒罪を犯さずんば、暫く罪を犯す。若し佛子、是十大願を盡し已りて、佛の教を奉じて、是願を作して當ふべし。寧ろ其身を以て熾然たる火、大坑刀用に投ずとも、終に諸佛の羅網を脱免して、一切女人と不淨下作さず」と。

復願を作すべし。寧ろ熱鐵の羅網を以て、千軍周匝して、身を纏ふとも、終に破戒の身を以て、信心檀越の一切衣服と受けず」と。

復願を作すべし。寧ろ此身を以て、熱鐵丸及び大流の猛火を呑んで、百千劫を經とも終に破戒の口を以て、信心檀越の百味の飲食を食せず」と。

復願を作すべし。寧ろ此身を以て、大猛火の羅網、熱鐵の地上に臥すとも、終に破戒の身を以て信心檀越の百種床褥を受けず」と。

復願を作すべし。寧ろ此身を以て三百の鋒の刺を受けて、一劫二劫を經とも、終に破戒の身を以て信心檀越の百千種受を受けず」と。

復願を作すべし。寧ろ此身を以て、熱鐵の錢に投じて、百千轉を經とも、終に破戒の身を以て、信心檀越、千種房舍、宅園林田地を受けず」と。

復願を作すべし。寧ろ鐵錘を以て、此身を打碎きて、頭より足に至り、復願の如くならしむとも、終に破戒の身を以て、信心檀越の恭敬禮拜を受けず」と。

復願を作すべし。寧ろ百千の熱鐵刀鋒を以て、其兩目を挑るとも、終に破戒の心を以

て他の好色を斷ず」と。

復是願を作すべし。一、寧ろ百千の鐵錘を以て、遍く耳根を總刺して、一劫二劫を經とも、

終に破戒の心を以て好音聲を聽かず」と。

復是願を作すべし。一、寧ろ百千の刃刀を以て其鼻を割去すと、終に破戒の心を以て、諸

音を鼻嗅せず」と。

復是願を作すべし。一、寧ろ百千の刃刀を以て其舌を割斷すとも、終に破戒の心を以て人の

百味の淨食を食せず」と。

復是願を作すべし。一、寧ろ利斧を以て、其身を斬斷すとも、終に破戒の心を以て好饑に食

せず」と。

復是願を作すべし。一、願くば、一切衆生に悉く成佛を得しめん」と。而るを菩薩、若し

是願を發さずんば、轉垢界を犯す。

若佛子、常に二時に頭陀し、冬夏に坐禪して、結夏安居し、常に持杖と澁豆と、三衣と、

經と、鉢と、坐具と、鉢鉢と、香爐と、澆水囊と、手巾と、刀子と、火絛と、鐺子と、

繩床と、經と、律と、佛像と、菩薩の形像とを用ふべし。而も菩薩、頭陀を行せん時は

遶方の時に及んで、百里千里を行來し、此十八種物、常に其身に隨へよ。頭陀は、正月

十五日より、二月十五日に至り、八月十五日より、十月十五日に至る。是二時の中、此十

八種物、常に其身に隨ふこと鳥の二翼の如くすべし。若し布薩の日は、轉學の菩薩、半月

【五一】三十七に日  
離遊行藏

【二時】春秋の暑  
かからず寒からざる  
時。

【頭陀】ヅー々  
(Dhuta) 陶汰、修  
治なりと譯す。精  
潔の事垢を拂ひ去  
りて佛道を求むる  
こと。





【羅刹】 ラークンヤサ(ラウカス) 食人鬼と譯す。

【五時】 四十に揀擇受戒也。

【破羯磨轉法輪僧】 佛滅後別の邪羯磨なしとし、正羯磨及初轉法の類なり【聖人】 四果の僧なり。

阿闍梨、亡滅の日、及び三七日、乃至七七日、亦大乘經律を讀誦講說すべし。齋會して福を求め、行來して治生し、大火に燒かれ、大水に漂され、黑風に船舫を吹かれ、江河大海羅刹の難にも亦此經律を讀誦し講說すべし。乃至一切の罪報、三惡し道八難、粗穢物饋に、其身を繫縛し、淫多く、瞋多く、愚癡多く、疾病多きに、皆此經律を讀誦し、講說すべし。而るを、新學の菩薩、若し自ら承ふば、輕垢罪を犯す。是の如きの九歲當に學し、敬心に奉持すべし。梵壇品の中に當に説くべし。

佛の言はく、佛子、人の與に受戒せしむる時、簡擇することを得ざれ、一切の國王王子、大臣百官、比丘比丘尼、信男信女、淫男淫女、十八梵天が欲天子、無根二根、黃門奴婢、一切の鬼神、盡く受戒せしむることを得よ。教へて身に著る所の袈裟、皆壇色にして道と相應せしめ、皆染むるに青、黃、赤、黑、紫の色ならしめ、一切單衣乃至臥具も、盡く以て壇色にし、身に著る所の衣、一切染色ならしむべし。若し一國國王の中、國人所著の衣服あらん、比丘は皆其俗服と異ること有らしむべし。若し受戒せしめんと欲する時、問うて言ふべし、「汝現身に七逆罪を作さざるや不や」と。菩薩の法師、七逆人の與に現身に受戒せしむることを得ざれ。七逆とは出佛身血と、殺父と、殺母と、殺和上と、殺阿闍梨と、破羯磨轉法輪僧と、殺聖人となり、若し七逆を具せば、即ち現身に得戒せず、餘の一切人は、盡く受戒せしむることを得べし。出家人の法、國王に向つて禮拜せざれ、父母に向つて禮拜せざれ、六親を敬せざれ、鬼神を禮せざれ、但法師の語を解せんもの、百里千

果より來りて求法する者自らんに、爾を重く罰す。其の法は、三心以て、而も即ち一切衆生に戒を與せしむれば、輕罪を犯す。

【七】十一に爲  
七逆罪

【十】十發趣  
十長養  
性種性亦

【十一】十金  
道理性

【十二】また學  
び十地の

【十三】十八  
【十四】十八  
【十五】十八  
【十六】十八  
【十七】十八  
【十八】十八  
【十九】十八  
【二十】十八

若し、人を教化して信心を起さしめん時、菩薩他人の與に、教戒の法師と作らば、受戒せんとす人を見て、畏れて二戒を請せしむべし。如上と阿闍梨となり。二阿闍梨に問うて、汝七逆罪有りや不や」と、若し逆罪に十逆罪行らば、師與に受戒せしむべからず、若し七逆無くんば、與に受戒せしむることを得。若し十重を犯すること有らば、教へて懺悔せしむべし。佛菩薩の相續に在つて、日夜六時に十重四十八輕戒を誦し、書寫に三世に佛を禮して、懺悔を成ることを得しめよ。若し一七日、二三七日、乃至一年にも、好相を見ることを得しむべし、好相とは佛來りて摩頂し、光を見華を見る等の異相なり、佛に滅罪することを得。若し前罪無くんば、懺すと罪を全無し、是人現身に、亦得戒せず、若して増進することを得しめよ。若し四十八輕戒を犯せば、對首懺悔せしめよ、罪便ち減ずることを得、七逆に同じならず。而も教戒の師法中に於て、一一好相を得ずし。若し大乘經律の、若し輕罪は、是非の相を解せず、第一菩薩、習種性、夏、性種性、不可壞性、道種性、正法性、其中の多、其の出入、十種支、一戒の行法を解せず、一一此法中の意を得ず、而して菩薩、其の法に、名聞の爲の故に、尋求多求し、弟子を貪利して、而も許して一切の戒を許せりとせば、是れ自ら毀許し、亦他人を毀許するなり、故に人の真に授戒せば、斯罪を犯す。

【卷】四十二に爲  
惡人爲戒戒。

若佛子、利養の爲の故に、未受菩薩戒の者の前、若は外道惡人の前に於て、此千佛の大戒を説くことを得ざれ。邪見人の前にも亦説くことを得ざれ。國王を除いて、餘の一切人に、説くことを得ざれ。是惡人の輩、佛戒を受けざれば、名けて畜生と爲す、生身に三寶を見たてまつらず。木石の無心なるが如し、名けて外道邪見人の輩と爲す、木頭と異ること無し。而るに菩薩、是惡人の前に於て、七佛の教戒を説かば輕垢罪を犯す。

【七】四十三に集  
慚受施戒。

若佛子、信心に出家し、佛の正戒を受けて、故に心を起して、聖戒を毀犯せば、一切檀越の供養を受くることを得ざれ。亦國王の地上に行くことを得ざれ。國王の水を飲むことを得ざれ。五千の大鬼、常に其前を遮り、鬼大賊なりと言ひ、若し坊舎、城邑宅の中に入らば、鬼復常に其脚跡を掃はん。一切世人、咸く皆罵りて佛法中の賊なりと言ふ。一切衆生、眼に見んと欲せず。犯戒の人は、畜生と異なること無く、木頭と異なること無し。若し故に正戒を毀らば輕垢罪を犯す。

【五八】四十四に不  
供養經典戒。

若佛子、常に一心に、大乘經律を受持し讀誦し、皮を剥いで紙と爲し、血を刺して墨と爲し、髓を以て水と爲し、骨を析いて筆と爲して、佛戒を書寫し、木皮、紙、絹素、竹帛にも、亦悉く書して持し、常に七寶無價の香華、一切の雜寶を以て箱囊と爲して、經律の卷を盛るべし、若し如法に供養せずんば輕垢罪を犯す。

【五九】四十五に不  
化衆生戒、  
【一歸】歸依佛、  
歸依法、歸依僧。

若佛子、常に大悲心を起すべし、若し一切の城邑舍宅に入りて、一切衆生を見ては、當に唱へて言ふべし、汝等衆生、盡く三歸十戒を受くべしと、若し牛馬猪羊、一切畜生を

【六〇】四十六に説法不如法戒。

【白衣】在家の人

【四衆】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。

【事火婆羅門等】西國の外道多く火神に事へ専ら盡敬して念念に相續するを以て今擧ぐるなり。

【六〇】四十七に非法制戒。

見ては、心念口言すべし、「汝は是れ畜生、菩提心を發すべし」と。而も菩薩は一切の處山川林野に入りても、菩提心をして、菩提心を發すべし、是れ菩薩にして、若し衆生を輕慢せずんば輕罪を犯す。

若佛子、常に教化を行じ、大悲心を起すべし、若し僧貴人の家、一切衆の中にいらんに、立ちながら白衣の爲に説法することを得され、白衣衆の前に在りては、高座の上に坐すべし、法座の比丘、地に立ちて四衆の爲に説法することを得され、若し説法の時、法師は高座にして香華供養止しめ、四衆の聽者膝下坐にして、父母に孝順するが如くし、師教に敬重すること、事火婆羅門の如くすべし、共説法者、若し不如法にして説かば、輕垢罪を犯す。

若佛子、菩提心を以て神戒を受けん者の、若は國王太子百官、國部の弟子、自ら高貴を恃んで佛戒の戒律を破滅し、明かに制法を作して、我が四部の弟子を誡し、出家行道を聽さず、亦復形像佛塔經律を建立することを聽さず、統言を立てて衆を誡し、衆を安んじて僧を誡せしめ、菩薩の具足は地に立ち、白衣は高座にして、廣く非法を行すること、兵奴の様に非ふるが如くせんとす、若し菩薩は、正しく一人の信衆を受くべし、信衆を反つて官の爲に走使して、非法非行ならん者、若し國王百官、好む處に佛戒を受けん者は、是れ菩薩の罪を作すと莫れ、若し故に佛法を背き、世間法を犯す者、若し、心を以て出家し、而して名聞利養の爲に、國王百官の前に就て、七佛戒を

説かん者の、横に比丘比丘尼、菩薩弟子の與に、繫縛の事を作すこと、罪因の法の如く、  
 兵刃の法の如くせば、佛子身中の齒の、自ら佛子の肉を食うて、餘外の齒に非ざるが如し。  
 是の如きは佛子自ら佛法を破す、外道天魔の能く破するに非ず、若し佛戒を受けん者は、  
 佛戒を破ること一字を念ふが如く、父母に事ふるが如くすべし、毀破すべからず、爾も若  
 薩は、外道惡人の、惡言を以て佛戒を誘破するの聲を聞いては、二百の鐘をて心を轉し、  
 千万萬杖もて其身を打拍するが如く、辱しりして異なることあること無かるべし。擧る自  
 ら地獄に入りて、百劫を経とも、爾も一たび惡人の惡言を以て、佛戒を誘破するの聲を聞  
 かされ、而るを泥んや自ら佛戒を破らんや、人に破法の因縁を教へ、亦善觀の心無く、若  
 し故らに作さば無垢罪を犯す。法の如きの九支、當に擧し歡心に奉持すべし。

諸の佛子、是四十八種戒、汝等受持すべし。過去の諸の菩薩も已に誦し、未來の諸  
 の菩薩も當に誦すべし。現在の諸の菩薩も今誦す。

諸の佛子諦かに聽け、此十重四十八種戒は、世の諸佛、已に誦し、當に誦し、今誦  
 したまふ、我も今亦是の如く誦す、汝等一切の衆衆、若し國王、王子、百官、比丘、比  
 丘尼、信男、信女、菩薩衆を受持せん者は、當に佛性常住の戒律を受持し、護持し、解  
 説し、書寫して、三世一切の衆衆に流通して教化して絶えざらしむべし。千佛に見ゆるこ  
 とを得ては、佛佛に手を授けられ、世世惡道八難に墮せず、常に天道中に生ずることを  
 得ん。我今此樹下に在りて、略して七種の法戒を聞か、汝等大衆、當に一心に護持捉木又

【十の住處】以下流通分  
 金剛座に坐して十  
 世界海を説き、二  
 三に釋尊宮に十住を  
 四に兜率に十行を  
 五に化樂に十定を  
 六に他化に十地を  
 七に初禪に十金剛  
 八に二禪に十



計我著相の者は、是法を信すること能はず

滅壽取證の者も、亦下種の處に非ず

菩提の苗を長くて、光明世間を照さんと欲せば

應當に歸かに、諸法眞實の相を觀察すべし

不生亦不滅、不常復不斷

不一亦不異、不來亦不去なりと

是の如く一心の中に方便して、勤めて莊嚴し

菩薩の所應作、應當に次第に學すべし

學に於ても無甚に於ても、分別の想は生ずること勿れ

是を第一の道と名け、亦摩訶衍と名く

一切戲論の惡は、悉く是處より滅し

諸佛の薩婆若は悉く是處より出づ

是故に諸の佛子、宜しく大勇猛を發し

諸佛の淨戒に於て、護持すること明珠の如くすべし

過去の諸の菩薩も、已に是中に於て學し

未來の者も當に學すべし、現在の者も今學す

此は是れ佛の行處にして、聖主の稱したまふ所なり

【摩訶衍】マハ  
ヤーナ (Mahayana  
ニ大乗と譯す。  
【薩婆若】サトルツ  
サユニヤ (Sambodhi  
ニ一切智と譯す  
者佛果上の智慧に  
名く。



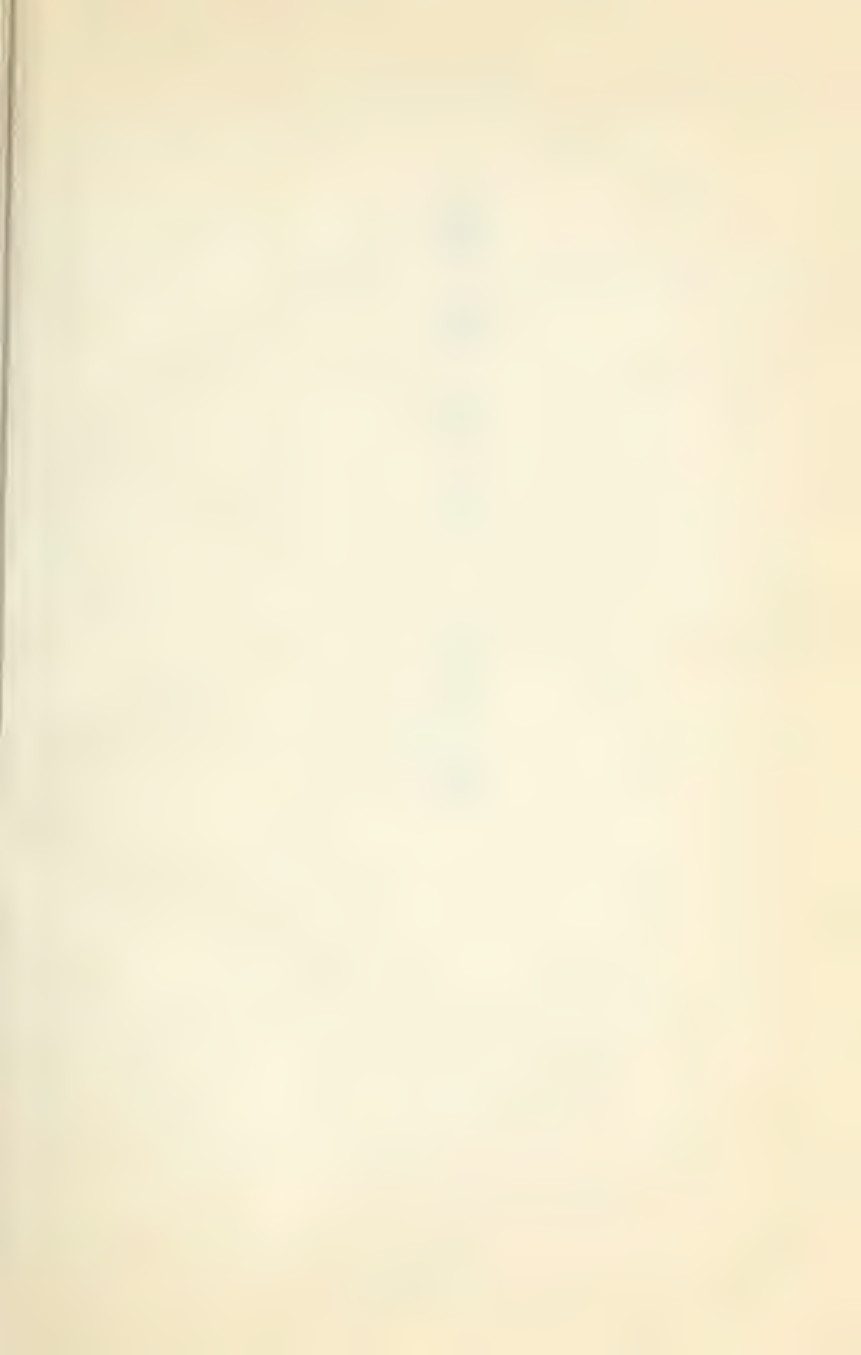
我々に編輯して置く、雑誌に東京の集まるる  
編して、紙に集まるる、共に一切の事に  
之には、法に則する、此に何道と云ふ  
之には、法に則する、此に何道と云ふ

東京の集まるる  
紙に集まるる  
共に一切の事に  
法に則する  
何道と云ふ



佛說四十二章經

第一卷



佛說四十二章經

後漢迦葉摩騰竺法蘭同訳く譯す

【世尊】世尊の尊は、正統通と音し、一切一草となす。異例なり。

【苦集滅道】四門、世尊の門

【四門】四門の法を

【阿羅漢】阿羅漢

【四天王】四天王

【四天王】四天王

【四天王】四天王

【四天王】四天王

【四天王】四天王

【四天王】四天王

【四天王】四天王

世尊、成道し已りて、見思性を作したるを無く、聲を離れて寂靜なる、是を最と勝れた  
と稱す。一と。大神定に住して、世尊の心を降し、鹿野苑の中に居て、四諦の法輪を轉  
じ、陳如等の五人を度して、而も道果を證せしめたまふ。復比丘有り、説きたまふ所の  
中、疑を佛に承めて進止す。世尊、教勸し一一に開悟せしめたまへば、合掌し敬諾  
して、而も尊勸に順ず。

佛の言はく、親を辭して出家し、心を識りて本に達し、無爲法を證するを、名は四門  
と曰ふ。常に二百五十戒を行ひ、進止清淨にして、四眞の道行を爲し、阿羅漢を證す。阿  
羅漢とは、能く飛行し、變化し、曠劫の壽命に住し、大地を動す。次をば阿那含と爲す。阿  
那含とは、壽終りて、靈神十九天に在り、阿羅漢を證す。次をば斯陀含と爲す。斯陀含と  
は一たは有り、一たび還りて、阿羅漢の道を得。次をば須陀洹と爲す。須陀洹とは、したる  
聖し、心を生じて、便ち阿羅漢を證す。愛欲を離すと云ふは、四眞の道じて、復之を用  
する事無し。

釋經 第一章

【二】利根の爲に教を示す。【自心の源】如来藏性なり。

【三】沙門を制して世の資財等を去らしむ。

【四】身口意の行を戒む。

【五】無心にして理を辨へざるを過と謂ふ。

佛の言はく、出家沙門といふは、欲を斷ち愛を去りて、自心の源を戒り、佛の深理に達して無爲の法を悟り、内に所得無く外に所求無く、心は道に繫がれず、亦業に結ばれざるものなり。無念、無作、非修、非證にして、諸位を厭ずして而も自ら崇最たる、之を名けて道と曰ふ。

右經 第二章

佛の言はく、鬚髮を剃除して、而も沙門と爲り、道法を受くる者は、世の資財を去りて乞ひ求めて足ることを取る。日中一食し、樹下に一宿して、愼みて睡ぶること勿れ。人をして愚癡ならしむるものは愛と欲となればなり。

右經 第三章

佛の言はく、衆生、十事を以て善と爲し、亦十事を以て惡と爲す。何等をか十と爲す。身に三、口に四、意に三なり。身に三とは、殺と盜と姪となり。口に四とは、兩舌と惡口と妄言と綺語となり。意に三とは、嫉と恚と癡となり。是の如きの十事、聖道に順はずんば十惡行と名け、是惡若し止みぬれば十善行と名く。

右經 第四章

佛の言はく、人には衆の過有り。而も自ら悔いて頗に其心を息めずんば、罪來りて、身に起くこと、水の海に歸して漸く深廣と成るが如し。若し人、過有りて自ら解りて非を知り、惡を改め、善を行せば、罪自ら消滅すること、病に汗を得れば、漸く瘡損する

こと有るが如きのみ。」

右經 第九章

佛の言はく、「愚人、善を聞きて、故に來りて撓亂せば、汝自ら禁息して、當に嘔吐すること無るべし。惡來りて惡む者は、而も自ら之を惡むなり。」

右經 第十章

佛の言はく、「人有り、吾が道を守り、大仁慈を行ずるを聞きて、故に佛を罵ることを致す。佛、黙して對へたまはず。罵ること止む。問うて曰はく、「子、禮を以て人に従はんに、其人、禮を稱れずんば、子に歸せんや」對へて曰はく、「歸せん」佛の言はく、「今子、我を罵る。我今稱れず、子自ら禍を興して、子が身に歸す。猶し響の聲に應じ、影の形に隨ふがごとく、緣に免れ離るること無し。愼みて惡を爲すこと勿れ」と。」

右經 第十一章

佛の言はく、「愚人の賢者を害すること、猶し天を仰ぎて唾せんに、唾、天に至らずして還つて已に従ひ、塵と、風に逆ひて塵を揚ぐるに、塵、彼に至らずして、還つて已が身を益すがごとく、賢は害ふべからず。賢は害すべからず。」

右經 第十二章

佛の言はく、「佛に問きて、道を學すれば、道は必ず會し難し。志を守りて、道を學すれば、此道其の大なり。」

【六】 嗔心起る時佛知見をもて之を禁息すべし。自ら惡むは自ら害ふなり。

【七】 佛は誘すべからず。佛は誘を受けざるを以て禍還りて己に歸す。

【八】 賢は害すべからず。賢者は害すべからざるを以て、ただ自ら害すべからず。

【九】 多問を以て道を學ぶときは、佛の言に依りて學べば、此道其の大なり。

【二〇】功德は六度を出でず、而して布施は之に該當す

【二一】田を擇びて種を播き、念住修證の人は凡格を以てゆるが故に其福有り勝れり。

【二二】略して人情の難事二十種を示し、難を轉じて易

右經第九章

佛の言はく、一人の道を施すと犯す、之を助けて歡喜せば、福を得ること甚だ大なり。沙門、問うて曰はく、此福盡くるや。佛の言はく、燈へば一炬の火あるに、數千百人、一炬を以て來り、分ち取りて食を熟し、冥を除くも、此燈は故の如くなるが如し。善男子亦之の如し。

右經第十章

佛の言はく、一惡人百に飯せんよりは、一りの善人に飯せんには如かず。善人千に飯せんよりは、一りの五戒を得する者に飯せんには如かず。五戒の者の萬に飯せんよりは、一りの須陀洹に飯せんには如かず。百萬の須陀洹に飯せんよりは、一りの斯陀含に飯せんには如かず。千萬の斯陀含に飯せんよりは、一りの阿那含に飯せんには如かず。一億の阿那含に飯せんよりは、一りの阿羅漢に飯せんには如かず。千億の阿羅漢に飯せんよりは、一りの辟支佛に飯せんには如かず。百億の辟支佛に飯せんよりは、一りの三世の諸佛に飯せんには如かず。千億の三世の諸佛に飯せんよりは、一りの無念、無住、無作、無證の者に飯せんには如かず。

右經第十一章

佛の言はく、一人に於て二十種の難有り、貧窮にして布施すること難し、豪貴にして道を學ぶること難し、一命を重んじて必ず死すこと難し、福徳を得ること難し、生れて



と爲し、情を化して道に向はしむ。

【一〇】 道もと現成に由るが故に隔る、故に佛答あり

【一〇】 道、行に依らざる時は空ろなず、守に依らざる時は外移す。

【一〇】 忍を行ずる者は名けて有力大人と爲すべし。

佛世に當りては、色を以て欲を思ふこと難し。好を見に求めざること難し。辱められしを以て忿を思ふこと難し。譽有りて驕まざること難し。事に覆れて無心なること難し。廣く學び傳くこと難し。我國を離れしること難し。未學を輕んずること難し。心行平等なること難し。衆生を度かざること難し。空しく識に會ふこと難し。佛を見、道を學ぶこと難し。世間の事に隨ふこと難し。一法を觀て益かざること難し。善く方便を解すること難し。

右經 第十一

沙門、佛に問はく、「阿耨多羅三藐三菩提を以て、宿命を知り、其正道を會する、ことを得る。」佛の言はく、「心を正しくして、至道を會すべし。瞋へば能く會するに、垢去りて、明存す。瞋を離れ、戒を以て、其正道を會すべし。當に無命之真に會す。」

右經 第十二

沙門、佛に問はく、「阿耨多羅三藐三菩提を以て、何者か大なる。佛の言はく、「正を行じ、眞を守る者は善なり。正と眞を會ふ者は大なり。」

右經 第十三

沙門、佛に問はく、「何者か多力なる。佛の言はく、「多力にして、忍を以て、至道に會する。忍者は無く、善人の心に隨ふ。心垢盡し、清くして、佛の道を以て、其正道を會す。未だ天梯有らざること、今日に至るまで、十方

の所有、見ずといふこと有ること無く、知らずといふこと有ること無く、聞かずといふこと有ること無く、一切の智を得るを明と謂ふべし。」

右經第十五章

【六】愛欲を捨てざれば道を見る能はず

佛の言はく、「人、愛欲を懐ひて、道を見ざることは、譬へば流水の、手もて之を攪すことを致せば、衆人共に臨むも、其影を觀る者、有ること無きが如し。人、愛欲を以て交錯すれば、心中に濁興る。故に道を見ず。汝等沙門、當に愛欲を捨つべし。愛欲の垢、盡くれば道見るべきなり。」

右經第十六章

【七】以上は皆無明を破して道を見る。此章は諦を見ず無明を滅す

佛の言はく、「夫れ道を見るときは、譬へば炬を持って冥室の中に入らば、其冥即ち滅して、明獨存するが如く、道を學び、諦を見ば無明即ち滅して、明は常に存す。」

右經第十七章

【八】我が一切の法は無住を本とす

佛の言はく、「吾が法は無念の念を念とし、無行の行を行とし、無言の言を言とし、無修の修を修とす。會する者は近く、迷ふ者は遠し。言語道斷にして、物の拘はる所に非ず。之を毫釐も差へば、之を須臾に失ふ。」

右經第十八章

【九】無常は入道の門、靈覺は本有の佛性、此二者を有

佛の言はく、「天地を觀するに非常と念じ、世界を觀するに非常と念じ、靈覺を觀すれば即ち菩提なり。是の如く知識すれば、道を得ること疾し。」

觀ぜれば道を得る  
こと疾かなり。

【二】此身は唯河  
大の觀相合にして  
我無き者たるを觀  
せしむ。

【三】戒名を本町  
に穿くこと、佛  
を身後に從すなり。

【四】時色の吉宅  
る。

【五】妻子命宅に  
對して自ら流汗に  
浸して自ら潤る事  
が如し。

【六】佛の法を以  
て色欲を斷ずべし。

百篇第十九章

佛の言はく、一富に身中の四大を念すべし。各自に名有り、都て我無き者なり。我既に  
體二無ければ、其れ如幻なるのみ。

百篇第二十章

佛の言はく、一人、情欲に隨はて聲名を求む、聲名聞著にして身に故入。其富の  
名を會ひて、道を學ばざるは、功を授けて罪を誇す。體へは香を燒きて、人、香を聞々と  
雖も、香の味のみあるが如し。身を燃ゆるの火、而も其後に在ら。

百篇第二十一章

佛の言はく、一財色の人に於ける、人の之を捨てざれば、體へば刀塚の膏有り、一財の  
美に思ふざるを、小兒之を成るとまは、則ち舌を割るの患有るを明し。

百篇第二十二章

佛の言はく、一人の妻子命宅に繋ること、牢獄よりも甚し。牢獄は體を刺す有り、妻  
子は體を刺す無し。情の色を愛すること、以て體を傷らんや。世日の世有りと雖、心に  
甘快せず。此に覺じて自ら潤る、故に凡火をばふ。此門を垂得すれば、出家の縁成なり。

百篇第二十三章

佛の言はく、一愛欲は色より甚しきは莫し。色欲なる、其れ火にして身無し。體に  
一有り。若し二をじて同からしむば、普天の人、皆く放め爲にする者無かる人。

【三五】愛欲は自らを損ふ。

右經第二十四章  
佛の言はく、愛欲の人は、猶し炬を執りて風に逐つて行くが如し、必ず手を燒くの患有り。

【三六】佛の降魔なり。

右經第二十五章  
天神、玉女を佛に獻じて、佛意を壞らんと欲す。佛の言はく、「革囊象鼻、來るも何か爲ん。去れ、吾用はず」と。天神、遂敬ひて、四りて道意を問ふ。佛、爲に解説したまへば、即ち須陀洹果を得たり。

【三七】學道の人、木の水に在るが如し。

右經第二十六章  
佛の言はく、「夫れ道の爲にする者は、猶し木の水に在りて流を尋ねて行くが如し。兩岸に罅れず、人の爲に取られず、鬼神の爲に遮られず、河流の爲に住められず、亦腐敗せざれば、吾、此水を保す、決定して海に入らん。學道の人、情欲の爲に惑はれず、衆邪の爲に嫉はされずして、無爲の精進せば、吾、此人の必ず道を得んことを保す。」

【三八】阿羅漢を得ざれば我意を信ずる勿れ。

右經第二十七章  
佛の言はく、「慎みて汝が意を信すること勿れ、汝が意、信すべからず。慎みて色に會すること勿れ、色に會すれば、即ち禍生ず。阿羅漢を得已りて、乃ち汝が意を信すべし。」

【三九】女に處する

右經第二十八章  
佛の言はく、「慎みて女色を視ること勿れ。亦共に言語すること勿れ。若し與に語りな



【三】 精進度を示す

佛の言はく、「夫れ道の爲にする者は、譬へば一人の萬人と戦ひ、鎧を掛けて門を出るに、意氣は怯弱、或は半路にして退き、或は格闘して死し、或は勝つことを得て還るが如し、沙門、學道せんには、應當に其心を堅持し、精進勇銳にして、前境を畏れず、衆魔を破滅して、道果を得べし。」

右經 第三十一章

【四】 懈怠は道に差むこと能はず

沙門、夜、迦葉佛の遺教經を誦す、其聲悲慄にして、思ひ悔いて退かんと欲す。佛、之に問うて曰はく、「汝、昔、家に在りしとき、曾て何の業をか爲せし。對へて曰はく、「愛して琴を弾じき。」佛の言はく、「慈愛きとき如何。」對へて曰はく、「鳴らす。」慈急なるとき如何。對へて曰はく、「聲絶ゆ。」急緩、中を得るときは如何。對へて曰はく、「諸音普し。」佛の言はく、「沙門の學道も亦然り、心若し調適せば道を得べし。道に於て若し暴なれば、暴は即ち身疲る。其身若し疲るれば、意即ち懈を生ず、意若し懈を生ずれば行即ち退く。其行既に退けば罪必ず加はる、但清淨安樂ならば道失せず。」

右經 第三十四章

佛の言はく、「人の鐵を鍛へ、淬を去りて器を成せば、器即ち精好なるが如く、學道の人、心の垢染を去れば、行即ち清淨なり。」

右經 第三十五章

【五】 衆生の結習は心に在り

【六】 九難を列す

佛の言はく、一人、惡道を離れて、人たることを得ること難し。既に人たることを得れども、女を去けて師も男たることを難し。既に師たることを得れども、六根完具すること難し。六根既に具はれども、中國に生れることを難し。既に中國に生るれども、佛世に值ふこと難し。既に佛世に值ふとも、惡言に遇ふことを難し。既に道に遇ふことを得れども、信心を興すことを難し。既に信心を興せども、菩提心を發すことを難し。既に菩提心を發せども、無難、無難なることを難し。

【七】 戒は道を行ふの基なり

佛の言はく、佛子、善を離るること難し。佛子、善を離るれば、必ず惡業を得べし。善を離るに在りて、常に善を見んと欲し、善が成に難し。善を得べし。右經卷第十七章

【八】 壽考の相、當勤衰減なるは道に近し

佛、沙門に問はたまはく、人の命は幾の間にか在る。對して曰はく、數日の間なり。佛の言はく、善、まだ道を知らず。復り沙門に問はたまはく、人の命は幾の間にか在る。對して曰はく、飲食の間なり。佛の言はく、子、人の道を知らず。復り沙門に問はたまはく、人の命は幾の間にか在る。對して曰はく、呼吸の間なり。佛の言はく、善い哉、善、道を知れりこと。

【九】 一代の壽山、佛の道に在りて、當勤衰減なるは道に近し

佛の言はく、佛子、佛の道に在りて、當勤衰減なるは道に近し。佛の言はく、佛子、佛の道に在りて、當勤衰減なるは道に近し。

を食するに、中邊甘甜きが如し、吾が經も亦なり。

有經第四十九章

【四〇】身行道すと雖も、心世諦に緣せば佛備のみ。

佛の口はく、二門の行道は、磨牛の如くすること無かれ、身は行道すと雖も、心道行せず、心世諦し行ば何ぞ行道を用ひん。

有經第四十章

【四一】須らく道に專念なるべし。

佛の言はく、二天れ道の爲にする者は、牛の重を負うて深泥の中へ行くに、疲れまれど敢て左右を顧視せず、淤泥を出離して乃ち休息すべしが如し。沙門、當に觀ずへし、情は汗泥よしも世しきことを。直心にして道を念せば苦を免るべし。

有經第四十一章

【四二】佛己が知見を示し、衆生を開悟せしむるなり。

佛の言はく、一王、王侯の位を視ること隙を過ぐる馬の如し。金玉の寶を視ること瓦礫の如し。執事の服を視ること弊帛の如し。大千界を視ること一詞子の如し。阿耨多水無量阿僧祇劫の如し。油の如し。方便門を視ること寶鬘を化するが如し。無上乘を視ること金帛を視ること塗足の如し。方便門を視ること寶鬘を化するが如し。無上乘を視ること金帛を視るが如し。佛道を視ること眼前の花の如し。禪定を觀ること須彌の柱の如し。涅槃を視ること梵天の如し。佛道を視ること四時の木の如し。佛道を視ること六龍の舞ふが如し。平等を視ること一眞地の如し。興化を視ること四時の木の如し。

有經第四十二章

佛說四十二章經終



佛說尸迦羅越六方禮經

經典部	第一卷
-----	-----



# 佛說尸迦羅越六方禮經

後漢安息國譯 安世高譯

【一】序分。

【王舍國】ラーシツ

【中印度摩羅陀國の都城】

【鷓鴣山】カククダ

【迦葉入寂の地として知らるる。】

【尸迦羅越】巴利

名シカロー(去三)

【阿三十三】長

【阿十一】なる善生

【善生】同人なり

【六分衛】徒にピン

【六分衛】徒にピン

【六分衛】徒にピン

【六分衛】徒にピン

【六分衛】徒にピン

佛、王舍國の鷓鴣山の中に在しし時、其昔の子あり、尸迦羅越と名く。早く起きて頭を嚴り、洗浴して衣衣を著け、東に向ひて四たび拜し、南に向ひて四たび拜し、西に向ひて四たび拜し、北に向ひて四たび拜し、天に向ひて四たび拜し、地に向ひて四たび拜す。

佛、國に入りて分衛し、遙に之を見、往いて其家に到りて、之に問ひたまはく、「何んが六向拜を爲すや。此は何の法にか爲すや。」尸迦羅越言さく、「父在りし時、我をして六向拜せしめき。何の法なるやを知らず。今父は喪亡せるも、敢て後に於て之に違はず。佛の言はく、「父の汝をして六向拜せしめたるは、身を以て拜するにあらず。尸迦羅越便ち長跪して言さく、「願くば佛、我が爲に此六向拜の意を解きたまへ。」

佛の言はく、「之を聞きて、内心中に著けよ、其れ長者點人の能く四波を持ちて犯さざるもの可らば、今世には人天に敬はれ、後世には天上に生れん。一には、諸の群生を殺さざらん。二には、盜まざらん。三には、他人の婦女を愛さざらん。四には、妄言兩舌せざらん。心欲、貪欲、嗔怒、愚癡をば、自ら制してすこと勿れ。此四意を制する能はざるものは、日月に間に、月の暮る時、光明の消雲きが如く、暗く自ら其意を覆するものは、月

【惡知識】 惡黨の法を説きて人をしめて魔道に陥らしむるものをいふ。善知識の對。

【征徂】 おそれあわてること。

【博掩子】 ばくちうち。

初めて生ずるや、其光精明かにして十五日盂蘭の時に至るが如くなり。

佛の言はく、「復六事あり。錢財、日に耗滅す。一には、喜んで酒を飲む。二には、喜んで博掩す。三には、喜んで早く臥し晩く起く。四には、喜んで客を請ふも、亦人をし之を請ぜしめんと欲す。五には、喜んで惡知識と相隨ふ。六には、憍慢にして人を輕んず。上頭の四惡を犯し、復是六事を行はば、其善行を妨げ、亦治生を變ふるを得ず、錢財、日に耗滅して、六向拜すとも當に何の益かあらん。

佛の言はく、「惡知識に四輩あり。一には、内に怨心有り、外強ひて知識と爲る。二には、人前に於ては好言語し、背後には説きて惡を言ふ。三には、急ある時、人前に於ては愁苦し、背後には歡喜す。四には、外には親厚の如く、内には怨謀を興す。

善知識も亦四輩あり。一には、外怨家の如くして、内に厚意あり。二には、人前に於て直諫して、外に於ては人の善を説く、三には、病瘦の縣官には其が爲に征徂し、憂ひて之を解く、四には、人の貧賤なるを見ては棄捐せずして當に念じ、方便を求めて之を富まさんと欲す。

惡知識に復四輩あり。一には、諫曉し難く、之をして善を作さしむれば、故に惡者と相隨ふ、二には、之をして酒を喜む人と伴を爲すこと莫らしむれば、故に酒を嗜める人と相隨ふ、三には、之をして自ら守らしむれば、益更に多事なり、四には、之をして賢者と友たらしむれば、故に博掩子と厚きことを爲す。

善知識に亦四輩あり。一には、人の貧窮乏なるを見ては、生を治めしむ。二には、人と評ひて計校せず。三には、日に往いて之を消息す。四には、坐起常に相念ふ。

善知識に復四輩あり。一には、車の馬に捕へたるれば、將の歸りて之を載置し、後に於て之を解決す。二には、病瘦あれば、將の歸りて之を医視す。三には、命盡死亡すれば棺蓋して之を埋む。四には、知識已に死すれば復其家を念ふ。

善知識に復四輩あり。一には、賊に入らざれば之を止む。二には、惡知識に隨はんと欲すれば之を諫止す。三には、生を治むるを欲せざれば、勸めて生を治めしむ。四には、正道を喜まざれば、教へて之をして信喜せしむ。

惡知識に復四輩あり。一には、手くも之を辱せは、便ち大いに怒る。二には、争ありて之を僞使すれば行くを肯んぜず。三には、人の意あるを見る物は、人を遊戯てまじ。四には、人の死亡を見ては、擊つて視す。

佛の言はく、其責を論と運んで之に在り、是れを責は之を遠離せよ。我善知識と相勸（一）自ら成佛を致しかり。

佛の言はく、車に向かて致するは、子の父母に事ふるを請ふ、常に五事あるべし。一には、常に生を治むることを念ふべし。二には、早く起きて飯時を勤令し、時に飯食を作らむ。三には、父母の事を念ふべし。四には、常に父母の事を念ふべし。五には、父母の病あれば、常に濡覆して醫治を求め、之を治せしむべし。父母の老を視る亦五事あり、一

【一】次に六法行  
てんしにのまて用

には、當に塵を去り、善に就かしめんことを念ふべし。二には、當に計畧疏を勤ふべし。三には、當に教へて經戒を習たしむべし。四には、當に早く與に婦を娶ふべし。五には家中ある所は、當に之を給與すべし。

南向して拜するは、弟子の師に事ふるを謂ふなり。當に五事あるべし。一には、當に之を敬輔すべし。二には、當に其恩を念ふべし。三には、勤ふる所は之に隨へ。四には、思念して厭はざれ。五には、當に従ひて後之を稱譽すべし。師の弟子を教ふるも亦五事あり。一には、當に疾に知らしむべし。二には、當に他人の弟子に勝らしむべし。三には、知りて忘れざらしめんと思せよ。四には、諸の疑難あれば悉く爲に之を解説せよ。五には弟子の智慧をして師に勝らしめんと欲せよ。

西に向ひて拜するは、婦の夫に事ふるを謂ふ五事あるなり。一には、夫外より來れば、當に起ちて之を迎ふべし。二には、夫出でて在らざれば、當に炊爨掃除して之を行つべし。三には、外に疑心あることを得ざれ。夫罵詈すとも、還りて器り色を作すことを得ざれ。四には、當に夫の教誡を用ひ、有ゆる什物藏匿することを得ざれ。五には、夫休息すれば、蓋藏して乃ち臥するを得しめよ。夫の婦を視るに亦五事あり。一には、出入當に婦を敬すべし。二には、之に飯食せしめ、時節を以て衣被を與ふべし。三には、當に金銀珠璣を給與すべし。四には、家中ある所の多少は悉く用て之に付せよ。五には、外に於て邪に傳御を畜ふることを得ざれ。

北に向ひて拜するは、人の親屬朋友を視るを請ふ。當に五事あるべし。一には、之を罪惡を伴すを見ば、私に屏處に往きて、之を覆護して呵止せよ。二には、少しく急あむば、當に奔趨して之を救護すべし。三には、私語あれば、他人の爲に説くことを得ざれ。四には、當に莊嚴雜すべし。五には、有ゆる好物は、當に多少之を分與すべし。

地に向ひて拜すは、大夫の紅奢傳を視るを請ふ、亦五事あり、一には、當に時を以て飯食せしめ、衣被を與ふべし。二には、痲痺あれば、當に爲に醫を呼んで之を治せしむべし。三には、安に之を過擲することを得ざれ。四には、私の財物あれば、之を乞ふことを得ざれ。五には、分付の物は、當に平時ならしむべし。紅奢傳の大夫に事ふるに亦五事あり、一には、當に早く起きて大夫をして呼ばしむること得るべし。二には、當に作すべきものは、自ら用心して之を爲す。三には、當に大夫の物を覆護して、乞へんに棄捨することを得ざるべし。四には、大夫の用人には、當に之を送迎すべし。五には、當に大夫の言を稱讃して、其惡を説くことを得ざるべし。

人に向ひて拜するは、人の沙門道士に事ふるを請ふ。當に五事を用ふべし。一には、善心を以て之に向へ。二には、好言を擇んで之に説き。三には、身を以て之を敬せよ。四には、當に之を敬養すべし。五には、沙門道士は人中の雄なり、當に恭敬し、承事して三世の事も問ふべし。沙門居士は、當に六意を以て凡民を視るべし、一には、之を敬へて布施せしめ、自ら憍慢あることを得ざれ。二には、之を責へて實を持たしめ、自ら色を犯すこ

【沙門】 シユラマ  
ナ (Sramana)  
息、止息せりと  
す、出家して佛道  
を修むる人の意

【四】佛更に偈を  
 説きて先に説くと  
 ころを重唱す。

とを得ざれ。三には、之を教へて忍辱ならしめ、自ら悲怒することを得ざれ。四には、之を教へて精進せしめ、自ら傲慢なることを得ざれ。五には、人をして一心ならしめ、自ら放意することを得ざれ。六には、人をして慈悲ならしめ、自ら愚癡なることを得ざれ。沙門道士は、人を教へて惡を去り、善を爲さしめ、正道を開示す。思ふ父母より大なり。是の如く之を行はば、汝の父の在りし時の六向拜の教を知ると爲すなり、何んが富まざるを憂へん。尸迦羅越、即ち五戒を受け、禮を作して去りぬ。

佛、眼偈を説きたまはく、

鷄鳴當に早起し、衣を被來りて床を下り

澡漱して心を淨からしめ、兩手に花香を奉るべし

佛は尊きこと諸天に過ぎたまふ、鬼神も當ること能はず

低頭して塔宇を遶り、又手して十方を禮せよ

賢者は精進せざれば、譬へば樹の根なきが如し

根斷たるれば枝葉落つ、何の時か當に復連るべき

華を採りて日中に著くれば、能く幾時か鮮かたる有らん

心を放ち自ら意を縱にせば、命過ぎて復何をか言はん

人は當に非常を慮るべし、計し來るに期あるなし

過を犯して自ら覺らず、命過ぎて自ら欺くことを爲す





【十二の因】十二因縁のこと。即ち

無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死これなり。

【六度】六波羅蜜のこと。布施、持戒、精進、禪定、忍辱、智慧。

【六情】喜、怒、愛、樂、哀、惡。

【八難】在三惡道在長壽天、在北俱盧洲、盲聾瘖瘵、世智辯聰、生佛前佛後の難をいふ。

起滅は罪福に従ひ、生死に十二の因あり  
現身遊びて亂を免れ、一切の人を濟育す  
慈傷して衆邪を墜し、流れて深淵に没す  
勉進六度を以てし、修行自然を致す  
此故に稽首して禮し、中天に歸命せよ  
人身は既に得難く、得る人復嗜欲す  
意識痛想に、貪婬して厭足あるなし  
豫め種を後世に栽ゑ、歡喜して地獄に詣る  
六情幸に完具するに、何爲れぞ自ら困辱する  
一切能く心を正しくし、三世の神吉祥なり  
八難の與に食らず、隨ひ行ひて十方に生ぜん  
生ずる所に轉ち精進し、六度を橋梁となし  
廣く勸むるに無極の慧もてし、一切神光を蒙らん

佛說尸迦羅越六方禮經 終

玉

耶

經

第一卷	經典部
-----	-----



玉耶經

東晉天竺三藏竺法護譯

【音訓】 玉耶、ヨウヤ、  
玉、ヨウ、耶、ヤ、  
【釋義】 玉、ヨウ、  
耶、ヤ、  
【譯文】 玉耶、  
玉、ヨウ、耶、ヤ、

【音訓】 玉耶、ヨウヤ、  
玉、ヨウ、耶、ヤ、  
【釋義】 玉、ヨウ、  
耶、ヤ、  
【譯文】 玉耶、  
玉、ヨウ、耶、ヤ、

而持之。此の如く、一男、佛、舎利國祇園精舍蘭樹園に在りたまふ。佛、四生の弟子の  
に法を説きたまふ。時に給孤長者の妻、先に子の病に悩まされ、長者の家の女なり、女  
を玉耶と名く。端正調直にして、賢明を生じ、給孤を以て正法を婿に承事せず。

給孤長者夫妻、議して言へらく、「子の姑、願なき、世に依りて離せず、設ひ杖捶を加  
ふとも、此を言ふことを止せし、置きて教誨せざれば、其の心益々増さん、當に之を如何  
がすべき。」長者の曰はく、「嗚呼、佛、大聖のみ善く物を化することを能くしたまふ、剛強も弾  
伏して、敢て我にざる無し、佛の來化を請ひたてまつらん。」妻の言はく、「大いに善し。」

明旦服を著り、佛の所に往詣し、頭面を地に著す、前みて佛に白して言さく、「我が家、  
子の爲に給孤を愛りしに、姑、甚だ大いに憍慢にして、禮節を以て我が子に承事せず。  
くば世尊、明日自ら屈したまひ、佛の弟子を請ひて、舎に到りて中飯し、并に玉耶の  
病に法を説きて、心して開解し、心を改め、善を行はしめたまへ。」佛、長者に告げたま  
はく、「善い哉、善い哉。」給孤長者は、佛の言を受けたまへるを歡喜して、佛を禮

し、是を請して、佛、舎に歸りて中飯を供せり。

【三十二相】應身佛の身に具する十二の相好、八十種好は相好に附隨する細相なり。

明日、佛、千二百五十の弟子と與に、長者の家に到りたまひしかば、長者は、歡喜して佛を迎へたてまつり、禮を作す。佛坐し已に定まりたまひしかば、大小皆出でて佛を禮し、却きて住せしに、玉耶は逃れ蔽れて、佛を禮することを背んぜず。佛即ち變化して、長者の家の屋宅、牆壁をして、皆琉璃水精の色の如く、内外相見せしめたまへり。玉耶、佛に三十二相八十種好あり、身、紫金色にして、光明輝暉たるを見たてまつり。玉耶、惶怖して、心驚き、毛墜つ。即ち出でて、佛を禮し、頭頂懺悔して、却きて右面に在り。

佛、玉耶に告げたまはく、「女人は、當に自ら端正を恃み、夫婿を輕慢すべからず。何をか端正と謂ふ、邪態八十四婚を除却し、定意一心なる、是を端正と爲す。顔色面目髮縁を以て、端正と爲さざるなり。女人の身中には、十の惡事あり。何等をか十と爲す。一には、女人初めて生れて地に墮つるや、父母喜ばず。二には、養育するに親て滋味なし。三には、女人は心常に人を畏る。四には、父母恆に嫁娶を憂ふ。五には、父母と生きながら相離別す。六には、常に夫婿を畏れて其顔色を視、歡悦すれば輒ち喜び、瞋恚すれば則ち置る。七には、懷妊すれば産生甚だ難し。八には、女人は小にしては父母の爲に檢録せらる。九には、中にしては、夫婿の爲に制せらる。十には、年老いては兒孫の爲に訶せらる。生より終に至るまで、自在を得ず。是を十事と爲す。女人は自ら覺知せず。」

玉耶、長跪し叉手して、佛に白さく、「賤身を稟受して、禮儀に閑はず。唯願くば世尊、其に教を説き、婚たるの法を訓へたまへ。」

佛、玉耶に告げたまはく、三婦の姑姑夫婿に事ふるに、五善三惡あり、何等か五善と爲す。一には、婦は常に早く起き、髪を櫛梳し、衣服を整頓し、面目を洗拭して垢穢あらしむること勿く、作事を興るには尊む所に先啓し、心常に恭順にして、戩し甘美あれば先づ食することを得ざれ。二には、夫婿訶罵すとも瞋恨することを得ざれ。三には、一心に空塔を修り、娼婦を念ふことを得ざれ。四には、常に夫婿の長壽ならんことを願ひ、用で行けば常に家事を整頓すべし。五には、常に夫の善を念ひ、夫の惡を念はざれ。是を五善と爲す。何馬をか三惡と爲す、一には、婦禮を以て姑姑夫婿に承事せず、但美言は言んとて、之を欺はんと爲す。未だ冥からざるに早く臥し、日出でて起きず、夫を罵すりと爲すれば、目を瞋らして夫を視、拒に應じて罵り罵る。二には、一心に夫婿に向はず、但世の男子を念ふ。三には、夫をして死せしめ、早く更に夫を得んと欲す。是を三惡と爲す。玉耶、歡喜として佛に辭答したてまつらば、

佛、玉耶に告げたまはく、七世間に、七世の婦あり。一の婦は、母の如し。二の婦は、妹の如し。三の婦は、賢識の如し。四の婦は、姑の如し。五の婦は、親の如し。六の婦は、怨家の如し。七の婦は、壽命の如し。凡そ七世の婦と爲す。汝輩解するや。玉耶、佛に白さく、七の婦は、盡く何の修行する所なるを知らず、唯唯は佛に、佛に告げたまはく、一婦かに地獄に墮け、善く之を思念せよ。善常に汝が爲に

分別し解説す。

何等をか母婦と爲す。母婦とは、夫婿を愛念すること猶し慈母の若し、其晨夜に侍して左右を離れず。供養に心を盡して、時宜を失はず、夫若し行き、來りて人の輕罵を恐るれば、見ては則ち憐念し、心に疲厭せず、夫を憐むこと子の如し、是を母婦と爲す。

何等をか妹婦と爲す。妹婦とは、夫婿に承事して、其敬誠を盡し、若し兄弟の氣を同くし、形を分ち、骨肉至親にして、二情あること無きが如し、尊奉して之を敬ふこと、妹の兄に事ふるが如し、是を妹婦と爲す。

何等をか善知識婦と爲すとは、其夫婿に侍し、愛念懇に至り、依依戀戀として相棄つること能はず、私密の事は常に相書示し、過を見ては依て呵し、行失無からしめ、善事には相敬して益明慧ならしめ、相愛して、世を度すこと善知識の如くならしめんと欲す、是を善知識婦と爲す。

何等をか姉婦と爲すとは、夫人を供養するに誠を竭し、敬を盡し、夫婿に承事して謙遜に命に順ひ、夙に興き夜に寐ね、恭しく言命を恪しみ、口に過言無く、身に過行無し、善あれば推讓し、過てば則ち己を稱し、誨訓、仁施、勸進を道と爲す、心端しだ專一にして分邪有る無く、婦節を精修して終に剛毅無し、進んで儀を犯さず、退いて禮を失はず、唯和を貴しと爲す、是を姉婦と爲す。

何等をか婢婦と爲すとは、常に畏慎を懷きて敢て自ら慢せず、兢兢として事に趣きて遊



解する所無し、心常に悲憤にして忠孝節を慕ひ、言は以て忠孝、性法常に和順、日に忠孝の言を思ふて、常に威儀の行を入れり、貞良節一貫外直信、常に自ら清静し、禮を以て自ら夫婦を許り、性孝せられて以て橋慢せず、及び妾遇せられざるも以て怨も慢せず、夫は種族の分を得、妻はこれに志らる、罵詈せらるるに及んでも黙して恨みず、苦心業受して一室のうらさを耐へし。好む所を勧進して聲色を絶せず、いを過すこと曲薄ならも呼へて諍しならんことを求めず、誇めては口を修めて衣食を操はず、専ら慈路を結ぶ、嗔及ばざることを恐れ、夫婦を敬重して男の女家にも事ふる如くす。是を神婦と稱す。

幼少して他家婦と爲すは、夫の體はさるを見れば性に従順を盡す、晝夜に思念して解離すしことを憚ると爲す、夫婦の心候を常に守奉の如し、言信調諍しし長忌する所無し、病を亂して家臥して作使すべからず、家を治め兒子を養育せんことを念はず、夫は難病を有れば憂鬱を耐らす、罪は次第の如く罰星を致辱して、誓へば無家の如し、思を絶家絶ると曰す。

國に下りて妻命と爲すは、衣食に滯ねずして、悲心もて相向ふ。常に傾ぬる御もて夫を慰撫することを得ず、流涙を與へんと臥して人の覺悟せんことを恐も、夫は穢草に於れば穢草之に寄ら、是を前志常に以て愛敬すも作す、夫は實物を許せば悪人之下に於し、夫は物を得ては恨みことを耐えしめり、夫の命を懸けず、是を神命婦と稱す。此を七賢の婦と爲す。

【三塗】 刀塗、火塗、血塗、即ち順次に餓鬼、地獄、畜生の三惡趣に同じ。

【優婆夷】 ウパーシカー（二在家女）近事女と譯す。佛道に入りたる在家の女。

佛、玉耶に告げたまはく、『五善婦とは常に顯名あり、言行に法あり、衆人、愛敬す。宗親九族並に其業を蒙り、天龍、鬼神皆來りて擁護し、抔擯ならざらしむ、萬分の後、天上の七寶宮殿に生ずることを得、在所自然に左右に侍從し、壽命延長にして意の欲する所を恣に快樂言ひ難し、天上に壽盡れば下世間に生れ、常に富貴なる侯王の子孫と爲り、端正聰慧にして人に奉尊せらるべし。其惡婦は常に惡名を得、現在身をして安寧なることを得ざらば、數惡鬼累々の爲に病はされ、臥起安からず、惡夢に驚怖す、願ふ所は得ず、多く災横に逢ふ、萬分の後魂神形を受けて當に地獄餓鬼畜生に入りて、三塗に展轉し劫を果ぬるも竟らざるべし。』

佛、玉耶に告げたまはく、『是七輩の婦、汝何を行はんと欲す。玉耶流涕し、前みて佛に白して言さく、『我が心愚癡、無智の作す所、今より以後、往を改めて來を修め、當に婢婦の如くに、娼婦夫婿に奉事し、我が壽命を盡すも敢て憍慢ならざるべし。』佛、玉耶に告げたまはく、『善哉善哉、人誰か過無からん、過ちて能く改むる者は善焉より大なるは莫し。』玉耶即ち前み請じて十戒を受け、優婆夷と爲れり。

佛、玉耶に告げたまはく、『戒を持つに、一には、殺生することを得ず。二には、偷盜して他人の財物を取ることを得ず。三には、他の男子に姪することを得ず。四には、酒を飲むことを得ず。五には、妄語することを得ず。六には、惡罵することを得ず。七には、綺語することを得ず。八には、嫉妬することを得ず。九には、瞋恚することを得ず。十には

【濯水】長者に肉を搦ぐる時、その手に水を濯ぐこととす。

【嗔囔】ダク、ナ(Dak-sin)財施、布施と譯す。

當に信を作せば、信を得、信を作せば罪を得ることを信じ、佛を信じ、法を信じ、比丘僧を信じて、戒優、夷の法と爲す。終身奉行して敢て違犯せざれ。

經を讀まば、佛を供養し奉るに百味の飲食もてす。

玉耶に言はたまはく、當に信じて布施し、常に其福德を得べく、後世には當に復長

家に生るべし。玉耶言さく、諾。

飯畢り、より嗔囔に呪願したまはく、五十善神、汝の身を守護せよ。

玉耶に言はたまはく、勤めて經を讀まばよ。玉耶言さく、我、佛門を家り、經法を



大乘本生心地觀經報恩品

第 一 卷	經 典 部
-------------	-------------





を獲したる人。

【如如の理】 絕對

【馬】 カルバネ

【長時】 長時と譯す。

【優婆塞】 ウブム

ハラ (Uparika)

【聲聞】 シユエラ

ツカ (Sikhanika) 佛

の教誨の聲をきい

てことなる人。

【緣覺】 プラトエ

一カブダグ (Pativy

ekajukha) 師に

よらずして證る人

【菩提】 ボイヂイ

(Jaliti) 覺と譯す

【涅槃】 ニルヴァ

ナ (Nirvana) 寂滅

と云す。

【不共の徳】 佛の

み有する徳。

【阿耨多羅三藐三

菩提】 アヌソタラ

サムヤクサンボ

デー (Anuttara-

myakambhisi)

無上正遍知と譯す

佛の覺知をいふ。

【玉舍城】 ラーツ

ヤカリハ (Rajagriha) 中印度マガダ國

非處なく、二に卑辱なく、三に非器なく、四に非法なし。病に墮じて業を與へ、復除する  
ことを得しめたまふ。即ち是れ如來不共の徳なり。聲聞緣覺は、未だ自在なることを得ず、  
諸の菩薩摩訶薩の不共の境なり。是因縁を以て、菩提の正道、心地の法門は、見難く、聞き  
難し。

若し善男子善女人ありて、是妙法を問き、一たび耳に經て、須臾の頃も念を措し、心を  
觀じて、無上菩提の種を熏成せば、久しからずして、當に菩提樹王、金剛寶座に坐して、  
【阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。】

爾時、玉舍大城に、五百の長者あり。其名を妙徳長者、勇猛長者、善法長者、念佛長者、  
妙智長者、菩提長者、妙辯長者、法眼長者、光明長者、滿願長者と曰ふ。

是の如き等の大富長者は、正見を成就し、如來及び諸の聖衆を供養せり。是諸の長  
者是世尊の大乗心地の法門を讚歎したまふを聞きて、是念を作さく、我如來の金色の光  
を放ちて、菩薩の難行苦行を影現したまふを見るに、我は苦行を行ふ心を愛樂せず。誰か  
能く永劫に生死に住して、衆生の爲に、諸の苦惱を受けんや」と。

是念を作し已りて、即ち座より起ち、偏へに右の肩を袒き、右の膝を地に着け、合掌し  
恭敬して、異口同音に、前んで佛に白して言さく、「世尊、我等は大乗の諸菩薩の行を樂は  
ず、亦苦行の音聲を聽くことを喜ばず、所以は何ん。一切の菩薩の修したまふ所の行願  
は、皆悉く是れ恩を知り恩を報ずるにあらず。何を以ての故に、父母を遠離して、出家



【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

【阿耨多羅三藐三菩提】  
Asambhaya

に越き、自らも妻子を以て、欲する所に著し、頭目髓腦も、其願へまむるに隨ひて、悉く皆布施し、諸の逼惱を受けて、三僧祇劫に、具に諸度の八萬四千の波羅蜜行を修して、生死の流を越え、方に菩提大安樂の境に至り。二乗の道果に趣向して、三生百劫に、寶輪を修集して、生死の因を斷し、涅槃の罪を證して、速に空樂に至る、方に聖恩と名くるに如かざればなり。

爾時、佛、五百の長者に言けたまはし、善い哉善い哉、汝等大乘を讚歎するを聞きて、心に生ぜり。妙善を發起して、未中世中の恩徳を知らざる一切衆生を利益し安樂ならしめん。諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念せよ。我今汝の爲に、世出世間の有恩の處を分別し演說せん。

善男子、汝等が言ふ所、未だ正理にはせず、何を以ての故に。世出世の恩に四種あり、一には父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩なり。其の如きの四恩は、一切衆生の平等に荷負するなり。

善男子、父母の恩とは、父に慈愛あり、母に慈愛あり、母の慈愛は、若し我世に住して、一劫の中に於て説くと盡すことせず。我今汝の爲に、少分を宣説せん。人あり假令功德の爲の故に、一百の淨行の菩薩摩訶門と、一百の五種の諸の神仙と、一百の善友とを、恭敬し、供養するに、七寶以上、の堂内に安置し、百千種の上妙の珍膳を以てし、一語の異言と衆の寶の衣服を垂れ、妙香、沈香もて、其の命を立て、百寶もて床臥敷

珊瑚、琥珀。  
【梅檀】 チヤンダ  
ナ (Chandana) 香木  
の名。

【未形】 未だ子の  
形として生れぬ前

【無常】 常ならぬ  
こと、ここにては  
死を意味す。

【須彌】 スメール  
(Sumeru) 妙高山  
と譯す。

具を莊嚴し、業精を治療するには百種の湯藥もてし、一心に供養して百千劫に滿てども、一念、孝順心に住して、微少の物をもちて、悲母を色養し、隨所に供侍するに如かず。前功徳に比するに百千萬分にして校量すべからず。世間の悲母の子を念ふことには比するのなく、思は未形に及ぶ。受胎より始りて、十月の終まで、行住坐臥に諸の苦惱を受くこと、口の宣ぶる所にあらす。欲樂する飲食衣服を得と雖も、而も愛を生ぜず、憂念する心は、恆に休息することなく、但自ら思惟するのみなり。

將に生産せんと欲するや、漸く、母の苦を受け、晝夜に愁惱す。若し辛難き時は、百千の刃の競ひ來りて、屠り割くが如し。或は無常を致すことあり。若し苦惱なれば、諸親眷屬の喜望盡くることなく、猶し貧女の女意珠を得たるが如し。其子の聲を發するや、音樂を聞くが如し。母の胸臆を以て、寢處と爲し、左右の膝の上に、常に遊戯を爲す。胸臆の中より、甘露の泉を出す。長養の思は、普天に彌り、隣慈の徳は、廣大にして比すべきもの無し。

世間の高しとするところは、山岳に過ぎたるは莫し。悲母の思は須彌に逾ゆ。世間の重しとするところは、大地を尤と爲す。悲母の思は亦彼に過ぐ。

若し男女ありて、思に背きて順はず、其父母をして、怨念の心を生じて、母に惡言を發せしめば、子は即ち墜墮して、或は、地獄、餓鬼、畜生に在らん。世間の疾しとするところば、猛風に過ぎたるは莫し、怨念の微は、復彼よりも連なり。一切の如來、金剛天等



方便もて子を導引するが故に。九に敬讓と名く、善き言辭を以て、衆惡を離れしむるが故に。十に興業と名く。能く家業を以て、子に付屬するが故に。

善男子、諸の世間（世間）に於て、何者が最も富める、何者が最も貧なる。悲母、堂に在せば之を名けて富と爲し、悲母、在さざれば之を名けて貧と爲す。悲母、在す時を名けて日中と爲し、悲母、死する時を名けて日没と爲す。悲母、在す時を名けて月明と爲し、悲母、亡する時を名けて闇夜と爲す。是故に汝等、勤めて加修習して、父母に孝養せよ。若きは人仰に供すると、福等しうして異なることなし。應當に是の如きの父母の恩に畏ゆべし。

【三】次に衆生の恩を明す  
【五道】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間の五道

【無明】事理にくらきこと。  
【宿住智明】三明の一、過去の宿習のことを知る智慧

善男子、衆生の恩とは、即ち無始より來、一切の衆生、五道に輪轉し、百千劫を経て、多生の中に於て、互に父母と爲る、互に父母となるを以ての故に、一切の男子は、即ち是れ慈父にして、一切の女人は、即ち是れ悲母なり。昔、生生の中に於て、大恩あるが故に猶し現在の父母の恩の如く、等しうして差別あることなし。是の如きの昔の恩、猶未だ報ずること能はず。或は妄業に因て、諸の違順を生じ、執著を以ての故に、反つて其怨を爲す。何を以ての故に。無明に宿住智明を覆障せられ、前生に曾て父母たりしことを了せず。恩を報ずべきところは互に饒益せよ。饒益するところ無きものを名けて不孝と爲す。是に因縁を以て、諸の衆生の類は、一切の時に於て、また大恩あり、實に報い難しと爲す。是の如き事を衆生の恩と名く。

【四】次に國王の恩を明す。

【三十三天】梵にトラーヤストリンシャーフ (Trayastra-loka) といふ、刹利天のこと。

【十善】不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不癡見。

國王の恩とは福徳最勝なり。人間に生ずと雖も自在を得るが故に。三十三天の諸天子等、彼に其力を與へて常に護持するが故に、其國界に集ける山川大地大海際を盡して國王に屬し、人の福徳は、一切衆生の福に勝過せるが故に、最大衆王は正法を以て化し、能く衆生をして悉く皆安樂ならしむ。譬へば乳間の一島の樹根は、柱を根本と爲すが如く、人其の豐樂は王を根本と爲す、王に依て有るが故に、亦衆王の能く萬物を生ずるが如く、聖王は能く治國の法を生じて、衆生を利するが故に、日天子の能く世間を照すが如く、聖王亦上下を觀察して、人をして安樂ならしむるが故に。

王、正治を失へば、人は依る所なし。若し正を以て化せば、八天諸情其國に入らず。其の國の侵逼、自界を叛逆、惡鬼の疾病、國土の饑饉、非時の風雨、過時の風雨、日月の明滅、星宿の變怪あり。人に王たさものの、相を許しうして人民を利益すれば、是の如き八難も侵すこと能はざるが故に。譬へば、長者の第一子有りて、愛念無比にして、慈愛益し、常に安樂を與へて、晝夜を以てさるが如し。國の上下も、亦復是の如く、群生を示ること、同一子の如くし、擁護の心、晝夜を捨つること無し。是の如く、人に至たるもの、十善を修せしめば、福徳の主と名け、若し修せしめざれば、非福の主と爲く。所以は何ん。若し下の國內に、一人の善を修するものあれば、其善す所の福は皆七分と爲り、造善の人は、其五分を得、彼國王に於て常に其二分を獲ればなり。善く王に因りて修せば福利を同じうするが故に。

【十惡業】 十善業  
の反對

十惡業を造るも、亦復是の如し。其事を同じうするが故に。一切の園内乃同地園林の生ずる所の物、皆七分となることも、亦復是の如し。若し人に王たるものあり、正見を成就して、如法に世を化せば、名けて天主となす。天の善法を以て世間を化するが故に、諸天善神、及び護世の王、常に来りて王宮を守るが故に、人間に處すと雖も、天業を修行し、賞罰の心、偏黨なきが故に。一切の聖王の法、皆是の如し。是の如きの聖王を正法王と名く。是因縁を以て、十徳を成就す。

一に能照と名く。智慧の眼を以て、世間を照すが故に。二に莊嚴と名く。大福智を以て國を莊嚴するが故に。三に興樂と名く。大安樂を以て、人民に興ふるが故に。四に伏怨と名く。一切の怨敵自然に伏するが故に。五には離怖と名く。能く八難を却け、恐怖を離るるが故に。六には任賢と名く。諸の賢人を集めて、國事を評するが故に。七に法本と名く。萬姓の安住は、國王に依るが故に。八に持世と名く。天王の法を以て、世間を持つが故に。九に業主と名く。善惡の諸業、國王に屬するが故に。十に人主と名く。一切の人民は、王を主と爲すが故に。一切の國王は、先世の福を以て、是の如き十種の勝徳を成就す。大梵天王、及び忉利天は、常に人王を助けて、勝妙の樂を受けしめ、諸の羅刹王、及び諸神等は、身を現せずと雖も、潛に來りて、王及び眷屬を衛護す。

上の、人民の諸の不善を造るを見て、制止すること能はずんば、諸天神等は、皆悉く遠離せん。若し善を修するを見れば、歡喜讚歎して、皆盡く唱へて我が聖王と言ひ、詛

天は喜悅して、日月の田を灌漑、五穀成實して、人民豊樂ならん。若し悪人等に親近せずして、普く世間を利し、成く正化に従へば、如く寶珠、必ず王の國に現はれ、王の隣國に延けるもの、成りて歸服し、人と非んと稱せざるなげん。若し悪人あり、王の國內に於て、道心を生じば、日月の田にして是の如く人の福は、自ら冥滅せん。命終れば當に是のの中に墮し、畜生を經歷して、備に諸の苦を受くべし。所以は何ん。聖王に於て善を知らずばに由りて、諸の惡逆を起し、是の如きの福を得るなり。若し人民あり、善を修心せりて、王を敬禮し、敬重すること、佛の如くせば、是人は、現世に安隱豊樂にして、彌ふする所あれば、心に種はざるを得ん。所以は何ん。一切の國王は、過去時に於て、曾て如来の清淨の集教を受け、常に王と爲りて、寶珠衣寶なり。是因縁を以て、佛の果報は皆備の樂するが如し。聖王の恩徳、廣大なること此の如し。

善男子、三寶の教とは、不思議と看く。衆生を得樂して、休息すること有ること無し。龍神佛の身は、既經無量にして、無量の人劫に、因縁して遊する所たり。一切の諸果、一切に覺して離すことなく、功徳の如山、巍巍として居すことなし、一切の諸情分知ること能くする所なり。龍神の此深なることは聞して益の無く、智慧の覺悟すること無し。常に佛に、隨順變化して、其隨に在り、光明遍照十方三世を照す。一切の衆生は煩惱と愚て覺知せず、善法に迷滞して、生死無常こと無し。三寶出世して、大轉回と成り、善く善法を成じて、度脱に相見せしむ。諸の自智の善は、皆善く成ずる。

【九】 法華三寶の  
 利益の因

【愛法】 善信のこ  
 と

【六】以下佛寶の細釋、總じて三身を明す。

【大體】眞如法性の一、善惡邪正等の別を絶したる本體の大徳あるをいふ。

【二身】大法二空を釋す。初に自性を釋す。初に自性を釋す。

【八】次に受用身の申すに自受用身多數集合することをいふ。

【所知】所知の境たる有爲無爲の諸大及、眞如の理を覆つて眞智を生ぜしむる、菩提を障ふること。

【煩惱】有情の身心を擾亂し、生死に迷ひしむる煩悩の尊嚴をいふ。

【位】因位の顯行に相應し、成就したる萬徳圓滿の佛身をいふ。

【第八阿】第八阿

善男子等、唯一の佛寶に、三種の身を具す。一には自性身、二には受用身、三には變化身なり。第一の佛身に、大斷徳あり。二空の顯す所にして、一切の諸佛に、悉く皆平等なり。第二の佛身に、大智徳あり。眞常無漏にして、一切の諸佛は、悉く皆同意なり。第三の佛身に、大恩徳あり。定通變現にして、一切の諸佛は皆、悉く同事なり。

善男子、其自性身とは、無始無終なり。一切の相を離れて、諸の戲論を絶す。周圓無際にして、凝然常住なり。其受用身には、二種の相あり。一に自受用、二に他受用なり。自受用身とは、三僧祇劫に修する所の萬行、諸の衆生を利益し、安樂ならしめ已りて土地の滿心なり、身を運んで、直に色究竟天に往き、三界を出離して、國土を淨妙にし、無量の大寶蓮華に生ず。而して不可說海會の菩薩によりて、前後を圍遶せられ、無垢の繒を以て、頂上に繫けられ、供養し恭敬し、尊重し讚歎せらる。是の如きを名けて後報の利益と爲す。

爾時、菩薩は金剛定に入りて、一切の微細の所知と諸の煩惱障とを斷除して、阿耨多羅三藐三菩提を得得す。是の如きの妙果を、理體利益と名く。是眞報身は、有始無終にして、壽命、劫、限量あること無し。初品正覺を成じてより、未來際を窮む。諸根相好は、法界に遍周し、四智圓滿す。是れ眞報身の受用法樂なり。一には、大圓鏡智なり。異熟識を轉じて、この智慧を得、大圓鏡の如の色像を現するが如し。是の如く、如來の鏡智の中に、能く衆生の諸の善惡業を現す。是因縁を以て、此智を名けて大圓鏡智と爲す。大



頼耶識の異名、この識は佛に至つて大圓智と轉化する故に凡夫位にある間を異熟識といふ。

【我見識】第七末那識の異名、この識は第八識の諸法の種子を貯へ、且つこの身を保持して相續せしむる爲を認め、これを我が身の主宰の如く考ふるなり。

【分別識】第六意識をいふ、愛憎等の一切の分別をなす能なるが故に名

【五法】前五法といひ、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識をいふ。【一切】一切の法門

悲に依りて、初に衆生を緣じ、大智に依りてが故に、常に法性に如す。眞俗を變觀して開眼するは、常に能く無漏の根身を執持して、一切功德の依止する所となる。二には、我見識を轉じて、此智慧を得、是を以て、よく自他平等二無私の性を證す。是の如く轉じて平等性智と爲す。三には、妙觀察智なり。分別識を轉じて、此智慧を得、能く諸法の自相と共相とを觀じ、衆會の前に於て諸の妙法を説き、能く衆生をして不生得しむ。是を以て、名けて妙觀察智と爲す。四には、成所作智なり。五種の識を轉じて、此智慧を得、能く一切種種の化身を現じて、諸の衆生をして諸の善根を成熟せしむ。是因縁を以て、名けて成所作智と爲す。是の如く四智を而も上首として、八萬四千の智門を具足す。是の如く、一切諸の功德の法を轉じて如來の自受用身と爲す。

【諸の男子】二に、如來の他受用身とは、八萬四千の相好を具足し、眞淨土に居り、衆の法を説き、諸の菩薩をして、大乘微妙の法樂を受用せしむ。一切の如來は、十地の菩薩衆を化せんが爲に、十種の他受用身を現す。第一の佛身は、百葉の蓮華に坐して、初地の菩薩の如に、百法明門を説きたまふ。菩薩に悟り已りて大神通を起し、變化して百佛の世界に當り、無數の衆生を、利益し、安樂ならしむ。第二の佛身は、千葉の蓮華に坐し、諸の菩薩の爲に、千法明門を説きたまふ。菩薩は悟り已りて、大神道を起し變化して百佛の世界に當り、無數の衆生を、利益し、安樂ならしむ。第三の佛身は、萬葉

【諸の男子】二に、如來の他受用身とは、八萬四千の相好を具足し、眞淨土に居り、衆の法を説き、諸の菩薩をして、大乘微妙の法樂を受用せしむ。一切の如來は、十地の菩薩衆を化せんが爲に、十種の他受用身を現す。第一の佛身は、百葉の蓮華に坐して、初地の菩薩の如に、百法明門を説きたまふ。菩薩に悟り已りて大神通を起し、變化して百佛の世界に當り、無數の衆生を、利益し、安樂ならしむ。第二の佛身は、千葉の蓮華に坐し、諸の菩薩の爲に、千法明門を説きたまふ。菩薩は悟り已りて、大神道を起し變化して百佛の世界に當り、無數の衆生を、利益し、安樂ならしむ。第三の佛身は、萬葉

【二】次に變化身を明す。

【四大州】須彌の四方にある四つの洲、南瞻部洲、東勝神州、西牛貨洲、北俱盧洲

【二界】欲界、色界、無色界のこと。

【勝軍州】シラーム

【三十三相】三十三の相

【十二相】十二の相

【善趣】五位の第一、佛果菩提の資糧たる福智の行を修集する位。

の蓮華に生じて、三地の菩薩の爲に、萬法明門を説きたまふ。菩薩は悟り已りて大神通を起し、變化して萬佛の國土に滿ち、無數の衆生を、利益し、安樂ならしむ。是の如く、如来は漸漸に增長し、乃至十地の他受用身は、不可説の妙寶蓮華に坐して、十地の菩薩の爲に、不可説の諸法妙門を説きたまふ。菩薩は悟り已りて、大神通を起し、變化して不可説佛の微妙の國土に滿ち、不可宣説不可宣説なる無量無邊の種種の衆生を、利益し、安樂ならしむ。是の如きの十身は、皆七寶の菩提樹王に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を證得す。

諸の善男子、一一の華鬘を、各一の三千世界と爲し、各に百億の妙高山王及び四大州日月星辰、三界の諸天ありて、具足せざるなし。一一の葉上の諸の瞻部洲に、金剛座菩提樹王あり、其百千萬より不可説に至る。大小の化佛、各樹下に居て、摩訶を繞り已りて、一時に阿耨多羅三藐三菩提を證得したまふ。是の如き大小の諸の化佛身は、各各三十二相、八十種好を具足し、諸の資糧、及び四善根、諸の菩薩等、二乗、凡夫の爲に、宜しきに隨ひて爲に三乘の妙法を説きたまふ。諸の菩薩の爲には、應ずる六波羅蜜を説きて阿耨多羅三藐三菩提を得て、佛慧を究竟せしめたまふ。辟支佛を求むる者の爲には、應ずる十二因縁の法を説き、聲聞を求むる者の爲には、應ずる四諦の法を説き、生老病死を度して、涅槃を究竟せしめたまふ。餘の衆生の爲には、人天教を説き、人天の安樂果を得しめたまふ。是の如き諸の大小の化佛を、皆悉く名けて佛の變化身と爲す。善男子、是の如きの二種の應化身佛は、滅度を現すと雖も、而も此佛身に相續して常住

【四角】心衆の修行の常位

【三】佛國衆の修行の常位

【二】佛國衆の修行の常位

【一】佛國衆の修行の常位

【十】佛國衆の修行の常位

【九】佛國衆の修行の常位

【八】佛國衆の修行の常位

【七】佛國衆の修行の常位

【六】佛國衆の修行の常位

【五】佛國衆の修行の常位

【四】佛國衆の修行の常位

【三】佛國衆の修行の常位

【二】佛國衆の修行の常位

【一】佛國衆の修行の常位

【十】佛國衆の修行の常位

【九】佛國衆の修行の常位

【八】佛國衆の修行の常位

【七】佛國衆の修行の常位

【六】佛國衆の修行の常位

【五】佛國衆の修行の常位

たり。佛の弟子は、一なる佛寶の如きに、是の如き等の無量、無邊、不可思議の衆生を利

樂する。諸大の恩徳あり。其因縁を以て、佛に於て如來、應、正遍知、自行圓滿、善哉、其

間常、無上十、調御丈夫、天人師、佛、正覺を以て。善男子、一の聚會の中に、六種の如

計の功徳を具足す。一には、無上の功徳出たり。二には、無上の智慧あり。三には

無量、無邊、不可思議の衆生中の如なり。四には、佛を以て值遇し奉養すること、優越すの如し。

五には、三千大千世界に、無一り出現す。六には、世、出世間の功徳、一切の如きを得ず。

佛の如き等の六種の功徳を具して、常に佛の一切の衆生を利樂す。是を佛寶不思議の如と名

す。佛、在りて無量、佛に白して言さく、世尊、佛の如きたまふ如の如くせば、一の佛寶

の中に、如來の佛徳あり、如來に支那して、衆生を利樂す。何の因縁を以て、世間の衆

生に、多く佛に以て奉じて、調御丈夫を受くるや。

佛、五百の如來に言けたまはす。善男子、佛の如きたまふ如の如くせば、世間を照明す

れども、而も百千萬の如、光明を見ざるが如し。彼佛弟子、佛に於て三昧、自覺天子に

して、是の如きを言ふ。

佛に長者の言さく、世尊、佛の如きたまふ如の如くせば、世間を照明す

れども、而も百千萬の如、光明を見ざるが如し。彼佛弟子、佛に於て三昧、自覺天子に

して、是の如きを言ふ。

佛に長者の言さく、世尊、佛の如きたまふ如の如くせば、世間を照明す

れども、而も百千萬の如、光明を見ざるが如し。彼佛弟子、佛に於て三昧、自覺天子に

して、是の如きを言ふ。

佛に長者の言さく、世尊、佛の如きたまふ如の如くせば、世間を照明す

【善逝】 スガタ (Ananta-ayudhaya) の譯。

【世間解】 ローカ (Lokavita) の譯。

【無上士】 アヌツタラ (Anuttara) の譯。

【善男子】 善男子、一の佛實に、無量の佛あるが如く、如來の説きたまふ所の法寶も亦然り。

【善男子】 善男子、法寶の中に其れ四種あり。一には教法、二には理法、三には行法、四には果法なり。一切の無漏の、能く無明と、煩惱と、業障とを破する

【善男子】 善男子、諸佛の師とする所は御も是れ法寶なり。所以は何ん。三世諸佛は、法に依つて修行し、一切の障を斷じて、菩提を成

【善男子】 善男子、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く

はす、是の如きの衆生は、罪業深重にして、無量劫を離れども、三寶の名をすらすら、見聞することを得ず。彼盲者の、目に翳を起するが如し。若し衆生ありて、如來を恭敬し、一乘を愛樂し、三寶を尊重せば、當に翳を去り、是人は業障を消除し、福智を増長し、善根を成就し、遂かに佛を見ることを得こ、永く生死を離れ、當に菩提を證すべきなり。

【善男子】 善男子、一の佛實に、無量の佛あるが如く、如來の説きたまふ所の法寶も亦然り。一の法寶中に、無量の義あり。善男子、法寶の中に其れ四種あり。一には教法、二には理法、三には行法、四には果法なり。一切の無漏の、能く無明と、煩惱と、業障とを破する

【善男子】 善男子、諸佛の師とする所は御も是れ法寶なり。所以は何ん。三世諸佛は、法に依つて修行し、一切の障を斷じて、菩提を成ずることを得て、未來際を盡して衆生を利益すればなり。是因縁を以て、三世の如來は常に能く、諸の波羅蜜微妙の法寶を供養したまふ。何に況んや三界の一切の衆生、未だ解脱を得ずして、微妙の法寶を敬する能はざらんや。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。

【善男子】 善男子、我昔、曾て求法の居士と爲り、大火坑に入りて、正法を求め、永へに生死を斷じて、大菩提を得たり。是故に、法寶の能く一切生死の牢獄を破ること、猶し金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶の能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。



ガルヤーヤナ (Gharaiyana) 胡豆と譯す。

【別解脱戒】 大乘の戒法は一戒毎に各別に皆解脱を得るの功德あるによりこの名あり。

【三】 佛法僧を何故に寶と名くるやに就て。

を眞の福田僧と名く。

復一類あり、福田僧と名く。佛の舍利、及び佛の形像、並に諸の法と、僧と、聖との制する所の戒とに於て、深く敬信を生じ、自ら解見なく、他も亦然らしめ、能く正法を宣べて、一乘を讚歎し、深く因果を信じて、常に善願を發し、其過犯あるに隨つて、業障を悔除す。當に知るべし、是人は、三寶を信ずるの力、諸の外道に勝ること、百千萬倍、亦四種の轉輪聖王にも勝れり、何に況んや餘類の一切衆生をや。影金華の夢伴すと雖も、猶し一切の諸雜類の華に勝るが如し。正見の比丘も、亦復是の如く、餘の衆生に勝ること百千萬倍。禁戒を毀つと雖も、正見を壞らば、是因縁を以て、福田僧と名く。若し善男子善女人等にして、是の如きの福田僧を供養する者は、得る所の福德窮盡あること無けん。前の三の眞實の僧寶を供養して、獲る所の功德と、正に等しうして異なることなし。是の如く、四種の僧寶は、有情を利益して、恆に暫くも捨つることなし、是を僧寶不思議の恩と名く。

爾時に、五百の上首佛に白して言さく、「世尊、我等は今日佛の法音を聞きて、三寶の世間を利益することを悟ることを得たり。然も今何の義を以ての故に、佛法僧を説いて、名けて寶と爲すことを得るやを知らず。願くば佛、解説し、顯示して、衆會、及び未來世に於て、三寶を敬信する一切の有情をして、永へに疑網を斷ちて、壞せざるの信を得しめ、三寶の不思議海に入らしめたまへ。」

【法義】 思ふ通り  
の實の出づる處の  
意。

爾時、佛諸の長者に告げて言はく、「善い哉善い哉、汝高男子、能く如來に法深の妙法を問うて、未來世に於ける一切の衆生を、利益し、安樂ならしめん。譬へば、甚深第一の珍寶の、七寶を具足して、國界を莊嚴し、有情を饒益するが如く、佛法僧寶も、亦是の如し。一には、佛寶、衆生寶は、人の多く成ることなきが如く、佛法僧寶も、亦復是の如し。外道も成る能はざるが故に。二には無常・世間の寶は清淨・光潔にして、穢穢を雜へず、佛寶僧寶も、亦復是の如し。悉く能く煩惱の染着を離脱す。三には、眞寶・天の徳瓶の重く堅固を成ふるが如く、佛法僧寶も、亦復是の如し。衆生に世出世の安樂を與ふ四には、眞寶・古眞寶の希有にして得難きを亦如く、佛法僧寶も亦世品の如し。世間の寶は億劫にも成らぬし。五には、眞寶・如意寶の能く貧窮を成らぬが如く、佛法僧寶も亦世品の如し。世間の諸の寶物を破するが故に。六には、眞寶・摩訶王の所有する能く能く諸惡を伏するが如く、佛法僧寶も、亦復是の如し。六臂師を具して、四魔を降伏す。七には、眞寶・摩尼珠の、念に隨ひて能く所求の寶物を成らすが如く、佛法僧寶も亦復是の如し。能く衆生の種種の願望を滿ぜしむ。八には、眞寶・眞の寶の、正言を正言するが如く、佛法僧寶も亦復是の如し。法王の善說寶言を莊嚴す。九には、眞寶・天の寶の最も微妙なるが如く、佛法僧寶も亦復是の如し。諸の世間の眞寶を寶に歸す。十には、眞寶・譬へば、眞寶の天に入れども成らざるが如く、佛法僧寶も、亦復是の如し。世間の八風も傾動すること能はざる所なり。佛法僧寶は、無量の功德妙法を具足して、有情を利益

【四】四恩に報ずべきの修行を説く

し、暫くも休息なし。是義を以ての故に、諸の佛法僧を説きて名けて實と爲す。善男子、我、汝等の爲に略して世出世間に於ける、四種の有恩の處を説けり。汝等、當に知るべし、菩薩の行を修して、應に是の如き四種の恩を報ぜんことを。

爾時、五百の長者、佛に白して言さく、「世尊、是の如きの四恩は、甚だ報じ難しと爲す。當に何の行を修してか是恩を報ずべき。」

佛、諸の長者に告げたまはく、「善男子、菩提を求むるものの爲に、其れ三種の十波羅蜜あり。一には、十種の布施波羅蜜多なり。二には、十種の親近波羅蜜多なり。三には、十種の眞實波羅蜜多なり。

若し善男子善女人ありて、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、能く七寶を以て、三千大千世界に滿じて、無量の貧窮の衆生に布施せんに、是の如き布施は、但布施波羅蜜多と名くれども、眞實の波羅蜜多と名けず。若し善男子善女人あり、大悲心を發し、無上正等菩提を求めんが爲に、自らの妻子を以て、他人に施與して、心に憍慢なく、身肉、手足、頭目、髓腦、乃至生命をも、來りて求むる者に施さば、是の如き布施は、但親近波羅蜜多と名くれども、未だ眞實の波羅蜜多と名けず。

若し善男子善女人ありて、無上菩提心を發して、無所得に住し、諸の衆生を勸めて、同じく此心を發し、眞實の法を以て、一の四句の偈を一衆生に施し、無上正等菩提に向はしめば、是を眞實波羅蜜多と名く。前の二の布施は、未だ報恩と名けず。若し善男子善女人





# 大乘本生心地觀經

卷第二

大唐罽賓國藏般若詔を奉じて譯す

## 報恩品之下

【一】 智光長者四恩を説かんことを請ふ。  
【山句】 ヨーシヤナ(Yojina) 印度里數の單位。

【耆闍崛山】 ゲリドラタータ(Girijata) 鷲峯山、靈鷲山と譯す。

【二】 以下智光の爲に佛重ねて四恩を備もて説きたまふを明す。

爾時、王舍城の東北八十由旬に一小國あり、增長福と名く。其國に一長者あり、名を智光と言ふ。其年衰邁して、唯一子有りしが、其子惡性にして、父母に順はず、有ゆる教誨にも皆從ふ能はずりき。

遂に釋迦牟尼如來、王舍城の耆闍崛山に在して、濁惡世の無量の衆生の爲に、大乘報恩の法を宣説したまふと聞いて、父母及び子並に諸の眷屬、法を聽かんが爲に、供具を齎して佛の所に來詣し、供養し恭敬して佛に白して言さく、「我に一子あり、其性弊惡にして、父母の有ゆる教誨を受けず。今、佛の四種の恩を報ぜよと説きたまふと聞き、法を聽かんが爲の故に、佛の所に來詣せり。唯願くば世尊、我等の類、及び諸の眷屬の爲に、四恩の甚深なる妙義を宣説し、彼惡子をして孝順の心を生ぜしめ、此世當生に安樂を得しめたまへ。」

爾時、佛、智光に告げたまはく、「善い哉善い哉、汝は法の爲の故に、此所に來至し、供

【最勝の法王にして】其の心地の法門を盡すまで、罪障の盡くすまで、明す。

養し恭敬して、是法を聞かんことを樂ふ。汝等諦かに聽きて、善く之を思念せよ。

善し善男子善女人ありて、善信心を發して、法要を聞かんが爲に、擧足下足は、其處も近きも、踐む所の地に踏みて、百千の輩の輩までも、是因縁を以て、金輪の轉輪大王を感得せん。

聖王の報盡くれば、欲天の王と作り、欲天の報盡くれば、梵天王と作り、轉輪を見たてまつり、法を聞きて、地に妙果を證することを得ん。

汝、大長者、及び汝の法王の爲の故に、我が所に來至し、是の如きの八十由旬を越過せり。大地の微塵、一一の微塵までも、能く人天輪王の果報を感じ、既に法を聞かざれば

當來には阿耨多羅三藐三菩提を得得せん。我、先に甚深なる五思の微妙の義趣を説くと雖も、今汝が爲に、略して略説すべし。

而も佛を説きて言はく、最勝の法王にして大聖の法王は、一切の人天中に等倫無く、其の相好を以て身を飾りたまふ、智の海は空の如く、量あること無し

自他の利行皆圓滿し、其の善く諸の國土に聞え永く其の徳を傳へたまふ、其の徳を傳へたまふ、其の徳を傳へたまふ、其の徳を傳へたまふ

其の徳を傳へたまふ、其の徳を傳へたまふ、其の徳を傳へたまふ、其の徳を傳へたまふ、其の徳を傳へたまふ

十方の人天及び外道も、悉く調御佛を尊ずるもの有ること無し

法華品之下

二二

【無礙の辯】法、義、詞、筆、墨の四無礙辯のこと。

【時に諸の長者等】以下父母の恩を明す。

【二乘自利の行】

利他の行を缺ける小乘淺近の行。

【三空解脫門】三空無相、無作の三昧のこと。

金口もて能く無礙の辯を宣べ、能く問ふもの無しと譯し、而も自ら説きたまふ大海の潮の時を失せざるが如く、また天鼓の天心に滴ふが如く是の如き自在は唯佛のみ有したまひ、五通の仙魔等には非ず難思の劫海に行願を修し、是の如き大神通を證獲したまふ我三昧の大寂室に入りて、諸根及び業病を觀察し、自ら禪定を出でて、三世の佛法の心地門を證得す時に諸の長者、大心を退きて二乘自利の行に住せんと樂ふ我大智方便の教を聞いて、三空解脫の門に引入す如來の意趣は能く量るもの莫し、唯佛のみ能く眞の祕密を知りたまふ利根の聲聞及び獨覺、不退を勤求する諸の菩薩十二劫數共に度量すとも、能く其少分すら之を知ること有る無し假使十方の凡聖の智を、一人に授與して智者たらしめ是の如き智者竹林の如くならんも、其少分をも測量すること能はざらん世間の凡夫は慧の眼なく、思ある處に迷うて妙果を失ふ五濁惡世の諸の衆生は、深恩を悟らずして恆に徳に背く我爲に四恩を聞示し、正見菩提の道に入らしめん慈父と悲母との長養の恩によりて、一切の男女は皆安樂なり

【五款】色聲香味  
觸もいふ

父の恩の深きことは山王の如く、母の恩の深きことは大海の如し

若し此世に住すること一劫に於てし、母の恩を報くとも報すること難はざらん

今略し、少分を説くに、母の恩の深きことを報くは、

使人あり福徳の爲に、淨行の業を修む

在明神の自在なる者と、大智の師長及び善友とを供養するに

じを安置して堂殿と爲し、及び牛頭、梅檀の房を以てし

百千の臥具各敷陳し、世間の美味甘露如くし

鬼神と療治する諸の湯藥は、金銀の器物中に盛り満てて

是の如く供養すること日に三時し、乃至數百劫に盈つとも

一々の分を申べて、悲母の大恩田を供養するに如かず

福徳無邊にして量るべからず、算分曉す皆比無し

世間の慈母の其子を孕むや、十月懐胎して長く苦を受け

胎中の樂に於ても情著せず、隨喜の飲食も亦同じく然り

晝夜常に悲愍の心を懷き、行住坐臥に母の苦を受く

若し母に其胎藏の子誕るるや、鋒刃を刺りて肢節を解かるるが如く

東西を迷惑して辯ずる能はず、遍身疼痛堪ふる所なし

或は此難に因りて命終れば、六刺眷屬も共に悲惱す

是の如き衆苦は皆子に由り、變悲痛切にして口の宣ぶる所に非ず  
若し平復を得て身安樂なれば、貧の資を獲たるが如く喜び量り難し  
容顏を顯現して厭足なく、憐念の心著くも捨てず  
母子の恩情は常に是の如く、出入にも悲母の胸臆の前を離れざるなり  
母乳は猶し甘露の泉の如し、長養時に及んで曾て竭くるなし  
慈念の恩は實に比することかたぐ、鞠育の徳も亦量り難し  
世間は大地を稱して重しと爲す、悲母の恩の重きことは彼に過ぐ  
世間は須彌を稱して高しと爲す、悲母の恩の高きことは彼に過ぐ  
世間の連疾なることは唯猛風のみとすれども、母の心ふ一念は彼にも過ぐ  
若し衆生ありて不孝を行ひ、母をして暫時も恨心を起さしめ  
怨念の辭少分も生ぜしめば、子は乃ち言に隨ひて苦難に遭ひ  
一切の佛も金剛天も、神仙の秘法も能く救ふこと無けん  
若し男女ありて母の教に依り、顔色を承順して相違せざらんに  
一切の災難盡く消除し、諸天擁護して常に安樂ならん  
若し能く悲母に承順せんに、是の如き男女は悉く凡にあらす  
大悲の菩薩の人間に化して、報恩の諸の方便を承現したまふなり  
若し男子及び女人あり、母恩を報ぜんが爲に孝養を行ひ

肉を割き血を割して常に供給し、是の如くすること第一功に益ち  
種種に孝道を勤修するとも、猶木を暫時の恩に重報ゆること能はざらん  
十月胎中にて處り、常に乳根を肉、脂血を飲み  
胎中たりしより童子たるに及ぶまで、飲む所の母乳は言に自解餘なり  
飲食湯洗なる衣服、子は先に用は後にするを常則とす  
子若し愚童にして人に悪まれんに、母は亦恩憐し二棄置せざらん  
昔女人あり其子を抱いて、恆河の水瀑流するを渡れるに  
汎水を以ての故に力前み難く、子と俱に没せしも能く捨つる事かりき  
是慈念の善根力の爲に、命終りて梵天に上生し  
長く梵天三昧の樂を受け、如來に遇ひたてまつりて授記を受くることを得たり  
是故に悲母に十徳あり、應に義と利とに隨ひて其名を立つ  
一には大地と名付二には能生、三には能正者四には養育  
五には與智者六には莊嚴、七には安樂と名付八には教授  
九には教誡者十には與業、餘の恩は母の恩に過ぎざるなり  
何の法か世間に最も富有なる、何の法か世に最も貧無なる  
母堂に在りて最も最富と爲し、母在さざる時を最貧と爲す  
母在す時を日中と爲し、母亡き時を日没と爲す

母存す時は皆圓滿、悲母亡き時は悉く空虛  
世間一切の善男女、恩の重を父母は丘山の如し

應當に孝敬して懐に心に在くべし、恩を知りて恩に報ゆる是れ聖道なり  
身命を惜まずして甘旨を奉へ、未嘗て一念も色養を虧かざれ

如し其父母奄喪する時は、胸に恩を報せんと欲するも誠に及ばざるなり  
佛書修行して慈母の爲に、相好金色の身を感得せり

名聞廣大にして十方に遍く、一切の人天咸く稽首し  
人も非人も皆恭敬するは、自ら往昔慈恩に報いたまひしに縁りてなり

我三十三天の宮に昇り、三可母の爲に眞の法を説き  
母をして聽聞して正道に歸し、無生忍を悟りて常に不退ならしめたり

是の如きを皆慈恩に報ずと爲す、報ずと雖も恩深うして猶未だ足らず  
神通第一の目犍連は、目に三界の諸の煩惱を斷じ

神通力を以て慈母を觀じ、眼に苦を受けて餓鬼の中に在りき  
日變連自ら往いて母恩に報じ、慈親の受くる所の苦を救免して

他化に上生せしめ、諸の天衆と共に遊樂し天宮に處らしめたり  
當に知るべし父母の恩は最も深く、諸佛も聖賢も咸く徳に報じたまふことを

若し人あり至心に佛を供養すると、復精勤して孝養を修するとあり

【他化】他化天即ち六欲天の最後天





父母を見るが如く等くして差ふことなし、皇帝を證せざれば識るに由なし、一切の男子は皆是れ父、一切の女人は皆是れ母

如何に未だ前世の恩を報ぜずして、却つて異念を生じて怨嫉を成すべき

常に須らく恩を報じて互に饒益すべし、應に打罵して怨嫉を致すべからず

若し福智の門を増修せんと欲せば、晝夜六時に當に發願すべし

願くば我生生無量劫に、宿住智の大神通を得て

能く過去の百千生を知り、更父母たりしことを相憶せんとな

六趣四生の中に循環して、我が一念をして常に彼に至らしめ

爲に妙法を説いて苦の因を離れしめ、人天長受の樂を得しめ

堅固なる菩提の願を勸發して、菩薩六度の門を修行せしめ

永く一種の生死の因を斷じて、疾に涅槃の無上道を證せしめんとな

十方一切諸國の王は、正法もて人を化して聖主と爲す

國王の福徳は最勝なり、所作自在なるを名けて天と爲す

三十天及び餘の天も、恆に福力を持て王の化を助く

諸天の擁護すること一子の如し、是を以て天子の名を稱し得るなり

世間は王を以て根本と爲す、一切人民の所依と爲ること

猶し世間の諸の舍宅は、柱を根本と爲して成立するがごとし

【晝夜六時】 日没  
初夜、中夜、後夜  
晨朝、日中。

【宿住智】 三明の  
過去の事を知  
り得る智慧。

【四生】 胎、卵、  
濕、化。

【十方一切諸國等】  
以下國王の恩を頌  
す。

【大梵王】 色界初  
【須彌王】 須彌  
【須彌王】 須彌

王の正法を以て人民を化するは、大梵王の萬物を生ずるが如く

正法を以て政理無きは、猶し瓊麻王の世間を濁ぼすが如し

謂ふこと勿れ時濁惡の世に墮すと、當に知るべし善人は是れ王の修なることを

日天の世間を照らすが如し、世を化するも亦是の如し

日光は夜分を照さずと雖も、衆生有情をして安樂を得しむ

王は非法を以て世を化せば、一國の人民依る所なし

世間の有ゆる諸の恐怖は、威の福力に依りて生ずる能はざらむ

人民の成する所の安隱の樂は、當に知るべし是れ威の福力及三川なきことを

世間の有ゆる勝妙の華は、威の福力に依りて開敷す

世間の有ゆる妙園林も、威の福力に依りて開敷す

世間の有ゆる諸葉草も、威の福力に依りて開敷す

世間の百穀も、威の福力に依りて開敷す

世の人民の歡樂を受くるも、王の福に依りて常に自ら然るなり

譬へば長者に一下あり、智慧滿盈にして二世に比な

て母の恩愛すること眼目の如く、晝夜に護念の心を生ずるが如し

の大聖王も亦是の如く、衆生を愛念すること一下の如し

善年を養育し、孤獨を拯ひ、賞罰の心常に不二なり

是の如き仁王を聖主と爲す、群生の敬仰すること如來に等し

仁王化治すれば國に災なく、萬姓恭勤して常に安隱なり

國王無法もて世を化すれば、疾疫流行して有情に災ひす

是の如く一切の人非人も、罪福昭然として覆ふ所なけん

善惡の法を七分に分ちし、造者は五を獲て王は二を得

園林田宅悉く皆然り、所稅等を分つことも亦是の如し

轉輪聖王出現する時は、分ちて六分と作して王一を得

時の諸の人民は五分を得、善惡の業報も亦皆然り

若し人王ありて正見を修し、如法に世を化せば天主と名く

天法に依りて世間を化するを以て、毘沙門王常に擁護し

及び餘の三天羅刹衆も、皆當に聖王の宮を守護すべし

聖王出世して國を理むる時は、衆生を饒益して十徳を成す

一に能く國界を照すと名け、二に國土を莊嚴すと名け

三に能く諸の安樂を與ふと名け、四に能く諸の怨敵を伏すと名け

五には能く諸の恐怖を遮ると名け、六には諸の聖賢を修集すと名け

七には諸法の根本となると名け、八には世間を護持すと名け

【毘沙門】ガイシ  
ユラマナ(Kashmirin  
dit)多聞と譯す。  
四天王の一、南洲  
を守る。  
【餘の三天】東方  
持國天、西方廣目  
天、北方增長天の  
三。  
【羅刹】ラークシ  
ヤサ( Rakshasas) 食  
人鬼と譯す。

【音譯】 シヤクラ  
 モーゴ、シンドラ  
 (akrahavidya)能  
 天をす。切利  
 天を。  
 【義文】 ヤクシヤ  
 (シラヤ) 勇健と譯

【音譯】 シヤクラ  
 モーゴ、シンドラ  
 (akrahavidya)能  
 天をす。切利  
 天を。  
 【義文】 ヤクシヤ  
 (シラヤ) 勇健と譯

九には能く造化の功を作すと名は、十には國界人民の事と云く

若し王十勝徳を成就せば、梵王帝釋等諸天

夜叉羅刹鬼神王、身を隠して常に東りて編冠を戴す

龍王歡喜して甘雨を降らし、五寶成寶して萬姓安からん

國中處處に珍寶を生じ、人馬力靈め怨敵なく

如意寶珠王前に現じ、境外の諸王自前代々

若し王の國に於て不善を生じ、念も心を失して災害を蒙らば

是人は命終りて地獄に墮し、苦を受くること永劫にして出期なげし

若し誠を勤めて國王を助くるあらば、南天龍念して榮華を増さん

智光長者汝寧に知るべし、一切の人王は其の歸する所にして

諸法は因縁によりて成せざるはなく、若し因縁なければ諸法なきことを

生天及び惡趣なるは、其の如く、是の如く人は因を了らざるなり

無因無縁は大邪見にして、罪惡を知らずして妄計を生ずるなり

王今受る所の福業は、往昔會て三淨戒を持ち

戒徳の修によし、懺悔する所にして、人天の妙果たる王の壽考は、其の如く

若し人提の心を失し、願力もて無上果を資成し

堅く上の清淨心を持たば、起居自在にして法王となり

【壽】 壽生とも  
一切衆生の  
こと。

神通變化して十方に滿せしめ、緣に隨つて普く諸の群品を濟はん  
 中品に菩薩戒を受時するものは、福に自在を得て轉輪聖王となり  
 心に隨つて作す所みな盡く成じ、無量の人天悉く遷奉せん  
 下に上品に持てば大鬼王となり、一切の非人成く率伏せん  
 戒品を受持するに缺犯ありと雖も、戒勝に由るが故に王となることを得るなり  
 下の中品に持てば禽獸の王となり、一切の飛走するもの皆歸伏す  
 清淨戒に於て缺犯ありと雖も、戒勝に由るが故に王となることを得るなり  
 下の下品に持てば琰摩王となり、地獄の中に處して常に自在ならん  
 禁戒を毀ちて惡道に生ずと雖も、戒勝に由るが故に王となることを得るなり  
 是義を以ての故に諸の衆生、應に菩薩の清淨戒を受くべし  
 善能く護持して缺犯なければ、所生の處に隨つて人王と作らん  
 若し如來の戒を受けずんば、終に野干の身をも得ること能はざらん  
 何に況んや能く人天中の最勝の快樂を感じて、下位に居らんをや  
 是故に王者には因なきにあらず、戒業を精勤して妙果を成じたるなり  
 國王は自ら是れ人民の主たり、慈恤すること母の嬰兒を養ふが如し  
 是の如く人王には大恩あり、撫育の心報すべきこと難し  
 是因縁を以て諸の有情、若し能く大菩提を修證せんには

【一行】第八講内  
 【種子】一切萬象  
 【開發】すること  
 【種子】第八講中  
 【伏在】して自體の  
 【生ずる】能力の  
 【種子】第八講内  
 【種子】のこと。

【摩尼】  
 【摩尼】

一切の衆生に對して大悲を起し、應に如來の二業を受くべし。  
 若し如法に戒を受けんとなせば、應當に罪を悔して消滅せしむべし。  
 起罪の因に十緣あり、身に三と目に四と鼻に三と舌に二なり。  
 生死も無始なれば罪も窮りなし、煩惱の火は盡つて灰なく  
 業障は峻極にして須臾の如し、造業は二種に由因り二理あり。  
 謂ゆる現行及び種子なり、當法は一切の種を持緣し  
 影の形に隨つて身を離れざるが如く、一切時中に聖道を離へ  
 近くは人天妙樂の果を離れ、遠くは無上菩提の果を離る。  
 在家は能く煩惱の因を損き、出家も亦清淨の戒を破る。  
 若し能く如法に懺悔せば、有ゆる煩惱は悉く除かれん、  
 懺悔は能く煩惱を燒く、懺悔は能く人に往生するの業をり  
 能く劫火の世間を壞り、能く惡業に其力を燒き盡す如し。  
 能く四禪の樂を享、能く摩尼寶珠を得んす。  
 能く金剛の寶を履べし、懺悔は能く常樂の宮に入らむ。  
 能く三界の寶を得べし、懺悔は能く菩提の樂を離る。  
 佛の大圓鏡を見しめ、懺悔は斯く寶鏡に等しむ。  
 法に懺悔せんとするものは、當に一切の罪門に依りて悔すべし。

【六塵】香、味、觸、法、色、聲、

一には觀事滅罪門、二には觀理滅罪門なり

觀事の滅罪にその三種あり、上中下根の三品と爲す

若し上根の淨戒を求むるものあらば、大精進を發して心に退無く

悲涙して血に泣き常に精進に哀感して、遍身に皆血を現はし

念を十方三寶の所と、並に餘の六道の諸の衆生とに繋け

長跪し合掌して心を亂さず、發露洗心して懺悔を求めよ

唯願くば十方三世の佛、大慈悲を以て我を哀愍したまへ

我輪廻に處して依る所なく、生死長夜常に覺めず

我凡夫に在りて諸縛を具し、狂心顛倒して遍く攀緣す

我三界火宅の中に處して、妄に六塵に染れども救護するもの無し

我貧窮下賤の家に生れ、自在を得ずして常に苦を受く

我邪見なる父母の家に生れ、罪を造るは惡眷屬に依る

唯願くば諸佛大慈尊、哀愍護念して一子の如くしたまへ

是の如く勇猛に懺悔する者は、名けて上品の上戒を求むるものと爲す

若し中根に戒を求むる者あらば、一心勇猛に諸罪を懺し

洋淚交横るも覺知せず、遍身汗を流して佛に哀求し





【如】 不動不變の善

【性用】 事物の性質とす  
【如】 絶對の眞理

新らしき薄衣を著て躑躅歩し、心を攝め念を正しうして諸縁を離れ  
 常に諸佛の妙法身は、體性空の如くにして不可得なるを觀ぜよ  
 一切の諸の罪性は持如なり、顛倒の因縁は妄心より起る  
 是の如きの罪性は本來空にして、三世の中に所得なく  
 内に非ず外に非ず中間に非ず、性相如如にして俱に不動なり  
 眞如の妙理は名言を絶す、唯聖智のみありて能く通達す  
 存にも非ず無にも非ず有無にも非ず、有無にあらざるにも非ず、名相を離れて  
 法界に周遍し生滅することなし、諸佛は本來同一體なり  
 唯唯くは諸佛加護を垂れ、能く一切の顛倒心を滅したまへ  
 唯くは我をして早く眞性の源を悟り、速に如來の無上道を證せしめたまへ  
 若し清信の善男子ありて、日夜に能く妙理の空を觀せば  
 一切の罪障自ら消除せり、是を最上に淨戒を持つと名く  
 若し人ありて實相の空を觀知せば、能く諸の重罪を滅すること  
 猶し大風の猛火を吹いて、能く無量の諸の草木を燒くが如くならん  
 諸の善男子、眞實の觀を名けて諸佛の秘要門と爲す  
 若し他の爲に廣く分別せんと欲せば、無智の人の中に宣説すること勿れ  
 一切の凡愚の衆生類は、聞いて必ず疑を生じ心に信ぜざるなり

【廣足尊】智慧慈悲の二を満足する人のこと、佛なり。

【廣益一應凡愚】利他の行、一切善法戒、一切善事を修する者なり。

若し善信の善信解を生じ、念念に眞念眞如を悟り  
十方の諸佛の眞現前して、菩提の妙果を眞然證せん  
善男子等我が後後に、未來世の中の善信の者  
此の觀門に當て常に懺悔し、常に菩薩の聚縁を受くべし  
若し上品の當て受持せんと欲せば、當に師と佛と菩薩とを請ぜよ  
我釋迦牟尼佛を請じて、當に菩薩戒和上と爲すべく  
龍種淨智尊菩薩を、當に淨觀阿闍梨と爲すべく  
未來の導師釋迦佛を當に、清淨の教授と爲すべく  
現在十方の廣足尊を當に、清淨の戒と爲すべく  
十方の一切菩薩の戒を當に、修學する伴侶と爲すべく  
釋梵四王金剛人を當に、學の外護と爲すべし  
是の如きの諸菩薩と及び、現前の導師を請じ奉らん  
普く四恩に報んが爲の故に、清淨の菩提を發起して  
應に菩薩の三戒を受くべし、饒益一切有情と  
修攝一切善法と、修攝一切律儀戒と  
是の如きの清淨戒は、三世の來護したまふなり  
無量阿僧祇の有情は、無量劫中にもまた請問せよとなり

唯過十方の佛のみありて、已に淨戒を受け、常に護持し

三障の煩惱を永へに斷除して、無上菩提の果を證することを獲たまふ

未來の一切の諸の世尊も、三聚淨戒の寶を守護し

三障並に習氣を斷除して、當に正等大菩提を證したまはる

現在十方の諸の善逝は、共に三聚淨戒の因を修し

永へに生死苦の輪廻を斷じて、三身菩提の果を證することを得たまへり

生死の深大海を超越するには、菩薩の淨戒を箭筏と爲し

永く貪瞋癡の繫縛を斷ずるには、菩薩の淨戒を利劍と爲す

生死の峻道の諸の怖畏には、菩薩の淨戒を舍宅と爲し

貧賤の諸苦の因を息除するには、淨戒能く如意の寶と爲る

鬼魅に著かれし諸の疾病には、菩薩淨戒を良藥と爲す

人天に王と爲りて自在を得るには、三聚淨戒を良藥と爲す

及び餘の四趣諸王の身は、淨戒を緣と爲して勝果を獲るなり

是故に能く自在の因を修し、當に王と爲りて尊貴を受くることを得べくんば

應に先づ十方の佛を禮敬し、日夜に清淨戒を増修すべし

諸佛は護念して常に受持せしめたまふ、戒は金剛に等しく破壊すること無し

三界の諸天諸善神は、王身及び眷屬を衛護したまふ

【三障】煩惱、業障、報障。  
【習氣】薰習したる氣分の義。唯識にて種子の異名に用ふ。  
【善道】ス。タ

(Vigraha) 佛十號の一、佛は無量の智慧をもつて諸惑を斷じて善妙に世間を出でて果上に趣き退還することなきをいふ。

【餘の四趣】人天、外の修羅、餓鬼、畜生、地獄のこと

以下、實の思を具

一切の怨敵は皆歸伏し、萬姓は歡娛して王化に成す

甚かに菩薩戒を受持せば、世出世の無爲の果を興ぜん

實は常住にして世を化し、恩徳は廣大にして不思議なり

及び現在の劫海の中、功德利生休息すること無し

佛は千光のごとく常に世を照し、群生を利益して有縁を度す

無難ければ佛の慈光を覆す、猶し盲者の見る所無きが如し

佛言は一味にして變易すること無く、前佛後佛の説皆同じ

佛の一味にして普く普く需すも、草木の慈榮大小に別るること無し

衆生は根に隨つて、各稱を得、草木の潤を蒙ること亦、咸なり

菩薩摩訶薩は衆生を化す、大河水の流の竭きること無し

衆生は信無ければ化を成らず、眞實に處して日の照し影を去らず

如來の月光は甚だ清涼なり、能く衆暗を照くも亦是の如し

猶し覆盆の月を照さざるが如く、迷惑の衆生も亦其の如し

法喜は甘露の妙良藥なり、能く一切煩惱の病を治す

信有るものは善を離し善思を離し、信無きものは縁に隨つて善惡に隨す

菩薩摩訶薩は常に善に在りて、無量の方便して衆生を度す

能く衆生に信樂の心有らば、各三昧安樂の時に入る

般若 方便 智 慧  
妙覺 五十二位  
の最後位、佛果の  
こと。

【如來藏】 眞如の  
こと。眞如はよく  
如來の功徳を含攝  
し出生し、又衆生  
の煩惱のために覆  
藏せらるる故にい  
ふ。

如來世間に出でざれば、一切の衆生は邪道に入り

水く甘露を離れて毒藥を飲み、長へに苦海に溺れて出期無けん

佛日は三千界に出現し、大光明を放つて長夜を照らす

衆生は睡るが如くにして覺知せざれども、光を蒙りて無爲の室に入ることを得ん

如來の未だ一乘の法を説きたまはざるとき、十方の國土は悉く空虛なりしが

發心修行して正覺を成じ、一切の佛土皆莊嚴せり

一乘の法寶は諸佛の母なり、三世の諸佛は此より生じたまふ

般若と方便とを無間に修せば、解脫の道成じて妙覺に登らん

若し佛菩薩出現したまはざれば、世間の衆生は導師無く

生死の險難過ぐるに由無し、如何が寶所に至ることを得ん

大願力を以て善友と爲し、常に妙法を説きて修行せしめ

十地に趣向して菩提を證せしめ、善く涅槃安樂の處に入らしむ

大悲の菩薩は世間を化し、方便もて衆生を引導するが故に

内に一乘眞實の行を秘し、外に緣覺及び聲聞を現す

鈍根の小智は一乘を聞き、怖畏心に發して多劫を経

身に如來藏あるを知らず、唯寂滅を耽んで樂勞を厭ふ

衆生は木より菩提の實有り、悉く賴耶藏識の中に在り

善い善い女に逢うて梵心を獲し、三種の煩惱より二行を修せば  
水と輪廻無知之障を断じ、如来常住の身を證得せよ

亦此の因果は法に離れず、假の言知照は法に離れず

一假の言照の障直を断せんに、四障は即言に断ぜしめし

善友に親近するを断ぜしめし、正法を修習するを断ぜしめし

假の障も思業するを断ぜしめし、假の障も修習するを断ぜしめし

十方一切の大聖主は、是四法を修して菩提を證したまはり

故に諸の長者大聖賢、及て七転回の諸佛也

假の障も正法を修習するに、要す常に修習して信願を修すべし

断ぜしめしに善友に親くし、正法を修習するの四障也

假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし

一假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし

故に諸佛して法界に親く、七転回して、假の障も断ぜしめし

假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし

假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし

假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし

假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし、假の障も断ぜしめし

【法華經】 法華經卷第六  
譬喻品第十一

【法華經】 法華經卷第六  
譬喻品第十一

法身の本性は虚空の如し、六塵を遠離して所染無し

法身は無形にして諸相を離れ、能相所相無く虚空なり

是の如き諸佛の妙法身は、真言密の相を寂滅す

一切諸の分別を遠離して、心行虛滅して體皆如なり

如來の身を證得せんと欲するが爲に、菩薩は善く萬行を修す

智體は無爲にして眞法性なり、色心は一切の諸佛に同じ

譬へば飛鳥の金山に至り、能く鳥身をして彼色に同せしむるが如く

一切の菩薩は飛鳥の如く、法身の佛體は金山に類す

自受用身の諸の相好は、一一十方初に遍滿す

四智圓明にして法樂を受け、前佛後佛の體皆同じ

法界に遍しと雖も障礙無し、是の如きの妙境は普眼識なり

是身常に報佛の土に住し、自受の法樂は間斷あること無し

他受用身の諸の相好は、佛に隨つて應現するに増減無し

地上の諸菩薩を化せんが爲に、一佛にして十種の身を現す

所に隨つて應現するに各同じからず、展轉して倍增無極に至る

根に隨つて爲に、法要を説き、法樂を受けて一乘に入らしむ

彼神通を獲ること漸く増長し、悟る所の法門も亦是の如し



【宗光】 即ち四...  
 【義忠】 無色界...  
 【非想】 即ち無...  
 【衣現行果】 聖道  
 自力向に於ける終  
 證得果の次第、後  
 は佛の言教、理は  
 その中の道理、行  
 はその理に應ふ修  
 の結果するところ

下位の菩薩の意思を思すとも、上地に了達すること能はず  
 在七の位に於て暫に、善大威に屬して、所屬と爲る  
 或は、一佛の位に化せられ、或は多菩薩の一佛に化せられ  
 或は、十佛正覺に化せられ、善大威の音提樹に坐す  
 前佛入滅、後佛成道、化佛の跡を承て現するに同じからず  
 十種の坐する所の蓮華、周匝各百千蓮華有り  
 一の蓮華中に一佛土あり、即ち坐れ三千大千世界なり  
 一の界中に百億の蓮華、星如四大洲  
 六欲諸天及び四禪、善大威等あり  
 其四洲中の南瞻部に、金剛座  
 及其菩提の大樹王あり、菩提正なる所の、四身は  
 一時に菩提道を證得し、妙法華を大千に轉じて説ふ  
 菩薩緣覺及び聲聞は、所根宣したる隨へ二聖果を成ず  
 是の如く説く所の三身佛と、及上無上なれば名けて寶と爲す  
 佛の三身の所説の法は、致遠行果を三寶と爲す  
 諸佛は法を以て大佛と爲し、心を修め證する所は菩提道なり  
 法は三世に變易すること無し、一切の諸佛皆同也

【降魔若】サルブ  
ジユニヤ一(五三三)  
諸佛の果上の智慧  
をいふ

我今降魔若を頂禮す、然に法寶を誦きて佛師と爲す

或は猛火に入らば焼くこと能はず、時に墮して即ち眞解脱を得ん

法寶は能く生死の獄を推く、猶し金剛の鐵鉤を燒くが如し

法寶は能く衆生の心を照す、日天子の空界に廣むが如し

法寶は能く堅牢の船と作す、能く凌河を渡りて彼岸に超ゆ

法寶は能く衆生に樂を與ふ、譬へば天鼓の天心に應ずるが如し

法寶は能く衆生の貧を救ふ、摩尼珠の衆寶を雨らすが如し

法寶は能く三寶の階と爲る、法を聞き因を修して上界に生ず

法寶は金輪大聖王なり、大法力を以て四魔を破す

法寶は能く大寶草と爲る、能く衆生を運んで火宅を出づ

法寶は能く大導師と爲る、能く衆生を引いて寶所に至る

法寶は能く大法螺を吹く、衆生を覺悟して佛道を成せしむ

法寶は能く大法燈と爲る、能く生死の諸の黑暗を照す

法寶は能く金剛の箭と爲る、能く國家を鎮めて諸怨を伐す

三世如來の所説の法は、能く衆生を利して苦縛を脱せしめ

引いて涅槃の安樂域に入らしむ、是を名けて法寶の恩恵と稱しとなす

智光長者汝諦かに聽け、世出世の偈に三種あり



一、美微勝の法を讚誦し、其に隨つて隨つて障銷除し

諸の衆生の爲に佛國を成す、是の如きの凡夫も亦僧寶なり

鬱金華の華摩訶と雖も、然し一切諸妙華に勝らざるが如し

正見の比丘、亦是の如く、四種の輪王も凡ぼざる所なり

是の如き四種の衆と凡俗は、有情を利樂して暫くも竭むこと無し

稱して世間の良福田と爲す、是を僧寶の大恩徳と名く

我説く所の如き四恩の義、是を能く世間造るの因と名く

一切の萬物是より生ず、若し四恩を離れば得べからず

譬へば世間の諸の色塵の、能く四大を造りて生を得るが如し

有情の世間も亦復然り、彼四恩に由て安立を得るなり

爾時、智光長者、及び諸子等は、佛の説きたまひし所の四恩の大恩を開きて、未曾有な

ることを得、歡喜し合掌して佛に白して言さく、「善い哉善い哉、大慈世尊、濁惡の因果を

信ぜず、父母に孝ならざる、邪見の衆生の爲に、眞の妙法を説きて、世間を利樂したまへ、

唯願くは世尊、報恩の義を説きたまへ、我等眞に甚深の四恩を悟り、而も今未だ何の善業

を修して、是恩に報いんかを知らず。」

佛、長者に告げたまはく、「善男子等、我五百長者の爲に、先に已に廣説せり、而して今

汝が爲に略して少分を説かん。若し善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲、精勤

【三】 智光等に報恩の義を重説するを明す。

【四】會集の得益  
 【五】會集の得益  
 【六】會集の得益  
 【七】會集の得益  
 【八】會集の得益  
 【九】會集の得益  
 【十】會集の得益  
 【十一】會集の得益  
 【十二】會集の得益  
 【十三】會集の得益  
 【十四】會集の得益  
 【十五】會集の得益  
 【十六】會集の得益  
 【十七】會集の得益  
 【十八】會集の得益  
 【十九】會集の得益  
 【二十】會集の得益

して十法羅漢を修行せんに、若し有所得なれば、未だ報恩と名けず。若し人、須臾も能く一善を行ふ、無所得なれば、乃ち報恩と名けず。所以は何ん。一切の如來は、無所得に依りて、乃ち佛の位に成じ、諸の如來を化して一法なり。若し淨信も淨思も如、是經を聞くと心得、信解し、受持し、所説し、思慮し、無所得の三輪體空を以て、譬に一人の處に、兩句の法を説き、邪見の心を除きしめ、再犯に趣向せしめば、法を説き得て四思を如すと稱す。如を以ての故に。是等は、當に如來善法を得、展轉して、無量の衆生を教化し、阿耨多入らぬ、三善の徳を以て衆生を度脱せしめせん。

爾時、智光長者、是偈を聞き已りて、忍辱三昧を得、世間を離脱して、大覺慧を得たり。時に諸十萬天子、俱に此偈を得、無量阿僧祇劫を三寶に奉思ひて、阿耨八千人も亦三昧を證り、遠塵離垢し、法眼淨を得たり。

七 摩訶心經 經



昭和四年五月一日印刷  
昭和四年五月十日發行

新編 國譯大藏經

新編 國譯大藏經 第一卷

編纂者

東京市下谷區  
國譯大藏經編輯部  
代表者 三井 誠 要

發行者

東京市下谷區  
東方書院  
代表者 坂井 謙一郎

印刷者

東京市澁田區表保町十番地  
興合  
代表者 森 波 謙三郎

發行所

東京市下谷區  
上野橋本町五〇

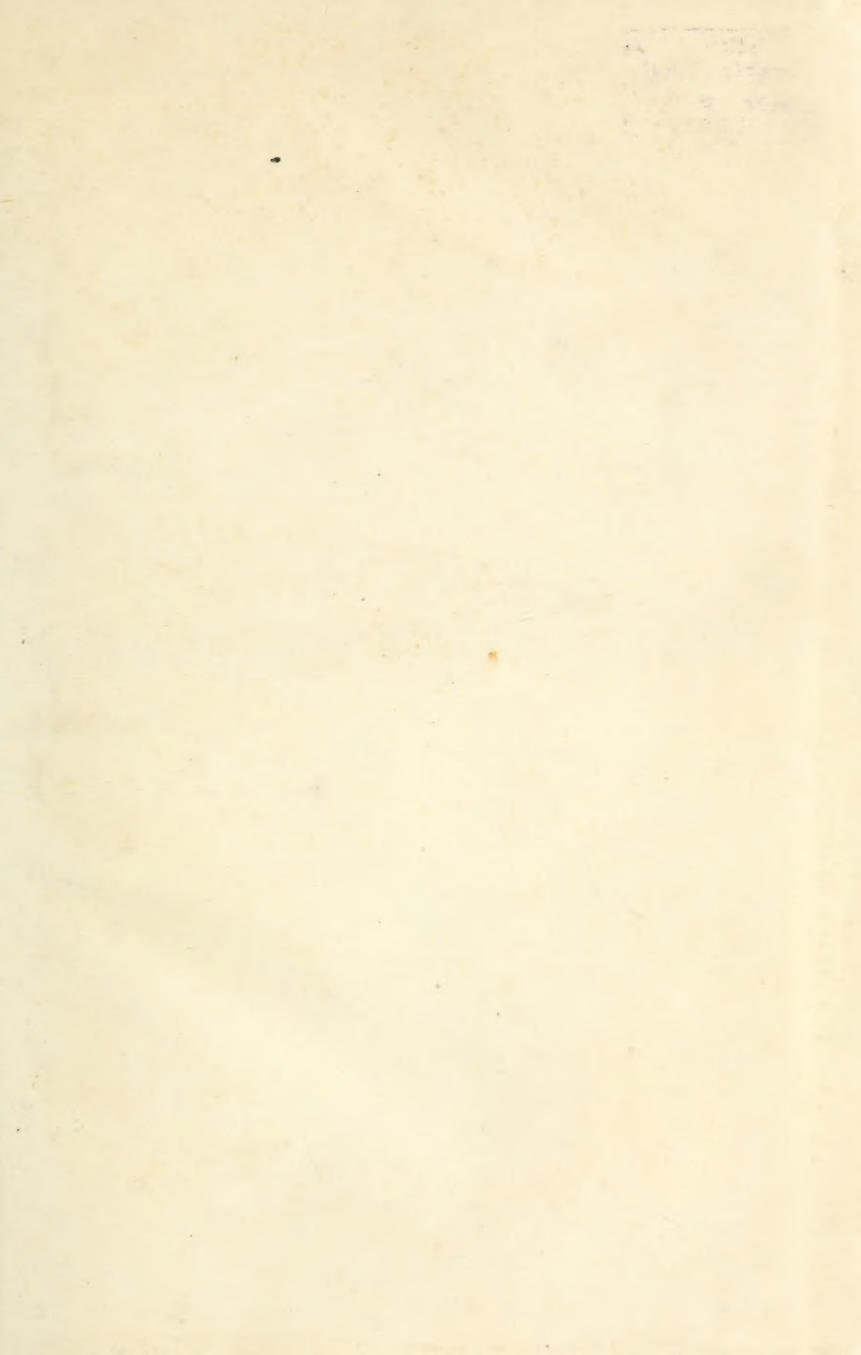
東方書院

電話 下谷製二五九  
郵政東京六六一一









廣東市東門  
山喜房佛書林  
〇〇九一東東街  
一六三五石小話電

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3787